

堕ちた提督

Yasoshima kakeru

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

名将としてその名を轟かせていた村上。しかし、ある作戦で敗北を記し戦線は大幅に後退してしまう。村上は墮落していく海軍の立て直しを図るが失敗。現状に失望した彼は海軍を去った。モンゴルで静かに過ごしていた村上だったが些細な事情から、三年後日本に一時帰国。新たな放浪の旅を計画していた村上だったが……

目次

プロローグ	1
狂った前提	14
単純な関係	24
鬼の娘	32
兵士と目。	40
幼い大人	47
運と意志	54
穢れた龍	61
伝染した疑心暗鬼	67
栄光の戦艦	73
不吉な予兆	79
死に場所の選定	84
芽吹き	92
グアム先制防御作戦 前段	101
グアム先制防御作戦 後段	108
行き場亡き二人	118
少しの平穏	125
崩壊の兆し	132
アメリカの威信	139
鉄底海峡	147
第一攻撃群の栄光	153
第一攻撃群の落日	161
詐欺師の信奉者達	171
おかしな噂	178

必要悪	182
Nobody	192
必然の一致	201
不自然な謀略	210
鎮魂	215
書類上の収束	220
鎮守府の歩むべき道	229
好都合の側面の不都合	236
公然の秘密	243
記憶の目覚め	252
反乱者たち	265
英雄の限界点	272
ト書きなき世界	284
精神年齢	292
妥協した協力者	299
shock and awe	309
それぞれの前哨戦	317
殺意の欠けた戦闘行為	326
二人の正義	337
絶望の中での一手	349
上澄みの悪と、泥だらけの正義	358
決別と出会い	366
二つ目の仮面	373
計画通りのエラー	381
大英帝国最後の日 前編	394

大英帝国最後の日 後編	403
三途の海峡	412
命をかけて守った世界の微笑み	421
選択と決意	432
変わり始めた戦争	441
渡り鳥	449
韓信と曹操	458
神託か？執行力か？	466
地球号の人員整理計画	472
New Deal 作戦	480
精神論者の系譜	488
勝利の重み	499

プロローグ

晴天のもと海は重油にまみれそこら中に破壊された装備が浮かび海底には深海棲艦や艦娘の残骸が横たわっていた。

村上是そんな場所で第一攻撃群旗艦である原子力潜水艦に搭乗し退避命令の出た海域にとどまっていた。もはや逃げようがなかったといったほうが適切ではあったが。

「マーク！早く海域を出ろ。」

村上が何度も呼びかけていたのはマークと言う司令官であった。彼はこの人類と化け物の戦争が始まったその日から戦友として戦ってきた仲間だった。彼もまた別の潜水艦に搭乗して海域にとどまっていた。

「ムラカミ、司令部の奴らを殴るのはお前に任せる。こんな愚策しか取れなかった司令部のために俺はここに残る。司令船がすべてここから逃げれば艦娘たちもここから撤退するだろう。だから私はここにとどまる。後のことは任せる。中越にもよろしく伝えてくれ。」

そう言つてマークは撤退を拒否した。そこでマークと大勢の艦娘が死んだ。

「マーク、俺も連れていけ。一緒に地獄へ連れていけ。」

そう言つて手を伸ばすがその手は何もつかむことはなく村上是後頭部に強い衝撃を受け村上是目を覚ました。

「またあの夢か……。」

ベットの上の枕を壁に投げつけ寝付くために、昨晚飲んだウオツカの残りを流し込み起き上がる。日本にいたころは医者が睡眠導入剤を処方したが効果はなく、モンゴルに来て酒を浴びるほど飲み、やつとまともな睡眠がとれるようになった。まとも。とはいっても悪夢はほぼ毎日彼の脳内で反復され一向に収まる気配はない。

だが幸いなことにモンゴルでは泣き叫んでも大暴れしてもそれを止める人間はいない。ただ大地が静かに風をそよめかせ彼の頭を冷却するだけだ。

人が周りに住んでいないから迷惑をかける対象もない。わざわざ

ぎ遊牧民は、ほかのゲルの近くに移動してこない。

少し落ち着いてから村上は食糧庫を見るがもう合成スナツクの残りは少ない。

三年前に日本で大量に買ってからずっとここにいた村上はパスポートはおろか財布をどこに置いたかも忘れてた。

ウオツカを買うときには何かしらの手伝いだとかをすれば気前よく住人は酒を分けてくれた。

モンゴルの人々は彼のことを変わった外国人として可愛がっていた。

だが、さすがに食料となると話は別だ。当然頻繁に彼らのもとに訪れなければならぬ。村上もそこまで厚かましいことせず日本から大量の合成スナツクを持ち込んでいた。

「はあ。」

そう大きなため息をつき日本に向かう支度をし、世話になったモンゴル人に別れの挨拶をしてモンゴルを後にした。

日本で数年分の食糧を買いすぐにペルーに向けて出発しようと彼は考えていた。ペルーの山岳地帯なら内陸国のモンゴルと同様に攻撃の心配もなく静かに過ごせると考えたのだ。

正直日本には一秒たりとも滞在したくはなかったが次の生活のための試練だと言いつつ聞かせ心を平穏に保った。

モンゴルを出ていくらばかりだっただろうか。

何にせよ村上にとっては日本に向かう飛行機と言うだけで気の遠くなるような長さだった。

ようやく日本にたどり着いた村上だが、氣力を失い彼はそのまま空港近くのホテルに泊まった。

空港のすぐ前にもかかわらず人は少なく閑散としている。何故かとホテルマンに聞くと

「わかっているでしょう。」

とにこやかに対応されたが明らかにいらだっているのはわかった。

ここのところずっとこんな調子なのだろう。外界との情報を完全に立っていた村上が知り得ない何か起きたのだろうか。

部屋に入ると対して動いたわけでもないのにすぐに寝てしまった。「ムラカミ、目を覚ませ。グダグダしていると死ぬぞ！」

またこの夢か……。そんなことを思っていた時だった。

「村上様！早く避難をお願いします。突き当りを左に行くと非常階段があります。」

村上は現状を全く把握できていなかったが声の主が過去の記憶と一致しなかったので現実で何かが起きていることを何となく悟り、スーツケースから鞆を取り出すとすぐに非常階段を駆け下りた。

地上につくと遠くから爆発音や機銃の音が聞こえてきた。村上は鞆から携帯電話を取り出して起動した。もう何年も起動していなかったため起動できるのか不安であったが何の問題もなく起動し、ディスプレイにはこちらの許可なく見たくもない不吉なニュースが映し出された。

「近海警備群の被害甚大。東京侵攻までの秒読みか？」

トップに出てきたニュースに彼は驚愕した。

近海警備群は第一攻撃群ともに海軍でトップを張る軍の最高戦力だ。その部隊が敗北し東京に侵攻を許したことが村上には信じられなかった。だが、もう彼には関係のない話だ。村上も軍を捨てたし軍もまた村上を捨てたのだ。東京から逃げればほかにも空港はある。わざわざ侵攻の始まった危険地域にとどまる理由も義理も彼にはなかった。彼が求めていたのは静かな暮らしだけだった。

爆発の光と爆発音から察するにまだ数キロは離れている。十分逃げられる距離だった。

その時ディスプレイから音声 flowed。

「攻撃を検知。最寄りのシエルターは近海警備群最高司令部に付随する第1号シエルターです。この情報は緊急時の特例として開示されています。みだりにこの情報が開示されるような事態が発生した場合処罰される恐れがあります。」

「ルート変更。東京から最短で脱出したい。」

村上はそう答えた。

「その行動は非常に危険です。三十秒以内に指示に従わない場合、都

知事の権限によって憲兵隊を派遣します。」

村上には選択の余地がなかった。東京の道は複雑になり三年ぶりに訪れた村上が何のガイドもなしに東京を脱出することなど不可能に近かった。

「わかったルートを示してくれ。」

近海警備群最高司令部 指令室

「司令、各鎮守府から支援が派遣されましたがどれも間に合いません。この基地を放棄するほかにはありません。」

司令官は沈黙を続けていた。マークなら、村上ならどうしただろうかと考えていた。こうなることは何となくわかっていた。司令部の発案した作戦に近海警備群の兵力が使用されることが決定した時中越は反発した。あの時もう少し強くいふべきだったのかもしれない。

「中越司令！」

「黙れ若造。」

低く腹の奥から響くような声に皆が背筋を凍らせた。マークや村上のことを思い出しつつも中越は至って冷静だった。あらかじめ予想していた攻撃だからだ。

「うちの所属の兵員はどれだけ残ってる。」

中越の問いにオペレータは素早くこたえる。

「駆逐型146名、戦艦型2、空母、正規8、軽は24です。」

「潜水艦はどんだけいる。消耗の状況も合わせて教えろ」

「はい。潜水艦は39名で兵装の残数は83です。現在補足している敵は1072で圧倒的に兵装が不足しています。」

そして想定していた軍の損耗状態。防衛網に穴が開いていることは知っている。そこを抜けることが出来るのは中規模の部隊だけであることも。

「わかった。数人が地下30階の旧世代の兵器のコントロールルームにいけ。陽動程度なら使えるはずだ。無線も携帯しろ移動中に作戦を伝える。」

そういうと中越は椅子に深く腰掛けて30秒ほど目をつぶり再び

立ち上がった。

「作戦を伝える。敵は恐らく高度な知能を持つものが多い。つまりヒト型が多い。連携が取れているが彼らの連携はあくまで人間を模倣したものの過ぎない。無駄に経験を積んでいる私たちよりも圧倒的に未熟だ。そこを叩く。」

まず潜水艦と駆逐艦を東京湾から太平洋に移動させる、そしてかつて東京に配備された防衛システムを起動して援軍の本体が来たように見せかける。狙うのは戦艦ではなく駆逐艦クラスのものや空母などの被害が大きくなるものに絞れ。そうすれば被害報告が一気に増え敵の指揮官を一時的に混乱させられる。相手は未熟だ経験は積んでも数年では人間の指揮官を超えられない。さて、作戦準備は整ったかね。」

中越はにやりと笑いオペレーターにそう聞いた。

村上がホテルを出てかシエルターに着くまではほんの一分ほどしかからなかった。シエルターの階段は人であふれかえり、なかなか奥には進まない。こんな惨状を生み出したのは誰なのか疑問に思い

「今の警備群の指揮官は誰なんだ？」

そう携帯に搭載されたAIに聞いてみる。だが村上の問いにAIではなくシエルターにいた女性が答えた。

「中越というこの戦争が防衛戦争になる原因の戦いを指揮した無能司令官の一人です。」

村上は露骨なプロパガンダが行われたことにすぐに気づいたがもはや怒りよりも呆れが先行した。正しい戦果を報告すべきでないことには同意できる。

だがやっている事と言っていることが完全に矛盾している。中越司令が優秀だから近海警備群に配属したにも関わらずその司令官を責め立てるような記事を書かせる。意味が分からない。

「そうですか。それは心配ですね。」

「そうですよ。あの男が司令じゃなければ私の夫が死ぬことはなかったんです。」

そう言って泣き崩れてしまった。

女性をなだめながら数時間待機するとようやく警報が解除された。

結果的に敵は中越の策に完全にひっかった。

深海棲艦の単純すぎる指揮系統は中越の攻撃により混乱、部隊は分断された。散り散りになりパニックに陥る深海棲艦を各個撃破。東京湾から侵入してきた部隊は、ほかの鎮守府からの応援の到着により包囲され殲滅された。

村上が外に出ても特に変わった様子はなかった。

攻撃を受けたのは防衛連合海軍施設や国連軍施設、港湾設備のみであった。村上はほっとして携帯でペルーまでの旅券を買い合成スナックを購入するため近くのスーパーまで歩き始めた。

防衛連合軍 最高司令部 司令長官室

「村上傑。元防衛省官僚、そして元国連軍第一艦隊第一攻撃群初代司令官。戦争中の戦果は……これはかなりのものですね。」

報告を聞き国連軍から分裂して組織された防衛連合軍の最高司令官である二サエルが

「連行できるか?」

とたった一人のために東京の憲兵に総動員をかけようとしていた。

「経歴は素晴らしい。ですが彼は逃げたんです!いまわざわざあなたが直接指示を出して引き戻すべき男なんではないか?」

報告をした部下はそう苦言を呈すが

「彼は私と似ている。マークはあの海で死んだがこの男はあの戦いの直後から戦果を挙げ続けていた。彼は信念が折れて逃げた訳でもないだろう。どちらかと言えば彼は私たちを見捨てた。そういう方がいいでしょう。」

二サエルは大まじめにそういったのだ。個人が軍を捨てる?そんなばかばかしい話があるか。とは思ったが

「わかりました。」

とだけ言って長官室を後にする。

東京中の憲兵が動いた結果村上はあっさり拘束された。大量のスナックを抱えていた村上が憲兵隊に囲まれて拘束されるのは当然と言えば当然なのだが。

彼は拘束されたのちに目隠しをされ、防衛連合海軍の施設に連行された。

抵抗しようかとも考えたが明らかに分が悪いことはわかりきっていた。ここはあえて従順にふるまう方が得策だと考え何も抵抗せずにおとなしく彼は拘束された。

「おはよう。」

村上の目隠しが外れたのは全面がコンクリートで覆われ机といすが二つ置かれた何とも殺風景な部屋だった。平たく言えば取調室のそれである。

ただ、この場所が人間だけを尋問する場所でないのは強化された扉から見ても分かった。

「一体どんな権限があつて一般人を不当に拘束できるんでしょう？」

村上は冷たくそう言い放つ。そんな村上を完全に無視して

「私は二サエル。防衛連合軍の実質的な最高指揮官だ。」

「それで？」

村上はこの男が何を言つて来るのか何となく見当がついていたが聞いてみた。

「短刀直入に言えば君に軍務に戻ってほしい。と、言つても君はどうせ聞かないだろう。」

二サエルがお前の考えはわかっていると云つた顔をしてこちらを見る。

「その通りです。私は軍も艦娘も捨てた訳です。この日本列島にすら足を踏み入れまいと覚悟しましたがそれは現実的ではなかった。仕方なしにここに戻つたらこのざまですよ。」

「君は信念が折れて女々しい理由で軍を去つた。そうだろ？」

「私は軍人です。私の心が折れたからと言つて軍務を放棄するなんてことはあり得ない。信念をもつて敵と対峙していました。少なくとも

も軍が軍としての形ではなくなるまでは。」

村上が軍をやめた理由は複雑だが大きく二つに分けると、司令部との不仲、軍内部に広がった墮落である。

墮落が広がり士気が明らかに低下したのはマークが死んだ頃だった。

それから一年、防衛連合軍は敗退を重ねる一方で深海棲艦達に大規模な揚陸能力がないと判明し人々は沿岸部を放棄。防衛連合軍への予算は削減。

彼らの母体であった国連軍が大規模に拡張され人類の主戦場である地上での戦闘を強化する方針が取られた。

海軍は存在意義を失い、将校の士気が低下。そこからは恐ろしい速度で軍全体が墮落したのだ。

村上はこのままではまずいと、上官に掛け合ったりしたが司令部の作戦指揮のミスを押し付けられ戦犯としての扱いを受けていた村上に発言力はなかった。

村上はその後も司令長官の予算着服などを匿名で告発、しかし軍の墮落は止まらず村上は軍を去った。

「あの頃と状態はあまり変わっていない。そして君は、あの頃とは変わってしまった……。」

村上には痛い言葉だった。彼は軍を去り酒におぼれて、彼自身も墮落していたのだから。

「私が戻ったところで軍は変わりません。それに今の私には軍に戻る資格も、人の上に立つ資格もない。」

「もつとだと思う。今の君では恒常的に部下に暴力を振るうほかの提督と何ら変わりはない。」

村上には二サエルが一体何のために自分を引き留めているのかわからなくなってきた。

「あなたは私を引き入れたいのかどうしたいのかさっぱりわかりません。」

「資料を読んで君を引き入れたいと思い、ここで面会してこいつではだめそうだと思った。私は今まで資料だけで人を選び直観など信じ

なかった。私は今回どうすべきなんだと思う？」

「恐らく最後の要素は私の意思でしょう。」

「それがわかっていているなら何故君はそこで静かにしているんだ？」

自分が望むことであれば実力を発揮できるといふことは十分わかっていた。だがここで軍に戻ることはたして自分が望むことなのか一向にわからなかった。

「まあいい。そうだ。君の昔の部下を連れてきた。懐かしい話でもしたらどうだ。」

重厚な扉が開き二サエルが部屋を出るそれと入れ替わるように部屋に入ってきたのは冷たい目をした女だった。だがその冷たい目はただ彼女の癖で決してこちらを軽蔑している目ではないことを村上はすぐに分かった。

「久しぶりだな。加賀。」

「ええ。随分とお久しぶりですね提督。」

「すまなかったな。」

加賀は首を傾げ

「今更謝罪？」

とふふつと笑い

「別に誰もあなたのことを責めてませんよ。随分と弱腰になりましたね。」

村上が加賀の顔を直視できていないのも相まって加賀が何を思っ
てしゃべっているのか村上には皆目見当がつかなかった。

「私だつて人間だ。それにあのときほど自信過剰でもない。」

「自信過剰？そう。」

二人の間には空気が音を立てて凍り付くほどの沈黙が流れたかと思ふと

「そうね。」

と加賀が悲しそうにつぶやく。

「あなたはもう昔の提督ではないんですね……。そうだ、あなたが不在の間に大和さんと最上さん、夕立さん、そのほかにもあなたが教育した一級品の練度を持った娘たちが大勢死んだわ。ほかの提督があな

たと違い無茶な指揮を可能にする技量も持たず艦娘に無理を強いたせいでね。」

村上はその事実^に激しく動揺した。自分が教育した艦娘がそう簡単に死ぬとは思っていなかった。少なくとも彼らが命を落としてでも攻略せねばいけない作戦など彼が軍を去ってから行われていないはずなのだ。だが

「そうか。」

としか彼には言えなかった。沈黙する彼を今度ははつきりと軽蔑の意思を持った目で加賀は見つめる。その視線は村上が嫌がってもはつきりと自覚できるほどだった。それでも

「またどこかで会いましょう。」

加賀は決して声を荒げることはなく静かにそして冷たく言い放った。村上は頭を抱え座り心地の悪い椅子に深く座りそのまま沈黙を破ることはなかった。

村上はしばらくして解放され空港に向かっていた。羽田は先日の戦闘で被害を受け復旧作業中であるため成田に向かうことになった。とはいっても飛行機のほとんどが欠航となりかなり時間があるため村上は横須賀の慰霊碑に向かった。

慰霊碑は小さいものと大きいものが並びあたりは静かだった。大きいものが人間のためのもの。こちら側には多くの花束が供えられていたが隣にある艦娘たちのものは明らかに小さく花も片手で数えられるほどしか供えられていなかった。親も家族もない艦娘のための慰霊碑に花を手向ける人はそれほど多くない。村上はその二つに手を合わせた。

「すまなかった。」

ぼそりと空に向けてはなつた言葉は思ったよりも近くの何かにぶつかった。

「村上司令?。」

振り返るとそこには笑顔を浮かべる男がいた。

「やっぱりそうじゃないですか。私ですよ、あなたの秘書官を務めた

山本です。」

そう言うのと男はきれいな敬礼をする。言われてみれば確かに見覚えのある顔だ。

「そうだったかな？」

「そうですよ。戻ったんですか？」

「いや放浪の旅で立ち寄っただけさ。」

山本は少し残念そうな顔をして

「私も下手をすれば職を失うかもしれません。やっぱり男よりかわいいい女の子がそばにいたほうがいいんでしょうか。そうなった時は私も放浪のたびに連れていってください。」

冗談めかしく彼はそういうが秘書官の職を完全にとって代わられてしまった彼は一体何をしているのだろうか。

「私が軍に戻った時君に秘書官でも頼もうかな。」

軍に戻る気など毛頭ないにもかかわらずそう答える。すると山本は嬉しそうに

「ぜひお願いします！」

そう答える。罪悪感にかられるが仕方がないのだ。

「仕方ないのか？」

「どうしたんです？」

村上のつぶやきに山本は反応する。

「山本秘書官。私が軍を去ったのは仕方ないと思うか？」

「それは…。」

山本は突然の質問に戸惑いながらも

「あの当時のあなたの階級ではもはやどうすることも出来なかった。私はそう思います。」

階級があれば変わったことだろうか？

もつと根本的な問題があったはずなのだ。彼にはどうすることもできないそんな何かか。

「何かがつかめなかった。だからどうすることも出来なかった。あの時俺が言っていた愚痴を覚えているか？」

山本は天を仰ぎ少し考えると

「そうですね。司令部が意見を聞かないだとか、部下の士官が命令すら適当に済まそうとするだとか嘆いていましたね。」

だが村上が求めているのは当然そんなありきたりの愚痴ではない。あの時気づけなかった何かがあると村上は直観していた。

「他にないか？」

「うーん。他ですか？」

山本は困った顔をしてこちらを見る。かなり前のことを覚えていなくてもすごいのだ。だが村上の欲しい言葉は出てきそうもない。「戻ればいいじゃないですか。」

山本は突然そんなことを言い出した。

「あなたは軍を捨てた。でも現状の軍を見てやはり心を痛めている。軍を去った手前何か理由だとか目的だとかそんなものがないと戻ってはいけないと思っっているんでしょう？昔からあなたはいちいち面倒な人でしたよ。」

芯があり信念を持った男。そんな評価が自分の行動を縛り上げ居心地が悪くなっていたのは事実だろう。

もとはと言えただの官僚に過ぎなかった。軍をやめた時は信念があった。だが、いざ軍務を離れてみれば自分には何も残らなかった。自分がほしかったのは軽蔑の目線でもなければ激しい勧誘でもない。

「居場所はあるんだろうか？」

「私は歓迎しますよ。」

居場所なんてないだろう。勝手な理由で軍をやめ三年間も引きこもり突然帰ってきて復帰したいなどと言う。あまりにも身勝手すぎる。村上にもそれはわかっていた。腐りはてたプライドを守るべきなのか、それとも自分の過去の経験を生かすべきなのか。どちらがいいのかそんなものわかつている。

「俺はどうしたいんだろうな。」

「めんどくさい人ですね。やっぱり戻ります。それを言うのがそんなに難しいですか？」

山本は呆れたように言う。

「俺には戻る場所などない。でも、俺の経験が必要な場所はきつとあるだろう。山本。新しい身分を用意してくれるか？それと二サエルには期待するなど、言っておいてくれ。」

「二サエル司令長官がなぜ突然出てくるんでしょうか？」

山本はとぼけてみるが

「どうせ二サエルに説得するようにでも頼まれたんだろ。」

「正確には加賀さんにあそこまで言わしておいてあなたが変わらなかったらそのままどこへでも行かせてやれとは言われていましたよ。それと、加賀さんの言っていた轟沈ですがあれは避けられなかったことです。戦争に死者はつきものです。」

「少なくとも私のもとで戦っていたのなら彼女らは死ななかつたはずだ。」

山本は苦い笑いを浮かべ

「傲慢ですね。」

さういう。確かに傲慢だ。だが少なくとも彼も二サエルもそれがただの強がりではないことを知っていた。

彼が艦娘の未来を照らす光になるかは誰にもわからない。だが少なくとも二サエルは無能な中越に防衛を任せ、戦犯の村上に賭けるだけのものがあると、そう判断していた。

狂った前提

村上が再度軍に志願したと聞き、二サエルは微笑んだ。
あくまで予想通り。

彼は優秀な駒になってくれるだろう。二サエルは元と言えば軍人ではない。

彼は軍人をうまく使い謀略を企てる側の人間。もつと直球に言えば諜報機関の職員だった。

村上の戦歴は多くが修正を加えられているがプロパガンダのプロである二サエルをだますことなどではしなかった。

二サエルが司令長官の座に上り詰めたのは偶然の産物であり、お飾りであるはずの彼は就任から一か月もたらずに裏から自分を操ろうとしていた元帥を更迭し権力を奪ったのだが、彼にとって名誉ある地位は邪魔でしかなかった。

どちらかと言えば彼がなりたかかったのは更迭した元帥の立場だ。好き勝手出来る上に自分が攻め立てられることもない。

だから持ち駒を強化する必要がある。

「彼はこちらに干渉するなど言っていましたか？」

「私は彼の能力を買っているんだよ。干渉するなど言われるならしなさい。けれど私には提督の人事権がある。」

山本は嫌な予感がした。二サエルはとんでもないところに村上を送りつけようとしているのではないかと。

「彼が死ぬようなところに送ってしまったらどうするんです？駒がなくなると困るのはあなたですよ？」

二サエルは不思議そうな顔をして、

「別に困りはしないさ。君には盤面が読めていないようだがじきに分かる。彼の能力もこの戦争の終着点も。」

不気味だった。ただただ不気味だった。この三年間彼についてきたがここまで楽しそうな顔を見たの初めてだったからだ。

村上は南鳥島への配属と聞いて内心ほっとしていた。

自分がいた頃は前線への補給基地として練度の高い艦娘が多く配置され高い拡張性を誇る多種多様な艦娘が配置される大型の鎮守府であったからだ。

だがどうも自分が乗せられた輸送機のパイロットが気の毒そうな顔をしてこちらを見ているのが気になる。

たとえ状況が悪くとも自分がすべきことはわかっている。そう固く誓い竹野と言う偽名で南鳥島に向かうのだった。

また新しい提督が来るそうだ。

今度はどれだけ続くのかわからないが俺達には関係のない話だ。この島にいる艦娘のほとんどが何かしらの理由でここに隔離されている。司令官を殴っただとか気を病んで兵器として使えなくなったりだとか理由は様々だ。

だが共通として人間の司令官に敵意を持っている。憲兵隊に艦娘を鎮圧し拘束する特殊部隊が編成されていなければ上官を殺して逃げ出すことも出来たのだが、今はもうそんなことはできない。

仮に逃げる事が出来たとして俺たち艦娘は社会の中で生きていくことなど不可能だ。

「新しい提督はどんな人なのかしらね？」

龍田がそういう。どうせ興味もないくせに。

「どんなのがいいんだよ。」

「そうね。なんでも言う事を聞くおもちゃみたいな提督なら文句はないんだけどね。」

そういう龍田の顔は全く笑っていない。提督が善人だろうがクズであろうがそんなこと関係ない。はなから指示を聞くきなんぞ全くないのだから。

「それもそうだな。」

そんな話をしていると数年前の戦闘から全く補修のされていない滑走路に中型の輸送機が侵入してくる。

だが途中で滑走路の惨状を見て着陸を中止して再度上昇していく。しばらく旋回をしながら垂直離着陸モードでの着陸を試み始めた。

久しぶりに聞くジェットエンジンの音に奇異の目をしてぞろぞろと艦娘が出てくる。

何も起こらないこの島では随分久しぶりの光景だ。ジェットエンジンは滑走路に散乱しているチリを巻き上げながら降下して滑走路の少し左寄りのあたりに着陸した。

輸送機はエンジンを止めることなく身をかがめながら機体を離れる一人の男を置いたまま再び離陸してそのまま飛び去ってしまった。

飛行機を見送った私たちは恐らく新たに着任したのであろう提督に近づくことはなくそこに存在しないかのような扱いで無視した。

とはいえ俺は提督の人となりは少し気になる。俺はここにいるほかの艦娘よりは弱い理由でここに飛ばされた。あまり指示を聞かない俺はどうやら提督には問題児扱いされていたらしく異動の際にそう書かれてしまった。

別に提督が嫌いだったわけでもないし間違いと勘違いの連続でここに飛ばされてしまっただけだ。

それにこの艦娘たちと話しては息が詰まる。いつも人間の悪口ばかり。そんなことを言っても何の意味もないのに。俺は提督の後を遠くから追いかけてみることにした。

「どこ行くの天龍ちゃん。」

「ちよつとあいつのことを観察してみようと思つてな。」

「あらそう。どれだけムカついても暴力はだめよ。状況が悪くなるだけだから。心のナイフを使うのよ。」

龍田はまた冷たい目をしてさういう。そんな龍田を置いて提督の後をつけてみる。

「予想していたよりも荒れてますね。」

パイロットがさういう。

「予想してたとは？」

「知らないんですか？」

パイロットは驚いた顔をする。

「かわいそうに。ここの鎮守府は問題児の隔離先として使われている

んです。だから誰もここに来たがらない。前の提督が大けがを負ってこの島を離れて以来4か月は提督不在の鎮守府ですよ。」

まさか支援は要らんと行って、こんな場所に飛ばされるとは思っていなかった。ニサエルは、なかなか意地の悪い野郎だ。

「それで、着陸できそうですか？」

「着陸するんですか？」

心配そうな顔をしてパイロットがこちらを見る

「私を降ろしたらすぐに島を離れてもらっていいですから。」

「あなたこそ大丈夫ですか？この無線持つててください。何かあっても大丈夫なようにしばらく島の上で待機してますから。」

そう言ってパイロットは無線機をこちらに差し出してくる。その無線機を受け取るとパイロットは再び目の前にあるHUDを降ろし飛行モードを切り替える。少し機体が揺れたかと思うとヘリ特有の浮遊感が体を包み機体が徐々に降りていく。

村上改め竹野はコックピットを出て貨物スペースに入る。荷物は少なく竹野の私物と仕事道具などを詰めた鞆が一つだけだった。

「着陸できそうです。ただ建物からは遠い場所です。すみません。」

パイロットがコックピットでそう叫ぶ

「わかりました。ありがとうございます。」

こちらもそう叫び着陸を待つ。接地する音が聞こえ扉のロックが解除される。ハンドルを回し扉を押し開け外に出る。

艦娘たちが大勢見えるが興味を示しているのは輸送機の方。エンジンの物凄い風に飛ばされそうになりながら身をかがめ機体を離れる。

パイロットが扉の奥で敬礼し扉を閉め機体はまた空に向かっていった。

たどり着いた鎮守府はどうやらパイロットの言っていた状況で間違いないようだ。誰も話しかけてこないし、誰もが自分の存在を無視しようとしていた。この状況を打開するのは簡単ではないように見える。

周りを見回してみると敵意を向けているもの、怯えているものなど

様々だったが皆こちらとは絶対に目を合わせようとしない。

竹野はコンタクトを取ることを諦め、地味に重たい荷物を運ぶため滑走路を歩き鎮守府の建物に向かい始めた。

きよろきよろと周りを見回したかと思うと重そうな鞆を持ち上げ歩き始めた。

今自分が近づけばあのかばんをあのかはこちらに押し付けてくるのだろうか。そんなことを考える。

少なくとも今は権力で暴れまわったりするように見えない。当の天龍もここに来てからそんな輩を見かけたりしたがここにいる特殊な艦娘たちはそれに全く驚きもせずに従っていた。

だからおかしな言い方だが天然のクズを見かけたことはないのだ。自分はほかの艦娘と比べてクズに対処する能力もクズを見分ける能力も低いことは自負していた。

そう簡単には信じないとそんな気持ちで竹野の事を追いかけてみるが、この男は普通だった。

自分がここに来る前の鎮守府の提督と同じでただ黙々と執務室に入り書類仕事を始めたのだ。しばらくすると何かの資料を抱え外に出てきた。遠くからそれを見ていた天龍も彼の後を追いかけて建物出る。彼が向かっているのがどこかはすぐに分かった。

資源倉庫だ。前の提督の杜撰な管理で資源は大変なことになっているのは今の提督は知りもしないだろう。

「やっぱり。」

天龍はぼそつとつぶやく。竹野が資料を何度も見直しながら倉庫から出てきたのだ。彼は困惑していた。怒りだとかそういうものではなくなぜこうなるのか理解できないと言った表情だった。

それがどうにもおかしかった。誰かをしかりつけるとかではなく、彼は前任の提督の行動にドン引きと言った表情をしてまた執務室に戻っていく。

天龍は彼の事をそれ以上付け回すことはせずに龍田のもとに向かった。

「あら天龍ちゃん。どうだったの?」

「悪い奴じゃあなさそうだった。」

龍田は微笑みながら

「じゃあ今度の提督は狡猾なクズね。でも天龍ちゃんの目はどこについてるかわからないぐらいぼけてるからちよつと頭を使えるぐらいのクズかしら?」

一体何をされたら提督と言われて条件反射でクズが出てくるのか。ここまで好き勝手言われるのもなんだか癪になってきた。

「じゃあ今日の夜あいつのここに行ってみる。襲われたら殴って逃げればいいし。」

「全く。狡猾なクズは信用を得てから落とすのよ。信用しちやだめよ。」

信用を得てから襲う。それはもはやこちらの同意のあるそういった行為なのでは? そう天龍は思うのだが違うらしい。

その夜

天龍は龍田に見送られ必要以上に扇情的な服装をして宿舎を出た。

こんな格好をするのは本意ではないのだがクズを見分けるにはこれがいいと龍田やほかの軽巡からも勧められた。

クズでなくともこちらが挑発したら襲われても文句は言えないと思うのだが天龍はそのことに気がつかなかった。

龍田は天龍にヒトの恐怖を刷り込ませるためにそんな恰好をさせて送り出した。

もし何かあればすぐに突入して息の根を止めてやる。

提督以外に誰もいない鎮守府の本館の階段を登り二階の中央にある提督執務室に向かう。静かに提督執務室の前につきノックをしようとする。

「誰だ? そこにいるのは?」

向こうからそう話しかけてきた。物音を立てた覚えはないのだが提督はこちらの気配を感じ取っていた。

一瞬体が硬直するが気がつかれてしまつては仕方がない。

「天龍だ。」

「入れ。」

提督は短く入室を許可する。

「これは？」

執務室の中には所狭しと段ボールが並んでおり提督が物凄い勢いで電卓をたたいていた。

「昔の職場でよく装備品の調達の計算をやらされたことを思い出す。それで用件は？」

偽名を使っているが自分の鎮守府の艦娘には経歴がばれてもいいと思っていた。面倒な因縁をつけられたくないだけで、こんな僻地を調べ上げて、小言をいう熱心な人間はさすがにないだろう。もちろんその艦娘にもばれたくない過去もあるのだが。

「長くなる話なら隣の部屋にするが？」

天龍は扉の前で固まったまま黙り込む。

執務室はのソファは完全に使い物にならなくなっており座れる場所はなかった。

この言葉は提督が隣の部屋がどんな場所なのか知っているかで大きく意味が変わる。提督執務室の隣は提督の自室。

だがここではそれ以上の意味を持ち提督の夜伽の番となつてしまった艦娘が向かう部屋だった。

竹野は電卓を乱暴にたたくのをやめて天龍の方に視線を向ける。

天龍は硬直してこちらを凝視していた。

その天龍を見た竹野も呆気にとられて動きを止める。

「隣の部屋で待っていてくれ。それと、もう少し常識的な恰好をしてくれ。」

竹野が一時的に完全停止した思考回路を再起動して出た言葉はそれだった。

「わかった……。」

天龍は静かに部屋を出て隣の部屋に入る。大量の拘束具などが設置されていたこの部屋も憲兵隊が標準の部屋に改築しておりおかしな場所などなかった。

だが艦娘たちにとってそこが最悪な場所であることに変わりはない。天龍が怯えながら身にまとっていたやけに露出の多い服を脱ぐ。

竹野はいまだに困惑をしていた。ただ次第に理解したくもないことを理解できた。

彼女たちが気をやんだ理由は何もPTSDだけではなかった。性的暴行や心理、身体的虐待。心や人格を破壊する方法はいくらでもある。

竹野は渋々立ち上がり積み上げられた段ボールを倒さないように慎重に歩き部屋を出る。

隣の部屋に入ると電気が消えたままだった。

帰ってしまったのかとも考えたが確かに近くに気配がある。

「電気もつけずに何をしているんだ？」

竹野は電気をつけて天龍の姿を見てまた絶句した。天龍は裸だったのだ。

「なにしてるんだ？」

「もういいんだ。ここに来ちまった時点でいつかそうなるってわかってた。だから自分の意志で……。」

竹野はやはり困惑した顔をしていた。天龍は竹野に抱き着きその豊かな胸を押し当てる。

竹野は顔に笑みを浮かべて、胸を揉みしだき押し倒す。はずがなかった。

天龍の力は強力でやんわり押し返すことはできない。

竹野の頭は存外冷静に回り、結論を導き出す。

そこからの動きは早かった。

竹野は抱き着いてきた天龍の腕の下に手を通し腕を上にも払いのけもう一方の手で素早く払いのけた手をつかみ上に引つ張り上げる。そのまま足をかけ床に押し倒し拘束する。自由だったもう一方の手もすぐにつかまり体に力が入らなくなった。

「全くどういいう教育方針を取ってるのかわからん。何が目的でこう言った行為に走った？」

竹野は少しだけイラついていた。少しだけ口調が強すぎたことに気がついた時、すでに天龍は泣いていた。

必要以上に傷をつけるつもりはなかったがこんな状況で冷静に対応するほうが無理な話だ。

天龍は涙を流しながら整理のつかない感情に振り回されていた。怖いのか、痛いのか、悲しいのか、はたまた嬉しいのか。なぜ自分が泣いたのかわからない。

「武術の心得を見てやろうと思って。」

出た言葉は意味の分からない言い訳だった。

「なら、なぜ裸になる必要がある？ここは古代のオリンピックピアじゃないぞ。それと昼間俺のことを付け回してたのはお前だな？」

天龍には頷くことしかできなかった。竹野は天龍の拘束を解き

「服を着てから執務室に來い。いいな！」

そのまま部屋を出ていく。

「どうなってるんだ。」

竹野は憤慨して執務室に入る。そして電話を取り二サエルに電話を掛ける。

「司令長官。」

「どうしました？支援は要らないと聞いていますが。」

「私は変に干渉してほしくないという意味で言っただけつもりですが、いくら何でも鎮守府の形をした更生施設に飛ばされたら話は別です。」

「つまり事情が変わったからやっぱり支援が欲しいと？」

「不本意ですが私の力だけでどうこうなるレベルの荒れ方ではないことわかって飛ばしたんでしょう。ここに飛ばされた艦娘の元上官のリストとその上官の行動報告書を送ってくださいませか。」

「自分で調べろと言いたいところですが、山本君が君に慈悲をかけてくれるそうです。少し時間がかかりますが必ず送らせましょう。」

「感謝します。」

「気にする必要はありません。復帰祝いだと思って受け取ってください。」

どうにもいけ好かない男だが能力だけは本物なのだろう。受話器

を戻し天龍を待つ。積んである段ボールを何とかしてどけ部屋の中
央にある小さなテーブルと椅子を掘り起こす。

ちようどタイミングよくノックがあり入室を許可すると龍田が明
らかに殺意をむき出しにしてこちらに襲い掛かるのが見えた。

単純な関係

扉からとびかかってくる龍田を捉えた竹野はすぐに回避行動に移る。久しぶりに体を動かすため不安はあったが、龍田の第一撃を何とか竹野は受け流す。しかし艦娘が本気でかかってくるとさすがに命に関わる。さらにこの狭い執務室内に逃げ場はない。幸いにも龍田の戦い方は力任せの素人のそれだった。

龍田の攻撃を読みうまく蹴り飛ばして窓から外に放り出す。

たとえ艦娘と言えども二階の窓にジャンプして登ることなどできない。少し外で頭を冷やしてもらおう。

考えるに戻ってこない天龍を探しに来たら裸で泣いていた。状況だけ見れば勘違いが生まれるのも無理はない。

そして俺の息の根を止めに来たそんなところだろうと、考えているとまた龍田が部屋に飛び込んでくる。

うまく拘束して話ができるようにしたいがこの狭い部屋で暴れられると避けるしかない竹野の分が悪い。そこで竹野は窓から飛び降りて外に出る。そんな竹野を見た龍田は

「ふふ。いい度胸じゃないの。流石に着任したその日に手を出すだけのことはあるわ。」

そう言う。口では穏やかに言っても口以外のあらゆる部位から殺意がにじみ出ている。

「誤解だと言っても止まる気はないか？」

「当たり前でしょう♪」

龍田は全く声を荒げない。怒りを押し殺し冷静にふるまおうとしているように見えないこともないが、ただ怒りの表現が普通と違うだけだと頭が無慈悲に告げてくる。

天龍が誤解を説いてくれるとありがたいのだがあの様子ではまともにも声がある出るまでにかなり時間がかかるだろう。

全く予想していなかった天龍を拘束するのと戦闘態勢の龍田を相手にするのはわけが違う。

龍田は微笑みながら窓枠を越えて飛び降りる。そして真っ直ぐこ

ちらに突撃してきた。

竹野は攻撃を何とか躲すが当然艦娘と人間ではあまりに基礎体力が違い相手にならなくなるのも時間の問題だった。

ただでさえ劣勢であるにもかかわらず龍田はどこからともなく槍のようなものを取り出す。

龍田が飛び槍を振り下ろす。竹野は横に跳び回避する。すると振り下ろされた槍は横に水平移動して竹野の足を狙う。竹野は振られた槍を踏みつけ動きを止める。

槍を引き抜こうとする龍田の動きに合わせて足を離す。バランスを崩した一瞬の隙をつき一気に距離をつめるが龍田は槍を捨て後ろに飛びのく。

竹野は槍を持ち上げるがあまりに重すぎてとても人間に扱える代物ではない。

「やはり話し合う気はないか？」

「話し合う？そう言って天龍ちゃんをあの部屋に？天龍ちゃんはおバカだからそれでよかったかもしれないけれど私はそんな甘くないわよ。うふふ。」

彼女が私を見るとき、大前提としてのこちらがクズだとして話が始まる。

そこにあの状況を見られたのだ。何を言っても聞きはしないだろう。怖い笑顔を浮かべた龍田が動く。

艦娘の異常な身体能力で竹野との距離を詰めてくる。

龍田に腕をつかまれないように注意しつつ龍田を受け流す。軽巡だったからよかったもののこれが戦艦だったら受け流すことなどできず攻撃が当たった時点で終わりだろう。しばらく攻撃をかわし受け流し続けていると若干龍田から焦りを感じる打撃がやってくる。

竹野がその数少ない状況の打開手段を見逃すはなかった。訓練されているわけでもなかった龍田の攻撃は元々隙が大きくその上に焦った龍田は大きく振りかぶり勢いよく打撃を放った。竹野は龍田の打撃を逆に自分向けに引き寄せる。

完全にバランスを崩し左足を前に出して体制を保とうとするがそ

の足を竹野は蹴り上げそのまま地面に押さえつける。いくら馬力があるとはいえしつかりとした拘束具があれば軽巡程度であれば一人でも拘束ができる。

素早く手を回し龍田を縛り上げる。

「話を聞いてくれれば、こうはならなかったんだぞ。」

竹野は縛り上げた龍田を執務室まで運ぶ。執務室に来ることは龍田も抵抗を諦めて静かになっていた。

扉を開けると天龍が大人しく座っていた。目元は腫れまたすぐに泣きそうな顔をしている。

この頃には竹野は疲れ切っており話し合う気にもならなかった。

「私はひとまず今日は寝る。龍田も私の言うことなんか信用しないだろうから二人で話し合ってくれ。おやすみ。」

可愛そうだが龍田は縛り付けたままだ。そのうち天龍がほどくだろう。竹野が去った執務室は静かだった。

天龍も龍田も喋りはしなかった。龍田も自分が拘束された後何もしてこなかった竹野を見て本当に誤解であったということは何となくわかっていた。

だがどうして天龍が泣いていたのかを、教えるように催促するのは酷なことだと思ったのだ。静かに夜は更け龍田は縛られたまま夜を明かした。

酒の力を借りることなく熟睡できた朝。爽快な気分で竹野の着任二日目が始まった。

そんな気分も執務室に入るなり縛られた少女と泣きつかれて寝た少女がいたせいで吹き飛んだが。

竹野は二人に適当な毛布を掛け書類仕事に戻る。

結局二人が起きたのは昼を過ぎてからだだった。先に起きた龍田は自分の衣服の乱れ具合や股の様子などをしきりに気にしながらこちらを警戒していたがしばらくすると拘束を解けと目で言ってきた。

「暴れるなよ。」

そう言うと龍田は素直に頷いた。拘束具をほどいてやると天龍を

担ぎ槍をまたどこかに仕舞い部屋を出ていく。

その日の提督執務室への来客はそれが最後だった。

静かに業務をこなせるのはいいのだがあまりに活気がなさすぎて少し悲しくもなってくる。改めてとんでもない鎮守府に飛ばされてしまったものだど嘆く。

そうしてまた二日ほど経ったがついに艦娘の協力なしではどうしようもない事態が発生した。

不足した資材を司令部に要請したのだが護衛はそちらで出せといつてきたのだ。出撃する資材がないから補給を頼んだのにおかしな話だ。

だがそういわれては仕方ない。竹野は軽巡の宿舎に向かい天龍を探した。現時点では一番協力してくれそうだからだ。

阿武隈や由良にごみを見るような目を向けられたが当の天龍は先日の出来事がなかったかのように出てきた。

「おうなんだ？」

「司令部が補給船の護衛をこちらで出せと言ってきた数人見繕って来てくれないか？」

「自分でやれよな。」

そんなことをいつつも流石に悪いことをしたという意識はあるようにで渋々受け入れてくれた。

天龍は今の提督と少しずつなじめそうだ。私も人間を信じたくないわけではない。けれど、今まで出会った人間が悪すぎて基準がおかしくなってしまった。

今の提督はよく分からない。単純で明快な艦娘と提督の関係。提督に求められれば体を貸し命令されれば戦場で死ぬ。

何故か？提督が命令しなければ私は生まれることすらなかった。単純なはずだった。少なくともいまの状況よりは。

人間も艦娘も生物であり私たちは人間のメスに類似している。だから慰安婦も兼ねるのだ。当然のことだと思っていた。

でも今の提督は天龍の裸を見ても何もしなかった。意味が分から

ない。合理性に欠ける。

私は当然解体されると思っていた。だが彼は私のことを無視して資源の輸送について悩み、奔走している。そんなことをして何になるのか？

護岸の上を歩きながらぼそぼそとつぶやく。

「海を取り返す。もともと人間のものでもないのに傲慢。」

「そうかもしれない。海は誰のものでもない人間の引いた線で決まった領海も排他的経済水域もほかの生物にとっては何の意味もない。同じように深海棲艦のものでもない。人間は海を支配したがっているがそんなの無理だ。」

どうしてか提督がそこにいた。

「なぜ私のところに？」

「さつき天龍と話したんだが、少しでもあの勘違いを申し訳ないと思っているなら資源輸送の護衛を頼みたいとおもってな。」

私の求める分かりやすい関係だ。私は彼には協力するべきだし、彼は私に協力を要請するに足る理由がある。

「あなたは提督で私たちの所有者でしょう。命令をされれば私たちは聞くわよ。」

竹野は渋い顔をして

「君のその言葉と先日の行動は矛盾しているように思うが？」

「私は別にいいのよ。でも天龍ちゃんはここの鎮守府には珍しい純粋な娘だから。」

「そうか。それと一つ訂正だ。命令はできるが君たちは厳密には誰の所有物でもない。」

「私たちを生んだのは人間よ。提督たちの命令で建造されたのよ。」

その建造をやったのけているのは妖精たちであり人間の手がおよぶ範囲ではない。難しい問題だ。軍の中でもいまだ意見が分かれている問題でもある。

「人間がどうやって生まれてくると思う。」

龍田は嫌そうな顔をする。

「少なくとも気が付けば生まれているなんてことはない。人間の子供

は保護の対象だが親の所有物じゃない。親の意思がなければ生まれ
てこなかったにも関わらずな。」

それを聞くと龍田は不思議そうな顔をして

「ならば私たちがあなたの命令に従わなければいけない根拠は何なの
かしら。」

「君たちは軍人で私は君たちに仕事を強要することも出来るかに思え
る。だがな、実際はそうじゃない。私には君を自由に操る権限などな
い。しかし、君が私の指示を無視して被害を出せば軍法会議で裁かれ
る。そこで君は除籍処分を受けるかもしれない。だから君は自分を
守るために私の命令に従わなければいけない。しかし、私が君の上司
であるから肉体関係を強要したとしても、それはただの軍規違反だ。
そうなれば裁かれるのは私の方だ。上下関係は社会的かつ経済的圧
力によって維持されている。だから昔の君の上司が行っていたこと
はわかりやすい関係でも何でも無い。ただそれっぽい御託を並べた
だけのいびつな関係だ。そこには何の拘束力もない。憲兵隊が機能
してればの話だがな。」

「そうはいつでも上司には私の人事を決める権限がある。私を解体す
るのも異動させるのも自由。犯すのも殺すのも自由。そうじゃない
？」

私たちの命は必要性に駆られて生み出されただけの命。人類の脅
威に住まうしかない寄生虫。散々言われた。どれも妙な説得力が
あった。人類は戦争さえなければ私たちが必要としなかった。それ
は間違いない。

「残念ながら君たちは普通の軍人以上に縛られているのは確かに事実
だ。軍が君たちを見捨てれば君たちは生きていけないだろう。だか
らと言って痛みを持っている艦娘の命も尊厳も、もてあそぶべきじや
ない。」

艦娘には国籍も人権もない。彼女らを守っているのは軍規と憲兵
隊だけ。

「なら貴方はこの戦争が終わって私たちが要らなくなった時、味方し
てくれるのかしら？」

軽々しく「もちろんだ。」とでもいうのだろうか。龍田はそう考えたが竹野の言葉は違った。

「少し話がおかしい方向に向かっていている気がするな。君たちが権利を望むのなら可能な限り協力する。だが君たちが既存の人類の社会を破壊して人類から権利を奪い取ろうとするなら敵対せざるを得ない。そうならないためにもこの戦争の行きつく先が見えたら私は行動するよ。」

「そう。」

人類が私にはわからない。

私たちがいなければ深海棲艦にとって食われる勢力なのになぜか私たちに対しての当たり前のように暴力を振るい私たちを奴隷のように酷使する。

一方の私たちは少なくとも危険に見合う対価を何も受け取っていない。だから彼らに従う理由などありはしない。龍田がそう考えているとそれを見透かしたように

「君はこう思っているんだろう？ 私達が人類を滅ぼしてこの星の盟主になり替わり人類を奴隷化できるのではと。」

と竹野は言う。なぜ司令官に従うかという話の根幹には人類と艦娘の戦力差があるのだと、なんだか誘導されているようで不快だ。誘導するならわかり切ったこんな疑問に何故誘導するのか？

「人類と艦娘が戦えば艦娘が勝つでしょう？」

竹野は予想していたと言った顔をしていた。

「君たちのその素直さが人類に勝てない理由だ。単純な戦力、個々の戦闘能力。それでみれば確かに艦娘のほうが強い。でもな、人類は凶悪な残虐性と狂氣的な戦術を使って最終的に艦娘を皆殺しにできる。それこそたった一人の艦娘を殺すため町を一つ吹き飛ばしてでも戦闘を続けるだろう。」

龍田はばかっていると反論しようとした。でもそんな気も失せた。この鎮守府が人類のほうが精神的に優位であると証明しているようなものだったからだ。

ここにいる艦娘は世界各地で様々な上司に精神的、物理的苦痛を与

えられても誰一人として上官を殺した者はいない。

過去に上官を殺した艦娘はたった一人。彼女は解体されることなくどこかに連れていかれ消息を絶つたらしい。

「でも安心しろ。今の人類は文明を作って理性を持って野生を捨て去ろうと努力してる。君たちが人類の文明を破壊しない限り問題は無い。それに内地の艦娘は本当の意味で人類と共存する形を模索している。それは、わかりやすい関係ではないがな。」

龍田はこうも本音というよりも暴露と言った方がいいのかもしれないがバツサリと話す司令官には初めて会った。

この司令官が善人であるかはどうでもよくなった。自分が牙を向けない限り彼が自分たちに牙を向けることはあり得ない。

たとえ牙を向けたとしてもそう簡単に彼を弱らせることなどできない。そう思った。

「資源輸送の護衛に行けばいいのね。了解。」

「よろしく頼むぞ。」

鬼の娘

あそこまでの過激思想を見せられたから今更驚きもしないが、軽巡の中では龍田が最も人間を嫌っていたようで、相変わらず目線は怖い。阿武隈や由良、神通、長良、それに龍田と天龍で護衛艦隊を組むことに成功し資源輸送の手筈は整った。

軽巡だけで出撃させるのは心配ではあるが何気に万能ともいえる艦種であるし、そもそも安全確保済みの商船の航路を使うためそこまで心配はいらないだろう。

「というわけだ。この航路は付近の鎮守府が定期的に掃除している。恐らく脅威はないだろうが本土につき次第各自補給ののち、こちらに戻ってきてくれ。輸送艦さえ沈まなければいい。極力戦闘を避けて最大船速で移動するように。」

することがないためブリーフィングをしたが資源輸送の護衛など日常業務の一環。本来であればこちらが指示を出すまでもなくローテーションが組まれているはずなのだが、やはりこの鎮守府はほとんどの機能を失っているようだ。

軽巡たちを送り出し執務室に戻ろうとしたところ何者かの視線に気が付く。

「誰だ？」

そう言うのと物陰が動き勢いよく何か飛び出した。

顔は見れなかったが体格的に空母か戦艦だろう。ほかの鎮守府ではそれなりに好意的にとらえることが出来る行動もこの鎮守府では例外なくただの監視であり少しでも問題を起こそうものならすぎさま、もともとほとんどない信用を完全に失う。

建物の外周をぐるりと周り逃げた誰かを探してみるが結局見つからず仕方なく執務室に戻る。

あの男はこちらの視線に気が付いていたようだった。確かに私の体のサイズで尾行するのは難しいかもしれない。けれど一つ気が付いたことがある。あの男は異常に警戒心が強い。何かばれたくない

ことでもあるのかもしれない。

次は青葉さんに頼んで本格的な調査をしてもらおうかとも思いな
がら空母宿舎に戻る。

宿舎に戻ると、翔鶴姉はじめ加賀さんなどが心配そうな目でこちら
を見ていた。

「尾行がばれそうになって急いで逃げたら転んだだけ。」

微笑みながらそういう。

「そう。ならいいの。」

加賀さんは無機質な声でそう答える。もとより彼女の性格はク
ルだ。しかしここにいる加賀さんは昔の提督に暴行や性的搾取など
を受けさらに心を閉じていた。

「本当に大丈夫なの瑞鶴?」

翔鶴姉は私の腕を肩を触りながら全身に傷がないか注意深く見て
いる。

「ほんとに転んだだけだから。」

なるべく明るく。それでもしないとここにいる空母たちはみんな
心を閉じてしまう。すでに蒼龍さんや赤城さんは自室に引きこもり
めったに姿を現さない。

「大丈夫だって。」

へらへらと笑って見せるが、そんな私の心もすり減り続けている。

私も傷つけられてここにたどり着いた艦娘の一人だ。気持ち悪い
顔で私を舐め回した男も、傷心した私に同情するように見せかけて、
同乗してあげている自分がかわいくて仕方ないと言った女ももうた
くさんだ。

静かに暮らせていたこの鎮守府もまた新しい提督の着任で地獄に
変わるのだろうか。あの男は私に何を求めるのだろうか?

提督執務室に着くと書類ファイルにも関わらず10GB近いファ
イルが届いていた。

こんな僻地ではダウンロードに時間がかかるだろうと予想してい
たが意外にもインターネット環境はいいようですぐにファイルを開

くことが出来た。

その膨大な資料と心理分析などのファイルをみて竹野はぼやく
「俺は心理カウンセラーではないんだが。」

今の仕事はとても司令官がすべき仕事の範疇を越えている。

戦術的な話でも戦略に関わる問題でもない。

ただ間違いなくこの鎮守府は今の海軍で恒常化している墮落の原
因の一つである艦娘の兵器以外の側面が生んでしまった産物である
ことに間違いはない。

そうして自分を納得させ少なくとも次に発令される攻略作戦の時
までにこの鎮守府の機能を取り戻そうと目標を立てる。

現状、竹野の指示を聞いてくれるのは二人。

その二人のお願いで軽巡や雷巡が気まぐれで動いてくれる。うま
くいったとしても兵力として運用できるのは20数名が限界だろう。
それにいくら軽巡と雷巡の練度を高くしても当然戦艦などと同じ
運用はできない。

相手に空母型でもいた日には完全なワンサイドゲームが展開され
ることになる。

「一番傷の少ない娘を選定するか。」

そうして資料を読み始めた竹野だったが一時間もすれば全く読む
気が失せた。

量が多くて音を上げるような男ではないがあまりにも呆れてもの
が言えなくなった。

性的行為を強要されたもの、出撃の責任を負わされた日常的に暴力
を振るわれたもの戦果を挙げなかったため大破状態で半年以上放置
されたものなど様々だった。

客観的な報告書ならまだいいが、告発された提督たちの供述調書は
読むに堪えなかった。

言い訳を並べる奴に、軍規違反にも関わらず、艦娘は所有物である
から問題ないなど意味のないお気持ち表明をする奴。そいつらはま
だましだ。

開き直って聞いてもいないのに誰の何が気持ちよかったとか誰

が上手かつたかなどを恥ずかしげもなくしゃべる奴らもいた。

本当に意味が分からない。気分が悪くなった竹野は執務室を出る。心配がしたので疲れた目で扉の裏を見ると瑞鶴がぎよつとした目でこちらを見ている。

完全に目が合い逃げるに逃げれない瑞鶴は口をパクパクとさせている。

「何をしていたかは聞かないし聞く必要もない。どうせ監視か何かだろう。俺がいない間に執務室をあさってもらっても構わん。代わりに言うては何だが一つ頼まれてくれないか。」

瑞鶴は固まったまま動かない。竹野は資料を思い出す。

そして重要なことを思い出した。瑞鶴は報告によれば男性恐怖症を発症しているらしい。

そして異動になった先の鎮守府は女性提督の管理する場所だったが、彼女は海軍内でちやほやされていただけで能力の伴わない提督だと憲兵隊から手痛い評価を受けており、彼女にさらなる不信感を植え付けることになった。

竹野は男性であり提督。

瑞鶴が怯えるのも無理はない。彼女に性向を強要した男と同じ肩書。

瑞鶴からしてみれば周囲には自分を守ってくれる姉も仲間もないし助けも呼べない。彼女の中には最悪な未来が映り体の硬直は増していく。

ただ疲れて目を細めていただけの竹野のその目は、彼女にとっては視姦されているように見えていた。

彼女の中でそんな想像が広がる一方で、竹野は若干のめんどくささを覚えていた。なぜこうなるまで放置したのか本当に疑問だった。

が、二サエルと面会してわかったことだが彼は何らかの理由がないと行動しない。彼がそうせざるを得ないとしてここを作ったのだから仕方ないと頭では納得しているのだがやはり面倒なものは面倒だ。

「まあいいや。」

竹野はポケットから茶封筒を取り出し瑞鶴に渡す。

「空母宿舎のみんなで見てください。」

しかし瑞鶴は手を出そうとしなかった。完全に彼女はパニックだった。女性スタッフか天龍でもいてくれればよかったのだが仕方ない。残念なことに竹野には男性恐怖症に関する知見はなく有効な対策をその場では思いつけなかった。

仕方なく彼は、かたまった瑞鶴を置いて空母宿舎に向かい扉をたたく。

「なんの用ですか？」

扉が少しだけ開き、その隙間から加賀が警戒した様子でこちらを見る。

東京であった昔の部下の方もかなり怖かったがもつと恐ろしく心が冷えるような目と声だった。

「瑞鶴が提督執務室前で固まっているから回収してほしい。それと君たちに指令書だ。」

竹野は加賀にさっきの茶封筒を手渡す。

加賀はひつたくるようになんかそれを受け取り部屋に入っていく。しばらくすると翔鶴が部屋を飛び出してきて扉が竹野の顔を強打する。

鼻を押さえる竹野を完全に無視して加賀と翔鶴が鎮守府本館に走っていく。その後ろに鼻を押さえながら竹野が続く。

だが、途中で竹野は瑞鶴本人と接触するのはまずいと思い出し手帳を一枚引きちぎり謝罪と今後の連絡は翔鶴を挟んで伝えるとの旨を書き空母宿舎に戻る。

扉をたたくと出てきたのは飛龍だった。

彼女は…。

考える間もなく腹部に重い打撃を受け竹野は吹き飛ばされる。

誇張なしに彼の体は5mは吹き飛ばされていた。

龍田の時と違い扉が開いた時点で距離はほぼゼロ。不意打ちを回避するのは不可能だった。

赤城や蒼龍が出てくると思っていた。自分に手を出す恐れのある飛龍を赤城たちが放っておくはずがないと思っていたがどうやら間違っていた。

ぼやける視界の中で何とか飛龍の動きを捉えようとするが焦点が完全におかしくなりいつまでたつても視界が晴れない。

「ちよつと待て。伝言を伝えようとしただけだ。」

完全にまずい発言をした。加賀にすでに指令書は渡していたし竹野の思い付きで追加した伝言だと説明する余裕はなく首をつかまれ体が宙に浮く。

「伝言？ さっき渡してたじゃない。」

「別の伝言だ。」

飛龍の手によって着実に血中酸素量が下がり頭が回らず言い訳っぽさは増していく。

さらには思い出したくないことを思い出してしまった。

飛龍は過去に提督を職務復帰が不可能なレベルに暴行したことがあるのだ。その提督は轟沈を年間1000以上出しており問題視はされていた。

飛龍の進言を無視して赤城、加賀、蒼龍が轟沈する敗北を記し、帰還した飛龍によってその提督は半殺しになるまで追い込まれた。

その提督が軍法会議にかけられたこともあり解体は免れたが引き取り手がなくこの鎮守府に飛ばされた。

戦果重視の無理な進軍を行う鎮守府で生き残ってきた飛龍の練度は高く危険な艦娘だと竹野が判断した一人だった。

「私がこの部屋にいないと思った？ 目的は蒼龍？ それとも赤城さん？ 何をしようとしたのよ。」

またも打撃が飛んでくる。今度は口の中に血の味が広がる。抵抗の意思は消えていないが体に一切の力が入らない。

本当に意識が飛びそうになった時、飛龍の手は首から離れる。

しかし、すでに全身に力は入らず膝から崩れ落ちる。

首はうなだれ、遠くに加賀と瑞鶴、翔鶴らしき三人が見える。

彼女らに助けを求めて助けてくれるのだろうか。

そんな疑問が浮かぶ中、飛龍はまた拳を振り上げる。

いい加減内臓の一つや二ついかれてもおかしくない。憲兵隊を呼んでおけばよかったかと後悔するがここは内地の鎮守府ではない。

助けを求めても着くころには私は死んでいるだろう。

また加賀達の方を見ると何が起きているかに気が付いた加賀が急いで飛龍に飛びつき押さえつける。

「やめてーはなしてー」

飛龍がわめき空母宿舎から雲龍や天城が慌てて出てくる。加賀に加勢して暴れる飛龍を押さえつける。

しかし、その騒動の間に竹野も力尽きて気を失った。

面倒なことになった。

加賀はそう思った。飛龍が提督とぼったり会ってしまったことが問題だった。

天城や雲龍が出ていればこうはならなかっただろう。

気を失った上官とわめく飛龍。瑞鶴が男がいる部屋でも平気そうにしていること以外何もいいことが起きていない。

瑞鶴が特に怯えていないのは恐らく提督がピクリとも動かないからだろう。最初は憲兵隊が来たら空母の誰かを襲おうとしたとも言えばいいと思ったが、飛龍の言い分は間違いでこいつは本当に伝言を伝えるに来ただけだった。

なるべく瑞鶴との接触を避けるように心がけるとの意思と報告役として翔鶴を挟むようにとの指示。

飛龍の抵抗が収まり静かになってから指令書も呼んでみたが資源到着後、訓練所をだれがどう使うかの時間設定だとか近辺哨戒の順番などを記したただの指令書であり夜伽の番だとかそんなふざけた指令書ではなかった。

急いで青葉にこいつの素性を調べさせたがどうも嫌な予感がする。司令部の人間がこいつの人となりを知っている可能性がある。

「まずいことになりましたね。」

「突然倒れたとかいえばいいじゃない？」

五航戦のあほが何か言っているが聞き流す。

「この人はもしかしたら司令部から勅令を受けて着任した提督かもしれません。つまり今までのような左遷人事ではないかもしれない。」

「左遷された提督ではないということはかなりまずくありませんか？」

天城の言う通りだ。憲兵に何を言ってもこちらの嘘だと思われてしまうかもしれないのだ。

空母たちが困り果てている中竹野はすでに意識を取り戻していた。

しかし意識があると言い出せる状況ではない。

誰だかわからないが脈を測ってくれたりこちらの体を気遣ってくれている。根はやさしい子たちなのかもしれない。

悪くとらえると自分が死ぬともっと面倒になるから仕方なしに看病しているのかもしれない。いい風にとらえたいが今の状況から考えるに恐らくは後者だろう。

結局言い出せないまま時間が過ぎていった。

兵士と曰。

「で、どうするのよ？」

空母たちは困り果てていた。飛龍もいい加減非を認めたとおとなしくなっている。

「あの程度の攻撃で気を失う提督が悪いんじゃないかな？」

「黙りなさい二航戦。」

飛龍の必死の言い訳を加賀はばさりと切り捨てる。飛龍はまた下を向く。

案外艦娘同士では素直で、かわいげがある。

ただ、どう転んでも艦娘の本気の打撃はいくら訓練された成人男性でも耐えることができないと教育する必要があるようだが。

しかしどうしたものか。バレないように腕時計をのぞいてみるとしばらくしたら輸送船が到着するのだろ。いち早くここを抜け出したいが瑞鶴がここにはいる。突然動けば今度こそ息の根を止められかねない。

すでに飛龍の攻撃から完全に回復した脳で考える。考えなくともわかるのだが。変な誤解を招かないためには素直に自白した方がいい。

「飛龍。今私がここで目を開けて立ち上がったらお前は俺を殺すか？」

「起きてたの？」

飛龍が怪訝そうな声でそう聞く。

「下手に動けば殺さるかもしれないという恐怖があったからな。」

竹野は目を開け寝かされていたベットから立ち上がる。ベットから……。どこだ……。空母宿舎だと思っていたがどうやら違うようでありかなり物々しい空間だった。

「余計なことをするなら殺す。それは変わらない。」

と飛龍が言うが頭にその言葉は入ってこない。

「どこだ……？」

竹野と飛龍たちがいたのは鉄格子に囲まれ窓一つない部屋。

「懲罰房だけど？」

瑞鶴が普通に答える。大丈夫なのか？

「規模的にはあってもおかしくないのか…？」

竹野が昔教育した艦娘たちにも当然ながら問題はあった。しかし艦娘のほとんどは精神的に幼く、牢屋にぶち込んでまで教育する必要はなかった。

それでも鎮守府によっては憲兵隊が懲罰房に艦娘を連れて行くのが日常の場所もあったらしいが。

「出口はどこだ？輸送艦がじきに到着する。」

飛龍の目つきが鋭くなり

「私は騙されない。偉そうに余裕ぶって。私なんかいつでも解体できるから？だからそうやって慈悲を『与えてやる』とでも言いたいのか？」

加賀が飛龍を制止するがそれを振り切り飛龍は胸倉につかみかかってくる。

「軽巡をたぶらかして、私たちに変な期待を抱かせて。何が面白いの？優しくするやつも戦果のために私たちを使い捨てる奴も結局同じ。自己満足のためでしょうが！」

胸倉につかみかかってくる飛龍の力はわめきながらも弱々しくなっていく。

「だったらどうする？私が自己満足のために軍に所属して自己満足のために人類を救う。自己満足のために艦娘をこの戦いの呪縛からとく。そう言ったらどうするんだ。身勝手な被害者ずらもいい加減辞めたらどうだ。私はお前の仲間を沈めたやつとは別の人間だ。いつか私はお前をこの海のどこかで死なせる時が来るかもしれない。けどな、空母三隻を失ってまでまで得るべき戦果であるかどうか、お前の昔の上司と違って考える。誰であれ部下の死に意味をもたせられなければ私はおとなしく死ぬさ。」

竹野が言えることではない。彼も分かっていた。彼は被害者ずらをして海軍をさり、部下を大勢殺した。彼にとってこの発言は飛龍に対する説教以上の意味を持っていた。

だが当然それには誰も気が付かない。
「……」

飛龍は何も言えなかった。彼女はつかんでいた襟を離す。提督は襟を直してから懲罰房から去って行った。

「何も。言い返せなかった。」

飛龍は荒れた息を吐きながらそうつぶやく。加賀は飛龍の背中をさすりながら。

「気にする必要はないわ。あんな傲慢な男の事なんて。」

「そうじゃない。そうじゃないの。」

理論は無茶苦茶で言い返そうと思えばできた。

でも、戦争を、死の応酬が続く戦場を、あの提督はわかっていた。死への恐怖も知っていた。

新米の提督？そんなわけがない。

私達艦娘と実在した艦艇に因果関係はない。あったとしてもそれはオカルトの領域だ。存在しないの山口提督の記憶。

その記憶の中の山口提督と彼は違う。でもあの時代を生きていた人間と同じ目をしていた。吹き飛ばした時もそうだ。

彼の目には恐怖ではなく不満と安らかさがあった。自分を酷使した提督にも自分のことをケアしようとした提督にもない目を、あの提督はしていたのだ。

竹野は帽子をかぶりなおし時計を見て小走りですぐ港に向かう。すでに水平線に輸送艦が見えている。

輸送艦は深海棲艦出現前のものであり艦娘たちとは比べ物にならないほど大きく、言い換えれば超巨大なものである。

その分積載量も多く一年分の資材を一気に輸送できるほどの能力があった。

少し沖合で輸送船は止まり小さなボートで船員が向かってくる。

「お疲れ様です。ここの鎮守府への輸送は久しぶりで揚陸用のクレーンの点検を先に行います。」

船員はつなぎを着た数人を連れて潮風でさび付いたクレーンに上って行った。それを眺めていると護衛にしていた艦娘が接近し

てきた。

「帰りの護衛はいらないだつてよ。」

天龍が報告してくる。

「わかった。解散ののち艀装解除。ゆっくり休め。明日は朝から訓練を再開する。」

護岸から天龍達を見下ろす形で指示を出し視線を再びクレーンに戻す。すると作業員の一人がこちらに駆け寄ってきて言う

「潮風のダメージがひどくて使えそうにありません。船のクレーンで揚陸しますので人員を貸してもらってよろしいでしょうか？」

こちらが困った顔をする。

「やっぱり大変ですか？」

そう聞いてくる。

「もう、二度ほど殺されそうになりましたよ。」

冗談ぽく言ってみるがどちらも本当に命の危険を感じた。

「わかりました。私達だけで何とかしてみます。」

「だめそうなら護衛についてた軽巡たちに声をかけてみますが、あまり期待しないでくださいいね。」

その夕方軽巡たちに探照灯で揚陸作業を支援するように指示するとその光に飛龍が申し訳なさそうに飛び込んでいき揚陸作業を手伝い始めた。

瑞鶴は少し離れたところでわなわなしていたが加賀や翔鶴など空母の参加により揚陸作業は朝までには終わりそうなペースになっていた。

それを横目で見ながら明日の練習時間を書き直す。

さすがに徹夜で揚陸の手伝いをさせた軽巡をそのまま訓練に参加させるわけにはいかないからだ。

そうして順番は駆逐、重巡、戦艦、空母、軽巡に決まった。海防艦も数名いるようだが駆逐と同じ時間に設定した。

潜水艦は通商破壊作戦の指示も出ていないため後回しだ。空母や軽巡に仕事をさせておいて自分が寝るのはさすがに忍びなかったが彼は明日の早朝から仕事有大量にあるため、時間の変更をアナウンス

してそのまま床についた。

竹野が起きた4時頃には揚陸作業は終了していたようで数名の作業員がクレーンを叩いたり眺めたりしている。損傷の状態をチェックしているのだろう。

補給基地としての役割を果たすためいつか修復したいが戦果の一つも上げずに形だけ整備するわけにはいかない。

だが竹野は少し不安だった。訓練をアナウンスしたのはいいが軽巡と空母以外が来てくれるのか心配だった。

彼女たちは戦いたくないのでは？そんな考えが頭をよぎる。そもそもなぜ彼女らは戦いを強要されているのか考えたことは何度もある。

だが一度も結論は出てこなかった。戦闘本能としか説明できなかった。狩りでもないのに命を懸けて戦う。竹野は頭を振りその考えを飛ばす。どれだけ考えても結局人間だけでは今起きている事態に対処できないし、彼女らもこの戦いが終わるまで人間の束縛から逃げられはしないのだから。

本土の精神科医からのメールだとか途中で読むのをやめた報告書や供述調書を読み時間は六時を回ろうとしていた。

「そういえば。誰が総員起こしをかけるんだ？」

着任からいろいろとあつて完全に忘れていたが総員起こしがこの鎮守府に来てから一度もかけられていないことに気が付いた。

秘書艦が担当することになっているがそもそも秘書艦がないのだから当然と言えば当然なのだが。

自分でかけようかと考えたがひとまず今日は、やめておくことにした。駆逐に通達した時間は8時。それまでに時間もある。

そういえば食堂に行ったことがなかったと気が付いて竹野は食堂に向かうことにした。鎮守府本館から食堂のある棟は少し離れていたがその間に誰かと会うことはなかった。恐らく重巡クラスの艦娘が、遠くを走っているのは見えたが。やはり避けられているのかもしれない。

じわじわと心に来る攻撃だ。

食堂は簡素なものだった。内地ではないこの場所では新鮮な食材は入手が難しい。

それは仕方がないことで今回揚陸した資材もやはり長期保存がきく代わりに味に関しての評価が微妙なものばかりだ。

それでも食料は一年分はなく三か月もすれば無くなってしまいうだろう。週一で遠征に出てもらえるようになればもう少し状況は改善できるのだが。

食と娯楽は部隊の士気に大きくかわる。必要そうなものを一通り見て回りメモを取る。司令官の仕事ではないが、鎮守府の整備などをのんびり考えるのもいいものだ。

「よう提督。何してんだ？」

天龍が話しかけてくる。彼女の傷は浅く特に意味もなく話しかけてくれる程度には回復していた。

「兵站は重要だからな。少し視察がてら見に来たところだ。」

「でもここ使っていないぞ？」

「ならどうやって。」

「イムヤとかが魚を取ってきて外で焼いて食べてる。後は畑でなんか育てたりしてたはずだぞ。」

なかなか無茶苦茶な鎮守府だ。

「自給自足も悪くはないが軍隊として活動するうえで兵站確保にあまり時間をかけるのはよろしくないな。」

「それもそうだけど、前の提督が何もくれなかったから仕方なくやってるんだよ！」

「またも、憲兵隊の報告に乗っていない新事実だ。本当に無茶苦茶やっていたのだなと実感しつつはたしてその程度の食事だけで艦娘として能力を発揮できるのか疑問だ。」

「天龍。今から訓練をされると言われて全力が発揮できそうか？」

「昨日から寝てないからそれは無理だな。」

「睡眠の問題ではなくてエネルギーが足りるかだ。」

天龍は悩んでから言う。

「やっぱりわかんねえよ。」

「そうか、ありがとう。手間をかけた。」

竹野は天龍と別れて訓練所に向かうことにした。

幼い大人

訓練所は時間のせいもあって静かだった。

使われた形跡はなくほとんどの艦娘が戦闘訓練をここ最近行っていないことを改めて実感する。

肉弾戦の練度などあまり必要ではないが、龍田の様子を見るに大体の技能が同じようなレベルだろう。

かく言う竹野も自分が戦闘訓練をしたのは開戦初期の訓練が最後だ。そもそも艦娘の戦闘と人間の戦闘など似て非なるものであるの。

人間が撃てる拳銃の軽く数倍の威力を持つ艦砲を撃つ彼女らと同じ練習をすれば人間など爆風でズタボロになってしまう。

「思い出すな。」

艦娘の出現から半年ほど経ったとき初めて艦娘のための拠点が完成した。

式典も行われることはなく静かにその基地は稼働し始め、銃の射撃訓練所とは比べ物にならない爆音が響き渡っていた。

竹野は手探りで戦術を考えその戦術を可能にすべく艦娘を指導した。

基礎的なことから突拍子もない訓練まで様々なことをやった。

「何を思い出すのでしょうか？」

昔のことを思い出していると誰かが訓練所に入ってきているようだった。

時計を見るが時間はまだ七時を回ったところだった。

「集合は八時だぞ朝潮。」

「わかっています…。」

朝潮は言葉に詰まったようで黙り込んでしまう。

「何か言いたいことがあるなら言って構わないぞ。」

彼女が飛ばされた原因は上官への過度な進言とされていた。が、どうせ例にも漏れず仕事のできない上官に、言っただけの意見を飛ばされてもしたのだろう。

飛ばしただけなら問題ではないのだが次の提督はかなりの自信家

であったようで意見されたことに腹を立て意図的に危険な海域に送り込み大破させ、落伍し始めていた朝潮に撤退を許可しなかった。

落伍したおかげというのもおかしいが漂流していた朝潮を掃海任務中の旧オーストラリア海軍の艦艇が保護し別の鎮守府に配属されたものの、意思疎通がうまくできない状態であるためここに送られてきた。

だから上官に何かを言うのは彼女にとって難しいことなのだろう。「いえ。何でもありません。ご迷惑をお掛けしました。」

そう言つてどこかへ行こうとする。だが目的があつてここに来たのは、間違いない。

「待ちなさい。私が出ていくから好きにしてくれ。」

変に刺激してもいけないが何をしようとしていたか気になる竹野は訓練所を出た後にこつそりと訓練所に戻る。

中を覗いてみると朝潮が訓練の準備をしているようだった。

ほかの鎮守府では意欲的でよい行動だと楽観的に言い放てるが、この鎮守府でそのような行動をとるのは何か危険な兆候であるようにも見える。

朝潮は訓練設備の点検をして艦装や訓練用の砲弾などの残数を調べているようだった。どうせちゃんと管理されていないだろうということに、いい加減気が付いた竹野は予め点検もすませ備蓄も調べているが声もかけずそのまま見守る。

しばらくして朝潮は作業を済ませたようで訓練所を後にする。

結局彼女は訓練所の準備をしていただけだった。だがそれが問題だ。彼女はただ従順なふりをしているだけだと竹野にはわかっていった。

竹野があの場合にこの時間からいたということは点検も準備もしていると思うのが当然。

朝潮は点検を済ませたのかどうか聞こうとしていたのだろう。だがやめてしまった。理由は簡単。

もう誰にも自分の行動を決めさせないためだ。しかしそれは兵士として致命的な問題だ。軍規によって軍に拘束され危険な任務も上

官の命令で実行する。

今の朝潮を出撃させても恐らく彼女のフィルターで許可された命令しか受け付けられないだろう。たとえ竹野が時間をかけて作り上げすぐに意図が分からない複雑な作戦であつてもだ。

「やはり、少し小細工でもするか。」

司令官には仲間の命も自分の命も預けない。

そう決めてから何度目の危機だろう。新たに着任した司令官は私たちを招集して訓練をさせるつもりだ。

けれど、どうせ訓練の事故の責任も取るつもりはないのだろう。だから点検も何もかもあらかじめ済ませておくつもりだった。

でも邪魔が入った。司令官が訓練所にいた。意味もなくほつつき歩いてた。そんなに暇ならおとなしく寝ておけばいいのに。

深海棲艦などより無能な味方のほうがよっぽど危険なのにどうして司令部は私達だけで戦わしてくれないのだろうか。

「集合時間は八時だぞ?」

そんなこと言われなくても分かっている。

「わかっています...」

司令は一体どこで何を?そう聞こうとした。

でもその声は出なかった。もしかしたら点検でもしていたのかもしれないという仮定は捨て去る。

今まで上官が私にしてくれたことと言えばなんだろう。思い出してみると聞く気も失せた。

「何か言いたいことがあるならば言っていいていいぞ?」

いちいち発言許可がなければこちらが喋ることすらできないとも思っているのだろうか?

怒りがこみあげてくる。

「いえ。なんでもありません。ご迷惑をお掛けしました。」

訓練所を出ようとすると司令が私を呼び止める。

「待ちなさい。私が出ていくから好きにいなさい。」

腹が立った。なんだか見透かされているような気がして。

しつかり点検を済ませて砲弾の残数を数えて記録をする。そして駆逐宿舎に戻る。

司令官に道中で会うこともなく駆逐宿舎にたどり着くつく。同じ朝潮型も陽炎型も白露型も私が守らなければ。そう自分を鼓舞してみんなを起こす。

なかなか起きてこない娘もいるが何とかして起こす。司令官には怒る隙も与えたくない。

集合の十分前には駆逐艦全員をまとめて訓練所に向かった。だがまたしても司令官は先にいた。腕時計をみて時間を確認してからこちらを見る。

これでは文句は言えないだろう。わざわざ早く来ていたのにその労力を無駄してやった。

「早いな。後五分ぐらいは遅くても大丈夫だったのに。まあ早いに越したことはないが。」

司令はそんなことを言う。軽巡の方々が懐柔され駆逐艦の中にも司令官を好意的に見る娘が出始めている。そのうちの一人が

「提督は前の提督とは違うのかい？僕たちを殴ったりけつたりしないのかい？」

時雨がそう聞く。

「少なくとも前の提督よりはましだと自負しているよ。そろそろ始めようか。」

当たり前だ。面と向かって暴力を振るのか聞いても、「はい、そうです」と答えるわけがない。

ごまかすに決まっている。

「まずは君たちの能力を見たい。制止している目標への射撃、動いている目標への偏差射撃、魚雷投射の順でテストさせてもらう。まずはそこからだ。」

そうしてテストが始まる。

私はそれなりの精度を出したつもりだったがあの司令官はあり得ない程の高精度を目標にして訓練をすると言い出したのだ。

射撃のテストは問題なく終了したが魚雷投射のテストで問題が発

生した。

魚雷の一本が訓練用ではなく戦闘用のものだった。

「この管理をしていたのは誰？」

司令が怖い顔をしてそう聞く。私は無意識に手を上げていた。

「朝潮。訓練が終わってから執務室に来るように。」

そうとだけ言ってテストは再開された。魚雷は炸裂したが標的艦はただのラジコンであり誰もけがをしていなかったのが幸いだ。

そんなことを考えていた朝潮だが次第に彼女は恐怖にむしばまれ息を荒くしていた

「ほんとに大丈夫なの？」

満潮が心配そうに聞いてくるが

「ええ。大丈夫。」

そう答えるのが限界だった。

散々な結果でテストを終えて朝潮は執務室に弱々しく向かう。

「点検したのは君なんだな？」

司令は最初にそう聞いてきた。私は頷くことしかできなかった。

「ならばなぜあんな事故が起きた？」

私にもわからない。

「わかりません。」

「責任は君にあるんだよ。わからないでは困る。」

責任……昔の提督を思い出す。最悪な記憶だ。私が予想した通りの事故が起きた時、彼は責任など取ろうとせず。あろうことか、私が意図的に事故を起こしたと豪語した。

「申し訳ありません。」

「謝罪は求めてない。どう責任を取るんだ！」

司令は声を張り上げる。

「すみません。」

「だから！何度言わせるんだ？謝罪など無益なことをする必要はない！」

ならば私はどうすればいいのだろうか。

「責任を取って一人で戦果を挙げてきます。」

「できるのか？できないだろ。あのテストの成績で単艦で出撃？そんなこと許可できると思うか？」

「ならば。夜伽でも……。」

「あのなあ……。」

司令官の声が明らかに変わった。なぜか急に柔らかい声色になり呆れていた。

「おかしいと思わんのか？」

「何がでしょうか？」

「わかってるだろ。」

「練習用の魚雷の中に実物が混ざっていたことですか？」

「そうだ。どうしてそれに対して反論しない。わかっているだろ、自分が点検でミスをしたはずがないことぐらい。」

私は黙り込む。次に喋る言葉は考えなければいけない。司令官をなるべく立てるようにうまくこの状況を打破……するには……

「司令官に歯向かったら……沈め……られ。ちや……。」

言葉にならなかった。いろんな感情がごちゃ混ぜで自分が何が悲しくて、何が怖くて泣いているのかわからなかった。

朝潮はやはり相当ため込んでいたらしい。朝潮は顔をぐちゃぐちゃにして大泣きしていた。

年頃相応の顔だった。朝潮にそっと近づいて頭をなでる。

「悪かったな。」

そう語りかけると。

「ひどい……ですよ司令官。」

相変わらずの口調で、泣いているのによそよそしい。

「悪かった。」

恐らく朝潮に詳しく説明してやる必要はないだろう。

彼女ならどうして竹野がこのようなことをしたのかわかっているだろう。

「好きナだけ文句を言えばいい。生まれて十年もたつてない艦娘に簡単に言い負かされるほど私は思慮の浅い人間ではない。言い負かせ

られるならやってみろ。」

それから泣きつかれたのか朝潮は竹野の手の中で眠っていた。かわいらしい顔にはもう濁りはなかった。

「いつになったら厳しい訓練ができるようになるんだらうな。」

眠っている朝潮にそうぼやき満潮をよぶ。

満潮は竹野が朝潮を抱きかかえているのを見て殴り掛からんばかりの勢いで迫ってきたが、朝潮の顔を見て動きを止める。

「連れて帰ってやってくれ。」

「わかったわよ。」

朝潮の顔を見るとときとこちらを見るとときで明らかに満潮の顔が違うのが気になるがこの際もうどうでもいい。

結局時間は夕方になっておりその日の訓練を全て中止にしようとしたのだが意外にも戦艦も重巡も訓練を実施していたらしい。

鎮守府の風通しは徐々に良くなってきているのは明らかで腐臭のしそうだったこの島も徐々に活気を取り戻しているように竹野には見え

運と意志

今日は遠くで砲撃の音が聞こえる。恐ろしい。

少し前まで平穏な生活を送っていたのに。

どうして。怖い。憎い。新しい提督さえいなければ。提督がここに来てからいくらかの艦娘は彼をそれなりに評価し始めている。

彼女らの素直さもまた憎い。人の腐臭にだけは人一番敏感な私には彼が何かしらの闇、そう、言えない過去を持っているとわかってしまふからだ。

「扶桑お姉さま。起きてください。今日はいい天気ですよ。」

そう言つて山城が私に肩を貸す。その肩を借りてボロボロになった体を起こして椅子に座る。

「お姉さま。先日物資が揚陸されたようで今日はいつもと違う朝食ですよ。」

いつもの朝食は海魚を雑に焼き、穀物などはめつたに出ない。だが今日は珍しく白米もあるようだった。でも私はきれいに精米されたコメよりも粗くとも平和なあの焼き魚の方がましに思えた。

私たちは死ぬ運命だ。どうして死ぬことを知らない安全圏の人間に指図をされなければいけないのか。

そんなことばかり思つてしまう

「やっぱり駄目ね。」

「大丈夫ですよ。」

山城は微笑んでいる。ただ安らかな微笑みの陰に恐怖がにじんでいる事を見逃せるほど人の笑顔を素直に見ることなど扶桑にはできなかつた。

竹野はドックに来ていた。建造はする必要がないが修理施設の稼働状態を確かめなければいけなかつたからだ。

最初に見て回つた時からドックの状態が悪いことに気が付いた竹野は輸送船に建築資材をいくらか積み込むように要請していた。

「いつから整備してないんだ?」

「俺が知るわけないだろ。」

軽巡の訓練が終わり、なんやかんやで天龍がドックまでついてきていた。

「ドックに入ったのはいつが最後だ？」

「俺は、ここに来る前。俺が来た時からもうこのドックは壊れてた。龍田ならもつと昔からいるからなんか知ってるかもしれないねえ。」

「呼んだかしら？天龍ちゃん。」

相変わらず登場がいちいち怖い。

「龍田。ドックがいつから使われてないかわかるか？」

「さあ？大破のままにいる子たちもおおいわねえ。その子たちに聞いてみたらどうかしら。」

大破のまま放置、記録上はなかったがやはり当然のようにそんな状態の艦娘がいるようだ。

「明石にここの修理を頼めないか？」

「彼女も大破してまともに動けないわよ。」

希望はへし折られる。だがどうして工作艦が大破しているのだろうか。

「そうか。でもひとまず明石を呼んできてくれないか。意見を聞きたい。」

天龍達が明石を連れてくるまでの間竹野はドック内をうろついてみるが当然妙案など浮かばない。

人心掌握と強引に言い切れば心理カウンセリングのような今までの行動は竹野の専門分野と言えるかもしれない。

だが、ドックの修理などどうやっても竹野の専門ではない。

そもそも鎮守府の外観は人類が作ったものだが機能を整備しているのは妖精たちであり人類がどうにかできる技術レベルをはるかに超えている。

妖精がどこにいるかもわからないこの鎮守府では何とか外観だけでもきれいにして妖精たちに戻ってきてもらおうしかない。

「連れてきたぞ。」

天龍が明石を背負って戻ってきた。

「ありがとう。明石、わざわざすまないね。」

「いえいえ。」

明石は今までの艦娘と比べると初対面でかなり警戒を解いている様子だった。

竹野の感じていた空気感の変化は勘違いではなかったと少し安心する。

「それでどうすればいいと思う?」

「妖精たちは気分屋ですから、この場所が彼らにとって魅力的になればいいんです。」

「魅力的?」

「そうです。彼らは艦娘をサポートすることに魅力を感じている。だからここにこれば艦娘を手助けできると実感させてやればいいんです。」

艦娘の手助けに魅力を感じる。そんなこと初めて聞いた。昔は開発は開発の専門家たちが行い建造も修理も専門の部署があった。

だから竹野は妖精たちとのかかわりがほとんどなかった。

「なるほど。具体的にはどうすればいい?」

「このみすぼらしい場所を修理して湯でも張って損傷した艦娘をつけておけばいいんですよ。」

それでどうにかなるようには思えないのだが竹野がそんなを言うても始まらない。

明石は大真面目な顔をしてそう言っているのだここはおとなしく彼女の助言に従うべきだろう。

ドックもとい大浴場の修復作業は次の日から始まった。

訓練が終わった艦娘たちはドックの修理に向かい、どんどん交代していく形で作業を進めた。

明石が楽しそうに現場指揮を執っていたのでその間、竹野は訓練所で戦闘を教え、鎮守府本館で座学を教え、かなり忙しい日々を送っていた。

鎮守府の状態はかなり改善されており、艦娘たちからの竹野の評価はひとまずクズではないというのが共通認識になり始めていた。

いまだ竹野の掲げた目標には程遠いが艦娘たちの技能も向上しており順調かに思えた。

しかしドックの修理が終盤に差し掛かったところとんでもないトラブルが発生した。

竹野は訓練中に大きな爆発音を聞きドックの方向から煙が出ているのを発見した。

何事かと急いでそこに向かったがそこは悲惨だった。扶桑が交代で誰もいなくなっていたタイミングを計りドックを攻撃したのだ。

大破のまま放置され動くことも困難な彼女はろくに動かない体で射撃したため自分も吹き飛ばされたようで、瀕死の状態で見えなかった。

普通ならすぐに入渠させるが残念なことにできかけていたドックは扶桑の手で吹き飛ばされてしまった。

完全に竹野のミスだった。警戒すべき艦娘は未だに複数いたが少し状況が落ち着いていたせいで彼は油断をしていた。

まさか大破した艦娘が執念でドックを破壊しようと試みるとは思っていなかった。それに実弾の入った武器庫は固く施錠しており誰も実弾を使えないと思っていた。

だが違った。扶桑は自分が大破したとき持っていた弾薬を、一斉射分隠し持っていたのだ。

前任がそんなことに気が付くはずもなくそのまま扶桑は放置されていた。

ドックを修理するということは大破している艦にとっていいものだとはばかり思っていた。だが違ったのだろう。

扶桑は出撃などしたくなかった。艦娘が轟沈したことを隠し通すことは難しい。問題がありここに飛ばされてきた提督からしてみれば轟沈は内地に戻るためにも避けたいことだった。

だから大破した艦娘が出撃することはなかった。もし自分が修理されてしまえば出撃を命令されると思ったのだろう。しかし、その行

動には不可思議な点も多く竹野には理解できない行動だった。

しかし、理解することが出来なければこの鎮守府をまとめることなどできない。

ここにいる艦娘は例外なく闇を抱えている。こうなることを予測できるようにならなければいつまでたっても改善の兆しはない。

「姉さま。」

山城が呼びかける声が聞こえる。私はまだ生きているのだろうか？あのまま死ねたらずっと安らかだったかもしれないのに。

「山城。ごめんなさい。」

私は恨まれるだろう。せつかく立ち直ろうとしていた娘たちから道を奪ったのだから。いいや。もしかした私を踏み台に彼女たちは前線に戻れるかもしれない。

そうであってほしい。私は解体されるのだろうか？憲兵はいつここに来るのだろうか？

「姉さま。どうして。」

山城が私の腹の上に顔をうずめて泣いていた。

「あなたのせいじゃないのよ。全部私が悪いんだから。」

もう感覚のない手を山城の頭に置く。

「あなたはあの提督とうまくやれるわ。」

扶桑は目を閉じる。今なら安らかに逝けそうだった。だがそれは許されなかった。

「身勝手な行動の責任はとってもらいます。」

加賀が現れほかの空母数名に体を持ち上げられ運び出されてしまった。責任を取る。何をしなければいけないのだろうか。そう思っているとそこから持ってきただろうドラム缶に放り込まれる。

「ひゃー！冷たい。」

ドラム缶には水が張ってあり傷に染みる。何がしたいのだろうか。

「明石。ホントにこれで大丈夫なのか？」

「扶桑さんが完全に生きる意思をなくしていなければ。」

さつきまでの絶対大丈夫だと豪語していたがその自信はどこかへ行ったようだ。

まあいい。しかしただのドラム缶に魅力を感じるのだろうか。そんなことを思っていると水面から何かが浮かんでくるのが見えただ。

妖精の何も考えていなさそうな顔だった。竹野は安堵する。少し遅れて明石も気がついたようにで

「提督・妖精さんです」

その言葉に対して竹野は頷いてその場を離れる。憲兵隊を呼んで今すぐにも全ての宿舎を捜索すべきなのかもしれない。

もちろん彼女らが捜索に同意してくれるとは思えなかったが。

「加賀。一つ頼めるか？」

今回は冷たくあしらわれることはなく

「何でしょう。」

と竹野に聞き返してくる。

「各宿舎を調べて危険物を没収してくれないか？」

「私達から武器を奪うんですか？」

加賀はそんなことを言っている。しかし竹野からしてみれば弾丸などなくても艦娘たちは自分を殺せるだろうと言いたくなる。

「もし君たちが丸腰だったとして、私が一人でこの艦娘全員を憲兵が来るまでの十数時間しのげるとでも？」

加賀はこちらを睨み。

「わざわざ訓練以外で働かされた上に、それを何度もやりなおすのは不本意ね。」

どうやら捜索に同意してくれたようだ。

「よろしく頼むぞ。」

扶桑の回復は早く山城と扶桑は執務室に入るなり土下座をはじめなかなか顔を上げなかった。

根本的に話が解決したようには思えなかったが明石の言うように妖精たちは竹野にはわからない何かを知っている。

彼らが扶桑の心情の変化をつかんだのだろう。それならば敢えて竹野が浅い説法をする必要などない。

問題は扶桑をほかの艦娘がどう思うかだがそれは全く問題ではなかった。立場が異なればここの艦娘たちは同じことをしていた可能性が十分にあつたからだ。

「別に構わない。ただ無許可で所持している弾薬はすぐに返還するよ
うに。」

とくに竹野がいうこともなかった。彼は扶桑に謝罪しようかとも思ったがやめた。へんに謝罪したほうが偽善的で信用にかけるだろう。

穢れた龍

扶桑が五右衛門風呂で修理できたこともありドックの修復作業の進行は鈍化しそうであったが修理を完了した明石が鉢巻を巻きノリノリで現場を指揮し、ドックではこの前よりも派手な工事が始まっていた。

資材をうまくやりくりすると言っていたので竹野は予め割り当てた資源を渡し明石に作業は丸投げしていた。

鎮守府施設にはやっと血が通い始めていたがやはり血栓は複数存在していた。

瑞鶴がこちらを相変わらず怯えているがあれは解決まで時間の問題だろう。

竹野以外に男がいないこの環境は男性恐怖症を治療しやすい環境であったようだ。彼女よりも問題なのは蒼龍の方だった。

赤城、蒼龍の二人が空母宿舎で引きこもっていたが、赤城は入渠施設の復活により元気を取り戻した。

一方の蒼龍は体に損傷があるわけでもなく報告書を見てもこの鎮守府ではよく見るような経歴であった。

もちろんとらえ方は人それぞれでありこちらが問題でないと思っても相手からすればひどい経験である場合もあるのだが。

ただこの蒼龍には少し怪しい経歴があった。
「先日は申し訳ありませんでした。それで用とは？」

飛龍の目はまだ信用しないぞと言う意思にあふれていた。自分の過去がばれてしまえばまた窮地に立たされるのだろうと考えるとぞっとする。

それまでに関係性を良好と言えるまでに持っていきこちらから告白できるといいのだが。

「蒼龍の件だが、憲兵隊の報告書では情報が足りないし、当然前任の提督の報告書は嘘ばかりだ。姉妹艦ではないが何か知っていそうだと思うってな。」

「彼女はここに来た時から一言もしゃべらず空母宿舎に入りそのまま

ずっとふさぎ込んでいます。私が知っていることはそれだけです。聞き出すつもりありません。もうよろしいでしょうか？」

「わかった。下がっていい。」

飛龍と入れ替わるように遠征の報告のために睦月が入ってくる。

「作戦完了のお知らせなのです。」

「輸送した資源を記録したうえで補給のち1500まで海上待機でお願いします。」

「了解です！」

駆逐の素直な可愛さに感謝しつつ待機を命令する。

今まで待機していた艦娘などいなかったからここらにはあまり脅威はないのであろうが一応そういうやり方にも慣れてもらうことにした。

明石に滑走路に放置されていた無人高高度偵察機U-4 を復活させてもらい監視を強化し、近海では常時高速艦による哨戒を実施しつつ待機にも高速艦を割り当てている。

少なくとも敵の大部隊が突然出現してもしない限り問題はないはずだ。

もともと大部隊が情報部の監視網を潜り抜けた例は現状ないのだが。

防衛体制を強化し練度を着実に上げている一方で司令部による作戦の指示はなく各鎮守府は可能な限り安全な海域を増やすように指示が出ているだけであり、気楽なものだった。

竹野としては可能な限り出撃は避けるべきではあると考えてはいるものの演習弾を使った戦闘と実戦では感覚が大きく異なる。

新造艦がないこの鎮守府ではあまり心配すべきではないのかもしれないが戦場に出た経験があるなら、今度はPTSDを心配する必要がある。

それも考えるなら一度は戦場に出させるべきなのだろう。しかしそうなってくると本格的に事務作業の人手が足りなくなってくる。

少し前に山本にこちらに来てくれるように頼んでみたのだがあっさりと拒否された。

ぜひお願いしますなどと言っていた彼はどこに行ったのだろうか。「と、いう訳で事務作業の得意そうな艦娘を見繕ってここに連れてきてくれないか?」

もちろん今回も厄介な仕事を押し付けられたのは天龍だった。

「なんで俺なんだよ!」

こちらの意見に反論してくるのはいい傾向だが指揮官としては何とも悩ましい。

「命令だ。よろしく頼んだぞ。」

しかし、なぜ司令部は秘書艦などと言う訳の分からない制度を導入したのか?

竹野が司令部に秘書官を誰かよこすように要請したが却下された。せめて選択肢ぐらい残してほしいものだ。竹野が事務方で書類に埋もれていたのは官僚時代が最後で軍に入ってから山本があまりにも優秀だったこともあり、最終チェックで目を通すことしかしていなかった。

そのため文句を言いに行くこともなく山本と顔を合わせる回数が少なかったため竹野は山本の顔を見てもすぐに思い出せなかったのだろう。

やってできないことはないような仕事はないのだがここは手慣れた艦娘に任せるのが一番だろう。

提督から渡された仕事はどう考えても面倒な仕事だった。

この問題ばかり抱えた艦娘ばかりの鎮守府で秘書艦の経験が豊富な艦娘を探すのはどう考えても難しい。

「それで泣きついてきたの?」

龍田が微笑みかけてくる。しかしこの顔は何度も見たことがある。

龍田は天龍を軽巡宿舎から追い出し

「頑張つてね天龍ちゃん。」

また微笑む。手伝う意思はないということなのだろう。やっぱり

あの男はクズなのではとも思いつつ天龍は軽巡宿舎を後にする。

「誰か頼りになりそうな艦娘いねえかな。」

空を見上げながらしつかり者の多そうな空母宿舎に向かう。

「天龍だ。誰かいるか？」

丁度空母の訓練時間であるようで空母宿舎はもぬけの殻の様であった。天龍が戦艦宿舎に向かおうとすると突然扉が開き中から幽霊が出てきた。ぼさぼさの髪で死人のような顔をして天龍に近づいてくる。

「く！……来るんじゃない。」

天龍は剣を取り出して構える。しかし剣をつかむ手はその幽霊に抑えつけられる。

オカルトにしてはやや馬力がおかしい気もするのだが天龍は気が付かない。

訓練を終えて帰ってきていた空母たちが大騒ぎする天龍に気が付き幽霊を抑え込む。空母の力で拘束してもしばらく暴れ続けたがやがて静かになった。

そこでようやく天龍は気が付いたがそれは幽霊でも何でもなくただみすばらしい恰好をしただけの蒼龍だった。蒼龍は直射日光を眩しそうに眺めている。

「蒼龍。何で？」

飛龍が驚きを隠せないと言った表情で続ける。

「私が呼びかけても全然反応がなかったのに何で突然？」

飛龍の顔は驚きから困惑に変わるが蒼龍は何もしゃべらない。

あまりにみすばらしい恰好をしていたため蒼龍は空母たちに五右衛門風呂に放り込まれ服を着替えさせられようやく蒼龍だと一目でわかる姿になった。騒動を聞きつけた竹野も現場につき動向を見守っていた。

「これは鎮守府の雰囲気が悪くなったから出てきてくれたと好意的にとらえていいのか？」

明石にそう聞いてみるが

「私だって提督と同じで艦娘一人一人の感情を完璧に読めるわけじゃありません！」

と残念な回答が返ってくる。仮に明石にそんな能力があれば大概の鎮守府は司令官が明石になるだろうが。

「蒼龍はどうしてここに流されてきたの？」

飛龍が近づいてきてそう聞いてくる。

今回は拒絶の意思はあまり見られない。さすがに自分から近づいておいて上手に出るのは気が引けたのだろう。

「それがわかったら苦労しない」

実のところ蒼龍に関する記述は明らかに偽造されていた。もともと所属していた鎮守府が提出した報告書だけならよくあることだが憲兵隊の方の記述も偽造されていた。

竹野がそれに気が付いたのは昔関わっていた極秘事項を覚えていたためだった。

特殊要員として艦娘が暗殺などに使用されることは珍しいことではない。その艦娘の所属を偽装するために作られた架空の鎮守府が存在しており、蒼龍の所属はその鎮守府だった。

しかし、その鎮守府に所属したが最後、ほかの鎮守府に移動することなどあり得ない。

逃亡するなら始末される世界だ。記述ミスも考えたが報告書を書いた人間は裏の世界ではそれなりに有名な士官だったためミスではないだろう。

そこで竹野の疑惑は確信に変わり飛龍にそれとなく聞いてみた。飛龍はこちらに敵意を向けてはいたが蒼龍の秘密を知ってはいないとすぐに分かった。

「私が何も知らないとわかってからしか教えてくれない。つまり最初から信用されていないということですね。」

飛龍が抑揚もなく言い放つ。信用できないのは事実だ。

「ここで軽々しく信じてるなんて説得力のない言葉を並べる指揮官のほうがいいか？」

「そういうところも含めて私はあなたが嫌いです。」

「私はしっかり意見をいう部下は好きだぞ。」

飛龍がこちらを睨んでくる。少しおちよくりすぎたようだ。

「蒼龍の過去はこっちで調べてみる。だが今の蒼龍はうちの鎮守府の大事な戦力だ。彼女を復帰させてくれるな?」

「あなたがやるよりはスマートにやって見せますよ。」

「どうやら朝潮を泣かせたことはすでに知れ渡ってしまっているようだ。竹野は苦い笑いを浮かべつつ、

「頼んだぞ。」

と言って立ち去る。執務室に戻ると天龍がうなだれた様子でだらけていた。

「何してる?」

「疲れた。みんな、嫌だっけ言うんだぜ。あれからいろんなところ行っただけどよ、誰も承諾してくれないんだよ。」

「案の定苦戦しているようだ。ふと思ったが天龍は事務作業はできるのだろうか?」

「天龍。秘書艦の経験は?」

天龍の顔に焦りが浮かび

「やっぱりもうちよつと粘ってみる。」

と出ていこうとするがその手をつかみ

「一日だけでいいから。」

そう言っただけで座らせる。その日は訓練を各自でやらせて天龍に秘書の仕事を押さ込んだ。嫌がっていたが意外にも覚えは早く、山本の二十分の一ぐらいの速度で仕事をこなせるようになった。もとの仕事量がただの鎮守府と第一攻撃群では違うため及第点だろう。

「やりたくない。」

などと言っているが変わりが見つかるとまでは彼女にやらせてもらえない。

龍田もそれなりに天龍の事を気にかけているようでたまに執務室に顔を出すようになった。

天龍が秘書艦として事務作業を済ましてくれるようになり手が空いた竹野は指揮室の機材に被った埃を払い本格的に出撃の準備を進めていた。

伝染した疑心暗鬼

竹野はあまり気が進まないながらも作戦計画を立てていた。

この危険な海でも非武装の輸送船がいまだに多く行きかっっており年間40隻以上の船が沈められ、小さな漁船も合わせればその数はゆうに300隻は超える。

おもな貿易先はアメリカである。かの国は沿岸部の大部分を失っているが戦力を集中運用して貿易用の港だけは確保していた。

島国である日本やイギリスは深海棲艦と戦わざるを得ないがアメリカなどは製造拠点を内陸に移し徐々に国力を回復しつつあり、防衛連合軍の拠点をシカゴに移す案が持ち上がったりにしている。

ただ、米海軍の大部分は依然として日本の支援のもとで活動しており立て直しが進んでいるとはいえ沿岸部を喪失し造船能力のほとんどないアメリカが再び海軍大国となるには時間がかかる。

何にせよ未だアメリカ空軍と陸軍は健在であり日本は主に偵察機などをアメリカからの輸入に頼っている。

そのため海運航路の安全確保が必要なのだ。竹野がここに着任してから複数の通報が入っておりいずれもほかの鎮守府に対応してもらっていたが鎮守府の整備も完了し艦娘たちの再教育もおおむね完了した。

そろそろ実戦に移ってもいいころあいだろう。

風の噂だがどうやら提督が久々の出撃を命令するかもしれないらしい。

ここらの哨戒任務で最近になって久しぶりに海に出た。

だが今度は練習弾ではない実弾の撃ち合いをするらしい。自分たちはそれをするための存在であり本当なら出撃の機会をくれる提督に感謝をしなければならぬのかもしれない。

しかし、どうやってもそんな気分にはなれなかった。私は提督とそう何度も喋ったことがあるわけでもない。

だけれど彼は明らかに今まで私が出た提督とは違い私が初めて

配属された鎮守府と同じ空気を醸していた。

中越司令だっただろうか？憲兵は彼の事を嫌っていた。だが私たちには憲兵が彼の事を嫌う理由がわからなかった。

しばらくして彼は私たちのもとを去っていった。そこから私の不運が始まった。私の言葉遣いが気に食わなかったらしく殴られ、蹴られ散々な目に遭った。

私からあの提督を奪った二サエルと言う男が許せなかった。

しかし、私を助けたのもあの男だった。あの男が司令長官に就任して憲兵隊に大規模なテコ入れが入った。

そして私は憲兵たちに助けられた。けれど私の向かった鎮守府ではもれなく提督が逮捕されていき気が付けばここの流刑地にたどり着いていた。

逮捕された提督たちが様々な圧力を使って軍隊に残ろうとすれば二サエルはここに配属してその司令官を精神的に追い詰める。ここはそういう場所だ。

憲兵がどれだけ強化されても根本的には何も解決しない。憲兵にばれないようにしているだけで内地の奴らがやっていることはどうせ同じだろう。

私はこの提督がどんな奴だとしても別に今更構わない。でも少しは期待してもいいのかもしれない。

「鈴谷、出撃してくれるか。」

「どうやら御指名らしい。」

「りようかーい！」

こいつはこの喋り方をしても何も言ってこない。別に私も挑発するためにこんな喋り方をしているわけではないのだ。私には彼が何を思っているのかはわからない。

「というわけである程度敵の編成は読んでいる。通商破壊の部隊に若干の護衛が付いていると思われる。鈴谷を中心に航空機主体で潜水艦を始末したのち護衛艦が逃走しなければ攻撃せよ。特に変わった指示はない。潜水艦をとっと消し去って砲撃戦に集中するよう

に。」

変わった指示ではない。装備も対水上艦装備を多めに積み対潜装備を控えめに積み込む。今の提督は新米らしいが初陣がこれでもいいのだろうか？

「これでいいの？もつと敵をしつかり叩かなくても？」

「相手は通商破壊部隊だ。コストとしては安いものだ。そんな部隊のために無茶をする必要もない。護衛艦が逃げたら、基地航空隊に追跡を命令して敵の拠点でも探すさ。」

提督の優先事項は艦隊の損害を最小限に抑えることであるようだ。日常的な通報に対応するたびに損害を被ってはられないということなのだろう。

「わかったら出撃してくれ。」

その声で司令室にいた艦娘が外に出る。

竹野は指令室にならぶモニターを注意深く見る。

艦娘たちの戦いは見えない場所ですべてが終わる現代戦とは真逆で目標が小さいため交戦距離はかなり近いものになる。

空母同士の戦いでも平均40キロ前後だ。対潜戦闘も昔の様に肉薄して機雷を投下するのが主流だ。

しかし、そのたびに損害を出されてはたまったものではない。

そのため竹野は昔から航空機主体の攻撃を行うようにしていた。いい加減学習したようで護衛に駆逐艦程度が出てくるようになったらしいが、航空機を相当数失ったところで潜水艦を撃沈すれば戦術的にも戦略的にも勝ちだ。

しばらくして、ローテーションを組み艦隊から先行して哨戒していた航空機が敵を発見したとの報告があった。

速やかに水上爆撃機による爆撃を開始するように指示を出す。

彼女の練度はまだそこまで高いわけではないがそれ以上にただの通商破壊に参加している敵の潜水艦の練度は低い。

次々に撃沈の報告が入り護衛を行っていた敵艦のみが残されていた。駆逐の砲撃は適正距離ではないもの鈴谷や羽黒などの射程距離

に敵は入っており一方的に攻撃を開始する。

天気が晴天であること付近に島がないことを鑑みて随伴していた時雨などの駆逐には今回はおとなしくしていてもらおう。

結局、敵の駆逐艦は射程距離の外に居るこちらの艦隊を補足すらできずに沈んでいった。

燃料、弾薬にもかなり余裕があったため出撃した付近の情報収集を任せて竹野は指令室を出る。情報部作成の日本近海の海流だとか天気の特徴、風の方向や地形などの情報はあるのだがどれも衛星スクリーンであり実際に見てみると違う場合もままある。

結局その日の出撃はそれ一件だった。竹野は少し違和感を覚えていた。深海棲艦の太平洋における戦力は推定1400万でありそれですら数年前のデータだ。

本来もつと攻撃を強めてきてもおかしくないにも関わらずなぜか日本近海は平和だった。

逆に言えば北海戦線や大西洋戦線は地獄で、フランスはノルマンデーが艦砲射撃で壊滅しイギリスも一時リヴァプールを占拠されていたが上陸して弱体化した深海棲艦をタコ殴りにして奪還に成功したらしい。

しかし、防衛連合軍のヨーロッパ方面軍の損耗は激しく情報部の調べによるとブリテン島全土に退避命令が出されるのも時間の問題らしい。

人類は敵の目的すらわからないまま失地を続けている。イギリスが落ちれば次はここだというのに防衛連合軍アジア方面軍は内部に複数の問題を抱えている。気が遠くなるようなことを考えていると鈴谷たちが帰還してきたようだ。

「帰投しましたー。」

相も変わらず軽い様子で鈴谷が報告にやって来る。

「特にいうこともない。久々の出撃お疲れだった。明日の訓練は平常通り行うからよく体を休めておくように。」

「まじー。休みでもいいじゃん！ケチだなー。」

「ハイハイ。帰った帰った。」

そう天龍が追い出しにかかる。随分秘書艦らしくなってきた。露払いはお手物のか。頼もしい。

「天龍。調べることがあるからここを頼んだぞ。」

「はあ？まあわかったよ。」

小言を言われるかと思つたがそう元気もないようだ。

いい加減交代で回せるようにしないと天龍の練度も下がってしまうだろう。

そんなことも考えつつ部屋を出る。向かった先は資料室である。だが目当てのものは資料ではない。

「遅いですよ。提督。」

「それで蒼龍は何かしゃべったか？」

蒼龍に関する情報を極秘で共有するため誰も来ないこの場所に飛龍を呼び出したのだ。

「なにも喋らない。提督は何か分かったの？」

出撃の指示もさることながら竹野は蒼龍に関してもそれなりの情報をつかんでいた。

「門外不出で頼むぞ。」

飛龍は言われなくても分かつてと言つた顔をしてこちらを見る。

「彼女は二サエル司令長官の飼い犬だった可能性が高い。」

「じゃあ何のためにここへ？」

わざわざ自分の飼い犬をこんな場所で数年間縛っておく意味が分からないのももっともだが

「私を監視するつもりだったのかも知れないが…。」

「でも提督は彼女の経歴を見てすぐにただ者じゃないって分かったわけでしょ？それなら監視なんてできっこないと思うんだけど。」

もっともだ。二サエルがそんな初歩的なミスを犯すとは思えない。

彼は自分の過去を知っている。本当に隠したいならばもっとうまく隠すだろう。

「二サエルは私にだけ彼女が特殊な存在だと知らせたくて意図的に仕組んでいた。そう考えるのが妥当だが目的がわからない。」

二サエルの何かとんでもない陰謀に加担させられているのではな

いかとも思えてくる。今まで竹野はここにいる艦娘たちは傷付き弱った可哀想な存在として見ていた。だがもはや。

「ちよつと。どうしたの？らしくない顔して。」

飛龍に肩をゆすられ最悪の想定が止まる。

彼らの負の臭素をあまりに嗅ぎすぎたのかもしれない。彼女らと同じ軍に所属しているだけで味方ではないのではと言う考えをふり払う。

「何でもない。引き続き蒼龍のことを頼むぞ。」

そう言つて竹野は資料室を後にする。しかし彼の中で何かがおかしくなり始めていた。

栄光の戦艦

竹野は執務室に戻りながら二サエルの目的を考える。

あの男のことをよく知っているわけではないが少なくとも自分の出世のために大掛かりな計画を立てるような男ではない。

自分を操り人形にしようとした人間をつるし上げ、権力を奪ったはいいがその権力は、裏で事を進めることに長けた彼には自身の関与を疑わせる足枷にしかない。

彼からしてみればこれ以上の出世はさらなる足枷にしかない。

二サエルは間違いなく何かを計画している。

こちらからしてみればそれが利益となるのか知るすべがなく不快でしかなかったが。

執務室に戻った竹野は天龍が宿舎に戻ってから所属している艦娘の報告を再度読み直し、憲兵隊、情報部双方の資料とこすり合わせて偽造された情報を探す。

しかし、どうやっても蒼龍しか怪しい経歴を持った艦娘が見つからない。

いくら何でもおかしい。憲兵隊は自分たちの畑である内部調査の仕事に強引に入り込んできた情報部と対立しているため共謀して情報を偽装するとは思えないのだ。

二サエルの行った憲兵隊の改革も、結局情報部出身の彼に対する反発などもあり、憲兵隊は自分たちの監視対象に司令長官も含まれると主張して、憲兵隊内の人事に関して司令部が影響力を持つことを拒んだ。

たとえ二サエルでもそこまで大掛かりなこととはできない。

あの男はもともと諜報機関の人間だ。そうであるなら極力関係者を少なくしたがるはずだ。

ここまで調べて分かったことは、この鎮守府の艦娘が実は全員敵だったなどと言うとんでもない展開ではないということだ。

少なくとも今は蒼龍だけを警戒すればいい。資料を片付けて竹野

は床につく。

自分をひとまず納得させた竹野だがやはり心のどこかに腑に落ちない何かがあった。

水平線に太陽が見えればそれは苦痛の始まりを意味し、水平線に太陽が沈めばそれはそれで別の苦痛を味わうことになる。

どちらに転んでも何の救いもなかった。私は気づけば提督に殴りかかろうとしていた。そんな私を制止して提督を殴り飛ばしたのは飛龍だった。

ただ私は呆然とするしかなかった。私も飛龍も裁かれることはなく、ここに来た司令長官は満足げに死にかけた提督を見て飛龍に微笑みかけていた。

あの顔は忘れることが出来ない。艦娘たちのリーダーとして私が声を上げようと決心した瞬間でもあり絶望した瞬間でもある。

「私は長門だ。ここの鎮守府の状況はあまりに悪すぎる。ここの艦娘たちを代表して抗議する。」

「君は代表ではないだろう。他と同じさ。何度心を踏みにじられても声すら上げない背景だよ。代表ならこの現状を変えた飛龍がふさわしい。」

二サエルは悪意もなく私にそういった。

次も司令官としてふさわしくない人間が来たら殴ればいいじゃないか。そう言い始めそうな顔をしながらこちらを見ている。

「私は部下であって、上司を殴るわけにはいかないだろう。」

震えながら投げた反論も

「部下と上司でまともなキャッチボールができるならそうでしょう。ですが今、この組織は不要な人間を過剰に保護して艦娘を迫害することで機能を保っています。正常な機能を失った組織で律義に規律を維持しまともじゃない司令官にまともな対応を試みる。それは賢い行動ではなく、狡猾な行動です。恥ずべきことだ。」

そう返される。

「ここにまともじゃない司令官を送っているあなたの責任ではないの

か？」

彼はそれを言った途端満足したように

「その通りですね。私を殴りますか？」

そう言つてこちらに歩いてきた。

私はまた立ち尽くすしかなかった。私は彼と目を合わせ続けることが出来ずに下を向く。

それから彼がどんな顔をして去つていったのか私は知らない。

それから四か月、当然私は新しい提督が来ると聞いて相当身構えていた。

今度こそ殴りつけてやろうと。だがそんな気持ちはすぐに消え失せた。

あの司令長官の気が変わったようであろうやくまともな指揮官がこの鎮守府にやってきた。

彼は規律も何もなく、ただいたずらに日々を過ごしていた艦娘に秩序と誇りを取り戻させた。私は彼の事をあまり知らない。

いい奴であることに間違いはないのだが、あの司令長官の顔を思い出すとどうしても提督がとんでもない行動に出るのではと想像せずにはいられなかった。

凜とした表情で隠した不安に彼は気づいているのだろうか？

翌朝竹野が目を覚ますと長門が来ていた。

「どうした？何か問題が起きたか？」

天龍も来ていない早朝ともいえる時間に彼女は執務室の扉の前でその大柄な体を折り曲げて体育座りをしていた。

「提督！いや、何でもないんだ？」

「何もないのに執務室の前で座り込んでいたのならそれはそれでどうなんだ？」

長門は慌てて何かしらの言い訳を考えている様子だが無駄である。

少なくともこちらに知られたくない事情があつてここに座り込んでいたのだろう。

「まあいい。ひとまず入れ。」

そう長門を執務室に押し込みコーヒーを入れる。

「飲むか？」

「いや。私は飲めな…。いや今はいい。」

彼女は隠し事が多いわりに相当嘘をつくのがへたくそなようだ。

放つておいてもそのうちなぜあそこにしたのか喋りそう。竹野は自分の分にブラックコーヒーを淹れ、長門の分には砂糖と牛乳を大量に入れたコーヒー風の何かを執務室中央のテーブルにおく。扉の前で立っている長門に着席を促し竹野も長門と向かい合ってソファに座る。

「そうだ。この時間に起きたのは何かそっちも用事があるからだろう。迷惑をかけたな。」

また長門は逃げようとする。

「少し前まではいろいろ用事があつたが最近は大龍も仕事に慣れてきたようで特に急いすべき仕事もない。ゆっくりしていいぞ。」

退路をふさがれた長門はこちらと目を合わそうとはせず、コーヒー風の何かをじつと見ている。

カップを持ち上げ顔を強張らせながらカップを傾ける。そんなに嫌なら飲まなければいいのに。

しばらくしてそれがコーヒーとはかけ離れた何かだと気が付いたようでおいしそうに飲み始めた。完全にこちらのことなど忘れていくようだ。

「長門？」

「なんだ？」

びくつとしたかと思うと顔に力を入れなおし始めたようで凛々しい顔でこちらを見る。

「何を隠している？」

「この長門の名前に賭けて隠し事などしていない。」

妙に力を入れてそう答える長門の姿はやはりどう見ても何かを隠しているようにしか見えない。

その隠そうとしていることはあえて語る必要のない彼女の悲惨な

過去ではなくもつとしようもないことであるように思える。

「長門。私が信じられないか？」

その凜とした表情の中に作られたわけではない憂いが浮かんだ。

「やっぱりか。」

ここの艦娘たちは飛龍などの例外はあるものの竹野の事を信じようとしているが、やはり彼とのかかわりが薄くなればなるほど竹野のことを何とかして探ろうとする。

長門は駆逐達の様にならな形で話しかけることが出来ずに竹野を信じたいが信じることが出来ずにいたのだろう。

「私は、いつもリーダーになり損ねるんだ。戦艦長門と同じようにな。」

長門は静かに彼女の心の内を話した。いつもの凜々しい顔にも戦うときの派手な艦装にも似合わない、暗く辛くドラマのような盛り上がりも落ちもないただひたすらに悲痛な過去。ニサエルの事、刺し違えてやろうと決めた時飛龍に止められてしまったこと。竹野はそれを静かに聞いていた。

「私にあるのは派手な名前だけさ。これでいいか？」

彼女は自嘲気味に話を終わらせた。竹野は何も言わずに立ち上がり執務室のカーテンを開ける。

「そろそろ日の出だ。朝はいい。体も心もリセットされてまた好きなように生きられる。でも実際はそうじゃない。私は朝には二種類あると思うんだよ。地球の裏側にいた太陽が地球の自転で再び姿を現すことと人生を覆う闇が晴れた時の二つだ。もしかしたら君にとって今は朝じゃないのかもしれない。動いてみて、それで手元すら見えなければそれは夜だと言うことだ。それでだめならまた朝を待てばいい。少なくとも私はこの鎮守府にとつての日の出となるためにここに来た。今の状況がどうであれ私はそういう意思を持ってここにいる。」

「自分のことを太陽だと？よく恥ずかしげもなくそんなことを。」

竹野は少し後悔したが長門の顔を見ると先ほどの演説はまんざら間違いいではないように思える。

「恥ずかしいことを言っておきながら大した戦果も挙げられないなんてことはしたくないな。今日の訓練は覚悟しとけよ。」

竹野は長門の方に邪悪な笑みを浮かべる。

「この長門の力、侮るなよ。」

長門は力強い言葉を返す。竹野は頷き時計を見る。時間はもうすぐ0600だ。

不吉な予兆

戦艦たちの訓練に数時間付き合い耳が使い物にならない状態で竹野は執務室に戻ってきた。

天龍が何か言っているが全く聞き取れない。天龍に筆談を要求すると天龍は何かを書き始めた。

司令部の二サエルから電話

一体何の用だろうか。まさかまだ何も動いていないのに何かに気が付いたのか？

そんな考えが思い浮かぶがいくら何でもこちらが脳内だけで怪しんでいることに気が付けばそれは優秀だからで片付けることのできる次元ではない。

何にせよこちらに身に覚えがない以上彼に電話をかけなおすことが一番手っ取り早いだろう。

三十分もすれば竹野の耳は正常に戻り電話を取り司令部に電話を掛ける。

「はい、長官室。」

「山本か？竹野だ。」

「村上提督ですね。少々お待ちを。」

必要もないのに本名に言い換えて山本は受話器を二サエルに渡す。

「竹野司令。お久しぶりです。二サエルです。」

「それは分かっています。わざわざこんな辺境の鎮守府に司令長官殿がどうして直接お電話を？」

皮肉をたっぷりと込めて返すがそれを完全に無視して

「南鳥島から200キロ程離れた地点に敵の拠点を情報部が発見しました。常時監視体制に入るように衛星を移動させ監視を続けてきましたが依然勢力が拡大を続けているため敵の攻撃が予想されます。ただ、情報部によれば勢力の拡大速度や規模などを見るに敵の侵攻作戦の準備が完了するまでに少なくとも2週間はかかると予想されません。つきましては敵拠点から距離の近い鎮守府から戦力を集めて逆に攻撃する作戦を立案して攻撃を行います。」

「つまり、司令部に集合せよということでもよろしいのですか？」

「はい。」

「しかし、この鎮守府に人間のスタッフは私しかいません。私が不在の間に何か起きればどうするんでしょう？」

「鎮守府で指示を出そうが司令部の指揮室から指示を出そうが変わらないでしょう。いざというときは会議を中止して対応すれば問題ないでしょう。」

「わかりましたそれで会議の日程等については？」

「会議は二日後に行います。明日そちらに迎えがいきます。仮にも軍の司令官ですから護衛と荷物持ちに誰かを連れてくるように。」

「了解しました。」

竹野が電話を切るよりも早く電話は切れる。二サエルも忙しいのだろう。受話器をおくと天龍が

「何だった？」

と聞いてくる。

「会議があるから本土に來いだつてさ。」

天龍が目の色を変えて

「じゃあ秘書艦としておれも本土に行くんだな。」

と言っているが留守の間にも鎮守府は動いているわけで留守中にできた膨大な書類の山を誰が整理するのだろうか。

「いや、天龍は留守番を頼む。」

天龍の抗議をBGMにしながら竹野は誰がいいか考える。そういえば青葉が本土に行きたいと何度か言っていたのを思い出し青葉を呼び出す。

「恐縮です！提督、それでご用件は？」

「本土での用事があるから護衛としてついてきてもらおうかと思つてな。」

青葉は一瞬うれしそうな顔をしたが護衛と聞いて少し顔をゆがませる。

「護衛と言うことは本土で自由に買い物したりできるわけではないんですよ？」

「それはそうだな。」

「ならこれはどうでしょうか？私が護衛として頼れそうな人を見つけ
てくるのでその代わりに私も本土で好きなようにする。どうですか
？」

公募して集まったわけではなくこちらから声をかけておいて何も
なしというのもかわいそうなので竹野はそれを許可する。

いい加減この島にも娯楽が必要だろう。鳳翔が居酒屋をやってい
る鎮守府もあるらしいし本土で少し鎮守府の娯楽について調べてみ
るとしよう。

翌日、竹野をここに送ってきたのと同じパイロットが輸送機を操縦
してやってきた。

護衛には加賀が付くことになり竹野は出発した。機内では青葉だ
けが上機嫌に鼻歌を歌っている。貨物室は少し気まずいので竹野は
コックピットに移動する。

「大丈夫でした？」

「まあ何とか生きてますよ。」

「でも案外うまくいってそうじゃないですか。」

パイロット扉の隙間から青葉の方を見る。

「やつと落ち着いたと思ったら今度は大規模な攻撃が予想されるだど
か何とかで本土に呼び戻されたんですからたまったもんじゃありま
せん。」

苦笑いをする。パイロットも笑い

「提督職もなかなか大変なんですね。」

と言って輸送機。パイロットのなかなかひどいスケジュールについ
て話してくれた。

そんな話をしている間にもだんだんと本土は近づいてくる。

港湾の破壊された東京の上を通り過ぎ海岸線から少し離れた場所
にあるひと際大きなビル、防衛連合海軍総司令部が見えてきた。

屋上には所狭しとアンテナが並びガラス張りのフロアとフロア全
体が外から見えなくなっているフロアが混ざった気持ち悪い縞模様

の建物である。

輸送機は垂直着陸モードに入り建物に接近する。ビルは十階までしかフロアがない部分と50数階までフロアのある部分に分かれへりはその段差になっている十階の屋上に着陸する。

今回は着陸後エンジンが切られ爆風が収まった状態で輸送機を降りる。

加賀に荷物を持ってもらい輸送機を降りる。青葉は声をかけようとしたがすでにどこかに行ってしまった。

「青葉は？」

「帰りの時間がわかり次第私が連絡する手はずになっています。」

加賀はそう答える。

「そうか。次からは私にも少しは話を通してくれよ。」

加賀に少しだけ注意しておく。その間にも別の輸送機がヘリポートに降り立ち提督らしき人が降りてくる。風貌は二十代に見える。

「初めまして。私は父島鎮守府の内藤です。今日はよろしくお願いします。」

「南鳥島鎮守府の竹野です。今日はよろしく。」

父島は南鳥島からかなり離れているがほかに近くの鎮守府がないのだろう。

ちょうど輸送機から降りてすぐの様で若干服装が乱れていたが爽やかな青年だ。同行していたのは雷だがあれは護衛になるのだろうか。

いささか見た目の抑止力がないような気もする。本部のスタッフに案内され会議室に入るとほかにも二人ほど提督らしき人物がいた。「初めまして。南鳥島鎮守府の竹野です。本日はよろしくお願いします。」

「南鳥島ですか。はるばる遠いところから。九十九里浜鎮守府のワーグナーです。今回の作戦ではそちらの基地で作戦前の補給を行うかもしれませんよろしくお願いしますよ。」

離島の鎮守府では実力不足だということだろう。父島鎮守府の規模は竹野の鎮守府の五分の一ぐらいしかない。

その南鳥島鎮守府も、九十九里浜鎮守府と比べれば十分の一程度の兵力しかなかったが。

「Angenaaam 竹野。私は硫黄島鎮守府のマフダです。有益な会議にしましょう。」

「オランダ語でしょうか？よろしくお願いします。」

竹野はオランダ語が分かるわけではないがデ・ロイテルを連れていたこととオランダで聞いたことのあるような単語だったから適当にそう言ってみる。

「オランダ語わかるの？」

そう聞かれて、彼は適当に微笑んでおく。今更わからないとも言いたくないし、わかると言ってオランダ語で会話が始めればどうしようもない。

どう逃げようかと考えていると、ちょうどタイミングよく二サエルと軍服を着た数名スーツを着た数名が入ってくる。

「私の自己紹介は必要ありませんね。私の隣から順に司令部戦略課からトマス、戦術研究課からライアン、司令部兵站部から森内、情報部のムーンとマーズとタイタンだ。さて会議を始めましょうか。」

死に場所の選定

ニサエルが着席するとほかの提督も着席する。

「マーズ。改めて状況を報告してくれ。」

マーズと呼ばれた女は立ち上がり状況の説明を始める。

「まずはこちらの写真をご覧ください。U-5Hが29日前に撮影した南鳥島から南東に約200キロの海域です。クラスの判別はできませんが規模から考えても上位の個体と下位の個体がちや混ぜになっっている脅威の高い集団であることに変わりはないでしょう。三か月前のモルツカ海海戦でもわかるように敵の集団戦闘能力は向上する一方で下位個体が上位個体を守るための外部装甲と化しており敵の主力を沈黙させることが難しくなっています。攻撃に際しているかに下位個体を安全圏から素早く壊滅させられるかにかかっているでしょう。また敵部隊の今後の動向に関してですが敵が取りうる行動は2パターンあります。グアムへの攻撃、あるいは南鳥島への攻撃です。」

そこでワグナーが手を上げる。

「発言よろしいでしょうかマーズ……なんと呼称すればいいでしょうか?」

「マーズ情報官でいいですよ。」

ニサエルがそう答える。

「ではマーズ情報官、なぜグアム鎮守府を呼ばなかったのでしょうか?」

「グアム鎮守府は防衛連合軍のアメリカとの交易航路が深海棲艦の活動範囲外である北航路に変更されたことにより重要防衛地点から外されほとんどの艦娘がヨーロッパ方面軍に配置転換されました。当然ですがこの情報は情報統制下にありますのでくれぐれも口外しないようにお願いします。続けます。」

マーズはとんでもないことを言った後なんでもないかの様に話を続ける。

いくら何でもグアムを捨てるなど無茶苦茶にもほどがある。グア

ムを捨てれば敵のフィリピン海侵入が容易になりフィリピン、台湾、沖縄などの複数の重要拠点が常に攻撃にさらされる可能性が高くなる。

しかしそれよりも状況が悪化している大西洋戦線の維持のほうが重要なのだろう。

もし仮に自分が南鳥島に派遣されていなかったら防衛の最前線基地がほとんど機能していないなどと言うとんでもない状況になっていたのではないのだろうか。

「グアム対する攻撃に防衛を講じることはできません。それにこの大部隊に対して我々が戦力を分散して運用したところで防衛に際して発生する被害が甚大だと予測できます。ここからは戦略課のトマスをお願いします。トマス。」

そう呼ばれた男は立ち上がり指示棒を持ち地図を指さす。

「敵が集合している地点は島ではなく何も無い海上です。彼らはこちらが攻撃をしてくることを予測していません。そこを一気に突き崩します。南鳥島を拠点に大部隊で一気に彼らを叩きます。目標は敵部隊の殲滅とこちらの被害を最小限に留めることです。防衛に使える部隊を損失してまで敵を叩くのは推奨できません。戦略課からは以上です。」

「ありがとうトマス。君たちに集まってもらったのはここからの方針を決めるためです。すでに攻撃することは決定事項です。いかに戦略目標を達成したうえで戦術的に勝利するかを考えてください。」

二サエルが総括してムーンに目配せをする。

「偵察の詳細です。」

ムーンはホチキスで軽く止められた資料を配布する。竹野はその資料に目を通す。

「敵、兵力4300に間違いは？」

竹野は内心あきらめの入った声でそう聴く。

「間違いはありません。九十九里浜鎮守府から4000の兵力を出していただきますので数的優勢は確保できると思われれます。」

ムーンの報告にワグナーは驚いた顔をして

「さて、4000だと？話が違うぞ。こちらから出せるのは3000までだ。」

「あなたの鎮守府からのヨーロッパ方面軍派兵を中止させた代わりに今回の作戦に参加するんです。それに今回敵を下せなければ君の鎮守府も結局最後は戦うことになってしまいます。」

「いえ、しかし。私が先日の攻勢作戦に派兵したために東京への直接攻撃を許してしまいました。あの時ですら派兵したのは1000です。」

「君の責任じゃありません。戦略課の予想していたことがそのまま起きただけです。それに中越司令がほぼすべての戦力を引き抜かれ少数になっていた近海警備群で東京への攻撃をはじめ返しました。今回は近海警備群の兵力も通常状態で全体で20万東京防衛のために一万近い兵力が投入されています。」

「わかりました。ならば3500ではだめでしょうか？」

ワグナーは妥協案を出す。

「竹野提督。そちらからはどれだけ出せますか？」

南島鎮守府の保有戦力は艦娘1547名。現時点で出撃を繰り返し前線に派遣しても問題がなさそうな艦娘はその約半数である762名だ。

「作戦実行の時期にもよりますが現時点では防衛を考えないのなら750名は派遣できるかと。」

「わかりました。確かそちらには1500名ほどの艦娘がいましたね。一週間以内に1000名まで出せるように訓練をさせてください。防衛は作戦時のみ近海警備群にやらせますから心配しなくていいです。100名程派遣すれば問題ないでしょう。」

無茶苦茶を言ってくる。厳しい訓練をしても大丈夫な関係性が出てくると期待しつつ

「わかりました。何とか間に合わせます。」

そう答える。

「硫黄島鎮守府からは500、父島鎮守府からは200で問題ないでしょうか？」

内藤とマフダは領き兵力の内訳が決定した。

「ではここからは戦術研究課の私から話を勧めさせていただきます。」

ライアンは立ち上がり電気を消しプロジェクターの前に立つ。

「まず先日のもルツカ海での敗北により戦術の変更を余儀なくされました。下位個体が上位の個体をかばうと我々が上位の個体に向けて行った攻撃のすべてが下位個体に命中し必要以上の攻撃を受けたうえで下位個体は沈没しますがこちらの兵站は悪化していきます。投入する火力が必要以上のものになりいざ上位個体を排除しようとなつた時、こちらは攻撃手段損失している可能性が高くなります。もルツカ海海戦で詳しい数値を算出しましたがこちらの攻撃の9割以上がこちらに大きな損失を与える能力のない敵艦に集中しており敵の主力は一方的にこちらの主力を攻撃していました。そこでこちらと同じ戦略を取ることを提案します。もちろん轟沈しろというわけではありません。熟練の駆逐を失うわけにはいきませんから。ですがこちらの高火力艦、特に空母を身を挺して護衛し空母には的確に主力を叩かせます。もちろんこれは艦娘たちに相当な負荷をかけることとなりますが一定の効果があることは保証します。」

ライアン自体この作戦に賛成しているように見えないが敵のおかしな戦術に対応するために仕方なく立案されたのだろう。内藤が手を挙げて

「ライアン研究員。この戦術で高い効率を出すには駆逐のダメージを心配してはとても無理でしょう。敵は耐久以上の攻撃を受けて沈むわけです。一方でこちらは被害を耐久以下でとどめ、損傷した艦は攻撃能力を失う。一見、敵に合わせて作ったかに見えても轟沈を前提にする敵の戦術と比べても効果も効率も明らかに低下するでしょう。」

ライアンは

「ならばあなたは轟沈させた方がいいと？」

内藤を詰める。内藤は返事に困っている様子だった。竹野は口を開き

「もつともな意見だと思いますよ。攻撃から身を挺して守るのと自分

へのダメージを気にしながらわざと被弾するのでは似て非なるものでしょう。それにこの戦術が取れるのは深海棲艦の異常な物量によるものであってこちらが同じことをしても、ただいたずらに被害を増やすだけです。」

「なにか思いつきましたか?」

ライアンではなくニサエルがそう言ってこちらを見る。

「二つ考えが。敵の戦術は冷静に見れば欠陥だらけです。こちらの兵力が少なければ集中して短期間での殲滅を実行し敵の主力は万全の状態で攻撃を続けることが出来る。しかし戦闘が長引けば長引くほど護衛は減っていく。だから私たちは主力の到着を意図的に遅らせる。駆逐と軽巡による水雷戦隊で敵を攻撃する。ただひたすらに敵の主力に遠方から魚雷を投射し砲撃を集中させればいい。」

「それなら、結局攻撃手段を失い……」

ライアンは言いかけて気が付いたのだろう。

「こちらの雷撃に意図的に下位個体がぶつかり続け水雷戦隊の攻撃が終了したとしてそこから少なくなってしまうた護衛と残された主力たちでこちらの主力を壊滅させられるでしょうか?」

深海棲艦に臨機応変な対応はできない。パターン化された戦術を用いて攻撃をしてくるがこの世の中に万能な戦術も陣形もないのだ。戦術研究課がなぜこんな簡単なことに気が付かないのか。恐らく研究員たちはデータしか見ていない。深海生還は個体差が大きいが艦娘は深海棲艦と違い指揮官もいる。全体としての力で見るとなら深海棲艦と同じ戦術など取れない。

「決まりかな?」

ニサエルの言葉に全体は同意を示す。

「竹野提督。何かほかに言いたいことは?」

「いえ特に。ただ司令長官、少し個人的に話したいことがありますので後でお時間をいただけますか。」

「山本君に確認しておいてください。」

ニサエルは立ち上がりほかの六人と共に部屋を出ていく。ワグナーがこちらを見て

「新米らしい突拍子もない作戦と発言の節々に見られる妙な説得力。よくわからない新人だな。頑張れよ。しっかりとカバーしてやるからな。」

と言っているこの男の事を竹野は知っている。

第一艦隊第三攻撃群教官補佐。内地で訓練の指導を中心にしていた彼と現地で指揮を執っていた竹野の面会はほとんどなかったが第三攻撃群の基地で何度か見かけたことがある。

優秀な教官である一方、上官への態度や指導の厳しさなどが問題になったこともある。良くも悪くも部下おもしろい、後輩思いが過ぎる男だ。

「お願いします。」

可愛くそんなことを言っておく。しばらく長官室に向かって歩いていると

「お疲れさまでした。」

後ろから冷気が来た。加賀がこちらをにらみながらそういう。竹野が言い訳をしようとする

「わざわざこんな恐ろしい場所に連れてきておいて私のことを置いていくなんていい度胸ですね。」

恐ろしい場所。加賀が若干涙目になっている。

「すまん。忘れていたわけではあるんだが。」

不満そうな顔でこちらを見る加賀。やけに今日は感情が豊かだ。

ただこの加賀ですらこうであるなら青葉が心配になってくる。彼女らの恐怖の対象から竹野が外れたのは確かだが相変わらず人に対する恐怖心はあるのだろう。

竹野が歩き出すと加賀は無言で後ろをついてくる。エレベータに乗り最上階を目指す。べたなところに長官室を作って安全面でするしくないのではと竹野は思いつつ歩く。

司令長官室の前につき山本と目が合う。

「竹野提督ですね。長官から話は聞いています。ちょうど用事もないようですのでそのまま入っていただいて構いません。」

村上と呼ばれるかと思つてひやひやしたがさすがにそんなことは

なかった。山本が長官室の扉をたたき

「竹野提督です。ご案内してよろしいでしょうか？」

「入れ。」

中から二サエルの声がして扉を開く。加賀に外で待つように言つてから部屋に入る。

「それで個人的な相談とは？」

二サエルは長官室の奥の机に陣取りこちらを鋭い眼で見る。

「私はあなたと情報戦をして勝てるとは思っていない。」

「どういうことでしよう？」

「お前は何をたくらんでる。」

二サエルはめんどくさそうな顔をして

「君が知る必要がないことです。君は南鳥島鎮守府の指揮官であつて今回は私が許したからいいものの君は本来私と面会することのかわない階級ですよ。」

「ならどうしてさっきの会議には来たんだ？」

「私の企んでいる計画にとって重要な局面だったからです。でも心配しなくていい。私は君の邪魔をしようとしているわけではない。」

二サエルに目的を教える意思はないようだ。

「邪魔をするわけではないならなおさら計画を教えてください。もしかしたら手伝えるかもしれない。」

二サエルは笑い。

「大丈夫だ。君は今すべきことをするんだ。絶対に君は私の計画に巻き込まれる。今を楽しめ。」

計画を教える気もなくこちらを勝手に巻き込んでくる。これだから裏の住人は嫌いだ。

「勝手だな。」

「勝手なのはそつちもでしょう。話はそれだけですか？今回の作戦、たのみますよ。」

「やっぱりそうじゃん。同じじゃん。」

青葉は週刊誌を握りしめ涙をこらえていた。

その週刊誌には数時間前まで同じ輸送機に乗っていた男の顔が載っていた。

ページの見出しは「戦犯村上！艦娘10万名に訪れた悲劇とは。」

芽吹き

南鳥島に再上陸した竹野だったが、彼はそれからしばらくの間訓練の組み見直しと出撃の指揮に追われ鎮守府の変化に目をつむっていた。

その間にも艦娘たちは竹野との間に壁を作り離れていった。理由はすぐに分かった。天龍が週刊誌の記事のコピーを持ってきたのだ。恐らく青葉が内地で買ったものだろう。あまりに脇が甘すぎた。未だに自分を信用していない艦娘がいることは知っていた。青葉が何をするのか知らないまま送り出したのが迂闊だった。彼女のプライベートに介入するのをためらってしまったことが問題だった。

「否定した方がいんじゃないかねえのか？」

天龍はそう聞いてくるが否定するも何も記事を見れば事実を多少誇張し大げさにものを言っているだけで否定することは何もなかった。

「付き合いは短いけどよ、さすがに艦娘10万もおいて逃げだすような指揮官じゃないだろ。」

竹野は何も答えない。

「何だよ。どうしたんだよ。」

「なら聞くが。私が仮にそれは事実じゃないと否定したところで君たちは信じるのか？散々人間の醜い部分ばかりを見てきた君たちが。」

竹野が本当の過去を語っても彼は当事者でありそれは事実ではなく彼の言い分にしかないのだ。

「それでも何も言わないよりはいいだろ？」

天龍はまだ純粹だともいえる。この鎮守府にいる艦娘の中で最もダメージがすくない。だから竹野が過去を語ればそれを信じてくれるだろう。

だがほかの艦娘はそうではない。心を開かせることが出来たのは今まで竹野がひたすらに自分の過去を隠し、よい面だけを見せ続けた結果ともいえる。

だが彼が艦娘を見殺しにした男だとしれば評価は逆転する。竹

野が詐欺師にしか見えなくなるのだ。

「言おうが言わまいが結果は同じだ。」

「なら作戦はどうするんだ？」

天龍はそう聞くが、竹野は特に慌てる様子もなかった。ひとまず目先の作戦に影響があるとは思えなかったからだ。

「それは問題ないだろう。敵を放っておけばここに攻め込んでくる。結局君たちは戦うしかない。」

「でも味方を見殺しにした指揮官と思われてるのに指示を聞いてくれると思うのか？」

「天龍。君が思うより君たちは強かで、君が思っているほど純粹じゃない。」

ここにいる艦娘たちは自分に危害を与える可能性のある人間をどうすればいいのか知っている。

牙を隠し従順さを演じ自らの存在を消す。何を捨てれば自分たちが生き残れるのか知っている。

誇りも、純潔も、彼女らは捨ててきた。今更竹野の過去がどうであると知ったところで彼女らは怒りも、竹野に対する期待も捨てて一時的に竹野の命令を聞くことを甘んじて受け入れるだろう。

そういう意味ではこちらに明確な敵意を向けてくる飛龍などはここにきても純粹さを保っている稀有な艦娘だと言える。

「そんな風に思ってたのか？」

天龍は作業の手を止めてこちらを見る。

「申し訳ないがそうだ。」

天龍は泣きそうな顔になっていた。彼女は下を向き顔を隠して駆け足で執務室を出ていく。竹野はため息をつき再び資料に視線を戻す。

「やっぱりここにまともな司令官が来るはずがなかったのよ。不幸だわ」

山城さんが嘆いている。でもどうしてでしょう。その目は安堵しているようにも見えます。

青葉さんが本土から戻りすぐにこの記事は鎮守府中に配布されました。

けれど、この大スクープに誰も喜びはしませんでした。青葉さん自身もそうでした。作り笑顔で提督の悪口を流布する姿は狂気の混じった恐ろしい姿でした。

加賀さんの話を聞いて私たちのほとんどは迷っていました。

どうやら敵が迫ってきているらしいのです。加賀さんが言うには私たちが提督に協力しなければ各個撃破されて壊滅するらしいです。

食堂に艦娘たちは集まってつまらない噂話に花を咲かせていると、天龍さんが涙目で走ってきました。

「提督。あいつやっぱだめだよ。ふふ。」

何とか明るく振舞おうとしていた様子でしたがだめだったみたいです。龍田さんが駆け寄ると彼女の胸に顔をうずめ静かに泣いていました。

「それでどうします。」

加賀さんがみんなの意見をまとめ始める。

「私はひとまず今回の作戦の指揮だけは取らせるべきだと思います。」

霧島さんは冷静でした。私たちの中で指揮を執る人を決めたところで恐らくあの提督には遠く及ばないからです。

「それには私も賛成だ。恥ずかしげもなく私に説教をしたあの男に腹が立つがそれとこれとは別問題だ。」

長門さんが同意を示したことでおおむね戦艦組の意見は決したようだ。

「私は反対です。加賀さんから聞いた提督の立てた作戦はそこまで難しい作戦ではありませんでした。時間さえあれば私達でも考え付きそうな作戦でしたから。」

赤城さんは提督に指揮をさせたくないらしい。

「ならどうするんだ？」

長門さんが赤城さんに聞く。

「今回は合同で作戦が行われるそうです。ですからほかの鎮守府のまともな司令官に代わってもらおうのはどうでしょう。簡単な作戦なら

指揮する部隊が増えても問題はないでしょうから。少なくとも私たちを見捨てはしないでしよう。」

赤城さんの意見ももつとも思える。

「駆逐艦から何か意見はないのかしら？吹雪？」

加賀さんからの指名が入る。

「え。あ、はい。私は赤城さんの意見に賛成です。司令官が激務で私達への指揮が杜撰になることもあると思いますけど、少なくとも敵ではない司令官のもとで作戦を実行したいです。」

加賀さんはしきりに何度か頷き

「なら駆逐の皆さんは今すぐにも指揮官を変えたいと言う事でもいいかしら？」

「私は反対です。」

朝潮ちゃんが手を挙げてそういう。聞いた話彼女は提督に飼いならされてしまったらしい。

「どうして？」

加賀さんが聞くと朝潮ちゃんは再びしゃべり始める。

「まずは事の真相を究明するのが先だと思うからです。週刊詩に書かれていたとしても本人がそれを否定するなら提督の言い分も聞くべきです。天龍さん提督は否定していましたか。」

「朝潮！聞くまでもないでしょ。天龍さんが泣きながらここに来たんだから。大体あんたねえちよつと優しくされたからってコロツと向こう側に落ちてるんじゃないわよ。」

満潮さんが天龍さんに近づこうとする朝潮ちゃんを止める。

「落ちた訳でも優しくされたから恩を感じているわけでもありません。」

朝潮ちゃんはそう言うけれど私から見ても最近の朝潮ちゃんは妙に司令官寄りに見えます。

「他に意見は？夕張さん？」

「え、私？えく。何だろ。私提督のことあんまり知らないんですけど。でも味方を見捨てるような指揮官の下で作戦するのは嫌ですよ。」

「まあ、当然ね。」

どうにもまとまる気配がありません。

提督が艦娘を見捨てた証拠がないと言ってまだ提督を信じようとする素直な娘に記事を読んでもすぐに提督を見限った先輩たち、今回の作戦だけは仕方なしに指揮をさせようとする戦艦の方々。

いろんな意見があつてなかなか難しい展開になつてきました。

みんなが黙り込んでしまえばらくの間食堂は静かでした。

静かになつた食堂で天龍さんが

「あいつは……否定しなかった。」

そう言います。

「それは、あの記事について?」

「そうだ。でも、肯定もしてなかった。自分が否定しても俺たちは信じないだろうって。」

みんなは何もしやべりません。ほかの艦娘がどう感じるかは知りませんが少なくとも私は提督の言い分がどれほど正しそうに見えても信じたりしないでしょう。

提督が何を言つても私達にはもう刺さりません。彼は過去を隠して私たちをだましていたのですから。

「私から提案があります。」

「吹雪?どんな提案?」

「はい。今の提督におとなしくしたがっておけばいいと思います。」

私がそう述べると加賀さんは

「さつきと全く違う意見になつたけれどそれはどうして?」

「今の提督は私たちに暴力を振るうわけでもなければ大破したまま放置するような提督でもありません。ただ私たちを裏切るだけです。だから私たちが彼の事を仲間だとも指揮官だとも思わなければいいんです。彼を変に追い出して次の提督が来た方が面倒になると思いませんか?」

私の意見にほとんどの艦娘は賛同してくれました。

でも一人、一番あり得ないだろうと思つていた艦娘が反論してきました。

「それでいいの?」

飛龍さんだった。彼女が一番提督の事を嫌っているだろうし追いつ出したいと思っっているはずなのに。

「どうしてあなたが？」

加賀さんも不思議そうな顔をしている。

「どうしても何も。こんな陰気臭い集会が気に食わないからよ。」

飛龍さんはまっすぐな人だ。提督を殴ることすらためらわない。だから私たちのやり方が気に食わないのだと思う。

「飛龍。今の提督を飛ばしたところで司令長官がこの鎮守府に意図的に問題のある司令官を送りつけている限りいつまでたつてもまともな提督が着任することはないんだ。ここらで妥協できないのか？」

長門さんがそうなだめると、飛龍さんはさらにあり得ないことを言い始めました。

「私はそんなこと言っていない。今の提督をどこかに飛ばさないと気が済まない。どうせ私をそんな単細胞だと思ってるんでしょ。10万の艦娘。」

長門さんは首をかしげる。

「それがどうした。」

「十万の艦娘を捨てて、のこのこ逃げ帰る奴に見えるの？あの無駄に肝が据わった提督が？」

飛龍さんはこの記事の内容とそれをただ受け入れたわたしたちが気に食わなかったみたいです。

「でもそんなことが出来る人じゃなければ私たちを懐柔することなんてできない。そうよね。」

山城さんが同意を求め。数名の艦娘がうなずくと飛龍さんは頭を抱えて

「つ……もうめんどくさい。不幸自慢に被害妄想。うんざり。あいつが本当に私たちの仲間を見捨てたんだつたら殴ればいい。ぶつ飛ばせばいい。そしたらまた新しい提督が来る。そいつもだめならそいつもぶつ飛ばせばいい。」

飛龍さんの言い分は無茶苦茶だ。

「そんなことすれば解体されてしまいます。」

扶桑さんが飛龍さんを止めるが

「私は解体されたことないわよ。」

飛龍さんはそう腕を叩いて見せる。

「納得いかないのよ。私の提案を無視して仲間を沈めた昔の提督と全然違う目をしてるここの提督が、あいつと一緒だったら、私の目が間違ってたってこと？冗談じゃない。せめてあいつの口からはつきり言わす。私に勝手に希望を与えた無責任な今の提督に。みんなムカつかないの？偉そうにご抗弁を垂れたくせに、いざ蓋を開ければ最低な指揮官でした。ふっぎけんな！」

ムカつく。司令官に向けていい感情なのでしょうか？

私にはそれがわかりません。提督に敵意を向けたことも憎しみを覚えたこともあります。でも私は司令官に改善を求めたことはなかったのかもしれませんが。

それが許されないことだと思っていたのかもしれませんが。

「私は。少し、頭にきました。」

加賀さんは相変わらず無表情に言う。

「私はさつきも言ったが腹が立つ。偉そうなことを言うだけの男なのが見ることもなく逃げていくのならもつと腹が立つ。でもそれとこれとは違うだろう？」

長門さんも同意を示します。

「何が違うの？長門、一瞬でも信じたから腹が立つんですよ。私たちが騙っていたのならあいつがどうしてそんなことをしようとしたのか気にならないの？」

疑問。探求心。そんなものつくに忘れしました。

でも食堂はざわついてきました。私は何か取り戻せないものを失ったのでしょうか？

「俺は。悲しかった。俺たちがこういうことを話すってあいつは分かっていた。俺たちの傷が癒えてないってあいつは知っていた。どれもこれもあいつにとって予想通りなんだと思う。でもあいつは俺たちが霧島が言っていたように利用すると思ってる。吹雪の言ったように関係を浅いまま続けようと思ってる。だから俺を蹴り飛ばし

たんだと思う。俺を引きはがそうとしたんだと思う。馬鹿だよな。俺って素直すぎるよな。あいつの策に引つかかって、こんなだせえ顔になっちまった。」

天龍さんは顔を上げます。目元は赤くなって目はうるんでいました。龍田さんが怒るのではと思いましたが彼女はただ優しく天龍さんを慰めていました。

「そろそろ決めましょう。」

加賀さんがいよいよと言った顔でみんなの方を見ます。

「提督の話を聞かずにこのまま追い出したいと思う人はいますか？」

当然誰も手を上げません。

私もほかのみんなも少なからずこの数か月は楽しかったし期待もしていました。みんなすぐに諦めたと言った顔をして食堂に集まっていたのですが、誰一人として今の提督が私たちに押し付けてきた安い希望を捨てられなかったんでしよう。

「なら彼をつるし上げてでも聞きましょうか。」

加賀さんは恐ろしいことを言います。みんなが笑っています。

「何ですか。本気ですよ。」

加賀さんがそう言うときまたみんなが笑います。こんな光景初めて見たかもしれません。

その後飛龍さんを先頭に執務室に殴り込みに行きました。

しかし提督は少しもおどろかずに言った。

「何か期待してるのかもしれないが私が10万の艦娘が死んだ海戦から生きて帰ったのは事実だぞ。」

竹野はそう言うが

「それが事実だとしても何か理由があるでしょ。責任を背負いたいのかわらないけど私たちは今、あなたの部下なの知る権利があると思わない。」

と飛龍に反論される。

「それでも君たちを失望させることになるのは間違いない。」

「なら、次の作戦で誰一人沈めずに作戦を成功させてよ。その後に関

けば私たちは失望なんかしない。」

飛龍は引くつもりがないらしい。次の作戦ではもともと轟沈しやすい駆逐や軽巡が危険にさらされる場面が多くなる。

それでも竹野には一人も沈ませない自信はあった。ここは彼女たちが沈むべき海ではない。

「わかった。長い話になる。今は時間を無駄にできない。作戦を一人もかけることなく成功させることが出来れば私の過去について話そう。それでいいか。」

飛龍は頷いて。

「二人でも沈んだら命がないと思いなさい。」

そうとだけ言い残して執務室を去っていく。静かになった執務室には天龍が取り残されていた。

「すまなかった。言い過ぎだった。」

「いや。俺もよく考えずに本心だと思っちゃまった。結局一番信用してなかったのは俺の方だ。」

実際のところ年端もいかない子供をだました竹野が悪いのだが今回は天龍が謝っているし言う事にしておこう。

ひとまず事態は解決した。竹野が思っていたよりもよい状況で。

過去を思い出すのも億劫だが今は気にしないことにする。

まず、すべきは轟沈なしで作戦を終わらせることだ。

グアム先制防衛作戦 前段

想像よりも整備された鎮守府。

ワグナーが上陸した最初の感想だ。少なくとも彼の知っていた隔離施設とは違った。

ワグナーがこの鎮守府に来たのは初めてではない。ボロボロになったこの提督をひっ捕らえに来たことがある。

正直な話二サエルの考えは読めないが竹野がそこまでの危険人物には見えなかった。

しかし、ここの鎮守府の今の様子を見るに、とてもただの新米が頑張った結果と言うには無理がある。

目標にしている精度は新米らしい無茶な数字が設定されている一方、それを実現させるに十分な指導が行われていた。

とても新米提督だとは思えない。会議の時もそうだったが、どうやっても新米の思い付きだと割り切ることが出来ないことを彼はやってのけている。

ワグナーにしてみれば今更二サエルに何かを仕組まれることいちいち相手にすることはないがやはり不快だ。

そうはいつでも彼にとって二サエルが何をしようが自分のすることとは変わらない。正義を信じて正しい行いをする。いかにもアメリカの軍人らしい考えの持ち主であった。

彼のその自由で深く考えすぎない性格のおかげで、深海棲艦との初戦で大破し大炎上する原子力空母ユージーン・B・フラッキーから飛び降り、唯一の生存者となれたのだろう。

「数日ぶりですね、竹野提督。」

「今回はよろしく願います。食事はまずい鎮守府ですが我慢してください。」

竹野は偵察情報を眺めながらそういう。

「ただのジョークだということを祈るよ。」

ワグナーは苦笑いをしながら竹野に近づき航空写真をのぞき込む。

「情報部の予想通り敵の勢力拡大はひとまず止まっているようです。」
「なら計画通り、水雷戦隊を第一波で突入させる。その後には主力部隊を侵入させる。第二次世界大戦当時の戦術にも見えなくないな。」
その通りだ。編成だけを見れば確かに二次大戦のものに酷似している。ただ水雷戦隊を白昼堂々バカみたいな質量の殴り合いに参加させるのだ。敵がこちらの意図に気が付く前に削り切る。あるいは最善のタイミングで撤退をさせなければ間違いなく轟沈が出る。

「水雷戦隊の撤収のタイミングは？」

ワグナーも同じようなことを考えていたようだ。

「こちらとしては轟沈はゼロに抑えたいです。ただ安全策を取りすぎれば敵の熟練の主力をまた取り逃がすことになります。」

こちらが勝利と言えるのは敵の熟練主力を壊滅させることが出来たときだ。壊滅させることが出来なければ深海棲艦の圧倒的物量で駆逐などの護衛が再補充されて再び攻撃を仕掛けてくることが目に見えている。

「この前も言っていた通りだな。」

「そうですね。タイミングはこの資料だけでは予想できません。作戦を開始してから私のタイミングで退いてもらえますか？」

ワグナーは頷いて

「わかった。自称新米の力を見せてもらおう。」

竹野は微妙な顔をして、

「初めての作戦ですから迷惑をかけないようにしないと。」

と返す。ワグナーは笑い。

「まあ、何を隠したいのか知らんが期待してるぞ。新米。」

そうして二人は作戦ボードを眺めて語り始めた。

「竹野提督。そろそろ具体的な編成を考えないか？」

それから数時間にわたって竹野とワグナーは作戦の細かい部分を詰めていきようやく編成にまでこぎ着けた。かなり関係ない話もしていたような気がするが。

「そうですね。ですが時間も時間も飯でもどうですか。」

時間は正午を回っておりワグナーもそう言われると途端におなかがすいてきた。

「そうだな。味にはあまり期待しないでおう。」

流石の竹野も食堂の味にはまでは自信がない。この前揚陸した食料を適当に煮込んだ、みたこともない料理が並ぶのがここ最近の日常だった。

二人が執務室を出るとワグナーの方には彼の鎮守府の艦娘が駆け寄っていく。一方の竹野の方には誰も駆け寄ってくることはない。

先日のことがあつてもなお駆け寄って来たのなら、それはそれで怖いのだが。

「えらく惨めに見えるな。」

適当に艦娘たちをあやしたワグナーがこちらをみてそう言うて来る。

「あなたのような鬼教官になぜそこまで艦娘がなつくのか理解しかねますね。」

「そうへそを曲げるなよ。」

事情はどうあれ、何となく指揮官として負けた気がして嫌だった。

「苦労してるのか?」

「それはもうとんでもなく。」

ワグナーは何か知っているのだろうか?

「あなたはここの鎮守府とどういった関わりが?」

「ここで暴れたでしょうしようもないクズを本土に連れ帰ったことが何度かある。それだけだ。」

そんな奴らのことは書類では知っている。

「あなたから見てその提督たちはどう見えましたか?」

「思い出したくもない記憶だが、君にはそれが必要だな。まずはこの前任だな。何をしたかは知ってるか?」

「強制的性向に必要性のない暴力行為。それに戦果の水増しと資金の横領。反省してやり直す機会をくれと泣きついたにもかかわらずこれですよ。全く意味不明だ。」

「全く君の言う通りの人物だったよ。全ての行動が支離滅裂。発言と

行動はおろか、目的と行動すらちぐはぐだった。」

「ろくな教育も受けさせずに権力だけ与えれば一部がそうなることは分かり切ったことです。彼はもちろん悪いがそれを止められなかったこの海軍と言う組織に問題の根本はある。私はそう思います。」

「そうだな。だが、食事前これ以上嫌な話はしたくない。ここに最初に来た時の状況を思い出しただけで反吐が出る。また後で話そう。」

相変わらず記憶に残らない味の飯を流し込み食堂を出る。

「さて。飯も食ったし仕事をしようか。」

ワグナーと向かったのは執務室ではなく地下にある作戦司令部だ。

「設備はそれなりに使えるようにしています。骨董品ですがね。」

深海棲艦相手に暗号通信まで使うは必要なくなるべく安く調達できる無線で指揮を執っていた。

衛星も使わしてくれないため大きなアンテナが鎮守府には設置されていなかった。

「最近はどこもこんなだよ。暗号通信だとか、情報戦だとか。そんな時代が懐かしい。」

「NCWは全然聞かなくなりましたがけどC4Iシステムはいまだに有効だと思えますけどね。」

「だとしても、残念ながらそれを運用できるほど今元気な軍隊はいない。」

戦略、作戦、戦術、戦闘を効率的に統制するシステムが使えたらどれほど楽だっただろうか。

ないものを嘆いても仕方ないのだが。

「さあ現実をみましょうか。」

内藤とマフダも合流していいよ作戦の細かい部分が決定していく。

主力はまとめて運用する一方で損耗の激しくなる水雷戦隊と兵装を使い切った駆逐や軽巡の撤退を援護する部隊は分割して指揮することが決定した。水雷戦隊の指揮はワグナーと内藤とマフダが執り後退援護の部隊は竹野が指揮することになった。

主力の指揮は攻撃を終了した水雷戦隊の指揮官が執ったとしても十分間に合う。

「後退支援には軽空母と重巡を使います。心もとないといえそうですが敵の主力を叩くのが今回の目的です。そのうえで被害を最小限にする。いや被害など出さない。」

「特に文句もない。強いて言うならあまり気を張りすぎるな。新米じゃないことはわかってるがそれでも久しぶりの指揮なんだろ。気楽に行けってわけじゃない。冷静に。そして冷徹に。わかっていると思うがな。」

「私はただの新米ですって。」

ワグナーの言葉が心に響く。冷静に。そして、冷徹に……。

久しぶりに大規模な作戦が発令されほかの鎮守府から大量の艦娘たちが上陸してきて、鎮守府はかなり活気にあふれていた。補給の大拠点として設計されたこの鎮守府はその大量の艦娘を支えるのに十分だった。

「轟沈ゼロ。本当に守ってくれると思う？」

「あたしは守らないに賭けるね。」

摩耶はきっぱり言い切る。

「俺たちは大丈夫かもしれないけどね、軽巡と駆逐はこんな作戦じゃ消耗品同然さ。」

作戦計画を聞いた時は正直駆逐と軽巡のリスクがあまりに重すぎると私も思った。消耗品と言っても差し支えないように見える。「やっぱりそう見えるわよね。」

けれど、司令官は一定の速度と装甲、火力を持つ私達重巡に水雷戦隊の撤退援護を指示してきた。

限界まで兵装を使い切り足の速さだけが残された駆逐と軽巡を援護しながら後退し敵の護衛艦を減らすように命令してきたのだ。

消耗品前提にするための駆逐と軽巡の撤退を援助するためにわざわざ部隊を作るのか疑問だ。

「司令部より各隊へ。交信状況の最終確認を実施する。」

夜が明けていよいよ作戦が始まろうとしていた。

「よし。司令部こちら主力打撃部隊旗艦長門だ。出撃の準備ができた。」

「copy」

「九十九里浜水雷戦隊旗艦神通行動可能です。」

「チェック。loud&clear。」

「南鳥島水雷戦隊 radio check実施せよ。」

「感明良好。準備完了だ！」

「こちら後退支援部隊だ。」

「copy loud&clear」

「最後だ。父島、硫黄島合同水雷戦隊。」

「デ・ロイテル。こちら感度良好。」

「確認した。続いて作戦中の呼称を確認する。九十九里浜水雷戦隊、以降呼称は1sd。」

「1sd神通了解しました。」

「南鳥島水雷戦隊。呼称は2sd。」

「2sd天龍了解！」

竹野は若干の後悔をすでに覚えていた。天龍は武装も練度も普通であるが本人たつての希望で旗艦に任命したがおとなしく阿武隈にでもやらせておけばよかったかもしれない。

「2sdフラッグ。張り切りすぎるな。」

「わかってる。」

「父島、および硫黄島合同水雷戦隊。呼称はsd3。」

「sd3デ・ロイテル了解。」

「続いて主力打撃部隊。呼称はMSGだ。」

「MSG旗艦長門だ。いつでも行動可能だ！」

「了解。sd後退支援隊に到達。呼称はsd1s。sdと大量の通信が予想されるためフラッグ以外が司令部の無線へ直接入力することを規制する。確認しろ。」

「sd1sフラッグ摩耶。了解だ。」

「s d 1からs d 3、s d 1 s およびM S Gとの通信状態は良好。特
記事項なし。全部隊、作戦開始の発令を待機せよ。」

いよいよ始まる。竹野は冷静に深呼吸をする。

「どうした新米？」

「なんでもありません。何せ久々なもので。」

ワグナーがにやりと笑うのが見える。

「新米じゃなかったのか？」

「ただの言葉遊びですよ。初めての作戦で緊張してしまつて。」

無線に音が入らないようにしながら初めてを強調して言う。

ワグナーは失笑して

「とつとと始めるぞ。」

竹野はワグナーに頷いて見せて無線を取る。

「All Station。こちら司令部。作戦開始を発令する。線
り返す。作戦行動を開始せよ。」

グアム先制防衛作戦 後段

作戦に開始と共に水雷戦隊と後退支援部隊は速やかに南下、主力部隊は九十九里浜の加賀や護衛空母が対潜哨戒を続けながら交易航路を使い交戦を避けながら南下していた。

「sd全隊へまもなくそちらは情報部の試算した敵の哨戒圏内に入る。警戒レベルを最大限に引き上げ侵入せよ。sdlは偵察機を飛ばしたうえで圏外にて待機せよ。」

じきに敵と接敵する。今までの傾向から敵はこちらの主力をいかに沈めるかを考えている。敵の堪忍袋の尾が切れて水雷戦隊への攻撃が本格化するまでにどれだけ護衛の船を沈めれるかにかかっている。

「sdl sフラッグより。僚艦が敵部隊を発見。距離はsd3の南南東5キロ。」

「sd3へこちらマフダ。交戦準備。敵部隊の編成は同じく水雷戦隊だ主力じゃない速やかに潰せ。連絡すらさせるな。」

なかなか恐ろしい女だ。

「デ・ロイテル Wilco」

竹野はすべての部隊を観察しながら兵装の残数をざっと計算しておく。そのうえでsdl s所属の軽空母に偵察機を大量に載せることで戦場のより詳細な目として全体を監視する。

偵察機が展開し終わるまでは完璧な監視体制とは言えないがスビードが命の第一段階ではそれを待つわけにはいかない。

第二段階ではこの偵察機の情報をもとに超長射程の艦娘と空母が視認外から攻撃する。それまでに展開できれば御の字だ。

「sdlの南に約60キロの海上に敵の主力にらしき軍団が見える。衛星の情報とも一致する。この一団を敵主力と断定する。」

流星に距離がありすぎるため敵が偵察機を飛ばしているかどうかはわからない。ただ敵はこちらの攻撃を予測していない。今まで機能していなかった南鳥島から大部隊が攻撃してくるなど予想できない。はずだ。そうであると楽なのだが。

「sd3。敵水雷戦隊と接敵。敵を全滅させましたがこちらも中破が14小破が37出ました。」

「sd1s司令からsd3へsd1sが即座に対応可能な範囲外だ。そのまま作戦を続行せよ。」

そろそろsd1sも作戦海域へ突入した方がいい頃合いだろう。

「sd1sフラッグへ作戦の海域に突入。敵主力がいる方向に向かえ。」

「任せろ！」

摩耶の気前のいい返事が聞こえる。

「sd2は敵の他部隊がいる可能性を考慮してタイミングをずらして敵に肉薄する。それでも問題ないか？」

「ワグナーWilco」

現時点での損害や兵装の残数、位置関係などから考えるに恐らくsd2が最後まで攻撃を続けることになる。必然的に撤退支援の中心はsd2になる。つまり竹野の鎮守府の部隊だ。

偵察を続けながら水雷戦隊は全速力で敵部隊に接近している一方で、sd3は哨戒部隊との複数にわたる戦闘で、すでに大破艦を複数出していた。

「予想以上に敵哨戒部隊が本気だ。sd3は敵主力と接敵するころには攻撃能力が半減している恐れがある。」

ロイテルの悲痛な叫びが聞こえる。しかし敵の総数は変わっていない。哨戒部隊が増員されているのなら当然主力を守る盾は少なくなっている。

最悪の場合、sd3の主力への攻撃は中止する判断も必要だ。

「了解。sd3は継続的に損害を報告せよ。兵装残量と損耗をみて主力への攻撃実行について司令部で判断する。」

マフダはただ冷静に部隊にそう告げる。まだ若いのに、内藤もマフダもかなり場数を踏んでいるのだろうか？ワグナーについては特に心配することはない。逆に彼が困っているときはそれすなわち竹野にとってもあまりよろしくない状況となっているのだからこちらも手が回らないだろう。

「sd1！敵を視認できるか？」

ワグナーの問いに神通は答える

「sd1フラッグ。敵を視認射程圏内に入ります。左砲戦開始します。」

「sd1コマンダーから、sd1全隊に次ぐ、展開して各自戦闘に移れ。攻撃開始せよ。」

いよいよ第一波攻撃が開始された。この時点で敵主力による本格的な攻撃が行われる可能性は低い。敵の補給線は伸びきっており、深海棲艦お得意の圧倒的物量による攻撃は最近の太平洋戦線では見られない。少なくとも主力は水雷戦隊の事を自分が発砲するに値しない部隊と判断するだろう。

「sd2へ通達しておく。sd1が交戦状態に入った。sd1が兵装の半分を使いきった時点で我々も突入する。」

「sd2天龍。了解だ！」

「sd1sに司令だ。sd3の損傷艦の撤退を支援しろ。」

竹野は損耗状態からこのままsd3が戦域に突入すれば轟沈を免れないと判断した。マフダもそれをわかつているようで。

「sd3の損傷艦へすぐに残弾を戦闘可能な艦に引き渡せ。sd1sが撤退を援護してくれる。」

マフダの指示により大破していた78隻の撤退がすぐに決定される。竹野はsd1sの中でさらに部隊を分ける。現段階で敵の哨戒圏内の大部分はこちらのリアルタイム監視下に入りさらには、敵水雷戦隊の壊滅を確認していた。そのため練度に若干の不安を抱えている重巡を本隊から引き抜き撤退と曳航を任せることにした。手負いの艦と未熟な艦だけの艦隊になるが100%の安全など戦場ではあり得ない。

「sd1s支隊へ以後呼称をsd1s2に変更sd3の損傷艦もsd1s2の隷下に入るように。またsd1s本隊はこれまで通りsd1sを使用せよ。」

呼称の変更を素早く告げて速やかに撤退を開始させる。

「sd3へ戦域侵入のタイミングはsd2と同時だ。ただしsd2の

戦闘が終了する前に兵装を使い切り s d l s の支援を受けずに撤退する。」

s d l s による支援もさすがに 2000 隻近い s d 全部隊を支援することなどできない。s d l s は 400 隻ほど編成されており五倍の損傷艦を援護しながら撤退することは不可能だ。

「MSG の長門より。敵の哨戒圏内侵入間近だ。指示を。」

「MSG へ。敵兵力の損耗により敵の索敵圏は縮小している。敵主力までおよそ 30 キロの地点まで移動せよ。」

敵の空母の攻撃圏内に入ることになるが、敵の通信能力から考えるに、敵は自分たちの水雷戦隊が壊滅していることに気が付いていない。そのため空母は偵察機を自分の近くにしか飛ばしていなかった。

「s d l より。もうじき兵装の約半数を使い切る。敵の損害は駆逐 630、軽巡 380、重巡 250 と空母 2、戦艦 4 程度は沈めたがまだ駆逐が 700 隻近く行動してる。それに重巡からの攻撃が攻撃開始から時間が経つほど本格化してる。s d 2 も s d 3 も警戒して侵入せよ。」

敵の主力が動き始めるのも時間の問題だった。

「MSG へ。艦戦を高高度に飛ばしておいてくれ。くれぐれも見つかるなよ。」

「MSG 了解した。」

念のためのお守りを飛ばしておく。

「s d l 攻撃終了。撤退開始する。」

「s d l s 支援砲撃準備完了しています。要望があればどうぞ。」

ワグナーはなめるなよと言った顔をして

「弾を取っつけ。」

と頼もしいことを言う。

「了解。s d l フラッグ。確認している損害を報告せよ。」

「s d l 神通。損害は大破 262、中破 145、小破 446 です。被弾していない艦が 63 隻です。」

「了解。撤退支援は不要と判断する。」

s d l は兵装を使い切っているため反撃はできないだろうが小破

程度の艦が複数いることから撤退には苦勞しないだろう。

「竹野すまない。sd3も撤退を開始する。」

sd3の撤退も開始される。

「sd2天龍だ。敵戦艦が攻撃を開始したぞ。どうするんだ。」

大量のノイズが混じった通信が入る。

「sd2へ。撤退を開始せよ。」

「だめだ。敵の護衛はまだ削り足りない。」

内藤の指示を竹野は拒否した。彼は戦場の目として全体を見ていたが主にsd3が水雷戦隊と通常の戦闘をして試算より多くの弾薬を消費してしまった結果多少の余裕があった計画が狂っていた。ただ竹野は冷静で充分な策を用意していた。

「MSGの長門だ。こちらはいつでも攻撃可能。」

竹野には今主力が攻撃を開始したところでどうなるのか見えていた。

兵力を温存していた敵の熟練の主力たちにとってほぼ同数のこちらの主力を壊滅させることなど造作もないことだ。

練度はあげたつもりだがあまりにも戦力が違った。情報部は敵の編成をあつてもヲ級のフラッグシップが主力程度だととらえていたようだが、ふたを開ければヲ級改フラッグシップを中心にして姫型が40隻近くいるとんでもない艦隊だった。

何とか砲戦に持ち込めたとしても敵にはとんでもない奴がいたル級改フラッグシップを中心にした本気の殴り合い部隊が存在していた。肝心の敵の編成を情報部の高高度偵察機では補足できていなかった。竹野が気が付いたのは偵察機の展開が終了したところ。つまりsd1による攻撃が本格化したタイミングだった。

ただ勝ち筋がなければすぐに竹野も撤退を決定する。

敵の護衛艦を全て飛ばし丸裸になった敵を偵察機からの情報による一方的な攻撃を展開するつもりだった。

sd1sの軽空母には偵察機以外では積めるだけ艦戦を積んでいだし制空権は確保できる。だが結局護衛を削れなければ精度もタイミングも合わせにくい遠距離からの砲撃では敵を黙らせることはで

きない。

敵の護衛は残り300程度。敵の防衛手段を封じれていないため最悪の場合敵の見かけの耐久は二倍以上になる可能性がある。

なら護衛だけを狙ってのんびり処理すればいいと言いかもしれないがそんなことをしている間に敵の高速戦艦群が長門はじめとした低速戦艦を補足するだろう。

「sd2には攻撃を続行させてください。このままでは目標を達成できません。」

内藤は困り果てていた。このまま攻撃を続ければ絶対に轟沈が出る。彼にとつては轟沈などとても看過できなかつた。

「しかし。」

「sd2私の隷下に入れ作戦続行。命令だ。一步も引くな。攻撃続行。」

竹野は困っていた内藤から無線を取り上げる。

「主砲による攻撃は中止！雷撃戦のみに集中せよ。いいな。」

戦艦と主砲で撃ちあうなど無意味だ。そのために使う能力を全て攻撃回避に使うように指示をする。

何とか轟沈を出さずにこの戦局を乗り越えるためにはある程度の攻撃能力を捨てなければならぬ。

竹野は偵察機の情報も注意深く見て撤退のタイミングをうかがう。

敵との激しい撃ち合いの末に敵の肉壁はほぼ壊滅したと言ってもいい状態になった。

「sd2撤退開始。sd1s支援砲撃！」

sd2は速やかに撤退を開始するが被害はとんでもなく、部隊の6割以上が大破しており機関にダメージを受けている艦も少なかつた。

状況を速やかに打開する必要がある。

タイミングを計り竹野は予定にはない行動を要求した。

「MSG！速やかに攻撃を開始。」

竹野の指揮のもと主力による総攻撃が開始される。

しかし、sd2に対する執拗な砲撃は止まない。手負いの水雷戦隊

に攻撃が集中するのは深海棲艦がすでに冷静な判断を失い感情的に攻撃していることが見て取れたが残念なことにこちらは敵が冷静さを失っていてもそれをうまく利用してカウンターを当てる能力をすでに喪失していた。sd1sと何とか合流したsd2だが、たかだか重巡と軽空母の艦隊で敵の主力に打ち勝つことなどできはしない。「冷静に。そして冷徹に……。」

犠牲は何か。何を捨てれば被害を抑えられるか。

竹野は偵察機の映像を見る。

「ワীগナー！MSGを敵主力に突撃させろ。」

「どういうつもりだ？」

「攻撃は最大の防御だ。典型的な手を使う。」

相手がこちらを沈めようとするならそれより早く相手を焼く。実に簡単な方法で竹野は状況の打開を図る。

「sd2、sd1s、MSGもてる兵力全てで敵を攻撃せよ。」

MSGが突撃を開始したためさすがに敵の主力は優先目標を変更する。

敵はようやく艦載機を発艦させ空母による攻撃を開始しようとするがそれは大失敗に終わる。

空母戦力を温存して主力攻撃に固執していたのがあだとなった。主力が見えた瞬間艦載機を上げることなど竹野にとっては織り込み済みの行動だった。

竹野の指示で高高度に待機していた艦戦は急降下で加速して高い機動性得た。一方、発艦直後で速度が出ておらず旋回すらままならない敵機では練度だけではどうしようもない圧倒的な差があった。

飛来した戦闘機部隊は五倍近い航空戦力を瞬く間に撃墜した。

出鼻をくじかれた空母は艦戦を出して抵抗を試みるがすでに制空権は完全に奪われており発艦と同時に艦載機は海に落ちていった。そのうえこちらの空母から発艦した攻撃機が飛来。しかし対空に集中すれば今度は重巡からの魚雷がぶっ刺さる。

何とか状況を打開しようとした空母たちの頭上には軽空母が射出した艦戦が到着し制空権はより盤石なものとなった。

空母が無力化され、攻撃力が大きく下がる中で、次第に敵の攻撃はあちこちに分散し効率的に主力を叩くという戦術は完全に崩壊していった。

またsd1sは隙を見て徐々に離脱を開始しており追跡しようとする敵にはsd2の駆逐が残っている魚雷すべてを投射し進路をふさぐ。鈍重な戦艦には至近距離から放たれる魚雷に対処する能力など当然なく撃沈された。

ただ、こちらにも至近距離からの戦艦の攻撃を防ぐすべはない。

そのため竹野は重巡に被害を引き受け弾受けをするように指示した。

あとは重巡が時間を稼いでいる間に何とかして敵を焼かねばならなかったがそこは心配する必要がなかった。指揮統制が上手くいかず射撃管制のままならない相手は手当たり次第に攻撃するがそれで沈むほど艦娘たちもやわじやない。敵はただ小破の艦を増やし続けたがこちらは攻撃を集中して速やかに敵を排除した。敗走する敵は空母の餌食になり最後の抵抗で突撃してくる敵は長門型と大和型の集中砲火を食らいあえなく撃沈された。

「情報部から作戦司令部へ。現在当該海域に敵戦力を発見できない。」
「了解。MSGへ。空母は哨戒を実施せよ。sd全隊、状況終了。帰投せよ。sd1sもsd2を護衛しながら帰投せよ。sd1s2は？」

「sd1s2です。すでに帰投済みです。」

「了解した。」

竹野は無線を置き指揮所の椅子に深々と座りこむ。

ようやく終わった。だが竹野としては満足のいかない作戦だった。情報部の甘い見積もりを鵜呑みにしたこともそうだがもっと早い段階で部隊を引き上げ戦略を再構成することが出来たはずだ。

今回は運で助かった部分も大きい。あらゆる状況に対応できるようにする前に、情報での圧倒的な優位が必要だと今回の作戦で思い知らされた。敵の艦種を判断するために精鋭の偵察機中隊を育て上げ敵にばれないで敵の艦種まで調べ上げる必要がある。

「竹野。」

ワグナーが近づいてくる。

「いまMSGから報告が入ったが戦艦たちもありったけの弾丸打ち込んで弾切れ寸前だそうだ。」

竹野としては分かっていたことだった。正直なところ敵に姫型がいたことで竹野の頭の中の試算では敵を撃ちこぼすと思っていた。艦娘たちは竹野の期待以上の働きを見せてくれていた。

「それは大変でしたね。」

「他人事のように言うがお前が気づいてなければ今ごろ敵を撃ち漏らし、手痛いしっぺ返しを食らってたかもしれんぞ。お前にはどこまで見えてたんだ？」

評価されることは素直にうれしい。ただ姫型があまりに多すぎることや情報部の情報があまりにも杜撰すぎることで、戦略部の脅威に対する対処があまりに遅すぎる。など怪しい部分が多いのだ。

昔の組織とは全く別物だということはわかってる。だが、戦略部は竹野にとっては悪い思い出しかない。

「正直ここまで大規模な艦隊が敵になるのは予想外でした。」

多少、情報が間違っていることや主力との会敵前に被害が出たことそこまでは竹野の予想通りだった。ただ、あまりにも間違え方が致命的すぎる。

「陰謀めいた何かを感じますよ。」

そう竹野は嘆くが

「轟沈なしで予想より強力な艦隊を撃破した。それでいいじゃねえか。」

ワグナーは笑い飛ばしている。軍人とは本来そうであるべきなのだろうか？

「そうですね。」

竹野は苦い笑いを浮かべる。

「よし。うちの給量艦に何か作らせよう。今日は宴会だ！」

ワグナーは立ち上がり指揮室から出ていく。

作戦が終わっても気持ちが晴れないのは、今から自分が過去を語ら

なければいけないことか？はたまた全く別のことが原因なのか。

実体のない何かにイラつき怯えるのもめんどくさくなってくる。

「私たちも行きますか？」

内藤とマフダに声をかける。三人は指揮室を出て食堂に向かう。

日はすでに落ちていたが帰還してくる艦娘がいまだに多くいるため港湾は明るく照らされていた。

行き場亡き二人

食堂はお祭り騒ぎ状態だった。

主に他鎮守府の艦娘が騒いでいる。ただ、艦娘同士の仲間意識はあるようで竹野の鎮守府の艦娘たちもそれなりに楽しんでいるようだった。

厨房の方では九十九里浜の間宮と、ここの鳳翔が楽しげに喋りながら何かを作っている。

すでに料理の大部分はできているようで、ここでは見たことがないようなまともな食事が並んでいた。腹を満たすことだけが目的の食事ではない。

「君のところの鳳翔もなかなかやるじゃないか。どうして今まで食堂を担当させなかったんだ。」

とワグナーは言うが、竹野も今日初めて鳳翔の能力を知った。

「明日からは食堂を担当してもらおうことにします。」

鳳翔はこう言つては何だが戦力としてはほかの空母と比べて大きく劣る。

その為、新型の兵装実験艦として運用するつもりであるから調理担当として訓練が多少減つてもそこまで艦隊に影響はないだろう。そんなことを考えながら厨房からワグナーの方に目を移すと

「提督。何で夜戦させてくれなかったの!」

と彼のもとに川内が走ってくる。そのまま減速せずにワグナーに突進する。

竹野は反射的に身構えるが、川内の突進はこの数か月の間に竹野が受けた攻撃的なそれではなく、一種の感情表現だった。

「夜戦はないと説明しただろ?」

「違つて!夜戦はない!夜戦 n i g h t っ て こと じゃ ン。 だー かい ー! やー せー ン! しよっ!」

夜戦の夜という頭痛が痛いと思たような何かを感じる主張をして騒ぐ川内をワグナーは

「ああ。そうだな。神通頼んだ。」

と神通に押し付ける。神通は少し嫌そうな顔をして「わかりました。」

と川内を連れていく。神通。水雷戦隊の旗艦としてかなり善戦していたのに特に激励の言葉もなく、苦労人だ。

「激励の言葉をかけてあげないんですか？」

「彼女は分かっているさ。」

ワグナーは熟年夫婦みたいなことを言い出す。

彼がそれでいいのなら竹野が口を出すことではないし、彼はそもそも帰還した艦娘と誰一人喋ってすらいない。

「君の方こそどうなんだ？」

竹野は首を振り

「彼女らが楽しそうにしているんです。私が踏み入っていい場所なんかありませんよ。」

と悲し気に言う。

「私たちは歓迎しますよ。」

とワグナーの傍にいた翔鶴が気を使ってそう言ってくれる。

「ありがとう。」

とても指揮を執っていた時と同じ人には見えない程に小さくなった背中を見て内藤とマフダは後ろで笑っていた。

竹野はワグナーと向かい合って座る。食堂は一度静かになり、

「さあ！今作戦の成功を祝って乾杯しようじゃないか。グラスは持ったか？」

ワグナーは立ち上がりジョッキを天高く持ち上げ、声を張り上げ言う

「チアーズ！」

乾杯と言ったりチアーズと言ったり一貫性がなかったため九十九里浜鎮守府の艦娘以外は困惑していたがそれもすぐに終わり食堂はひととき騒がしくなる。

「久しぶりですよ。」

「そうなのか？」

ジョッキを軽く飲み干したワグナーが言う

「食堂に人が集まること自体珍しいですから。」

大体いつもは腹が減ったら勝手に食事を作り食べるだけの場所だ。全員が一緒に食事をするのではない。一体感を持たせるため、部下の意見を引き出しやすくするため。いろいろと恩恵も大きい。いつか毎日こんな風になればいいと思うが、今はそれ以上にこのにぎやかな雰囲気を見ると泣けてくる。

ワグナーは自分の部下の艦娘たちと談笑して、竹野の鎮守府の艦娘たちも楽しそうにしている。

竹野は自分の居場所がないことを強烈に見せつけられ席を立つ。

「どうした?」

ワグナーがそう聞いてくる。

「少し報告作業が残っているので私はこれで。」

そうごまかしたが、ワグナーは恐らくこちらの真意をわかっているだろう。けれど特に竹野を止めることはなかった。

「ご苦労さんだな。」

とだけ言う。

食堂を出た竹野は報告作業と言ってごまかしたが当然それは嘘で、特にすることもなく手持無沙汰なままドックに向かう。すでにすべての艦娘が帰投しており港湾のライトは消えていた。そのうえドックにいつもいる明石も不在で静かだった。

絶海の孤島であるこの島では食堂を離れば離れるほど頼りになるのは星明かりだけになる。

今日は新月ほどではないが月はまだ小さく頼りない光しか放っていないかった。

海上は静かで心が落ち着く。

モンゴルの夜よりも波音があるこのほうが心地いい。

しばらく歩くと兵器の残骸が見える。恐らく大日本帝国時代の戦車だろう。

この島は二度要塞化されたことがあるらしい。

最初は太平洋戦争で大日本帝国に、二度目は国連軍に。

様々な防衛設備の残骸と艦砲射撃の傷がこの島には残っている。太平洋戦争では硫黄島の激戦とは違いここでは何も起きなかったが。それでも配備されていた戦車の残骸は残っていた。

けれどもこの島は国連軍による二度目の要塞化後大規模な攻撃を受けている。艦砲射撃により滑走路も通信設備もやられてしまった。通信設備は修復されたが滑走路には未だ大穴が開いている。

竹野はその大穴の中に足を放り出し穴のふちに腰を掛け、空を見上げる。

そして今までの事を思い出す。

「何してるの。」

思い出そうとした矢先声をかけられる。

「いいのか飛龍。食堂にいらなくても？そんなに早く私の過去が知りたいか？」

「そういう訳じゃない。」

飛龍は否定する。では一体何のためにここに来たのか。

「実は酒が飲めなくて困って飛び出してきたのか？」

そう茶化してみるが、飛龍の返事はない。星明りだけで飛龍の表情を読み取るとは困難だった。

「私と同じで、居場所がなかった……か。」

そこからは沈黙が続き、飛龍のすすり泣く声が波音の隙間から聞こえるまで誰も沈黙を破らなかつた。

けれど、泣いている飛龍に竹野から声をかけることはしなかつた。

竹野から聞けば絶対にはぐらかさうとするからだ。

宙ぶらりんになった足で空に円を何度も描き時間を潰す。普通に生活していればまず数えないような数字まで数えたころようやく飛龍が泣くのをやめた。だからと言って口を開くことはなかつた。

竹野は大穴から足を抜き立ち上がる。そのまま砂浜に向かった。飛龍は何も言わずに竹野についてくる。

制服ではなくラフな格好に着替えていた竹野は砂浜に躊躇なく腰を降ろす。飛龍は竹野から少し離れたところに座る。

「泣いてる女がいたら抱きしめろって誰かに教わらなかつたの？」

「理由を問い詰めようとしなかっただけでも十分評価されるべき行動だ。」

女が泣いていても理由を聞くな。彼女らは同情を求める生き物だからだ。

そう、偉そうにマークがご抗弁垂れていた。

めんどくさいと思わないのか？と言いつ返せばだからお前はチエリーなんだよと煽り倒された。と、どうでもいい記憶を思い出す。

「どうせ、女なんていたことないくせに。」

言い返すことが出来ないが。

「それは関係ないだろ。お前は指揮官としての私が嫌いなだけだろ？」

とは言いつ返し話題をずらしておく。

「私は、指揮官としても人間としても、あんたが嫌い。あんたがs d 2の撤退を許さなかった時、私がどう思ったと思う？」

切り替えた話題もそれはそれで話しづらい。

「やつぱり見捨てるんだ、この裏切り者！」そう思ったと言われるのが妥当だが、そんな分かり切ったことをいちいち聞いてくるほど飛龍は女々しい艦娘ではないだろう。

「私は、助かった。」

竹野がそうつぶやく。今度は表情こそ見えなかったが飛龍が驚いていることは分かった。

「そう。だけど、なんでわかつちやうかなあ？どうして？」

竹野も確信をもってそう言ったわけじゃない。食堂から抜け出してきたこと、わざわざこちらにそれを聞いてきたこと。何となく自分ならそう感じると思ったただけだ。

「なんとなく。」

「答えになつてない！」

飛龍が噛みついてくる。同時に彼女は顔の表情がわかるくらいに近づいてきた。

「なんで泣いてるの？」

驚きの声を出したのは竹野ではなく飛龍だった。竹野はその理由

を答えることはなく

「仲間は死んだけど自分は助かった。そう思ってしまったって自分を責めてるんだろ。あらかじめ言っておくが対処法はないぞ。」

そういう。その竹野の声は震えていた。飛龍が竹野のそんな姿を見たのは初めてだった。

その時の彼の顔が彼がどういう人間か現しているように飛龍には見えた。

顔はいつも通りで何も崩れずに冷静で、ただいつもと違うのは頬に涙が伝っている事だけ。そうして必死で外に感情が漏れることを防いでいた。

彼女が思っているよりも竹野はもろい人間なのかもしれない。

そう思うと急に目の前にいる人間が小さく儂く見えてしまう。静かに姿を消してしまうかもしれない。

飛龍は竹野の過去も知らない。本当に10万人を冷徹に見捨てて、これも演技なのかもしれない。

けれど飛龍にはそうは思えない。この前見た目をそうなのだろう。彼は大勢の部下を失い、戦友も失った。その後悔に何年もむしばまれている。単細胞な飛龍は疑うことをやめていた。

そして、彼女の体は動き竹野を優しく抱きしめていた。竹野は驚いていたが拒絶することはなかった。

「逆だろ。女が泣いてる男を抱きしめてどうする。」

竹野がそう言ってくる。

「違う。これは、私たちに真実を教えないままどこかへ逃げないよう拘束してるだけ。」

飛龍は無茶苦茶な言い訳をする。

とは言っても飛龍にもほかの艦娘たちと同じように提督と言う人間に生理的嫌悪はあるわけで彼女自身が襲われることはなかったが彼女が一線を越えるまえ仲間が襲われているのを見て見ぬふりをしたこともある。

抱きしめたはいいものの飛龍は完全に硬直してしまう。

そんな飛龍をたかが人間ごときの出力で引き離せるわけもなく、

「この平均気温知ってるか？」

と竹野が間接的に暑いと言うまでそのままだった。

飛龍と竹野の間に情愛の類は一切なかった。

二人は、本来あつて当然な生存に対する本能につけられた傷を舐めあつていたに過ぎなかった。

二人はまた黙り込み食堂から搜索のために出てきた天龍達に見つかるまで静かに波の音をただ意味もなく聞いていた。

少しの平穩

天龍が提督の搜索を始めてしばらくして海岸で飛龍と竹野という殴り合いが起きそうな二人を発見したが、二人はただ海を眺めているだけで静かだった。

「提督？何してんだ？」

「お？天龍か？どうした？」

そう聞くと

「どうしたも何も宴会が終わって提督がいなかったから探しに来たんだよ。」

「どうせつぶれてる奴がいるだろ。その処理をすましといてくれ。」

と天龍に指示を出して立ち上がる。今度は飛龍は竹野の動きに合わせて立ち上がることはなくただうつろな目で何の変化もない水平線を眺めている。

「夜風に当たりすぎるなよ。」

とだけ言つて竹野はその場を去る。

ワグナーはジョッキを一気していたにも関わらず顔は少しも紅潮させることもなく執務室にいた。

「酒。強いんですね。」

と竹野が言くとワグナーは

「アルコールは入ってない。指揮官が酔いつぶれてどうするんだ。」

と不思議そうな顔で言う。言われてみれば指揮官として当然の行いなのだがワグナーのあの飲みっぷりからまさかノンアルコールの麦ジュースを飲んでいるようには見えなかった。

「作戦前に部隊を鼓舞することも大切だが、日常の中で彼女らをどれだけ過ごしやすくするかも大切なことだろ。」

「それもそうですね。」

竹野は机に積まれた報告書の束を確認しながらワグナーにそう返す。

しかし、ワグナーの方に振り返るとアルコールは入っていないようだ。だが彼はソファーに深く腰掛け少し苦しそうにしている。

「指揮に問題はなさそうですが、少しは自制しないと腹を下しますよ。」

ワグナーは少し不機嫌そうな顔で

「一方の君は栄養失調で倒れないか心配だよ。」

と真面目に心配しているそぶりを見せる。どこまでもアメリカンな男だ。

「そういえば内藤提督とマフダ提督は？」

聞くと、

「ああ。彼らは食事が終わった後すぐに島を離れたよ。彼らは俺の鎮守府と違って島嶼防衛のための鎮守府の提督だから不要な滞在は避けるように厳命されていたそうさ。司令部に宴会に参加してた事チクるなよ。」

と言つて来る。命令は大切だ。だが、今の海軍の墮落の原因であるこれ以上の士気低下につながるような機械的な命令にいちいち従つていては何も改善しない。

「今回の攻撃で父島への攻撃の可能性も硫黄島への攻撃の可能性も低下したのにどうしてお役所仕事しかできないんでしょうね。」

ワグナーも頭を振り

「さあな？」

と嘆く。

「それであなたの艦隊はいつ戻るんですか？」

「明日の昼にここを出る予定だ。何か要望があれば聞くが？」

特に要望はない。明日はこの鎮守府も最低限の哨戒と練度維持のための最低限の訓練しか実施しない予定であるしとくに問題はない。問題なしです。それまでゆっくりしていただくさい。入渠艦もそれまでに修復を終わらせれるようにしておきます。」

「大破艦だけでいいぞ。中破と小破の艦は宴会で酔いつぶれるほど元気だった。」

修理もせずに宴会に参加していたことが驚きだがこの鎮守府の入渠設備でもさすがに3000隻近い損傷艦を一晩で修復する能力はないから仕方ないのだろう。

「了解です。そのように指示を出しておきます。」

ドックに電話を掛けると、明石ではなく夕張が出た。彼女もドックにそれなりに出入りしているらしい。

「はい。夕張です！」

「竹野だ。九十九里浜鎮守府所属の大破艦を最優先で修理してくれ、うちの艦娘はのんびりでもいい。」

「了解しましたー。」

受話器を戻し再び報告書の束に目を戻し机の上に置かれた万年筆を握り確認のサインを記入していく。

「お前も休めよ。」

ワグナーはそう言う立ち上がり執務室を出ていく。

「本当にお疲れ様でした。」

とだけ声をかけると竹野はまた報告書に目を戻す。しかし、竹野は報告書の確認作業を続ける気にはならず万年筆を置く。椅子の背もたれに首をのせ天井を見上げ、目を閉じる。

「マーク、俺も連れていけ。一緒に地獄へ連れていけ。」

受け取り手のいない周波数で飛ばされた自分の言葉を思い出す。

自分がそう叫んだとき、マークは生きていたのだろうか？

何を思っていたのか。自分の乗艦していた潜水艦でも警報が鳴り響きダメージコントロールが行われていた。

竹野は潜水艦の専門家ではない。後の処理は艦長に任せ自室に戻る。

そのまま沈めばよかった。そんなことも思いながら机の上に置かれた作戦に関する資料を引き裂き床にぶちまける。床に固定された机を何度も殴り、血が出るのも構わずに殴り続けた。

「おい。提督？」

天龍が執務室に戻ると提督が椅子の上で寝ていた。

「おい。寝てんのか？」

見れば分かるが一応声をかけてみる。

胸のあたりが動いているから死んでいいるわけではないだろう。

酔いつぶれた艦娘の対処を終了したと言う報告だけだったので別に執務室に来る必要はなかったと言えはないのだが、何となくさつき飛龍と何を話していたのか気になったので聞いてみようと思ったのだがどうもだめそうだ。

天龍は竹野を起こさないように報告書の束を傍にある秘書艦の机に移し確認作業を進める。

天龍がサインをしてもその報告書が有効であると認められることはないが何となくそばにいたほうがいい気がしたのだ。天龍もまた飛龍と同じく竹野の様子が変だと気が付いていた。

早朝、竹野は目を覚まし急いでシャワーを浴び、着替えをすませる。机に突っ伏して寝ている天龍の前に積み上げられた報告書の束を処理し、執務室に備蓄していたインスタントの食品が切れていたため食堂の倉庫に向かう。

食堂の前までつくといつもと雰囲気が違うことに気が付く。中からもの音が聞こえ、どこか日本人として懐かしいにおいがする。

「あ。提督。」

厨房には竹野が予想していた通り鳳翔と間宮がいた。こちらに気が付いた鳳翔が急いでこちらに駆け寄ってくる。

「すみません。出過ぎた真似でしょうか？」

と、こちらの様子をうかがうように聞く。

「こちらからも食堂の厨房を任せようと思っていたところだ。助かるよ。」

竹野の言葉を聞くと鳳翔は安堵した様子で

「ありがとうございます。それで何かご用でしょうか？」

と聞いてくる。

「適当に食事でもとろうと思ってきたんだが…… 出来上がるのは何時頃だ？」

せっかく作ってくれたのだ。お前の分などない。と、言われはしないかと少し心配になったがそう聞いてみる。

「0630頃に出来上がります。」

と、鳳翔が言う。どうやら杞憂に終わったようでよかった。

「それなら今日から総員起こしでもかけるか。私は一度執務室に戻る。頼んだぞ。」

と竹野は言い残し再び執務室に戻る。

その前に放送設備を確かめに地下の機械室に向かう。さすがにここは鎮守府のあらゆる設備の大本でもあるためきれいに整備されており特に放送機器に問題はなさそうだった。

自動アナウンスのスイッチを入れ直し機械室を出て今度こそ執務室に戻る。

竹野が執務室に戻るとすぐに0600をまわり自動アナウンスによつて総員起こしがかかる。最初からこれにしておけば秘書艦どうこうの問題もなかったと、そんなことを思いながら寝ぼけなまこの天龍を横目にコーヒーを淹れる。

「なんで、こんなの流れてるんだ？」

と天龍が不思議そうにしている。一方で九十九里浜鎮守府の艦娘たちはアナウンスに素早く反応したよう活発に動き出す。

いずれはこうなってほしいものだと思いつつ積みあがった報告書の束を封筒に一つずつ放り込んでいく。封筒と印刷用紙の在庫だけは無駄にある。

そうこうしているうちに二十分ほどが経ちそろそろ食堂に向かった方がいい時間が近づいてきた。

アナウンスは食堂の方から間宮がかけていたので特に竹野がすることはなかった。

朝食はみそ汁に、白米、それに魚の塩焼きと戦争が始まる前にはよく見かけた日本の食卓が再現されていた。鎮守府ではさして珍しいものでもない魚も漁場が危険であるため漁船を装甲でできる特殊な会社しか漁業を営めていないため戦争前よりもよく油の乗ったいい魚が取れるようになっていくらしい。

切り身になった魚の種類を判断することはできないが少なくとも、さばではない魚にさば以上の脂がのっていることは竹野にもわかつ

た。

向かいに座っているワグナーも箸を器用に使って朝食を食べていた。

満足感のある朝食を食べると九十九里浜鎮守府が器材の引き上げを始めたのでそれを手伝い、報告書の入った封筒の束を引き渡して彼らを見送る。中型の軍艦を取り囲むようにして陣形をくみ彼らは去っていた。

竹野は帽子を回して彼らを見送りまた通常の業務に戻る。

それから一週間がたっても竹野は自分の過去を話そうとはしなかった。

当然、そんなことをすればこの鎮守府では誰かが乗り込んでくるわけで我慢の限界が来た艦娘たちが乗り込んできた。

「提督。あなたが約束を破ろうとしているとは思っていないが、私達にもそろそろ話してくれないか？」

長門がそう言ってくる。

「そろそろ誰かは来るだろうと思っていた。飛龍あたりが来ると思つてたんだが。」

「飛龍がまだ来てないのか？」

長門は少し驚いた様子だった。あの夜のことを考えればおかしな話ではないのだがそれを知っているのは飛龍と竹野だけだ。

「わかった。何が起きたのか話そう。だがいいんだな。これを聞けば軍にも、私と言う指揮官にも落胆するかもしれないぞ。」

「少なくとも、私たちはあなたの指揮を一度見ている。よほどのことがない限り落胆はしない。」

長門は自信満々に言うがそのよほどのことが起きないとあの悲劇は起こりえなかったのだが。

「なら、今日の夜全員を食堂に集めてくれ。」

「任せておけ。」

「いよいよ、目をつぶってきた過去の傷を抉り出し膿を出さねばならない時が来た。」

嫌でもフラッシュバックしてくる悪夢の日を自分の意志でより鮮明に思い出すことは彼にとって多大な苦痛だがそれをやらねばならない。

崩壊の兆し

竹野が食堂に着くと大勢の艦娘がすでに集まっていた。

「それで、何から話す？」

長門に案内され食堂のひときわ目立つ席に案内される。昔、士官学校の入学式で前に立ち候補生たちに向けて演説したのを思い出す。

あの時と決定的に違うのは、自分のしゃべりが不幸を招くことがわかっていくかどうかだ。

「何から喋ってくれても構わない。」

長門はそういうが話はそう単純じゃない。

「ほんとに聞くのか？」

「くどいぞ。」

竹野の最終確認は長門にバツサリと切られる。

「わかった……。みんなはすでに知っているかもしれないが竹野と言う名前は偽名だ。私の本当に名前は村上傑だ。」

竹野は決心したようにしゃべり始める。

四年前 横須賀旧米海軍病院

「新しい作戦だよ。」

村上是病院のベットに横になっているマークに封筒を投げつける。

「けが人には気を使え！」

マークがわめいているがそんなことは知ったこっちゃない。

艦娘のすぐそばで指導していたところ、不注意で51センチ砲の衝撃波で吹き飛ばされた男に何故こちらが気を使わねばらないのか？

「まだ前線には復帰できないぞ。」

「主治医に確認を取った。作戦は2週間後だ。リハビリもどうせ受けないだろ？」

「君の目には一体わたしがどう映ってるんだ。」

どう映っているかと言われれば艦娘並みの回復能力を持つ化け物だろうか？

何にせよ今回の作戦に必要なだから呼びに来たのだ。

「準備しとけ。数日後にだれか迎えによこす。」

マークの目に恐怖が浮かび

「霞だけはやめてくれよ。」

と言う。一体何をされたのか。

迎えにはマークの秘書官であるライミスを行かせようとしていたがやはり霞にした方がよさそうだ。

「覚えてれば。」

と返すと、とてもけが人とは思えない程わめくマークを病室に置いたまま病院を出る。

エレベータのボタンを押し待っていると、会いたくもない男に出会う。

「戦う事しか脳がないから病院のお世話にならなけりやいけないんですよ。」

そう話しかけてくる。

「そちらさんが数字だけ見て適当に部隊を配置してくださいのおかげで現場では暇な時間ありませんよ。やりがいのある仕事をどうもありがとうございます。」

男には適当に皮肉を混ぜて返す。

男は広域戦略課でなぜか村上や実際の戦闘を行っている艦娘や指揮官たちを嫌悪している。

戦略課の人間は大体そうだと言ってしまえばおしまいなのだが、それでもこの男は嫌いな人間にわざわざ話しかけてくるという点でほかの追隨を許さない面倒な男だ。

「それはどういたしました。能力の低い現場の馬鹿では処理しきれないようですね。木を見て森を見ずとでも言いましょうか。現場らしい安直な意見をどうもありがとうございます。」

その後はエレベータを降りるまで二人は言葉を交わさなかった。

用事もないのに話しかけこちらの気分だけを不快にすると言う全く無意味な行動をとる人間のどこが優秀なのか。

「また、顔がゆがんでるぞ。」

病院の外に出るとすでに部下が車を回していた。中には中越が乗っておりそう言ってくる。

「いつもの奴です。」

「そうか。」

村上が車に乗り込むまで待つてから

「出してくれ。」

中越は車のドアを閉め車を出すように言う。

車が走りだすと横に座っていた中越が話しかけてくる。

「君はニュージールランド海軍の話聞いたか？」

恐らくは二日前のニュージールランド北島撤退戦で事実上壊滅したニュージールランド海軍の事だろう。

その件について何か話があるからここまで来たのだろう。

「ええ。壊滅したそうで。警告はしたんでしよう？」

中越は頷く。

「当然警告はした。船を使えば殺されると。でもあの国は島国だ。北島の空港で艦砲射撃を受けなかったのは内陸部のロトルア空港だけ。そこから避難する人数には限界があった。だから海軍を動員したらしいが今頃は難民と共に海の底だ。」

「支援は？」

「オーストラリアから広域駐屯隊の2700名が支援に向かったが敵兵力が30万以上確認されたため撤退した。」

つまりニュージールランド南島と北島は孤立。脱出に動員できる兵力もない。という事だ。

「取り残されたのは？」

「両島合わせて370万人。半数以上が逃げ遅れてる。」

国連軍の権限は日に日に強化されているものアメリカと言う巨大な後ろ盾を失っているためその権限に果たして効力があるのかは不透明だ。

国連軍は特殊な兵力として艦娘の管理を任されているが多くの軍艦は未だにその国の迷惑のために使用されていた。国連軍は避難に向いている部隊ではないはずだ。

「オーストラリアには中国系の人間が多いことを使って何とか中国海軍を引っ張り出せませんか？」

と聞いてみるが中越は首を縦に振らない。

「あの国は今それどころじゃない。民主化のクーデタに一人っ子政策のあおりを受けて超々高齢化社会に悩まされてる。そんな余裕はないだろう。」

日本とフィリピンと言う防波堤を持つ中国にとって深海棲艦の脅威はそこまで差し迫ったものではないのだろう。

そんなことより内戦寸前の国内を安定化させることにリソースを割きたいというのがあの国の本音だろう。

「それなら英国海軍はあてになりませんか？同君連合でしょう？」

英国のやり方に今さら期待などしていかないが聞いてみる。

「女王陛下からの激励はあったがさすがに地球を半周するのは厳しいらしい。」

英国海軍は半年前に横須賀を出港して以来アジア太平洋地域には展開されていない。

「一方でドイツ海軍は積極的に支援を申し出てるがドイツ海軍でどうにかなるほど避難民は少くない。」

姿勢は評価すべきだがドイツの海軍では不十分だろう。

「気が滅入りそうですよね。仮に避難用の船が用意できたとしても避難の護衛には誰がつくんです。」

村上は面倒ごとが自分の同意がない場所で進行している予感があった。

「もしや……。」

「察しがよくて助かるよ。ただ、私の第一艦隊を使って船団護衛をするなんて弱腰なこととはさせない。」

「ならば敵殲滅が目標ですか？」

殲滅と言っても現時点で30万近い兵力叩き潰す必要がある。それに北島の陥落により防衛線は後退しておりさらなる兵力の増強が容易に予想できる。

「出撃するとしても正攻法の殴り合いでは勝てませんよ。」

「言われなくても分かっている。航空支援も支援砲撃も実行させる。そのうえであとは君たちに任せる。なんとかしてくれ。」

無理難題は慣れている。2倍程度の兵力差で戦わされたこともある。

今さら驚きもしない。

「それは了解しましたが、それなら二週間後の第4次シアトル奪還作戦には我々は参加しないということですか？」

米陸軍との合同作戦が予定されていたがそれはどうするのか？

「連邦政府もワシントン州政府も今回で終わらせたいらしい。作戦に私たちは参加しないが第三艦隊第12支援群が参加する予定だ。」

敵のシアトル駐屯部隊の殲滅は諦めて目標であるシアトル奪還を優先するという事だろう。

長期的な目で見れば得策とは言えないだろうが政府の威厳と陸軍の準備などもある。そう簡単に中止するわけにはいかないのだろう。

「それで出撃はいつです。」

車は国連海軍横須賀基地の敷地に入り速度を下げ始めた。

「可及的速やかにお願いしたい。」

いつでもいいということなのだろう。

「わかりました。第一、第二攻撃群は二週間以内にシドニーに入港します。」

中越は頷いて

「了解だ。第三、第四、第五打撃群にも移動を命令しておく。二週間後シドニーで会おう。」

そう言う中越は目で運転手に合図してドアを開けさせる。

「それでは。」

村上は車を降りて第一艦隊宿舎に入る。

「お疲れ様です。送迎付とはいい御身分ですね。」

かなりとげのある言い方で霧島が話しかけてくる。

「俺の送迎じゃなくて、艦隊長様のお車であらせられる。」

「それ使い方間違ってますよ。それはいいとして作戦中止とはいったいどういうつもりですか？」

かなり伝達が速いものだ。村上もついさつき聞いた話がすでに伝達されているということは中越はそれなりの長時間車で待たされていたのかもしれない。

「ついでに言うのと二週間以内にシドニーに入港しなければいけない。まあ、シアトルに行くよりは楽だろ。」

極寒のアラスカを経由しないでいいのだから随分ましになっただろう。

「はあ。わかりました。伝達……ですよね。」

「よろしく頼むぞ。」

霧島に伝達を頼み、村上は第一攻撃群旗艦アシユベータに向かう。棧橋から伸びる板を渡りアシユベータの上に立ち梯子を駆け下りる。

「艦長！シドニーまでの航行計画を作成してくれ。今日、第四次シアトル奪還作戦に我々が参加するのが中止されたのは知っているだろう。代わりにニュージールランド北島からの避難を安全に行うため敵の部隊を殲滅する。」

それを通達すると潜水艦の水兵たちはせわしなく動き始め、指揮官たちは何も言わず会議室に集まる。

「それで少将。具体的な敵兵力はどの程度でしようか？」

部下がそう聞いてくるが村上にしても今持っている情報は限られており具体的な戦力はこつちも教えてほしいぐらいだった。

「最低30万。だがそれより確実に多い。とだけしかわからない。」

「いつも通り火力の集中運用でとつと戦力差を埋めるのが得策でしょうね。」

部下の一人がそう言う。確かにそれがこの戦争がはじまり艦娘が登場した後のもつとも典型的な戦い方だ。

だが今回はそううまくいかない気がしていた。情報が錯綜していることもあり信頼できる情報では30万の兵力だがニュージールランド空軍は敵兵力は130万と主張している。

それが事実であるなら第一艦隊25万の兵力で戦うのはなかなか厳しい。

「なるべく早く出港準備だけ整えるように。移動の間に作戦は練る。」

と指示して村上は無線を取り第二攻撃群にも同様の指示を出しておく。主治医の話では一週間もすれば退院できると言っていたが作戦の話聞けばどうせ明日にでもあの男は退院するだろう。

村上は艦隊の準備を整えマークを待つことにした。

アメリカの威信

村上の予想通り、マークはすぐに退院した。主治医も彼と言う人間をよく知っているため特に止めようともしなかった。

「マーク。出撃用意は整えてるはずだ。戦域の情報についてはまだ上がってきてない。第一攻撃群旗艦アシユベータ出撃。」

村上の命令に呼応して艦長が

「レッコー！両舷半速後進用意。タンクブローも確認しとけ。」

と手ばやに指示を出す。

「マークだ。先に出させてもらうぞ。」

第二攻撃群の旗艦のほうが防波堤の近くに配置されており先に離岸したはずのアシユベータよりも早く港を出る。

続いてアシユベータも港を離れ速度を上げる。

「リングアップエンジン！」

艦長の指示が飛んだあと村上も指示を飛ばす。

「今回の航行ルートはおおむね安全化されている。グアムまでは複縦陣で航行する。その後警戒陣にてソロモン諸島に侵入。その後ブリスベンでオーストラリア海軍とニュージールランド海軍残党と合流する。またすでに米海兵隊と米空軍はシドニーにて待機している。飛ばせ。なるべく早く入港する。」

二週間以内にシドニー入港と言うのは従来の潜水艦では無茶な日程だが、アシユベータは後がなくなった米海軍の全面的な支援を受けた国連軍が作り上げた超攻撃型の潜水艦だ。静穏性など無視し、水上艦からの砲撃を受けないためだけに潜水能力を付与された潜水艦だった。

当然速度は無茶苦茶で原子炉をぶん回し潜航すれば49ノットでの巡行が可能だった。

ただ残念なことにそこまで出せば艦娘が付いてこれなくなる事があるため現実的にはそこまでの速度は出せないのだが。

「少将！偵察情報が入りました。」

指示を出し終えた村上のもとに部下が駆け寄り報告してくる。

「わかったすぐ向かう。準備しといてくれ。艦長。後は頼みます。」
そうして発令所を出る。

梯子を滑り降りて自室から鞆を持ち出し会議室に向かう。

会議室に入るなり部下の一人がスクリーンを天井からおろし電気を消す。

「10分ほど前に入った情報ですが敵の兵力がニュージーランド空軍の報告通り100万を超える大部隊であると判明しました。」

スクリーンには高高度偵察機によって撮影された写真が映し出される。数える気にはならないが少なくとも30万では収まらないだろう。

「さらに敵部隊は北上中でありファイジーやバナアツに避難指示が発令されました。また、敵部隊には一定の統率が取られていることからそれなりの知性がある上位個体による戦略的な部隊移動とみられ攻撃目標はグアムである可能性が浮上してきました。」

仮にグアムが落ちればオーストラリアやニュージーランドへ、インドシナ経由でいくことになる。移動に時間がかかること以外にも防衛圏の縮小も免れないだろう。

「敵の移動速度は？」

「一日で270キロ程度移動していると思われます。」

となるとグアムでの補給なしでブリスベンに入港しようと思っても厳しいだろう。

途中で敵と鉢合わせ燃料の少ない状態での戦闘を行わざるを得ない。

珊瑚海かソロモン海が主戦場になる可能性が高い。敵の兵力とこちらの兵力を考えると珊瑚海での裸での殴り合いは避けるべきだ。

ソロモン海で敵を待つのが最適だろう。

「ポートモレスビーで待機中の米海軍航空隊に機雷敷設を依頼してくれ。」

正直な話機雷で深海棲艦が沈むことはまれだが艦娘に機雷を攻撃させ間接的に攻撃することはできる。それに人類も馬鹿ではない。機雷の中には濃硫酸を詰めたものやそこから中に高速で鉄片をまき散

らす対深海棲艦のものも用意されている。

「了解しました。」

連絡要員の一人が退室したあと報告が再開される。

「敵の移動が確認されたことで我々への命令も更新されました。敵の殲滅から敵部隊のグアム侵攻を阻止するための時間稼ぎが目標になりました。なるべく損害を避けながら第二、第三艦隊の到着を待ち、その後反転攻勢を仕掛け、一気に敵の大部隊を葬ることが最終目標です。」

時間を稼ぐだけとはいっても稼ぐ時間と、投入できる支援の量で大きく結果は変わってくる。

幸いソロモン海で戦闘するのなら日米豪の支援もかなり期待できる。

「日米豪の各軍に支援をどこまでできるか聞いておけ。それと司令部にどの艦隊がいつまでに到着できるか聞き出せ。」

士官たちは村上の指示で動き出す。村上も会議室を出て通信室に向かう。

通信室の映像通信設備でマークを呼び出す。

「どうした村上?」

「聞いていると思うが命令が変わった。」

マークは頷いて

「ああ。聞いている。ちょうどよかった。そのことで少し話したいことがある。」

村上はただ情報を共有しようと思ったただけだがマークにはほかにも要件があるようだ。

「なんだ?」

「これを見てくれるか。」

マークから何かのファイルが送られてくる。内容は、

「アイスランド陥落?」

「そうだ。司令部は俺たちにもこの情報を出すのを渋っていたそうだが、知人がこれを送ってくれた。」

村上は急いでファイルに目を通す。

だが、それは間違いなく大敗北の記録でしかなかった。国連軍の支援を受けずに真正面から深海棲艦と撃ち合ったロイヤル・ネイビーは事実上消滅し、先日フランス海軍がビスケー湾で壊滅したこともありヨーロッパはまともな海軍戦力を失ったことになる。

大西洋では米軍が大急ぎで第二艦隊に予備兵力を投入して空母打撃群を組織しており依然として人類側は大西洋の完全な制海権掌握を許してはいないが第二艦隊の優先事項はアメリカ東海岸の防衛でありヨーロッパの海岸を守ることはない。

アメリカはすでに空母8隻を損失、第七艦隊に至っては全艦喪失というとんでもない事態が発生しており、その影響もありヨーロッパに展開していた第六艦隊は解体されほかの艦隊に再配備されている。

「これは、だいぶまずいことになってきたんじゃないのか？」

「戦略課の連中が言っていた通りヨーロッパ方面軍が新設されこちらの兵力が減らされる恐れもあるな。」

非常にまずい事態であるのはそうなんだが一体今回の作戦にどう関係があるのか？

マークは基本的に作戦に関係ない話を伝えるために連絡してくることはない。今回は村上から通信を開始したが、恐らくそうでなくてもマークは連絡してきただろう。

「これが今回の作戦とどう関係がある？」

聞くと

「今の国連艦隊司令長官が誰か知ってるか。」

「ノーマン・デ・ローネンス。彼がどうかしたのか？」

確か、フランス人だった……

「彼はフランス海軍壊滅後から頻繁に国際電話でフランスにいる誰かと会話している。」

フランスにいる誰か。それが誰かは分からないが、目的だけはわかる。

「欧州への正式な派兵か……。何とか止めれないか？アイスランドが制圧されたとしても深海棲艦たちの進行速度は遅い。こっちの作戦が終わるまで派兵を待つように頼めないのか？」

マークにそう言うと、

「欧州の世論が納得すると思うか？目の前に現れた敵はすぐに攻めてこないから増援は待つてね。と、でも言うのか？」

と、もつともな意見が返ってくる。

どうせ大西洋には攻めてこないと思ってるくに深海棲艦のことを知らない世論を納得させるよりとつとと派兵して分担金を払わせたと言う事なのだろう。

つまり、政治的な理由で想定よりもこちらの兵力が減るということだ。

インド洋で活動中の第三艦隊あたりはこちらにこれないかもしれない。

「司令部もいい加減にしてほしいな。」

「まあ愚痴を言つて今さら変わる組織じゃない。なんせ国連と言う元アメリカ傀儡政権が強化されただけの組織だ。」

分担金を多く払う国にすくなびく組織だ。期待するのが間違いだ。「俺たちは軍人。政治とは切り離されていけないといけない。愚痴はここまででどうする？」

マークが素晴らしい村上は考えを巡らせる。

「数的不利があまり大きすぎる。この数的不利ならゲリラ戦が一番。ただ海上でゲリラ戦は厳しいな。」

海上でのゲリラ戦の前例がないわけではない。

アンダマン海西岸で村上の指揮のもと実際に海上版ゲリラ戦が展開されたこともある。

ただ、アンダマン海西岸はリアス式海岸であった上にただの駐屯部隊だったから長時間かけて制圧できただけであり、広大な海で、さらに敵の圧倒的な大部隊の移動を止めるのはゲリラ戦では無理だ。

「敵を誘導してこちらのキルゾーンに誘い込む。島も多いしできないこともないか？」

マークはそう聞いてくる。ゲリラ戦と比べれば大部隊を計画的に運用してそれなりの効果は見込めるが敵は100万を超える大部隊で釣り上げる部隊を間違えれば兵力を分散して運用しているこちら

が壊滅する危険性が高い。

それに敵の部隊数が多すぎてこちらが処理しきれなくなる可能性が高い。

「それにしても兵力差があまりに大きすぎる。ちまちま処理してる間に伏兵が待機してる場所にほかの部隊が到着して壊滅させられる未来が見える。」

いかなる戦術を用いてもあまりにも大きすぎる戦力差を打開する方法が見つからない。

防衛なら別だがこちらは戦力差があるにも関わらず敵の侵攻を止め少しの増援で殲滅までしろというのだ。

歴史を見てもこんな無茶苦茶な命令の前例などない。

13倍の敵を引き止め、6.5倍の敵を殲滅しろというのだ。わかりやすい無茶だ。

負けが見えている。

「低速戦艦に大量の武装でもものつけて固定砲台化させるか？」

とマークが冗談を飛ばす。

今から珊瑚海を取り囲むように堤防でも作るか？元気なアメリカなら本気で言い出しそうだ。

元気な……アメリカ？

「マーク。いま米空軍の兵力はどの程度なんだ？」

「空軍か？またどうしてそんな？」

アメリカは西海岸を失った後急速に軍拡を進めている。内陸部の工場で戦車と大量の航空機を作り、東海岸の造船所で二度目の週刊空母を始めようとしている。

「あんまり知らないが、とんでもない数を持つてると思うが？」

予想通りだ。

「マーク。こんなのはどうかだ。」

「何か思いついたか？」

村上は不敵な笑みを浮かべる。大体いつもこうだ。どちらかがいい案を思いつけば不敵な笑みを浮かべその笑みを見たもう一方はわざわざ思いついたのかと強調して質問する。

「まず艦娘たちで敵を誘い出す。そしてこちらの都合のいい場所に誘い込む。」

「それは、俺が言ったやつだぞ。」

マークは少し不機嫌そうにする。

「伏兵はおかない。誘導する部隊の動きに合わせて空母と戦艦を移動させ島の裏側から射撃する。」

「だとしても火力が足りないだろ。」

マークはまだ反論する。

「さっきの質問が無関係だと思うのか？」

ようやくマークは気が付いたようだ。

「誘導した場所に、大量の爆弾と人類がもつ最新の水上艦による精密な射撃をお見舞いする。」

「レーダーで捕捉できなくても関係ないということだな。」

「そう言う事だ。」

人間が深海棲艦に有効な攻撃手段を持たなかった理由の一つに深海棲艦があまりにも小さすぎたことがあげられる。

もちろん、対ドローンなどの小型目標に攻撃する手段は持っていたが、近接信管で爆発した砲弾の破片や機銃の火力でどうにかなる程深海棲艦はもろくなかった。

結果高性能なレーダーを積む水上艦はただの巨大で遅い的と化したのだ。高い誘導性を持つ対艦ミサイルも深海棲艦が横に水平移動すれば追尾不能になる。

あまりに小さな目標が強大な火力を持っていたのだ。

今までの戦術は全て無効化されてしまったと言っている。

ただ、さすがに深海棲艦も爆弾の直撃を受けて無事に済むわけではない。

「爆弾と砲弾の雨を降らせてやろうじゃないか。見せてもらおうか。昔、日本が苦しめられた米帝プレイを。深海棲艦から攻撃不能な高高度から爆弾を、深海棲艦では補足できない水平線の向こうから大量の砲弾を降らせてやろう。」

速やかに米空軍と日米豪の艦隊に連絡が行われソロモン諸島から

112キロのラインに誘導可能な砲弾の運用能力を持つ艦が配備され21キロのラインに旧型艦が配備された。旧型艦は敵空母の攻撃にさらされる可能性が捨てきれないが仕方ない。

誘導には航空自衛隊が早期警戒管制機を5機展開することになった。ついでに爆撃機の交通整理も実施するそうだった。

本命の米空軍はポートモレスビーとシドニー、マニラ、シンガポール、クアラルンプール、ニューデリーの航空隊を一挙に集中させ攻撃すると言ってきた。

さらに本土で新設されたばかりの航空隊も呼び出し4500機でローテーションを組み爆撃するらしい。

米国の深海棲艦に対する憎悪がとんでもないことは分かったがさすがに恐ろしすぎる。

130万に対して少し少ないと思うかもしれないが深海棲艦が迎撃能力を持たないのいいことに、ステルスも迎撃機への対策も防弾装備も捨てた対深海棲艦のためだけの爆撃機の爆弾搭載能力は146トンもあるそうだった。

爆弾と艦砲射撃の上に低速の艦娘の島を挟んだ死角からの射撃に空母艦載機による攻撃もある。火力不足には陥ることも、継戦能力を失うこともないだろう。

心配するのは艦娘たちの体力が持つかだ。

ただ、今回の作戦では人間が大量の機雷を敷設して敵の移動を抑制する一方でこちらは安全地帯を知っているため艦娘たちの危険も若干軽減できる。

「作戦はこんなものでいいだろ。後は俺たちの指揮にかかっている。司令部への連絡はこつちでしておく。頼んだぞマーク。通信終了。」

映像通信を終わり部下に作戦概要をまとめて司令部に送るように指示を出す。米空軍などにはいちいち司令部を経由すると長くなりそうだったから直接連絡しておいたが第二艦隊に作戦を説明する暇はさすがにない。

流石にそれぐらいはしてくれてもいいだろう。

連絡を済ませた村上是気を引き締めなおし戦闘指揮所に向かった。

鉄底海峡

「というわけで、君たちには爆撃機が大量に飛び交い後ろを振り返ればすべてが吹き飛ぶという状況の中で戦場で走り回ってもらうことになる。」

村上の作戦説明を艦娘たちは何も言わず聞いている。

かなり突拍子もない作戦だが彼女らも司令部の無茶苦茶な命令をどうにかして完遂しようとして村上たちが出してくる無茶苦茶な作戦で何度も難局を乗り越えてきた。

「また突拍子もない作戦だな。まあいい。任せておけ。」

と木曾が頼もしいことを言う。

作戦はいかにしてタイミングを合わせるかにかかっている。艦娘たちが爆撃地点を脱したうえで敵が全て攻撃範囲内にいる僅かなタイミングを計り爆弾を投下し艦砲を射撃しなければいけない。

流星に新しい爆撃機にも垂直飛行性能はなく爆撃機が攻撃をできるタイミングも限られており同時着弾を行うのは困難を極める。

ただ、空母と戦艦による艦娘の第二波攻撃も行えるため最悪少数の敵が残っても速やかに殲滅できる。

そのため、ある程度大雑把な攻撃でも問題ないのが唯一の救いだ。「それと、おとり役の高速戦艦、重巡、軽巡、駆逐はグアムの工廠で一部武装を改良型のタービンにでも換装しておくように。グアム鎮守府に話は通してある。」

なるべく高速化して、被害を最小限に抑えなければいけない。

司令部がどう思うっているのか知らないが、もとより高練度の艦娘しかない第一攻撃群は艦娘が一人沈む代償に敵を2万程度沈めないと、わりに合わない村上は個人的には思っていた。

言ってみれば、普通の艦隊が歩兵だとすれば、第一攻撃群は精鋭の機甲旅団のようなものだった。

最新装備と大量の実弾による訓練、数多くの実戦経験と、経験豊富な将校団により組織されている。

例えば村上が指揮官でなかったとしても数多くの華々しい戦果を挙

げることには容易だっただろう。

「了解しました。私たちの高速化は不要だということですね。」

「そうだ。敵が艦載機を上げる前に沈める。空母の高速化も、低速戦艦の高速化も不要だ。戦艦はひたすらに火力を優先しろ。空母も火力を優先してくれ。ただ、最低限の艦戦は積んでおけ。今回の作戦は艦娘の艦隊の支援は期待できない。ただ、ソロモン諸島の一部に米軍が対空陣地を形成してる。恐らくこちら側の爆撃で使用不能になることが予想できるが初期の防空はあまり気にしなくてもいいかもしれない。」

C I W Sは依然として深海棲艦の艦載機には有効だ。

よく動くドローンが異様に高い火力を持っているに過ぎないというのが米軍の評価だ。そのため敵が空母だけなら人間でも無力化が可能だとする意見もある。

もちろん敵がそんな編成で攻撃しないうえに深海棲艦本体に対する有効な攻撃手段を持っていない人類は本当に無力化までしかできないのだが。

「わかりました。」

「長期戦になる。爆弾も砲弾も計算上は十分すぎる量が準備されている。後はお前たちが誘導を続けられるかに、かかっている。気張っている。」

無線を切りアシユベータは最終調整に入っていた。A W A C Sとの優先通信チャンネルを開き、大量の駆逐艦の攻撃システム同期させアシユベータのイージスシステムベース12に接続してできる限り正確な爆撃を試みる。

ただ一つ問題があり、イージスシステムを完全な形で機能させるにはアシユベータが戦闘海域で待機する必要がある。潜行して小型のブイを上げれば水上にいる必要はないため安全ではあるのだがソロモン海は浅瀬も多く安全性を確保できるのか疑問だ。

流星の米軍も短期間でイージスシステムをソロモン諸島に配備するのは不可能だった。

ある程度の危険を伴うが実行しなければグアムが落ちてアシユ

ベータを損失するよりもはるかに被害は大きい。

最悪この潜水艦が沈没しても問題ない。浅瀬であるなら十分脱出も可能だ。

「艦長。こいつはもしかしたらここでお別れになるかもしれないな。」

「群団長。さすがにそれは司令部から締められますよ。」

艦長は苦笑いしている。この潜水艦がいくらするのか考えたくもない。

とにかく今は米軍と迎撃に一番だと考えられる海域を探すべきだと作業を再開したところに米軍からの連絡が入る。

こともあろうに米軍が指定してきたのはガダルカナル島とフロリダ諸島の間だった。

比較的水深が浅く爆弾が直撃せずともそれなりの効果が見込めること、間にはサボ島があり対空陣地の形成がしやすいこと島の間隔が他より小さく機雷敷設による海域の封鎖が比較的容易であること。

理由は様々だが……。

「艦長。グアム出港後進路をガダルカナルに向けてくれ。」

「何と言いますか……やはり米軍は合理主義者の集まりですね。」

過去や伝統に縛られず、最適であると考えられる場所で戦う。

それがたとえ昔日本とアメリカが散々殺しあつた鉄底海峡。アイアンボトム・サウンドであつてもだ。

「まあいいさ。彼らがそこだというなら俺たちには決定権はない。」

米軍の協力なしでこの作戦は成功し得ない。彼らにとつても今回の作戦はアメリカ軍の威信にかけて成功させなければならぬのだ。半端な気持ちである場所を選んだわけではないだろう。

ならばすべきことはただ一つだ。

グアムに入港した第一、第二攻撃群は装備換装を開始、比較的早く換装を完了した低速戦艦及び空母はいびつな警戒陣を形成しアシユベータを守るようにして出発した。

その後しばらくして、換装を終えた高速のおとり部隊が第二攻撃群旗艦アイラーヴァタとともに出港。

49ノットの快足を生かして20時間以上早く出発していた低速戦艦と合流。

しかし、迎撃準備を支援するため、アイラーヴアタとおとり部隊はアシユベータのもとを離れて先行してソロモン海に侵入した。

偵察情報によれば敵のグアム攻撃はほぼ間違いないとみられており、ソロモン海に敵を誘導するまでもなく敵が侵入してくると報告を受けた。

敵部隊は高高度偵察機7機と軍事衛星2基に追跡されており情報における完全な優勢を確保していた。

「群団長。アイラーヴアタ艦長から入電です。」

「読み上げろ。」

村上は一度作業中断して通信員の言葉に耳を傾ける。

「アイラーヴアタはレーダーブイを展開しフロリダ諸島北岸の浅瀬にて待機中。アシユベータは安全区域で予備のレーダーとして待機されたし。」

フロリダ諸島北岸は爆撃区域に含まれていないが安全かと言われれば少し疑問が残る。

浅瀬で待機しているということは恐らく至近弾でもそれなりに損害を被るかもしれない。

「了解した。艦長に適当な潜伏ポイントを見繕うように言つてそこで待機すると連絡を入れておいてくれ。」

ただどちらか片方がやらねば作戦は実行できない。

「それと艦長に居住区の空気がどれくらいあるか調べるように言つてくれ。もしかしたらアイラーヴアタの士官をこつちに移すかもしれない。」

最悪潜水艦はくれてやるが経験豊富な指揮官を失うのはさすがに看過できない。

「了解しました。」

通信員は駆け足で村上の部屋を出ていく。

あと12時間でアシユベータも戦闘海域に到着する。

敵が珊瑚海を抜けてくるまではあと二日。決戦の時は刻一刻と

迫ってきている。

慢心はしない。というかそんなことをしていただけるような戦力差ではない。

あらゆる可能性を頭の中でシミュレーションしながら村上は床につく。

しかし……村上の知り得ない脅威が存在していた。情報のない彼がそれを予想することは不可能に近かったのだが。

アシユベータと到着した戦艦および空母は詳しい測量と実地での訓練を開始した。

装備の換装はむつかしいが米軍が設置した補給ハブのおかげでかなり補給状況がよかった。戦闘が始まれば撤退するらしいが多数の強襲揚陸艦や護衛艦が測量や対空陣地の設置を行っており早ければ明日一日をすべて訓練に回せる可能性すら出ていた。村上とマークは一時下船してガダルカナル島の日米豪合同陣地に向かった。その間アシユベータとアイラーヴァタは再度潜伏ポイントを探し始めた。

「第三護衛隊群の軒下です。今回はよろしく頼みます。」

「アメリカ空軍第32爆撃隊のポール・スチュアートだ。今回はよろしく。」

「オーストラリア海軍元帥のワッカートニーです。ニューギランド空軍残党も参加しています。彼らの士気は非常に高い。きたいしてください。」

アメリカ海軍関係者と航空自衛隊関係者がしゃべりたそうにしてるが一国で代表一人であきらめてもらう。

挨拶もそこに機雷の配置や爆撃ポイントなどが確認する。

座標を指定すればどこにでもある程度は誘導可能らしいが爆撃機の飛行ルートなどからそれすぎるとかなり雑な爆撃になってしまう。

艦娘の各隊旗艦にレーザー誘導装置を持たせ、指揮官はなるべくあらかじめ決められた爆撃ポイントに誘導するように指示を出す。そうすればある程度爆弾の浪費を防げるだろう。

「それで、対空陣地の放棄はどのタイミングですか？」

村上が聞くと米陸軍の制服を着た女性が答える。

「機能を停止したタイミングで放棄します。作戦開始前に同士討ちが起きないように地上の人員は退避します。ですから球を打ち切るか、何かの攻撃で破壊されるまでは機能します。ですので詳しいタイミングは予想できません。」

「わかりました。」

敵をどれだけバラバラに誘導できるかにもよるがAWACSも展開している。それなりに防空網は信用できそうだ。

「よし。また作戦について疑問点があれば質問してくれ。部隊の呼称についてだがこっちの士官がイージスに攻撃目標を指定させる。そこに攻撃してくれ。ぶっちゃけ人間が整理できる部隊数を明らかに上回る部隊が展開されることになる。機械頼みでよろしく頼む。」

マークが話をまとめる。艦娘だけで10万、爆撃部隊の数は400は固いだろう。参加している艦艇は68隻。これを人力で射撃管制するのは無理だ。

艦娘の部隊数は誘導部隊が24部隊、火力を調整するために攻撃部隊はさらに細分化され62部隊にまで膨れ上がっていた。

一方で米軍が敷設した機雷は4万個で二千平方キロメートルという限られた海域に敷設された量としては異常と言えるだろう。

安全なエリアを知らない敵はうかつに行動できないだろう。

「ひとまず作戦会議？は終了しますがまた何かあったら無線でお願いします。」

マークと村上はそれぞれの水上機に乗りそれぞれの船に戻る。

いよいよ作戦が開始される。

第一攻撃群の栄光

作戦は轟音とともに始まった。

珊瑚海からソロモン海を通りビスマルク諸島に進路をとり始めていた敵部隊に水雷戦隊が攻撃を開始した。

上位個体であればある程度罠を警戒したりする習性がある。一方で人間と同じく慢心もする。

敵からは少数でおおいそぎで逃げていくこちらの部隊は獲物にしか見えなかったのだろう。

すぐに敵は食いついてきた。ただ、裸の状態でもそれなりの速力を持つ艦娘にさらなる高速化処置をしているのだ。

接近を許さないどころかある程度速力をセーブしないと敵がこちらを見失う可能性すらあった。

「よし。そのままマキラ島とガダルカナル島の間で誘導しろ。AWA CS爆撃用意を頼む。爆撃エリアは計画通りA1。艦砲射撃、全自動に設定、同時着弾を狙い順次発射せよ。」

そう命令してからしばらくすると

「誘導完了まで残り3分。」

と、指揮官がコールする。そろそろ艦砲の射撃が開始されることだろう。

「一発目は大きくいくぞ。艦砲は5発連続発射してくれ。機雷、遠隔爆破の用意。」

第一陣の機雷だけ遠隔爆破機能を持つ化学機雷であり、かなりの効果が得られるだろう。この際海洋汚染など無視だ。

「第一ライン艦砲射撃を開始しました。」

CICでは複数の報告が飛び交い、そのタイミングに合わせた艦娘の誘導が行われる。

弾着のタイミングと艦娘の動きをうまくコントロールする。

一日余分な時間が出来て測量にかなりの時間を割けたこともありかなり正確なタイミングで攻撃できそうだ。

「爆撃隊戦術爆撃を開始！」

「第二ライン艦砲射撃開始しました。」

「誘導終了まで残り30秒。」

「全弾同時着弾時間は36秒後。」

誤差は六秒。第二次攻撃は不要かもしれない。

そして村上が腕時計で時間を計ると大体3分後にやっと轟音が聞こえてきた。

それなりに距離が離れているのだから当然と言えば当然だが。

「アイラーヴアタから報告。目標は壊滅、第二次攻撃の要は認められない。敵損害5.7万。こちらの損害はなしです。」

化学機雷が効いたのだろう。

「よし。作戦の第一段階を終了する。全部隊、作戦を第二段階に移行する。速やかに敵のヘイトを分散、各個撃破せよ。」

第一段階はまだ楽だった。一つに集中すればいいからだ。しかしここからがかなり厳しい戦いになる。

相手は警戒するし、攻撃すべき目標は複数になる。イージスシステムの高速処理能力と艦娘に正確な誘導をさせることが成功のカギになる。

「それで？」

「そこから南下して反転。敵を引き付けながら500m進んだ後最速で離脱。30秒もすれば大量の爆弾が降ってくる。」

霧島は味方の爆弾に殺されるリスクが最も高い奇妙な戦場にいた。

自分たちの速度を持って敵と対峙すれば、基本的に敵は有効射程圏内に自分たちを捉えることすらできない。

こちらにも攻撃できないのは同じだが、自分たちが攻撃するよりはるかに高い火力を持った航空支援がある。こちらから攻撃する必要はない。

その為味方の誤爆が最も危険だった。

空母による長距離攻撃にもあるにはあるが、空母は発見されたが最後、ガダルカナル島の自走砲陣地から化学弾の雨が降り注ぎ、せっかく飛ばした艦載機も分間4000発のCIWSに無残に撃墜されて

いた。

砲撃陣地を発見して攻撃を開始しようとする頃には、自分たちを焼き払うための爆撃機が戦時国際法にくそくえとでもいうように大量のクラスタ爆弾を投下してくる。

「了解。」

霧島は36・5cm砲を引き打ちしながら隸下の艦娘と共に指示された場所まで下がる。

当然こちらも射程圏外だが気にする必要はない。

下がり終われば最大船速で可能な限り爆撃地点から距離を取る。

後方を見れば大量の爆弾と艦砲が降り注いでおり深海棲艦の絶叫が聞こえる。

ナパーム弾を廃止したと言っていた米軍がナパームに似た何かで深海棲艦を焼いていた。

「第二次攻撃の要あり。」

だが霧島はその深海棲艦達の姿を見てそういった。憎しみはない。ただ、彼らをやらねば殺されるのはこつちだ。

「了解。近くの第23攻撃隊に連絡を入れた。次の目標の誘導を開始せよ。」

深海棲艦が絶叫し、動物が焼ける嫌な臭いがそこら中に充満していた。

爆撃地点と機雷のあるエリアを避け鉄底海峡の外で索敵をしている敵の部隊を誘導する。

完璧な情報有利を確立している国連軍は敵との交戦も、接触も全て意のままだった。

望まない部隊が鉄底海峡に侵入しようとするれば、どことなく誘導部隊が出現し鉄底海峡から離れた場所までおびき寄せたかと思うと今度はその足で追跡を完全に振り切りまた別の部隊を鉄底海峡から引き離す。

130万もいた敵兵力はバラバラになり200近い部隊に分裂していた。

相次ぐ損害の報告に慌てて敵は索敵機を飛ばすがその索敵機はA

WACSからしてみれば単純な目標だった。

すぐにF35―Xが対ドローン兵器で攻撃を開始して状況の把握すら許さなかった。

混乱する敵部隊は損害をすでに30万以上出していた。一方の国連側もさすがに無傷では済まなかった。

艦娘の一部が大破し戦線を離脱し、第二ラインで砲撃を担当していた艦が3隻轟沈した。

ガダルカナルの対空陣地や無人の自走砲陣地は味方の爆撃と敵の砲撃により一部が損傷していた。

「霧島です。このまま一度鉄底海峡を離脱して誘導を行います。」

「了解。爆撃が必要になれば連絡を。」

指揮所も爆撃指示でそろそろ手一杯になり始めており敵の損害を完全に把握できていなかった。

その為霧島たちが鉄底海峡を出るとかなり面倒な部隊と鉢合わせることになってしまった。

派手な武装に、大量の随伴艦。攻撃部隊か？

霧島が目撃したのは大量の姫型を擁する大部隊。15万近い随伴艦を抱えている、敵の打撃部隊であった。

対する霧島たちは1000にも満たない部隊でありかなり分が悪い。

対空陣地の損壊により防空網は最初のころと比べれば脆弱なものになっており姫型が大量の艦載機を飛ばしてくると少し困ったことになる。

ただ、打撃部隊発見の報告をしたことで指揮が村上に引き継がれた。もちろんほかの士官も経験豊富で信頼できる。

村上の方はこちらに作戦の意図を説明することなく突拍子もない行動を要求してくる。そのため信頼はできない。

こちらがどれだけ彼と言う人間を信用しているかによって成功するか否かが決まる。

「霧島。変わった。村上だ。三式弾は積んでないな？」

「ええ。積んでません。」

「よし。なら敵が艦載機を飛ばして来たらB5の機雷原の上空を敵機が通過するようにして待機しろ。高速戦艦は機雷を狙え、ほかの船は対空戦闘用意。爆撃機だけを落とせ。」

「どう言う目的なのかわからない。だが、それが彼の考える最適な案だ。」

「最善でも最悪でもない。」

「予想していた通り敵の艦載機が襲来する。すでに手負いの様子だったが高度を下げて攻撃態勢に入ってくる。」

「攻撃開始。」

村上の号令で射撃が開始される。村上が何をしたかったのかすぐに分かった。

機雷が爆発したとき大量の鉄破片が周囲にばらまかれ次々に敵の雷撃機は落ちた。

本来船を沈めるための機雷にそのような処理が施されることはない。戦争の最初期、深海棲艦に有効なのではと開発されたが当然その程度で深海棲艦は沈まず、抱えていた在庫も散布したという事だろう。万が一艦娘が踏んでも問題ない。使い勝手は悪いが三式弾の代わりのようなものにはなると思うたのだろう。

「よし。大破艦は離脱。誘導を続行する。」

そうして誘導は再開されたが敵の攻撃隊の警戒心が強く、爆撃地点に接近してこなかった。レーザー誘導で爆撃ルートから少し外れた場所に爆撃を行う。

爆撃機の火力は期待できなかったが艦砲の集中運用で敵部隊を半壊させる。怒った敵をそのまま爆撃地点に誘導。殲滅した。

同じようなことが繰り返され、深海棲艦はただ、ひたすらに死体を積み上げていった。

「損害は70万を超え。すでにゴム攻略の能力を失っていた。」

一方で国連側も大破艦が全体の1割近くに上り第二ラインで砲撃をしていた艦の半数が轟沈や大破によって機能を停止していた。

対空陣地は未だに完全には破壊されていないものの弾切れで動作を停止していた。

その後、作戦が第三段階に入ったころ

「少将。司令部から少将クラスの権限を要求するメッセージが届きました。どうしましょうか？」

通信員はそう話しかけてくる。しかし村上にも余裕がなかった。

敵の本隊がようやく事態を把握して60万の兵力に総攻撃命令を出したのだ。

作戦の第三段階。戦力差を練度の差で押し、強引に敵の自由を奪う。

その間再度機雷敷設で海域を封鎖する。

「今は無理だ。今更司令部が支援をしてきたところでどうにもならん。」

と返す。

そして迫ってくる敵を見る。

敷設した機雷の9割以上が使用され艦娘の攻撃部隊と深海棲艦との間での砲戦が開始されており、誤爆防止のため米軍による航空支援はF-35Xからの精密爆撃のみになっていた。

「赤城、戦闘機を太陽の方向から向かわせ、攻撃機を直上から飛ばせ。戦闘機に向かって無駄弾を撃たせろ。」

練度も経験もある上位個体ばかりが残っており太陽をバックに攻撃するという方法はある程度予測されてしまっている。

博打ではあるが、あえてその裏をかき爆弾も積んでいない高機動の戦闘機に攻撃させひとまず爆撃機で敵から発艦能力を奪う。素早く無力化して見かけではなく実質的な数の有利をなくす。

高速で海上を走り回る駆逐に雷撃を行わせ、予測不能な攻撃で敵に攻撃する余裕を与えさせない。

60万での総攻撃は瞬間火力を出せる代わりにこの狭く限られた海域で多すぎる戦力は機動性を失い、魚雷のいい的になり始めた。

「大和、武蔵！踏ん張れ敵を押し固めろ。そうすれば魚雷で敵は沈む。」

近接化した戦闘で双方の被害は急速に拡大していたものの、明石と工兵がガダルカナルで整備を行い、順次大破艦を戦線に復帰させたため、今ここで踏ん張り、米軍による二度目の機雷敷設による海域封鎖を行い、長期戦に持ち込めば支援も到着するし、兵站においても有利なこちらの完全勝利が見えてくる。

「任せておけ相棒。」

武蔵がそう言うのと鬼のような全問斉射による超火力で敵を抑えつける。

長門や陸奥も後に続き敵の士気も統率も失われ始めている。

そこに無慈悲な全方角からの雷撃が行われさらに敵の抵抗は弱くなる。

大和も武蔵も弾受けを続けた結果すでに大破しているが一切引く意思を見せない。

村上はある程度何か言う事もなく、彼女らを信じ、撤退を指示しなかった。

姫級の最後の抵抗を受け当たらなければどうということはないと言う顔をしていた駆逐がかなり被弾した。

だが、彼女らがそれで攻撃をやめることはなく、日が落ち夜戦が始まる頃には駆逐達の報復を受けかなりの数の姫級が沈黙した。

それでも攻勢をやめることはなく敵の抵抗の意思を完全に破壊するまで砲撃を続け一部の戦艦は弾切れを起こしてもなお、白兵戦に移行し装甲として脆弱な深海棲艦の啞内に砲身をねじ込み力で貫いた。

さながら地獄だった。すでに海は重油と化学弾による汚染でひどいにおいと色だった。そんな海上で撃ち合い、殴り合い、海上で転倒したものは体についた重油が砲弾で引火し様々な燃料が混ざり消える見込みのない炎に包まれた。

村上は無表情にその画面を見て米軍の報告を待つ。

ようやく米軍から機雷敷設完了の報告が入り村上は大和や武蔵に修理を命令した

「よし。もういい。敵はここから逃げられない。大破艦は修理に入れ。そのほかの艦は敵の監視を続行。戦意を失うまで攻撃を続ける。

効果がなくても構わない。戦力で言えば未だこちらの不利はひっくり返っていない。悟られるな。」

そのまま、これからの行動について指示を出そうとした村上を通信員が止める。

「少将。艦隊長から、最優先通信です。」

村上の記憶が正しければ、中越が最優先通信をよこしたのは初めてだ。

「わかった。すぐ行く。大佐、後は頼んだ。」

とだけ言つて村上は通信室に向かう。

そこでとんでもない報告を受けるとも知らずに。

第一攻撃群の落日

終わりは突然だった。

通信室から重い足取りで発令所に向かう。

ただ、村上是静かに怒りを抑え、取るべき行動を指示する。

「艦長。全タンク注水！急速潜航！」

村上がそう言うのと艦長は何も言わずに手ばやに指示を出す。

今この状況で何を回避するために潜航するのか。艦長には言われなくても分かっていた。

通常の爆弾で被害が及ばない深度で待機するこの潜水艦がさらに深度を下げなければ破壊されてしまうような攻撃が来る。そんなもの一つしかない。

「聞いたか！とつととしろ！死にたいのか？」

艦長の怒号が飛び艦はどんどん潜航する。

「何とは言わんが、到達と同時に全タンクブローする。海底にたたきつけられるのはごめんだ。用意しとけ。」

事態を把握したCICは“それ”の着弾時刻を表示する。

村上は無線を取りアイラーヴァアタを呼び出す

「マーク！早く海域を出ろ。」

「なに言ってる。俺らがいるのは浅瀬だ。最期の冗談にしちや切れが悪いぞ村上。」

アシユベータは回避行動をとったが、浅瀬にいたアイラーヴァアタには無理だった。

自分が冷静さを欠いていたことに気が付き一度深呼吸する。

「マーク。どんな気分だ。」

無線を再び取り村上はマークに話しかける。

「意外と冷静でいられるな。四肢が吹き飛んで痛みと共に死ぬわけじゃないからな。何がどう転んでも死ぬ。」

「まあ現実的じゃないからな。」

「予想外もいいとこだよ。まさか味方に殺されるとはな。」

マークは自嘲めいて笑う。

「こっちは中途半端に生き残る可能性がある分ひどい気分だよ。」
アシユベータも回避行動をとっているが実際のところ生き残れるのかは五分五分だった。

この後の面倒な処理や、軍法裁判をするぐらいならここでとつとと死んで面倒ごとを全部中越に投げつけてやろうかと思ったりもした。その考えも結局のところただの強がりでしかなかったが。

「それなら俺の昨日と変わらないな。生き残るか、死ぬか。二択だ。」
「確率論を学んだほうがいいな。」

24時間の中で死に至る可能性が毎日一定であるわけがない。

最後の会話だぞ。しようもない乳練り合いで時間を潰すのか?」

とマークが言うが、出会った時から意味のない言い合いしかしたことがない。今更こっぴどくかしいことでも言えと言うのか?」

「まあ、先に地獄で待ってる。」

「地獄か?俺は天国に行けると思ってたんだが。」

「いけるわけがない。ちよつとは自分の行動を見直してみろ。」

とぼけるマークにそう言う。

「それもそうか...」

マークは黙り込む。しばらくして突然口を開き

「ムラカミ、司令部の奴らを殴るのはお前に任せる。こんな愚策しか取れなかった司令部のために俺はここに残る。司令船がすべてここから逃げれば艦娘たちもここから撤退するだろう。だから私はここにとどまる。後のことは任せる。中越にもよろしく伝えてくれ。」

ここに残ることを選択したわけではない。彼はそうするしかなかったただけだ。

だが、ここは花を持たせてやろう。指揮官として部下と運命を共にする。

無意味で非合理的だが、それでいいのだろう。

その数秒後、司令長官の承認を得た”戦略課”が発射した”戦術核”が鉄底海峡に着弾した”

村上是さっぱりと別れたつもりだったが気づけばうわ言のように「マーク、俺も連れていけ。一緒に地獄へ連れていけ。」

と、すでに受け取り手が死んだ周波数で呼びかけた。

村上の目の焦点ようやく合うようになったところには船体のあちこちに亀裂が走ったアシユベータは何とかして放射線の影響から離れようとしていた。

村上は冷静になろうとしたが無理だった。

静かに発令所を後にして自室に戻る。

あの光には見覚えがある。

いや、本来はないはずなのだが。

どうしてだろうか。何か運命めいたものを感じる。

全く同意した覚えのない理不尽さ。運命の赤い糸と、運命の白い光。実に詩的だ。白と光。どちらもそれ単体では死をイメージさせることはない。でも白い光。それには死ぬものにとっては一種の安らかなものがある。

運命の素晴らしさと狂気をひしひしと感じる。

あの無茶苦茶な指揮官と巡り合ったこと。そしてここで死ぬこと。不本意で美しい死に場所だ。

結局またも戦いの中で死ぬことはできなかった。でも、今回は飾りではなかった。撃ち合い、傷つき、そして散々敵を殺してきた。兵器として私は活躍できた。

「陸奥。満足か？」

「もちろん。とは言い難いわね。なんで、このタイミングであんなもの撃つのかしら。あの人にしてはきれいなじゃない勝ち方ね。」

会話している間にもその光は大きくなり近づいてくる。光は私を包み込む。

火球の中に入れば生物は蒸発する。爆発の騒音がたどり着く前に私は死ぬ。その衝撃波には似つかわしくもない静かな終わりだ。

さらば。少将。さらば戦友たちよ。

東京国連軍アジア支部

「全く理解できません。一体何の権限があつてこちらの承認どころか話一つ通さずに勝手な攻撃を行ったんです?」

中越がそう聞くと戦略課の広域戦略部長は自信に満ち溢れた様子で答える

「130万の兵力との絶望的戦闘を速やかに終わらせ、ヨーロッパ方面に後顧の憂いなく派兵が可能になりました。そのどこが問題なのでしょう?」

奴らは本当に事態を把握していない。深海棲艦がどうやって兵力を増やしているのか知らないし知りたくもないが敵の物量はとんでもない。

戦略課は本気で戦場を数字で見ている。

数字で見ると抵抗など無駄な程の戦力差があるにもかかわらず。

「それは素晴らしい。一年後どうなってるかわかるか?お前たちが意味もなく殺した兵士たちがいなければ大変なことになる。」

130万ではなくすでに60万しかいなかったことも指摘しようと思つたがどうせ無駄だろう。

彼らからすれば六対一で勝利したと言うことなのだから。

こちらが十万の損害を出しても問題がないと本気で思っている奴らに何を話しても無駄だ。

「いいですか?私たちの攻撃で太平洋戦線のしばらくの安全は保証されました。その間に失つた戦力を回復できないのはそちらの問題でしょう?わたしたちに責任を押しつけるのはやめていただきたいですね。」

挑発的な笑みを浮かべそう言うが、こいつは本気でバカだ。第一攻撃群は全艦隊から優秀な艦娘を集めて4年の訓練と5年以上の実戦経験を積み上げようやく完成した部隊だ。今までの戦闘データを有効に活用して最適化した訓練をしても再建には四年以上はかかるだろう。

「それを本気で言っていらっしゃるのであればもはや私たちが戦略課の指示を聞く必要はないでしょう。その元からスカスカの脳みその

軍団で一生懸命考えて、船頭多くして船山にすら上れず途中で滑落して全員死亡という失態を犯す人間もどきの猿の指示を受ける必要性を簡潔に説明してくださるか？」

中越のひどい言葉遣いに戦略課の人間は立ち上がり激しく抗議する一方で司令長官は自分がしたことには青ざめていた。

過去の現場からの報告で第一艦隊の能力を把握していた。特に第一第二攻撃群のともない練度はよく知っていた。

しかし、自分の故郷の危機に冷静さを失っていた。冷静に繕っていた彼は戦略課の人間に簡単に言いくるめられてしまった。

「中越艦隊長。一年での再建は無理でも、何とか今の戦線を維持して膠着に持ち込むことはできませんか？」

そう聞く。

中越は大急ぎで資料を見て守備隊の配置や即応部隊としてどれだけ用意できるか全体を見る。

それは本来戦略課の仕事だが将棋ですべての駒を”歩”としてしか見ていない彼らには将棋くずしがお似合いだ。

しかも第一攻撃群などの異常な戦果も合わせて平均をとった戦力で”歩”の強さを算出しており実戦経験ゼロの艦娘までもが将棋でいうところの”銀”程度の戦力があるとして計算しているのだ。

その平均を狂わせていた部隊を失えばリカバリーなどできない。

「無理です。戦略課の素晴らしい活躍によって太平洋戦線におけるほんの一瞬の優位は獲得できましたが今までの通り敵が毎月数十万の兵力を追加してくるのであれば攻勢能力の低い部隊では敵の処理が間に合わずじりじりと撤退することになります。全ての前線で陸戦のように艦娘を並べるほど兵力が余っているのなら話は別ですが、余っているんですか？」

中越は戦略課の一団の方を睨み付ける。

「数的不利は国連軍が慢性的に抱えている問題です。そこで我々は艦娘に頼らない新しい戦略を考えついたのです。」

彼らは待っていたとばかりに資料を配り始める。そうして彼らが提示したのは村上が今回の作戦で使用したものと何ら変わらない作

戦だった。

というよりも完全にパクったとしか思えないものだった。ただ、艦娘と言う要素だけが排除されていた。

「人類が効率的に爆撃を実施。ドローンによる終末誘導により安全に敵を始末します。艦娘など必要ありません。我々人類の戦いに敵勢力と同じような奴らは必要ない。」

彼らは知らない。現場が同じようなことを実施しようとして挫折したことを。

広い海の上で敵に正確な誘導を行い敵を沈没にまで追い込むほど火力を集中させることなど不可能に近かった。

村上が今回それをやり遂げたのは彼があらゆる可能性を考慮する中で一度は枯れた戦術が限定的に有効だと判断したからだ。

高い練度をもつ艦娘と士官、最新の技術のすべてを完璧にコントロールできる環境を作り上げることができたからだ。

限られた海域を何度も測量して数秒のずれだけで誘導できるようにしていたからだ。島も何もない開けた大海で同じことなどできるはずがない。

中越は確信した。戦略課は村上が挙げた戦果を知らず、手違いで攻撃したのではない。

これ以上第一艦隊にも艦娘にも戦果をあげさせないためだ。

最後の望みをかけて彼は口を開く。

「司令長官。あなたの間違いを今は許す気にはなれません。ですがまだやり直せる。第一艦隊の残存兵力でニュージージーランドの駐屯部隊をたたきニュージージーランドを要塞化、一度ハワイを放棄して防衛圏を大幅に縮小してください。そうすれば我々は反攻の戦力を温存できる。」

司令長官の良心と軍人としての責任感にかけるしかなかった。さつきは口について戦略課の意見を聞かないといったが、中越は一軍人でしかない。

組織がそうすべきだと判断すればそれに付き従うしかない。

「なるほど。ハワイ放棄は看過できない。それに戦略課の戦術にも期

待できる。ここは戦略課の要望を飲もう。すぐに駐屯部隊以外の部隊はヨーロッパ遠征の用意をするように。それと、戦術研究所と装備開発局に戦略課の方から連絡を入れるように。以上だ。本作戦の損害は全て第一第二群団長の責任だ。今後の戦略をスムーズに取るため、壊滅した艦娘の艦隊の尻拭いとして新戦術が用いられ130万の敵を撃破した。これを事実として公表しろ。いいな。」

だが、司令長官は軍人としてすべき事を放棄して保身に走った。もう中越にできることはない。殴り掛かってやろうかと思っただがそれもやめた。残された士官を守り、この現状を何とかするためにはみっともなく今の役職にしがみつくなかない。

その場に立ち尽くしていた中越を置いて、戦略課の人間と司令長官が会議室を出ていく。

「艦隊長。大丈夫ですか？」

「大丈夫だと思うか？」

山本が分かり切った質問をしてくる。

「それよりも君の直属の上司が左遷だぞ。」

山本は分かっていると云った顔で

「知っています。どうせあの人はこんな理不尽なことをされても自分の責任だと思ひ込みますよ。「俺が戦略課の不審な動きを察知できれば。」とでも言うんでしょう。彼は自分を神だとも思っているんですかね。」

山本にはわからないだろう。司令官と言うのは部下を失えば客観的には何も悪くなくても自分が悪いと本気で思ひ込むことがある。

最悪なのは彼は部下たちとあまりに長くいすぎたことだ。彼は部下と上司以上に全員を戦友だと思っていたに違いない。何を言っても彼は自分を責めることをやめないし、生き残ったことを後悔する。「部下の命と共にあらねばならないと思ひ込む。それが他人の命を好き勝手にできる権利の代償だよ。」

「そうですね。」

山本は納得していないようだがそれ以上彼から言ってくることはなかった。

中越は机に広げた資料を鞆に詰めなおしながら

「君は彼についていくのか？」

そう聞く。

「どうせ、今の第一攻撃群の人間の居場所なんて本部からはなくなりますよ。戦略課と現場の人間どっちが多いか知ってます？」

水兵や駐屯部隊指揮官を合わせるなら別だが彼らはあくまで各国軍隊から借りていたり、ナンバリング艦隊から切り離された指示系統を持っていたりするため、純粋な国連軍本部の職員の数は戦略課のほうが圧倒的に多い。

「それもそうか。彼が自殺を図ることはないだろうが、辞め時だと思えばやめさせてやれ。」

とアドバイスをして会議室を出る。

そこがターニングポイントだった。

そのあとに行われた、司令部の処理が最終的にすべてを終わらせてしまったと言っている。

殉職した第二攻撃群士官には勲章も階級特進もなかった。遺族に届いたのは死亡通知書だけ骨も遺品もなかった。

第一攻撃群の士官は全員更迭の上、島嶼に左遷された。

さらに、司令部はこの決定に抗議した現場の士官を全員更迭するという暴挙に出る。そのうえ各報道発表から現場の人間を締め出し、弁明の機会すら奪った。

当然だが、士官を大勢左遷し主力を失った国連軍と再び勢力を取り戻した深海棲艦で勝負になるはずもなく、前線は一気に崩壊した。

当然守れるはずのないハワイでは100万人以上の民間人が死亡した一方、プロパガンダだけは得意な戦略課に踊らされ日本列島や大陸本土に敵が襲来しても艦娘排斥運動はとどまることを知らず激化していく。

そして、言うまでもないが戦略課による新戦術は大失敗した。

米国CIA本部

「二サエル上級分析官。今回は愉快的な情報をお持ちしましたよ。」

「そうか。そういえば君たちの仕組んでる新組織の名前は決まったのかい？」

「二サエルがそう言うのとエージェントS12はめんどくさそうに口をすぼめる。」

「一体どこでそれを？」

「どこでそれをと聞くが、CIAが政権転覆や企業の破綻工作などをするときその予兆が絶対に現れる。内部にいる人間であれば少し頑張れば容易に知ることができる。」

「二サエルは本気でそう思っているがもちろんそれは彼の能力あつてのことだ。」

「この前の会議でそれを決めたのでは？頑張って世界中から海軍幹部集めて。」

「隠しても無駄かしら？どういう組織かもうご存じで？」

「海軍関係者を大量に集めているのだから一つしかないだろう。」

「国連軍の後継でしょうねえ。」

「エージェントS12は短くため息を吐き出し」

「ほつんと、最悪。頼むから黙っててくださいね。」

「と二サエルを睨む。」

「睨んでも意味ないですよ。教えてくれないなら探りを入れるだけですから。」

「そうやって目の前の電話に手をかけるようになるとエージェントS12は彼を制止して」

「防衛連合軍。」

「と素直に名前を教えてくださいました。」

「連合ですか。我が国らしい。はなから連合にする気もないのにユナイテッドステイツと名乗り、ユナイテッドネーションを作り。面白い。アメリカ式グローバル万歳ですね。」

「まあ。言い返せないわね。連合と名乗ってるけど入れるのはCIAとMI6が中心となってヘッドハンティングした人間だけ。保身と尊大な自尊心だけの国連軍は望み通り旧式兵器と人間だけで化け物」

と戦ってもらいましょう。」

その美しい顔に思わずこちらも微笑んでしまいそうになる笑顔浮かべる。

ニサエルも微笑み返す。

「それで報告とはなんでした?」

そう言うのとエージエントは途端に顔を元に戻す。

「変わり身の早い女だ。」

とつぶやいたニサエルに再び微笑んだ後

「DAY3が終わった。」

とだけ言っただけでニサエルの方を見る

「わかりました。引き続き頼みます。と君に行っても無駄でしたね。作業員たちに伝えておいてください。」

エージエントS12は若干かわいそうな位置で雑用扱いされている。能力は高いのだが若干使い勝手が悪い。

そんな彼女を憐れみつつパソコンの画面に目を移すころには彼女は音もなく消えていた。

詐欺師の信奉者達

「提督も壊れてたんですね。」

吹雪はそうつぶやく。

「そうかもしれないな。」

竹野、いや村上はそうつぶやく。彼はどこか吹っ切れたような顔をしていた。

彼の弱みであり、ここまでの散々な扱いを耐え続ける原動力であり、呪いでもある彼の過去。

彼自身過去に執着し、過去に呪われ、過去の自分と部下をどこか崇拜し、理想化していた。

話が事実なら彼の非は、ほとんどない。彼にどうにかできた問題ではない。けれど、それすら跳ね返せると錯覚するほど昔の彼は強く、そしてもろかった。

狂気の戦場で狂ったのは私達だけではない。

「満足か？」

「一つ聞いていいか？」

「なんだ？」

村上は長門の方を見る。

「私たちはあなたのことを村上と呼べばいいのか竹野と言えいいのかどちらだ？」

「他の提督が来た時には竹野と呼んでくれ。私は戦犯だからあまり印象が良くない。」

国連から分離独立した防衛連合軍内でも村上の印象は非常に悪い。戦略部のプロパガンダの影響でもあるのだが、中越はまだしも村上は自分の名前で活動できるほど彼の名誉は回復されていない。

「わかった。」

村上は頷くと立ち上がり食堂を出ていく。

誰も声をかけることはしない。どうすることが正解なのかわからない。

彼に気にするなど、言う事が正解であるとは思えない。艦娘たちが

らしてみればあまりにも村上の過去が予想外なものだった。

村上は気が付けば寝ていた。

食堂から戻り、再び事務作業を再開しようとしたときどつと疲れが溢れ、視界がゆがみその場に倒れ込んだことまでは覚えている。

目を開けると、床の冷たさが直に顔に触れ一気に眠気が飛ぶ。

立ち上がり服を整え腕時計を見る。時刻は深夜3時だった。

流石にこの時間から仕事をする気にはならなかった。村上が床に放置されていたことから見て特に急用もなかったのだろう。

部屋の隅にかかっている、外套を着て外に出る。

やっぱり。この島の夜は静かで落ち着くな。

波打ち際まで歩き履いていた靴を脱ぎズボンを折り海に足をつける。

自然な海に足をつけたのはいつぶりだろうか？安全な海であつても化学弾による汚染などがあり国連軍と防衛連合軍が唯一共通の声明として海に立ち入るな、と指示を出している。

だが実際は嘘だ。人間ごときがどれだけ頑張つても海に浸かっただけで人体に影響を与える汚染は作れない。

ただ単純に危険だからだ。そうやって言っておけば海に入る人間などいない。

いつぶりかな。海に入ったのは。

それを思い出すと泣けてくる。

まだ、第一攻撃群の発足当初関係を深めるためにいろんなことをした覚えがある。

艦娘の登場により人類側は急速に勢いづき各地から優秀な艦娘を大量に引き抜いてもまだ攻勢に余裕があったころ。グアムに部隊を移動させ熱帯での訓練と銘打ち予算をつけさせ、好き勝手にやりたいことをやらせた。その時、水泳大会が一人の艦娘の発案で実施され全力で泳いだにも関わらず潜水艦たちに完敗した。

仕方ないと言えばそうなのだが満足いかず、何度も戦いを挑み持久戦で最後には勝った。向こうがただ折れただけなのかもしれないが。

グアムでの滞在で艦娘への印象は大きく変わったと思う。空母も、戦艦も精神的には幼く、その容姿から大人になることをようようされてしまったという節がある。

こちらが見ていないときはそれは楽しそうに遊んでいたのを思い出す。

子供らしさを感じほほえましく思う一方で彼らが戦場に出なければいけないということに大きな疑問がわいた。

けれどあの頃はまだよかった。

今はこれだ。艦娘たちは戦場を生き抜く中で子供のような部分は消え去り、自分は、深夜の海で誰かいるわけでもないのに水に一人で浸かり水平線を見ている。

月は一週間まえに見たものより少し大きく、明るくなっていた。

ふと、島の方に目線移すと人影が見えた。容姿だけを見るなら飛龍に見えるがそれにしてはまどついている雰囲気はただ者じゃない。

「蒼龍……。だな？」

疑問形で飛ばした言葉がこちらに帰ってくることはなく、その影は動き距離を詰めてくる。

腕にかけていた上着を投げ視線を遮断し回避する。だが、

「殺そうってわけじゃありません。」

蒼龍は悲しそうに肩を落とし海岸に座り込む。

海水を吸って重くなった上着を海から引き揚げ絞った後村上も陸に上がる。

足首あたりまでしか水には入っていないなかったから、靴を持ち片足立ちで水を払って海岸を歩く。

「なら何の目的で深夜に私のもとへ来たんだ？」

そう言いながら蒼龍の横に同じように水平線に眺めるように座る。「私は確かに二サエル司令長官、いえ二サエル情報官のもとで働いていました。でもここに来たのはほかの艦娘たちと同じです。使いものにならなくなったからです。あなたのことを監視するわけでもなければ、あなたを殺すためでもありません。」

村上は首を傾げ

「君がいた部署では使い物にならなくなった機密情報の塊をこんな場所に送ることはしないだろう。処分するのが妥当だと思うが？」

「その通りです。だから私の最後のターゲットの目を見た時、絶望しました。」

殺せるターゲットを殺さない特殊要員。特殊要員には人間性も心も必要ない。ただ人を殺し、命令を聞き、極限状態に置かれても情報を漏らさずに必要なら自分の命すら迷いなく捨て去る。それが出来ればいいのだ。そのために最大の障壁となる感情を思い出し、しまった特殊要員は用済みだ。

「なら、どうして黙り込んでいたんだ？」

「あなたが私を怪しんでいたのと同じ理由です。あなたはほかの艦娘が特殊な事情を抱えていないとすぐに知り得る立場にいましたが、私は違います。私以外の艦娘が全て特命を受けて私に何かしようとしているように見えました。」

特殊作戦には数年かけて実行するものもある。だから彼女はずっと気を許すことが出来なかった。自分の前に作られたすべてが作戦を実行するストーリーに見えたのだろう。

しかし、それなら村上が来てたつた数か月で村上を信用するのもおかしい話だ。

「どうして私にそれを話す？まさかこの数か月で私を信用したとでも？」

「違います。もっと昔からあなたを知っていましたから。」

「昔？」

「ええ。私が、特殊要因として汚れ仕事を請け負うことになったのはあなたのせいでもありますから。」

蒼龍は村上を責めるようなことを言いながらも、村上に恨みを向けることもなく遠くを見ている。

「あくあ。何で私こんなものになっちゃったんだでしょうね？」

「私に非がある……わけじゃなさそうだな。」

蒼龍の方を見るとやけにすがすがしい顔で頭の後ろで手を組んでいた。

「あなたが私に高い評価を出しすぎたのがいけないんです。」

村上はハツとした。第一攻撃群に引き入れようとしたが結局いろいろな事情で迎えることが出来なかった艦娘もいる。

そのすべてを覚えているわけではないが蒼龍の一人に最高評価を付けて何とか引き入れようとしたが無理だった艦娘がいた。

最高評価を出した艦娘はほかにも居たが、ただ一人最高評価を出したが仲間として迎えることが出来なかった艦娘が蒼龍だった。

「私は君に最高評価を出してしまっていたわけだ。」

「そうですね。私も誇らしくてすぐに引き受けるつもりでした。というよりも、引き受けたんですけどね。でもあなたのもとで訓練をすることはなく、艀装も奪われて渡されたのは対人用の拳銃や毒物でした。」

高い能力を持つと判断してしまった結果、ほかの部署にも目を付けられ裏で手を回されてしまった。

当然、村上はそんなことを知らない。当時の彼の頭は今から教育する五万の艦娘の事でいっぱいだった。

「昔の私はまさか味方が自分をだますなんて想像すらしていなかった。最初からだったんだな。私が起こしたミスは結局どれも最初と同じだ。正義のためには無条件でみんな協力してくれる。目標が同じだから足並みもそろえられる。青すぎて、馬鹿らしい考えだ。」

「そうですね。確かに青すぎる考えです。私が配属された部署の人間は必要であれば殺しをして、最終的には軍が掲げる目標にたどり着くプランを立てていました。あなたの描くビジョンにたどり着くために私たちがしたことはあなたがやっていたことの何倍も汚い方法でした。」

「だが、取り返しのつかない残虐で単純な方法であらゆる内部の問題を解決することはできない。」

「その通りです。破壊が根本的な解決になるはずなんかないんですよ。でも、私はそれが最善策だと信じて悪魔に魂を売りました。」

悪魔。二サエルのことだろうか？彼も悪魔だが殺しが最終手段であり悪手だということを彼は知っている。最初から殺しのための部

隊を彼が作るとは考えにくい。

「君をその道に引き入れたのは誰だ？」

聞くと蒼龍は困った顔で

「私は自分を教育した人間をよく知りません。意図的に記憶が消されているというか認識ができないというか。教えられた技術は完全に覚えているけれど記憶をどう辿ってもその顔はぼやけて、思い出せません。」

そう答える。

「ならニサエルとはいつ会ったんだ？」

「防衛連合軍が発足した時、私は国連情報局から防衛連合軍情報部への異動の指示が出てそこで彼には出会いました。最後までよくわからない人でした。私たちをその名の通り駒として扱い、前に一歩進めとだけ言うように作戦の目標は言ってもどうしてその作戦をする必要があるのか。どうしてその作戦を実行しなければならないのか、絶対に言わない人でした。だから私が駒としての仕事を全う出来なかったときすぐに殺されると思いました。でも彼は満足そうに笑ってこの鎮守府に何も言わずに飛ばしました。私を叱責することもなく励ますこともなく。」

村上は笑って

「同じだな。あいつのすることは意味が分からないことが多い。味方なのかもしれないし敵なのかもしれない。全てを欺いているように見える。でもどうしてだかあいつの目的はもしかしたら自分が思い描く未来につながるかもしれないと錯覚させてくる。」

ニサエルは今まで村上が関わったあらゆる人間と異なる。熱い闘志を持っているわけでも信念のためには死ぬ覚悟があるようにも見えない。彼の計画に必要ななら家族、友人ですら簡単に切り捨てるだろう男だ。

「どうしてなんでしようね。」

「さあな。私たちが知ろうとしたところでそれが簡単にわかるなら苦労はない。昔は単純に敵を倒せばよかったが今は違う。蒼龍、君には深海棲艦が殺せるか？別の地獄に戻る覚悟は？」

蒼龍はただ微笑んで同意を示す。

「そう言えば、君は私がここに来た時から私が誰だか分かったのか？」

そう聞くと蒼龍は首を振り

「私があなたとあったのは十三、四年前ですよ？それに散々地獄を見て顔つきも変わってます。あなたが最初に指揮を執ったとき強烈な違和感がありました。驚きもない平凡な指揮。でも、それは新人士官ができることじゃない。だから最近頻りに外をうろついていたわけです。気がついてないかもしれませんが。」

十四年。そんなに経ったのか。そろそろ終わらせなければいけない。

終わらせることができるのか知らないが。

「早速明日出撃してもらおうか。」

「艦載機を使うのは何時ぶりかなあ。」

蒼龍は星空を見上げながらそうぼやく。人間は考えをまとめるとき、視覚から得る情報を減らすために映像に雑音が少ない空を見ることがある。ただ蒼龍が空を見上げたのはそれだけが目的でないことを彼女の瞳が不規則に光を反射していることが証明していた。

おかしな噂

二サエルはため息をつく。

「またも認めたくない事態が発生した。ある程度予想していたが二サエル直属の工作部隊は別の任務に従事しており妨害工作を実施できていなかった。」

「タイタン。それでどの程度の破壊されましたか？」

「フランス陸軍の計画では一キロ分崩壊させる予定だったようですが崩壊が連鎖して2・5キロほど崩落したようです。」

「これで英国が本土を放棄すると言ってももう安全に避難できないということですね。引き続き英国王室にもフランス大統領側近にも探りを入れておいてください。」

英仏海峡トンネルが爆破されるという話は少し前から上がっていた。

今のフランスは移民が全人口の三割を占めており、雇用喪失に治安は悪化。フランス政府は状況を鑑みてEUを脱退したがそれでも国境を警備する分の軍隊は海岸線に配備せざるを得なかったため結局状況は改善せず、またも混沌としたフランスの政治は革命の前兆すらある。そんな状態で今ブリテン島にいる2000万人がフランスに逃げてきた暁にはフランス政府は崩壊しかねない。MI5もMI6も表立って妨害に出なかったということはイギリス王室もある程度事情は了解しているということなのだろう。

「まあ、とにかく今は英仏開戦だとか、フランス革命は避けてくださいね。以上です。」

タイタンは無言で頷いてテレビ会議を終了した。

しかし、普通に考えてイギリス国民がフランスに保護されることを良しとするはずがない。英連邦加盟国に移住を強要すれば移住先など簡単に見つかる。オーストラリアの大部分は保持されているし、カナダにも南アフリカにも逃げれる。結びつきは弱いがインドもある程度は受け入れるだろう。

難民受け入れを拒否しているアメリカも大量の造船所や軍需工場

を支えてきた工員とその家族に関しては受け入れの準備が出来ているらしい。

今まで開発を行わなかった内陸部の開発を一気に進め、五大湖の湖畔には大量の造船所を建造している。

造船能力の低さから防衛連合軍支部の移転を延期されたことを受けた対応だろう。しかし、造船所が失われてしまったために技術を持った人々は日本やその他の国に移住してしまった。それにより生まれた人材不足を補う狙いもあるのだろう。

フランスの取った行動にフランス国民は絶賛するだろうが愚策だとしか言えない。けれど実行しなければフランスという国がバラバラになるのも目に見えていた。

「長官。お電話です。」

頭を悩ませていると山本が声をかけてくる。

「何番です?」

「5番です。」

受話器を取り5番を押すと女が慌てたような声でしゃべり始める。

「長官。突然のお電話申し訳ありません。ヨーロッパ方面軍憲兵第13中隊指揮官のオーマー・ラツコエです。」

「ご存じかとは思いますが君の行動は処罰されますよ。」

憲兵中隊の指揮官レベルが勝手に司令長官に直接電話をかける行為など当然許されない。もちろんそれをわかった上でこちらに電話してきたのだと思うのだが。

「はい。私が軍法会議にかけられることは分かっています。それでもお伝えしなければならぬことがあります。」

「なら聞きましょう。」

ニサエルは落ち着いた声で返事をして相手の会話のペースを抑制する。

「はい。反艦娘のカルト集団、Aaron Mankindはご存じですか?」

Aaron Mankind。悪いうわさしか聞かない。深海棲艦の公開処刑や艦娘を平気であり人間の所有物であると言い張り艦娘

に焼きごてを押し付け印を刻むなどの行為を行っているらしい。

アロン。モーセの兄の名だ。彼は帰らぬモーセに不安になった民たちのため偶像として金の仔牛を作り神の怒りを買った。間違った方法でも民のために自らを犠牲にしたアロン。

彼らは自らの残虐な行為を必要悪だとして自らの悪を認めた。だからこそ彼らの思想は広がった。

必要悪で艦娘を虐待することを正当化し、人間の残虐性こそが地球の覇者である根拠だと説いている。

「思想は結構だが、結局はただのカルト。合理性も理性ある人間としての側面も否定し、ヒトとしての側面だけを見ているかわいそうな人たちですね。」

「概ねその通りです。」

「それで？」

「ヨーロッパ方面軍司令部の幹部、アーサー・マクドネルが Aaron Mankind に籍を置いている可能性が浮上しました。正式な調査を行うおうにも私の権限では握りつぶされるのがおちです。」

二サエルは少し驚いた。ヨーロッパ方面軍がカルトをおとなくさせるために金を握らせ、一部の艦娘を生贄として差し出しているという話は聞いていたがまさか幹部があちら側の人間だとは思っていなかった。

「そうですね。」

情報部の人間を送れば簡単に解決しそうな話だがそれではつまらない。ヨーロッパの惨状を現場の司令官たちに見せてやろう。

「わかりました。研修と称して調査を指示した士官数名をそちらに送ります。あなたの処分は本件の処理が完了してから下します。何か見つかる自信がないのなら今のうちですよ。」

「いえ。問題ありません。内部を監査する人間の一人として軍規の尊さをよく知っているつもりです。覚悟は受話器を握った時からできています。」

頼もしい限りだ。

「了解しました。」

二サエルは受話器を今度は情報部に内線をかける。

「はい情報部。」

機械的な冷たい声で返事が聞こえてくる。

「新人士官だと言っても差し支えなさそうな奴を数人よこしてくれ。」

二サエルは返事も待たずに受話器を置く。

身分を偽った情報部員と本当の新人士官を送り、研修を実施してしまえば、まずばれることはない。実際は、ばれようがなんだろうがどうでもいいのだが。

「ついでに彼も送りましょうか。」

村上も四年前の写真と比べれば目つきも顔も変わっている。よほど親しくしていた人間ではなければわからないだろう。最初から嘘をついているものとして村上を見ていた南鳥島の艦娘たちには何となく似ているというだけでばれたようだがあれは特殊な例だ。

意外と人間は気が付かない。トップの人間が承認した研修生にまさか戦犯が混じりこんでいるとは思わないのだろうか。

「少しは面白くなってきましたね。」

二サエルはほくそ笑んで怪しげな新人士官候補の到着を待つのだった。

必要悪

炸薬の臭いと耳がおかしくなるほどの轟音。

その中で誰もおびえることなく、ただ取るべき行動をとる。

いつ見ても恐ろしい。あくまで演習用の兵装。艦娘相手なら殺傷能力はない。それでも兵器の攻撃にさらされることなくただ行軍する様子はいつ見ても、何度見ても戦争の狂気を感じずにはいられない。

「伊勢！新兵装の具合はどうだ！」

竹野は叫ぶ。

「なかなかいいですよ。」

航空戦艦。昨今迷走を続けているアメリカ海軍は空母と戦艦を合体させた改アイオワ級の建造を開始していると聞く。はたしてそれが有用なのかどうかは分からないが。

空母と最新のイージスシステムを搭載していた駆逐艦を全損したアメリカは方針を転換せざるを得ないのだろう。

「よし、黄艦隊が勝利したと判定できるだろう。戦闘終了。」

やつと轟音がやみ模擬海戦が終了した。

模擬海戦の多くは目的をもって限定して行うものとどちらにも指揮官が付き制限なく行われるものがある。今回はかなり多くの制限下で行われた伊勢の試験的な側面がある。

「特に言っておくべきことではない。各自補給ののち、待機に入ってくれ。解散。」

珍しく無線ではなく直接口頭での指示を与えると背後に加賀がいることに気が付く。

「お水いりますか？」

村上が額の汗をぬぐいながら振り返ると加賀はそう言う。

「ああ助かるよ。」

水のペットボトルを受け取るとびっくりするほど冷たかった。そろそろ本格的に夏が始まる。ここはかなり暑くなるだろう。

「それで。まさか私に水を渡すためだけにここまで来たわけじゃない

だろ。」

「ええ。司令部からお電話がありました。」

「今日は君が秘書艦だったか。すまない、最近は訓練の指導ばかりで事務作業を任せっきりになってしまっていたね。」

天龍の練度を低下させないため、秘書艦は原則日替わりになっていた。もちろん引き継ぎ作業がめんどくさすぎるような案件がある場合一週間同じ秘書艦が付くことも珍しくはないが。

「提督でなくても進めることが出来る仕事を部下がやるのは当然のことだと思いますが?」

相変わらず冷たい。

「それで誰からの電話だ?」

「司令部教育課がヨーロッパへ研修に行くように、と。」

ヨーロッパへの研修か。いかにも面倒ごとが起こりそうだ。

「それとこちらがその資料です。」

加賀は村上が飲み終わったペットボトルと交換するように資料を渡してくる。どこまでも気が利く娘だ。

ざっと目を通す。行程は一週間。出発は三日後。どうしてこうも無計画なのだろうか。

目的は島の防衛が多い太平洋戦線と上陸を阻止する戦いの多いヨーロッパ戦線の違いを学ぶため。

国連軍の影響が強いヨーロッパでは上陸されてからの地上戦が優先されている。上陸して能力の下がった深海棲艦に海からは艦娘。

陸からは大量の自走砲と野戦砲による絶え間ない攻撃が行われる。一年ほど前の太平洋戦線では日本列島に上陸部隊が展開されることもしばしばだったがニサエルの立て直しがおおむね成功し、今は艦娘は支援砲撃のための存在ではなく主戦力として運用されている。

艦娘がただの支援火器程度の意味しか成さないヨーロッパで一体何を学ぶのか?

「不満そうですね。自分には研修など必要ない?」

「嫌味っぽいこと言うな。ヨーロッパ方面軍から学べることがあるのか疑問なだけだ。」

「冗談ですよ。」

加賀は少しも顔の様子を変えずにすらすらと冗談を言う。

「それは失礼した。」

目的は分からないがその行動に悪意がないのは明白で、彼女が何かしら自分への評価を改めてくれたようで悪い気はしない。

「私が留守の間は君たちただけである程度の作戦行動をとってもらおうことになるが大丈夫か？」

「それは問題ないでしょう。私が言うまでもなくあなたが一番よくわかってるでしょう。」

知識の面でも戦闘の面でもボトムアップを意識して訓練をしてきた。攻撃されて怯み、反撃できない艦娘たちではない。特に心配はいらないはずだ。

「重大事態が発生すればまず近海警備群の指揮下に入ることになる。私は関知できない。頼むぞ。」

加賀は静かにうなずいて

「帰ってきたときあなたが不要だと言えるように頑張ります。」

冗談なのだろうか？

出来れば冗談であってほしい。村上は苦い笑みを浮かべる。

執務室に戻った村上は準備を一通り終わらせる。そこで気が付いたのだが誰かひとり艦娘を連れて行かなければならぬらしい。

普通は秘書艦を務めている艦娘を連れて行くのだろうが、どうにも不安だ。

いざというときは近海警備群の指揮官が本土から指示を出すらしいが毎日行っている軽い出撃まで手は回してくれないだろう。

そのため秘書艦ができる艦娘を連れて行くのは難しい。

「蒼龍。ついてくる気はないか？」

就寝時刻を過ぎ、加賀も自室に帰った静かな執務室で村上はそうつぶやく。

「ないですね。」

もしかしてとは思っていたがまさか本当にいるとは。

「理由は？」

「ヨーロッパの惨状をご存じですか？」

「AaronMankindか？」

蒼龍は頷く。

「連れていく人は考えたほうがいいですよ。いくら敵とはいえ無抵抗の深海棲艦の処刑があちこちで行われているらしいですから。」

「駆逐には見せられないな。」

「実年齢は変わらない場合もあるが駆逐娘に処刑を見させるのは何となく気が引ける。」

「なおさら君が来てくれるとありがたいんだが。人間の脳みそを吹っ飛ばすのは見慣れてるだろ。」

「見慣れてますが、抵抗がないわけじゃありません。」

「生物の死を冷静に何の抵抗もなく見ることが出来るのは精神病質者ぐらいだ。」

「飛龍……？」

「選択肢の中からなぜか一番問題を起こしそうな人物を選択してしまった。」

「私に何か用ですか？」

「しかも都合悪く蒼龍を探しに来た飛龍が執務室に入ってくる。」

「ねえ飛龍。ヨーロッパに行きたくない？」

蒼龍の目が怪しく光りなぜか飛龍を連れて行かせようとする。最近あの二人は仲がいいらしい。

「いや、まて。それはまずいだろ。」

村上がそう言うのと今度は飛龍がこちらを見て

「私がトラブルでも起こすと思ってるんでしょ。」

と見透かした様子でそう聞いてくる。

何となく彼女の胸の中で泣いている身として反撃しにくい。

「そういう訳ではない、こともないが。」

ある意味で言うなら、とんでもない指揮官に仲間を何人も殺されるまで我慢し続けた彼女は忍耐があるのではないだろうか？

そう言う事にしておこう。

妥協を重ね結局同行するのは飛龍になった。

出発の日になると、いい加減慣れた様子でいつものパイロットが輸送機を着陸させる。

「忙しい人ですね。」

「面倒ごとばかり起きるのでね。」

そう互いに軽く言葉を交わして輸送機に乗る。

今回はパイロットとではなく飛龍といろいろ話し込んだ。

彼女の過去についてもいろいろ聞いた。悪い話ばかりではなかった。

改二になるまでの彼女は優秀な教官の元、軍人の基礎を叩き込まれ、教官に尊敬すら覚えていたようだ。

練度が上がり、激戦地での戦いに十分対応できると判断されてからが地獄だったようだ。

「何があるか分らんな。」

「そうですね。まさか、掃き溜めの様な鎮守府に戦犯が送り込まれて、いろいろ反応を起こしてうまくまとまるなんて思ってもみなかったなあ。」

そう話し込んでいいうちに輸送機はパリに向けて着実にその行程を消化していった。

「花の都、パリー！」

到着早々異様なテンションで飛龍が絶叫している。こういうところを見るといくらひどい目にあっても心はまだ人間にしてみれば中学生程度でしかないことを実感できる。

「遊びに来ているわけじゃないぞ。」

「いいじゃん。あの狭い島から出るの久しぶりだし。」

まあそれもそうだ。

「竹野提督ですね。私は第3教育隊、補佐教官のマーリン・プルスです。この研修の担当者です。まずは講堂でヨーロッパ方面軍についてザックリ勉強してもらいます。迎えの車がそこまで連れていきますのでご心配なく。」

そうしてマーリンは手で車を示し乗車を促す。乗り込むと、運転手はフランス語で何かを言ってから車を走らせる。

車窓から眺めるパリはとても花の都には見えなかった。エッフェル塔は補修工事が行われていないのか、錆が目立ち、町のいたるところに血痕や銃弾の跡が残っている。

「いつからこんな状況に？」

「三年前、深海棲艦がイベリア半島に上陸してからです。それより前から深刻な難民問題はありましたがここまでひどくなつたのはそこからへんからです。研修が設けられた理由は分かりませんが、どうしても見せたいものがあります。いいですか？」

運転手の提案を受け入れると運転手は大きな幹線道路をそれて、かろうじて車がすれ違えるような道に入って行く。しばらく走り路肩に車を止める。

「少し待っててください。」

運転手は車の後ろに回りコートを引つ張り出してくる。

「軍の制服は脱いでこれを上から羽織ってください。」

それで今から見せられるものが何となくわかった。

飛龍はいつもの和装ではなく迷彩服に身を包んでいた。村上は飛龍にコートを渡して自分は制服の上を脱いだ。

「恐らくとんでもないものを見ることになると思うが、暴れるなよ。」飛龍も空気が変わったのをわかったのかただ頷いた。

運転手についていくと広場に出た。その広場を取り囲むように人が集まっていた。人だかりの中央には選挙カーのようなものが配置され、その上でいかにもカルトらしい服装の性別すら判別のつかない人間が立っている。

その人物はマイクを受け取りしゃべり始める。

「私たちは。ヒトだ。私たちは、ホモ・サピエンスだ。地球の構成員として私たちは栄光の時代を築いてきた。我らは繁栄すべくして繁栄した。弱い者たちを淘汰して、必要のない文明を破壊した。それを排斥された弱者たちは虐殺だ何だと騒ぎ立てた。間違ってる。彼らは

我らの慈悲に感謝すべきだ。しかし、私はかつての征服者たちに言いたい。どうして慈悲など与えてしまったのか！どうしてだ！」

「不完全だったからだ！」

「弱かったからだ！」

人々は熱狂し、叫ぶ。まさにカルトだ。

「その通りだ。かつての征服者は弱かった。劣等種を存続させてしまったのだ。劣等種に我らの尊大さを教えることは難しい。奴隷として搾取しつくして穢れた血で私達の新天地を汚した。インディアンを滅ぼすことが出来なかったアングロサクソンたちはブリテン島に取り残され、今、死を持っている。海峡トンネルを爆破した大統領は未来永劫、第二のナポレオンとしてその名を轟かせるであろう！」

新大陸でインディアンを搾取したのはフランスも同様だ。カルトによくあるそれっぽさだけの無茶苦茶な歴史だ。

「我らが劣等人種ではなく選ばれた人種であり続けるためには理性を捨てる必要がある。理性はヒトの感覚を鈍らせる。アリストテレスは言った。人間は社会的動物だと。しかし、時には野生に戻る必要がある。人間は社会的であり、暴力的であるべきなのだ！ヒトの知性が生み出す暴力。それこそが至高なのだ。化け物に頼る必要などない！」

「化け物たちに死を！」

「我々を裏切った弱者たちにも死を！」

また、人々は叫ぶ。演説者はゆっくりと何度も頷いて

「そうだ。裏切り者にも死を、我らの座を狙う汚い化け物たちにも死を与えるのだ！我々は正義などではない。返り血を率先して浴びる。だから、我らは理性を取り戻せない。我ら教団はこれ以上拡大しない。何故か？優秀な人種を残すためだ。私達の唯一の弱さは簡単に踏みつぶせる下等な人種にも慈悲を与え、自らの心を痛めてしまうことだ。だから、我らを正義として扱われなくていい。必要なのは、我らのこの偉大な事業に理解を示してくれることだ。賛成すら必要ないのだ！」

「大義のための犠牲に神の福音を！」

「私たちの穢れを見せよう。君たちは目を背けてはいけない。けれど、私の様に返り血を浴びる必要もない。」

演説者は目で合図を出し、すでに衰弱している深海棲艦を人々の前に引つ張り出す。

「見ろ！これが化け物だ。この化け物は我らの同志がヒトの力だけで捕らえたものだ。いま、ここで、ヒトの残虐性こそ地球の支配者たる根拠であると示す！我らの残虐性こそ、崇高であり、恐れるべき力なのだ！」

演説者が剣を受け取り天に掲げる。

顔を隠した白装束数名が押さえつけ、口に当てられた金具で深海棲艦の口を強引に開かせる。

「さあ！証明しよう！我らの力を！」

演説者はその剣を深海棲艦の口に突き刺し、そのまま頭を貫く。勢いよく血が噴き出し、演説者の着ている白装束を染めていく。深海棲艦の頭はうなだれ取り押さえていた数人も手を放す。

「暴力こそ我らの武器だ！何が理性だ！何が法だ！そんなもの、支配者たる我らの慈悲の塊！我らが慈悲を与えなければ化け物どもに居場所などないのだ！」

演説者はひと際大きな声でそう叫ぶ。

「暴力こそ至高。残虐性こそ我らの武器。暴力こそ至高。残虐性こそ我らの武器。暴力こそ至高。残虐性こそ我らの武器。暴力こそ至高。残虐性こそ我らの武器。」

人々は何度もそう繰り返し、大合唱となっていく。

ただ、ただ、飛龍がフランス語を理解できていなくてよかった。そう思った。目の前で深海棲艦が串刺しにされ、ぎよつとしていたが何を言っていたのか理解していない様で何よりだ。

「これが Aaron Mankind ですか？」

「ええ。でもこれはまだましな方です。彼らは駆逐艦娘と姫級の敵を決闘させ我ら防衛連合軍の弱さを説き、その姫級を大量の薬物で弱らせた後に同じように殺害する。そうして自分たちの優位性を説く。なんてこともしばしばあります。」

深海棲艦、艦娘ともども外皮以外は普通の生物と同じような強度し

かない。実際、防衛連合軍の士官が艦娘の抵抗を受けた時のマニユールには口、または目を狙うように書かれている。

けれど、そんな状況に持ち込むのは至難の業だ。

顔を隠していたからわからないが先ほど、深海棲艦を押さえつけていたのはどうせ艦娘だろう。

「わかっていませんね。それこそ残虐性ですよ。」

恐らく教団の一員とみられる白装束が一人話しかけてくる。

フランス語で話していたのがまずかった。

「防衛連合軍の方々でしょうか？あなたたちこそ真に優秀な方々です。けれど、あまりに優しすぎるのです。その優しさを解放しましょう。そうすれば妙案が見えてくる。我らヒトは破壊の限りを尽くせるのです。それが支配者の権利であり、支配者を理解しない奴らへの慈悲です。身の程を知り死んでいく。上位存在に殺されるのです。あなたはキリストが死をお与えくださったとき憎悪をいただきますか？違うでしょうか。」

運転手は任せてくれと言った様子でこちらに目配せする。

「その通りです。私たちに必要なのは残虐性だ。すぐに戻って艦娘たちに最期の祝福を与えるとしましょう。さあ。」

運転手はこちらに手を差し伸べる。村上もうまく合わせて

「そうですね。なぜあんな化け物を兵器としてでも使ってしまったのでしょうか。彼らは何の意味もなさない劣等種だ、行きましょう。」

白装束は満足そうに頷きながらこちらを見送る。

車に戻ると運転手はすぐに車を出す。

しばらく走ってから、

「アジアやアメリカではまだ教団の影響力はないと聞いています。新人士官にどうにかできる問題ではないことは分かっています。それでも、このままではヨーロッパ方面軍は深海棲艦との戦いではなくほかの原因で壊滅するかもしれません。そうならないことを祈ります。」

ほかの原因。想像もしたくない。

「早急に大規模作戦を成功させて防衛連合軍の権威を回復させる必要

があるでしょうね。」

「それをしようとして私は運転手に降格させられました。私は優秀な将校ではありませんでしたがそれなりにプライドを持って仕事をしていますから。」

運転手がなぜあの場所に自分たちを連れて行ったのかわかった。

「あなたの意思を継げるように頑張ります。」

「お願いしますよ。村上さん。」

村上……？

「昔君に会ったことがあるか？」

「ええ。私が士官学校を卒業したときあなたがスピーチをしてくださいました。私も雰囲気似ている人だな程度にしか思いませんでした。でも、新人士官があの場合でとんでもないものを見せられて最初に「あれがカルト集団か？」なんて冷静に聞きませんよ。」

新人士官にしては冷静すぎるということだ。言われて見れそうだ。そもそも、新人士官にしては歳を取りすぎだ。

「さつきから何を話してるのかさっぱりなんですけど。」

運転手と話していると横から文句が飛んでくる。

真実を教えるのはまだ早いかもしれない。

「パリの観光名所について話してる。」

「いや、絶対うそでしょ。」

飛龍は不満そうな顔でこちらを見てくる。そんな顔で見られても話しはしないが。

「おっ。」

「そうです。あれが防衛連合軍ヨーロッパ支部統括指令センターです。」

日本にある高層のビルとは違いひらつべたい建物が見えてきた。

ヨーロッパ方面軍は何を教えてくれるのだろうか？

N o b o d y

ヨーロッパ方面軍の基地に入り、すぐにこれではまともに戦えないということが分かった。

士気があまりに低すぎる。

艦娘の士気だけではない。士官の士気も低く、まともに指示を出そうという気概が見られない。

ヨーロッパでは防衛連合軍の居場所などなかった。

海岸を守り、守護神として君臨しているのはレオパルド3A2というドイツ製の戦車だ。

モジュール式装甲により高い生存性と整備のしやすさ、それに物量を出すことにも成功して、質と量、ともに高い水準にある戦車だ。化学弾運用能力が高く、初速を調整することで特殊な弾頭が破損することを防ぐこともできる、はなから戦時国際法を守る気などない戦車だ。

そもそも敵がハーグ陸戦条約などの戦時国際法に批准しているわけではないから問題ないということなのだろうか？

そんなことはどうでもいいが、そんな存在がいるせいで相対的にヨーロッパでの艦娘に対する評価はひどい。

イースターマンデー作戦で国連軍はベルファストに橋頭保を確保したが、一方の防衛連合軍は敵の補給線に対する攻撃を止められず、上陸した部隊の充足状況はみるみる悪化した。

結果、上陸から半月もたたずに燃料切れで戦車は停止、戦車数百両を放置し国連軍は後退を開始した。それでも十分な補給は行えず、アイルランド国防軍もIRAもダブリンを放棄したことを受け、もはやアイルランドでの勝敗は決したとして国連軍は速やかに撤退を開始した。

しかし、防衛連合軍へ撤退が通達されることはなく連合軍は意味もなくアイリッシュ海での戦闘を続け消耗した。

事実かどうかは知らないが、国連軍内で防衛連合軍への反感が強くなり意図的に撤退を通達しなかったのではと言われている。

そんなこともあり、防衛連合軍は国連軍の小間使いに成り下がっている。

戦果も挙げずに足を引つ張る。ヨーロッパでは防衛連合軍はただのお荷物だ。

「それではこちらへ。」

研修にきた新人提督たちが集まり、教官補佐が案内を開始する。

「ヨーロッパでは我々がすることは決まっています。上陸後の敵を効率的にたたくことです。」

一度上陸してしまえば深海棲艦だろうが艦娘だろうが機動性は大きく下がる。

人間の方は地雷を埋めて鉄条網で海岸をかため、野戦砲や迫撃砲をあらかじめ用意しておけばいいだけだ。

陸上で戦うなら勝機はあるが、敵が海上で生活をしている以上、勝利するにはいつまでも引きこもってはいつまでたってもこの戦争は終わりはしない。

そうやって説明したところで、あんなカルトが流行っているヨーロッパで防衛連合軍が勢いを取り戻すことは難しいだろう。

「我々は国連軍と共に、人類と艦娘の連携によって強力な防衛陣地を形成することに成功しています。」

聞こえはいいが実際は違うだろう。

連携などではなく、依存というべきかもしれない。

守るべき対象者が自らを中傷する。中傷はどんどん具体的なものになり、士官たちは目立つことを極度に恐れるようになった。

そこからは悪循環だ。目立つことを避ける士官のせいで、戦果は挙げられない。戦果が挙げられなければ、いつまでたっても評価は改善しない。

「私たちがとらえているビジョンは、より先進的でリベラルなものです。人間であるか艦娘であるかの区別はない。」

そう言い張る。言いたいことは山ほどある。

第一、国連軍は命を削って戦っていることをアピールするが、難民の命を燃料や弾薬に変えているに過ぎない。

先進的でもリベラルでもない。植民地軍を激戦地で戦わせた昔の列強と変わりない。

「さて次は司令部です。」

教官補佐がそう言って司令部への案内を開始したとき、基地敷地内にサイレンが鳴り響いた。

「どうやら敵襲の様です。皆さんはやくシエルターに向かいましょう。」

言われるがままにシエルターに向かおうとしたとき、純粋な目で教官補佐を見る新人提督が言う。

「私たちは軍人であり研修のためにここに来たのです。差し支えなければ指揮の様子を見させていたいただきたいのですが。」

教官補佐は微妙な顔をするが、その提督に同調するようにほかの提督たちも口々にお問い合わせをする。

竹野にはどうせ学べることなどないと思えなかったが、行くだけなら行ってみてもいい。それに海岸を持たないパリにすぐに攻撃が来ることなどあり得ない。

一体どうしてシエルターに誘導したのかさえ不思議に思えてくる。

「私も賛成です。」

竹野は一人だけ明らかに異質だった。新人と呼ぶにはあまりに歳を取りすぎている。

若く見られることの多い彼でもさすがに二十代だと言い張るのは少し難しい。そんな特殊な新人も賛成を表明したこともあり教官補佐はもはやあんなせざるを得ない状況に陥った。

「わかりました。」

しぶしぶ、教官補佐は承諾した。

「ル・アブルでは国連軍の展開完了の報を受けました。」

司令室に入ると竹野たちの相手をする暇がないと言った様子で報告や指示が飛び交っていた。

「問題なのはシエルブルの方だな。」

「ええ。前の戦闘で国連軍がコタンタン半島南岸の砂浜に移動して、

到着までには時間がかかりそうです。」

ただでさえ平野が多く、アメリカの様に国土の広さに物言わせて戦えるわけでもないヨーロッパは必死なのだろう。しかし、少し思っていたものとは違う印象を受けた。

国連軍の物量が思ったよりも少ない。アメリカが国連軍から離脱しているということもあるが、それにしても少ない。

今回上陸してきた敵の目的は沿岸地域の破壊程度が目的の部隊で、橋頭保を確保するには貧弱な部隊だ。

その程度の部隊なら港に十数台の戦車を配置すればかなり侵攻を遅滞できると思うのだが、国連軍は機動的に部隊を運用しすぎている。

「国連軍到着まで3時間です。」

「市民の避難は？」

「避難誘導を実施できていません。それに今避難させるほうが危険です。」

そもそもの疑問だが、どうして衛星監視システムや無人高高度偵察機をもつても敵の進行が開始されてからしか対策できないのか？

「教官補佐。失礼ですが、ヨーロッパ方面軍は戦闘前の情報戦で優勢を確保できていると思えません。」

教官補佐は不愉快そうな顔をして言う。

「厳しい質問ですね。原因は、そうですね。しいて言うなら、敵の上陸地点を絞り切れないと言ったところでしょうか？」

「それは、つまり。敵の上陸の目標が不鮮明だからということですか？」

「逆に、誘導してやればいいという話も出たのですが……」

深海棲艦は人間と違い、陸上で生活する必要はない。出所不明の敵であるが少なくとも陸上に何か施設を持っていなければ生きていけないわけでもない。

彼らには領土が必要ない。ならばなぜ上陸するのか？

ヒトを減らすためか？恐怖を与えるためか？

最終的に深海棲艦がどこにたどり着きたいのか不透明なのだから、上陸して何がしたいのかわからない。

だからある時は港に上陸してくるが、またある時は砂浜に上陸してくる。それに対応するには沿岸全てに部隊を配置する必要があるから無理だということなのだろう。

確かに国連軍だけでは厳しいだろう。しかし、深海棲艦はどこに上陸するかわからないということはある意味彼らはどこに上陸してもいいということなのだろう。上陸するということに意味がある。

ならば、艦娘たちを使つて誘導してやればいい。敵が上陸までなるべく接敵を避けるなら追い回して誘導してやればいいし、敵がこちらの艦隊を殲滅することを望むなら海岸にそつて国連軍の攻撃可能範囲におびき出せばいい。

やつてみたけれどもうまくいかないのではなく、変わったことはしたくないからやっていない。今の状況から見るとそういう意図があるのだろう。

「これ以上戦犯にならないためですか？」

「ええ。」

批判を恐れる軍隊はもはや終わりだ。それは敗者の軍隊によくみられる。

逆境こそ軍隊が力を発揮せねばならないときだが、そこから逃走するような軍人ばかりではいつまでたつても改善しない。文句は山ほど出てくるが、自分もそこから逃走した一人ではあるのだ。

そんなことを考えていると、

「暴動が……」

モニターを見ている指揮官の一人がそうつぶやく。暴動？一体何のことだ。

「全員シエルターに！」

どうということだ？まさかこれが起きるからシエルターに案内しようとしていたのか？

教官補佐を追いかけ司令部棟を出ると、大合唱が聞こえてきた。

「裏切り者に制裁を！残虐性こそ我らの武器！裏切りものに制裁を。」

残虐性こそ我らの武器！」

Aaron Mankind。敵が現れ司令部が混乱状態にある時を狙ってやってきたのだろう。

「いつもあるんですか？」

目の前で立ち尽くしていた教官補佐にそう聞く。彼は頷いたがどうも様子がおかしい。

「いつもは制裁というのは言いません。艦娘を差し出せ。そんなことを言うんです。もしかしたら。」

嫌な予感は的中するようで、衝撃波と大きな爆発音があたりに響き渡った。

ヨーロッパ支部庁舎の二階部分が吹き飛んだのだ。

それを皮切りに一斉カルトによる攻撃が開始された。メインゲートを警備していた憲兵が殺されるとすぐに防衛連合軍は瓦解した。当然、ここにいる艦娘は研修に同行していた飛龍やほかの艦娘のみでロケット弾や機関銃で武装したカルトに対抗できる武装はない。

「武器庫はどこです？」

教官補佐にそう聞くが明らかにうろたえて、目の焦点が合っていない。

「移動するぞー！」

そう、研修生たちに声をかける。一部の研修生たちはすでに移動したようでそこにはいなかったが、教官補佐を引っ張り、装備開発棟に入る。試作の装備があるかもしれない。

「飛龍。とんでもないことになったが、人間を撃てるか？」

竹野からしてみれば別勢力に攻撃を受けている中、同族殺しなどしたくないのだが、秩序を破壊するカルトに慈悲を与える必要などない。

「多分大丈夫だけど。どうなってるの？」

飛龍はかなり冷静であるように助かる。

「私にもわからん。」

竹野は電話を取り、ニサエルに電話をかける。しかし、すでに通信網の破壊まで実行されたようでつながらない。

カルトの起こした暴動にしては手際が良すぎる。

装備開発棟の一階でしばらく息をひそめていると、教官補佐が正気を取り戻したようで

「この地下にシェルターがあります。そちらに移動を。」

そう教えてくれた。

「聞いたな。移動しろ。」

竹野はそう言うが、彼自身はシェルターには向かわずに飛龍と共に別行動を開始した。

どうにもシェルターにこもっているだけは解決するようには思えない。

「何か使えそうな装備を探すんだ。」

一階には大量の工作機械や試作段階の装備が大量に並んでいた。

人間に扱える代物ではないが、飛龍なら行けるだろう。

「これなら頑張れば使えるかも。」

そう言って彼女は中口径の主砲を取る。

村上もおかれていた装備の中から使えそうな物を選び、護身用に誰かが隠していた拳銃も見つけ出した。

「よし、移動するぞ。」

二人は装備開発棟から静かに抜け出す。

基地敷地内はそれなりに広く、まだカルトがここまで到達してはいなかった。遠くでは通信設備が炎上しており、ヨーロッパ方面軍の指揮系統が完全に崩壊したことをありありと見せつけてくる。

竹野たちがさつきまでいた司令部棟にはロケット弾が大量に撃ち込まれ、半壊していた。

銃声が鳴りやむことはなく、戦車砲の音まで聞こえてくる。

本当にとんでもない事態に巻き込まれた。

ラッコエは難しい顔で部下と部屋の隅で隠れていた。

自分が何を間違えてしまったのか？司令長官に電話をしたことだろうか？

もしかしたら司令長官が何かミスを犯したのかもしれない。そんな

なことを考える暇があるなら現状を打破する方法を考えるべきなのかもしれないが。

「中隊長。司令部棟が半壊しています。通信網破壊もあり指揮系統が崩壊したものだと思われまます。」

「わかった。無線のチャンネルをクーデター対応のものに切り替える。」

そのチャンネルでは同じく憲兵隊でチャンネルの存在を知っている人間としか話せないが敵に場所がばれるよりはいいだろう。

「切り替えました。呼びかけますか？」

「当然だ。」

「こちら憲兵第十三中隊、over All Station over」

応答はない。この基地に駐屯している憲兵は30人程度だがその半数以上がメインゲートで射殺された。もしかした今も撃ち合っているのかもしれない。

「呼びかけを続ける。」

部下にそう指示を出し、携帯用ドローンで偵察を開始する。憲兵隊の標準装備ではないが持つていてよかった。

偵察を行うと大抵は知らなければよかったと言いたくなるような情報が得られる。

今回も例外ではなかった。

敵は旧式の戦車20数台、重装備の歩兵60人、ゲリラのような軽歩兵が数百から千人程度だ。化学弾は少なくとも使ってきていないが、艦娘がいないのだから脅威は同じだ。

「中隊長！応答が！」

部下がどうやら呼び出しに成功したようだ。

「所属を聞け。」

「所属を名乗れ。」

「どうやら研修に参加していた一人らしいです。」

研修にきた新人提督、あるいは情報部員か？

「変われ。」

ラッコエは無線を受け取る。

「私は第十三憲兵中隊中隊長のオーマー・ラッコエだ。情報部員か？」

「情報部？いや違います。」

ならいったい何者だ。

「貴様何者だ？」

「南鳥島鎮守府の竹野です。新人提督は嘘ですが情報部とは関係ないです。」

南鳥島？新人でないとしてもなぜこの周波数を知っているのか？

「なぜこの周波数を？」

「危機管理意識が低いからです。国連軍の時と非常時のコードが変わっていない。昔はそれなりの役職にいましたから知っているんです。」

怪しいには怪しいが、少なくとも敵ではなさそうだ。

「わかった無線はこのままで待機してくれ。」

「copy」

怪しかろうが味方は多い方がいい。

必然の一致

「そこまで不本意なことじゃありませんよ。」

ニサエルを問い詰めても反応は薄かった。

彼はインスタントのコーヒーを入れながらめんどくさそうにして
いる。

「ムーン。君はそんなにめんどくさい人間でしたか？」

いつもならニサエルが何をしようとする自分を出すことはない。あくまで彼の駒に殉ずる。

しかしいくら何でも今回はそうはいかない。今回はすでに死者が出ている。それもヨーロッパ方面軍の幹部が相当数死んだ。

さらに通信網が破壊され情報が錯綜しているが、カルトによる防衛連合軍施設への攻撃が世界各地で起こっている。

にもかかわらずこの状況でも黙ってついて来いと言うのか？

「らしくない。君は薄情で冷徹でできれば個人的な関わりを避けたいタイプの人間だ。それでも制御不可の状況で高を括るような人間ではなかったはずだ。」

「制御不能？制御不能な事態であるのなら私が打つ手はどちらにせよありませんよ。」

いまだに制御下にあるということなのか？

それが強がりだとは思わないが、いま彼女の頭ではニサエルが何を
考えているのかわからなかった。

同時刻 フランス パリ

「了解しました。非常電源の扉の前で合流しましょう。」

ラッコエは素早く指示を出し、部隊の移動を開始する。

「アリー！憲兵第1中隊はどこにいる？」

「ノルウエーで提督殺しが発生してその対処に向かいました。」

ヘリボーン可能な特殊訓練を施した治安維持のための艦娘部隊。
海岸にしかない鎮守府からではとても間に合わない事案に対処する
即応部隊だが短距離の無線機ではとても呼びつけられない。

「ならどこにならまともな部隊がいる？」

ラツコエは大規模暴動に対処できない防衛連合軍の体制を問題だとして上官に訴えたこともある。彼女は防衛連合軍が発生した事態に対処できないことがわかっていた。

恐らく攻撃されているのはここだけではない。ヨーロッパで自分たちを支持する人間などごく少数だ。

「竹野提督！合流は何分後ですか？」

「二分以内に合流ポイントに到着します。」

「アリー。合流次第この基地を出る。」

アリーはラツコエの言葉に驚いたようで、

「いや、しかし。私たちがここから撤退すればわが軍の威信にかかわります。」

「どこに威信がある？いいか、ここで私たちが時間を稼いでもわたしたちには抵抗する能力などない。」

「ここには艦娘がおらず、戦力がありませんが鎮守府なら別です。旧式の戦車数十台なら簡単に破壊できるでしょう。」

アリーは状況を理解していない。

「交戦規定を忘れたか？」

防衛連合軍には「いかなる場合でもヒトに危害を与える攻撃、あるいはそれに準ずる行動を禁止する。」そんな記述がある。

この規定を破棄する権限を持つ司令官はついさつき死んだ。通信網は破壊され、各鎮守府の責任者がこの攻撃に対応する必要があるが、恐らく誰も交戦規定を無視してまでも攻撃を実施しない。

Aaron Mankindは元防衛連合軍士官であつても自らに服従すればそれを受け入れる。

服従した彼らに、反人類主義者たちに騙された哀れな子羊として証言を行わせ、自らの正当性をより強固なものとする。それがAaron Mankindのやり方だ。

それを多くの士官が知っている。責任問題となる同族殺しなど指しせず、彼らに屈服すればいい。

それを許さずに、抵抗しようとする勇敢な人間はこんな組織など

とつくに見限っている。

「しかし。」

アリーはそれでも反論しようとするが

「ラッコエ中隊長ですか？」

それを遮り竹野がラッコエに話しかける。

「そうだ。竹野提督だな。まずこの基地に侵入してきたカルトどもを追い払う。」

「具体的にはどうやって？」

正攻法で勝てる量の敵ではない。飛龍にすべてやらせるとしても無理がある。

「恐らく敵はただの素人の集まりじゃない。通信網破壊に旧式ではあるが戦車を運用する能力すら持つてる。的確に第一射を司令部棟に打ち込んだ上に何の迷いもなく抵抗した憲兵を射殺した。元軍人あるいは、傭兵か何かだろう。」

可能性の話をするなら国連軍が匿名の志願兵を集めて人員を貸した。なんてことも十分あり得る。

「相手がプロならなおさらどうしようもないのでは？」

「たとえプロだとしてもこの基地内に地雷は配置されていないしこんな都市部で化学弾使用などさすがにあり得ない。」

「ならどうします？」

「まず、憲兵隊事務局に向かう。そこからヘリボーン可能な特殊部隊を要請する。」

通信網は破壊されているはずだが？

「通信網は破壊されてるはずですが？」

「私たちは憲兵隊だ。ヨーロッパ方面軍が司令部の命令を無視したとしても対応可能なように特殊回線を準備してある。違法な高出力通信機でヨーロッパなら大体どこにでも届く。」

味方こそ敵であるという憲兵隊らしい準備の良さだ。

「それでその後は？」

「基地制圧後、非常用回線でヨーロッパ全域に抵抗を命令する。」

権限がないのは百も承知だが仕方ない。それでもしなければどれ

だけの艦娘が殺されるかわからない。

「先導は私が。」

アリーが先導を申し出て四人は進み始める。相手がプロであるため進軍はかなり慎重で未だに基地全体は敵の支配下に置かれてはいなかった。

しばらく進むと、後方支援隊が装甲車で区画を封鎖していた。

こちらに気が付いた部隊は装甲車の機関銃をこちらに向ける。

「憲兵第十三中隊のラッコエだ。」

ラッコエはそう叫び銃を上に掲げながらゆっくり物陰から出て前に進む。

「確認しました。」

装甲車の傍にいた士官の一人がそう叫ぶ。

それを確認して三人もゆっくりと物陰を出る。そのまま装甲車の傍に駆け寄ると

「状況は？」

そう士官が聞いてくる。

「メインゲートの憲兵は私たち以外全滅だ。ほかの部隊とも連絡が取れない。壊滅したか戦闘中かどちらかだろう。」

「わかりました。私たちも今は封鎖を続けますが敵に戦車があります。シエルターからの引き上げが終わり次第シャルルドゴール空港から輸送機でローマの地中海支部に飛ぶ予定です。」

ラッコエは目を細め

「ローマは安全なのか？」

そう聞く。士官は答えて

「少なくともここよりか、うまくやっているはずです。」

比較的イタリヤは防衛連合軍への怒りが小さい。自国の損益にそこまで関わっていないこともあるが地中海司令はかなりの穏健派でありヨーロッパでは数少ない有能な士官だ。

確かにここよりはましだろう。

「そちらはどうします？輸送機にはまだ空きがあるはずですが？」

「私は残る。ここを制圧してヨーロッパ全域に交戦規定の破棄を命令

する。」

「司令部棟はすでに崩壊してますが？」

「問題ない。衛星通信車が北2番倉庫にある。そこを取り返す。」

「了解しました。しかし、通信設備はローマにもありますが？」

そう疑問を示す士官に対して

「権限が違う。司令部の権限を示すコードを送信できるのは司令部棟と倉庫の通信車じゃないとだめだ。」

と竹野も疑問に思っていたことを答える。

「わかりましたご武運を。」

そう言つて士官は部下に合図を送りライフルを四丁もつてこさせる。

「私にできるのはこれぐらいです。後は頼みます。」

「感謝するよ。」

ラッコエは手早く別れの挨拶をしてライフルを構え憲兵隊事務局へ向かう。しかし、すでに事務局のある総務棟は制圧されている様子で頭の後ろで手を組んだ事務員や士官がぞろぞろと連行されているのが見えた。

「竹野提督。狙撃できますか？」

ラッコエはそんなことを言い出す。アサルトライフルの一般的な射程は400メートル。銃の性能の話をするなら狙撃はできる距離だが中距離の狙撃にはそれなりの技能がいる。

「自信はありませんが。」

「なら私がやる。」

そう飛龍が言い出す。

「できるのか？」

何の違和感もなく英語で返すが、英語喋れたのか？

今までの会話を普通に聞いていたのか？意外だがこの際どうでもいい。

「なら頼む。」

飛龍の射撃の腕前は対空砲の命中率と言う参考にならない数値しか竹野はもっていないが彼女が大丈夫というなら任せよう。

飛龍は両足を開きべつたりと地面に固定して射撃の姿勢に入る。
ラッコエは双眼鏡を除き射撃の機会をうかがう。

そこから中に銃声が響いており銃声だけでこちらの位置がばれたりすることはなさそうだ。

「右前方、黒の帽子の軽歩兵。距離は70。こちらのタイミングで射撃してください。」

竹野もその目標を見る。目的もなくふらついている様子だ。恐らく見張りだろう。近くに車両がいるが動きからしてもうじきどこかに行きそうだ。

「よし。撃て。」

車両が離れ、ラッコエが射撃の指示を出す。飛龍の撃った弾丸は軽歩兵の頭を撃ちぬく。

軽歩兵はその場に倒れるがそのそばに駆け寄る敵はいない。

「やっぱりな。敵には占領状態を維持できるだけの数はない。ここにかけてるのは寄せ集めのカルトじゃなくて訓練された少数の精鋭部隊だ。」

たかがカルト。そうは言えなくなってきた。各地で鎮守府に攻撃を仕掛けているのはカルトの信者だろうが、このカルトには別の顔があるのだろう。

「よし前進するぞ。」

軽歩兵の脈を確認した後基地内の道路を横断して総務棟に向かう。総務棟の入り口が見える草むらに入り再度索敵をする。

「建物内にいる敵は分かりませんが入り口の二名以外には敵は見えませんが。」

「この距離で撃てば中にも敵がいたらさすがにばれるんじゃない?」

飛龍がそう言うがまさにその通りだ。

「事務局は何階ですか?」

ラッコエに聞くと難しい顔をして

「一階だが中央の左寄りの部屋にある。」

ヨーロッパ支部には平べったい建物が多く、いくら一階であっても中央の部屋であるならそれなりにリスクが高い。

「飛龍。いざというときは撃て。ラッコエ中隊長、来てくれますか。」
素晴らしいながら竹野はライフルを置き拳銃のチェンバーを確認する。

「了解した。」

ラッコエも意図が分かったようでライフルを置き軽装になる。

そのままハンドサインで建物に近づき窓を開ける。総務棟は重要度の低い施設であるため一階の窓に鉄格子がついていたりはしなかった。

竹野はペーパーナイフを握り建物内に入る。小部屋に入り耳を澄ませると足音が二、三聞こえる。

足音から距離を計りペーパーナイフに相手の目に光が当たらないように注意しながら相手の影を反射させより正確な動きを探る。

一階には廊下が三つありしばらく待機が続いたがようやく敵が現れた。

こちらを向いていないことを確認してからみると、軽装歩兵がそこにいた。

装備の質に合わないほど落ち着き慣れた様子で廊下を歩いている。

竹野は背後から近づき脇に手を入れ締め上げる。持っていたハンカチを敵の口に押し込み黙らせてそのまま締め落とす。音を立てないように引きずり、空き部屋に放りこんでおく。

ラッコエはその隙に無線を取りに行ったようで
ハンドサインで撤退を示す。

その指示に従い建物を出る。出た後もラッコエは静かに位置を変えようやく口を開く。

「いってなかったがかなり強力な電波が出る。もしかしたら敵に検出されるかもしれない。」

と今さらなことをいう。

「1000Wでもあるんですか?」

冗談めかしてそういつてみるがラッコエの持っている無線をみて竹野は絶句した。

現代では考えられないぐらい巨大なバッテリー付きのごつい無線

だったからだ。

「いや、1500Wだ。」

そこまでワット数があるとなると大概の電子機器に不具合が出るだろうし携帯型の電子戦装備と思われるも仕方ない。

「今さらですよ。手早く通信を終わらせましょう。」

ラッコエは頷いて電源を入れる微かに感じ取れる程度の高音が聞こえ無線は起動する。

アリーが周波数を合わせると

「all station this is site Q2 over」

site Q2そんな呼称は初めて聞いたがHQの略だろうか。ヨーロッパに2が割り当てられているのも不思議な感じだ。

「site Q2? OK. This is Zulel4 この回線は秘匿回線だぞ。それにsite Q2は陥落したとの報を受けている。」

そんな叫びが聞こえてくる。どうして秘匿回線など知っているのか?この女何者だ?

「Zulel4、私は憲兵第十三中隊中隊長のオーマー・ラッコエです。力を借りたいんです。」

「きみ出身はどこだ?」

最初は迷惑そうな声だった男の声色が変わる。

「ブルガリアのバルナですが?」

「確認した。暗号化されていないから詳細は話せないが今そっちに向かってる到着は四十三分後だ。」

「どういうことだ?」

「待ってくれ何者だ?」

「マーズですあの会議ぶりですね。村上さん。説明不要でしょう。そういうことです。」

無線越しにもいたずらっぽくしゃべり不快感を与えるのは一種の才能だ。

やっぱりそうだ。ニサエルが手を回している。

「ラッコエ、権限コードは受け取りましたか？」

「ええ昨日。」

権限コード？

ニサエルは司令部が混乱状態に陥ることも各鎮守府が自発的に行動しないのも織り込み済みなのか？

であるならばどうしてあらかじめこの混乱を防がないのか？

謎が山ほどある。

「聞きたいことが山のようにあります。」

必然といえば必然だが面白いほどラッコエと竹野の声は重なっていった。

「真実の探求よりも今はここからとつと立ち去ることを考えてください。」

アリーと飛龍は大急ぎで無線をしまい移動を開始していた。

竹野とのラッコエも急いでその場を後にする。

不自然な謀略

急いで移動を開始した一行だったがそれでも遅かった。強力な電磁波はすぐに検出され場所も簡単に特定されていた。軽歩兵数十人が駆け付けた。

竹野は区画を分ける低木の陰に隠れながら応戦する。

「飛龍、カバーしてくれ。」

そう言うと飛龍は敵から見える位置に飛び出し、機銃掃射を受け止める。

小口径の機銃で傷がつくほど艦娘はもろくない。

マズルフラッシュで敵の位置を正確に把握し、一発で仕留める。

しかし、銃撃戦をしていけば、いくら銃声が鳴り続けている基地内であっても増援がやってくる。

その増援とまた銃撃戦をする。それではいつか対応ができなくなるのが目に見えている。

「ラッコエー！何とかならないか？」

低姿勢でライフルを構えながらゆっくりとラッコエは後退している。

「このまま後退してデータセンターに入る。あそこなら頑丈だしコードを知っている人間じゃなければ入れない。」

竹野がラッコエの後方を見るとバンカーのようなものがあつた。

「了解。カバーするから開錠は頼む。飛龍！開錠中のラッコエの前に立って彼女を守れ！」

「了解。」

駆逐の主砲で建物ごと敵を吹き飛ばしながら彼女は答える。

負けじと竹野、アリーも攻撃を続ける。

しかし、主砲を撃つたのがまずかったのか戦車の音が近づいてくる。

「ラッコエ早くした方がいい。」

そう声をかけると

「ならカバーして！」

彼女は叫びながらバンカーの前の物陰から射撃を続ける。

攻撃の激しさが増している。状況の打開策がないと、このまま押されるだけだ。

「飛龍！信管をセットして適当な方向に砲弾を投擲しろ！」

射撃音がならなければ遠くからの攻撃だと錯覚する。それで警戒が分散してくれば一瞬だが、時間稼ぎにはなるだろう。

「よくわからないけど了解。」

飛龍は砲弾を適当に数発投げる。遠くから聞こえてきていた戦車の音が一時的に止み歩兵による攻撃も若干薄くなる。

その間に竹野とアリーはグレネードを投げる。基地内の道路が破壊され土がむき出しになる。

ここ数日パリがどんな天気だったのかは知らないが幸いにも土は乾燥していた。

その土を射撃して砂埃を舞わせる。意図を把握した飛龍はラッコエを物陰から引っ張り出しバンカーの扉に導く。

そして彼女に覆いかぶさるかのようにバンカーの壁につき盾となった。

砂埃が徐々に晴れ混乱も收拾して再び射撃が再開される。だがそこにはもう誰もいなかった。

「センター。こちらオスカーチーム。目標を喪失。敵は三人と一匹だ。練度は高い。部隊の半分がやられたこつちに人を送ってくれ。」

「オスカー。こちらセンター。増派の要求を受諾した。それと今後の指示を出しておく。」

「さて。部下の無線をすべて回収していない。周波数変更を要求する。」

「了解変更する。All Station 周波数をグループ4Bに変更せよ。」

バンカーの中で聞き耳を立てていた三人と一匹は残念そうにする。

「まあいいさ。これはカルトの暴走じゃないことの証拠になる。」

ラッコエはアリーの方を見る。

アリーは手に持っていたボイスレコーダーを振りにやりと笑う。「それで。これからどうする?」

竹野は首を右、左、とかしげて見せる。

「これからすることは簡単だ。ニサエル司令長官が連れてきた謎の部隊で基地を奪還。その後ヨーロッパ全域のカルト制圧を命令するだけだ。」

その命令だけで提督たちが Aaron Mankind に抵抗してくれるとはどうにも思えない。だがそれを信じる以外にほか方法はない。

「君はニサエル司令長官を知っているのか?」

ラッコエはそう聞いてくる。

「何度かあったことがある程度です。」

「そうか。なら聞くが、味方に裏切り者がいるとわかった上でいかにも怪しげな研修を実施するほど無能なのか?」

「どういうことです?」

確かに突然、研修だと言われてヨーロッパに呼び出されこのごまだ。当然ニサエルが何かしら仕組んだことは間違いない。だが裏切り者とはどういうことだ?

「私は一週間前、司令長官に電話をかけました。Aaron Mankind と通じている幹部がいると。名前はアーサー・マクドネル。かなりの権限を持つヨーロッパ方面軍トップ5には入る男です。」

「どうして裏切り者だと?」

「まず問題となったのは定期の精神鑑定でした。彼の考え方に少し危うさが見えました。私はすぐに彼を調べましたが、彼は幹部で私はただの憲兵でしかない。当然のように憲兵隊は彼の異常な行動を黙認しました。」

「それで何がわかったんです?」

「証拠はありませんでした。彼の行動記録は改ざんされていた。けれど彼はすべての下士官にまで影響を与えていたわけじゃない。それにかかわる人間が多くなればそれだけ秘密が露呈する可能性は高まる。だから下士官への尋問で何回かの不審な外出を確認できた。そ

の外出の日と、情報屋から入手したAaronMankindの集会のあった日が完全に一致した。さらに、情報屋に調べさせるとAaronMankindにはKingと言う名を持つやけに防衛連合軍の内部事情に詳しい信徒が確認された。」

アーサー王からとったのだろうか。」

「でも顔を確認すれば簡単なのでは？」

「一般的な集会とは別の暴力の実行者たちの集会がある。そこでは思考以外の情報を排除して人間の精神のみで対話するために顔はマスクで隠す。彼が所属していたのはそこだ。そう簡単な話じゃない。」

暴力の実行者達。汚れ仕事を請け負う真の意味でのヒトとでも言いたいのか？

「それで、そのアーサー・マクドネルは今日はどこにいたんだ？」

「居場所が確認できていない。」

まさかこの基地に来ていないのか？そうであるならば、ほぼ確実に裏切り者だ。あまりに偶然が多すぎるだろう。

「それで君から見てニサエルはどんな人間に見えていた？」

「彼を裏切りや謀略で出し抜くのは相当困難です。彼は元情報部で恐らく戦争前からどこかの国の情報機関で働いていた。彼は意図的に捜査が行われていることをほめかしたという事でしょう。」

「なら司令長官も裏切り者だと？」

「その可能性は低いでしょう。仮に裏切り者だったなら貴方を適当な理由で除隊させればいいだけだ。」

「私が吹けば飛ぶような人間だと？否定はできませんね。」

けれどニサエルらしくないというのが、率直な感想だ。

彼は基本的に目立つことを嫌う。何もかも闇の中で済ませるタイプの人間だ。裏切り者を泳がせ逆にAaronMankindに損害を与えることも容易いだろう。

「彼ならもつとうまくやる方法を持っている。」

「にもかかわらず、強硬手段を取ったということは時間がなかったからか？」

「あるいは彼にとっては強硬手段ではなかった。」

「いやどう見ても強硬手段だろ。慌てて蜂起したカルトを特殊部隊で攻撃しようとしているんだぞ?」

「いや。私たちとは目指す地点が異なるなら強硬手段でない場合もあり得ます。」

「司令長官は単純に裏切り者を排除しようとしているのではなくカルトの壊滅を狙っている?」

「つまりそう言う事です。」

傭兵すら持っている自称宗教を壊滅させるのに特殊部隊を用いるのはそこまで無茶苦茶なことではない。

しかし、たたけば叩くほど宗教というものは勢いを増す。本当に彼が宗教の壊滅を狙っているならそれはそれで別の方法を取るのが自然で二サエルらしい。

「連絡から四十二分が経過。部隊がそろそろ到着しているかと。」

アリーそう声をかける。ひとまず余計な考えを捨てて再び銃を構える。短距離の無線の周波数を合わせると騒がしい会話が聞こえてきた。

鎮魂

「散開！降下速度を保て。先遣隊は Site Q2 着地ののちに威力偵察を実行。終了後、ランディングエリアを確保しろ。」

「了解。ランディングエリアは予定通りで変更なし。」

風きり音がしばらく聞こえた後、銃声聞こえてくる。

「先遣隊より本隊へ。敵戦力の脅威度は低。敵の戦車の撃破も容易。」
彼らの声には恐ろしい程抑揚がなかった。特殊部隊と言っても戦闘時には興奮した声になる。威力偵察をしている艦娘らしき声も、空を飛ぶという本来人間に与えられなかった力を行使している人間の隊員の声にも抑揚がない。

冷静であろうとするよりも何か決定的に感情が損なわれているようにも見える。

改めてニサエルと自分では住む世界が違うことを意識させられる。

「了解した。速やかに敵の脅威を排除しろ。こちらは作戦の第二段階を実行する。」

まただ。またこの違和感だ。

竹野では影響を及ぼすことが出来ない何かが進んでいる。

それはもはや疑いようのないことだ。昔の様に彼は純粹で味方に見える何かがいとも味方であるとは思っていない。

同時に自分の無力さについてもいやというほど知っていたが。

「copy 速やかに増援含めて排除する。」

そろそろ頃合いだろう。

「こちらも動きましよう。」

竹野はそう言ってライフルを構えなおす。飛龍を先頭にバンカーの外に出る。

敵は降下してきた部隊と、激しい銃撃戦を行っているようで搜索部隊はすでに付近にはいなかった。

「こちらはラッコエ。そちらの部隊の場所は。」

「降下地点は総務棟から東に五十メートルの地点だ。」

すぐ近くだ。銃声もすぐ近くから聞こえてきていたからそんな予

感はしていたが。

物陰を移動してしばらくすると先遣隊と合流した。

傭兵とは明らかに異なる恰好をしていた竹野たちを見た先遣隊たちは竹野たちに何か声をかけることもせず、傭兵たちの方に向き直り攻撃を再開する。

竹野たちも重く邪魔な無線を置き、攻撃を開始する。

傭兵たちは異常な耐久力を持つ艦娘にダメージを与える手段を持っていなかった。一方で艦娘からしてみれば旧式で純粋な通常弾しか打てない戦車など今日ですらなかった。彼女らは戦車砲の数倍はある口径の弾丸を十分に耐えることが出来るのだ。ただの遅い目標でしかない。

先遣隊は慣れた手つきでライフルと大口径の砲を持ち換え戦車を撃破する。積みあがった戦車の台数はラッコエが確認できている戦車の半数をすでに超えていた。

「排除完了。敵増援に警戒しながら速やかに着地を。」

その数秒後。腰に巻かれたジェットを噴射しながら数十名の女と数名の男が降りてくる。

女の方のほとんどが艦娘だろう。体形意外に彼らを識別する方法はなく、マスクの中に隠された艦娘たちの顔を予想するしかなかった。降下してきた数十名円形に展開して警戒を始める。その中で数名は警戒することなくこちらに近づきながらしゃべりかけてくる。

「オーマー・ラッコエだな。私は情報部強制捜査班のエージェントフォボスだ。通信車までエスコートする。」

そう言うフォボスはハンドシグナルで手早く指示を出す。

その指示がどのような結果を生むのか竹野にはわかっていった。

「飛龍。制圧は彼らに任せて私とラッコエ中隊長の支援に回ってくれ。」

だから彼らから飛龍を引き離す必要があった。

「わかった。」

素直に飛龍の声には疑念はなかった。

それでいいのだろう。知る必要のない世界。竹野には知りたくも

なかった世界の住人と同じことをする必要などない。

私は何なのだろうか。

そんな疑問に意味がないことなど理解している。だがどうして私の前にいるのは深海棲艦と言う分かりやすく、思考を放棄して対峙することができない敵ではないのだろうか？

なぜ話し合える敵を無言で撃ち殺す任務についているのだろうか。いや、違う。なぜ、許しを乞うことしかできない子ウサギを一方的に撃ち殺しているのだろうか？

彼らの持つ豆鉄砲では特注の戦闘服を貫通させるにも不十分だ。

一方でこちらの携行している対戦車弾の前には旧式の戦車の装甲など無意味だった。

搭乗員は即死し、貫通した破片が洗車の裏に隠れている兵士をも殺害する。

彼らには勝機などない。たとえ彼らが今の戦力では不十分だと気がついて化学弾でこちらを攻撃しようとしてももう遅いのだ。

今回の現場ではどれだけ死体を積み上げればいいのか。

飛龍は目を見開き驚愕していた。どうして竹野が自分を彼らから遠ざけたのかようやく理解したようだ。

彼らの銃口の先にいたのはもはや屈強な兵士たちではなかった。

少なくともつい数十分までは彼らは自分たちにとっても脅威であつた。

人間である竹野やラッコエは当然だが、艦娘である飛龍にとつても接近を許せば拘束される危険が十分にある脅威であるはずだった。

しかし、彼らの士気は目に見えて下がっていた。一瞬で撃破される戦車に、銃弾では一切ひるまない艦娘。それだけなら、彼らは抵抗を続けただろう。

しかし、その艦娘は自分たちの知っていた存在ではなかった。一切の躊躇なく人間に向けて発砲しゆっくりと距離をつけてくる彼女らに、彼らは震え上がった。

さつきまで軽口を言っていた兵士の首から上がなくなっているのだ。戦場はそんなものだ。彼らは当然戦争を知っていた。

だが決定的に戦場と違う事があった。こちらがいくら自分を鼓舞して味方のかたきを打とうと抵抗しても最終的な結果は同じだった。戦闘というのは致命的に能力後異なる二者の間には発生しない。そこに発生するのは虐殺か、あるいは……押し付けられた平和だけだ。

「哀れな人間だ。」

降下してきたフォボスがそう言う。

「あなたが指示を出さなければこの事態は避けられたのでは？」

竹野は当然反論した。それが無意味なことだとわかっていたが。

「彼らは情勢を読み間違えた迷える子羊だ。軍に見捨てられ、各地で発生した内戦に加担して腹を満たし、そのせいで必要もない死者を出した。亡霊だよ。彼らは戦争と紛争から逃げられない。二度と表舞台に立つことはない。」

艦娘の出現により急速に進められていた軍拡は停止。配備予定で訓練中だった人員はおろか大規模なリストラまで実施された。人類は深海棲艦の勢力拡大停止を引き換えに大量の失業者生み出した。

失業率はEU内での失業率は21%と言うとんでもない数値に達した。

そこで、どうしようもなくなった先進国はまたもアフリカを踏み台にした。内戦に傭兵を送り付け自国民の雇用をいびつな形で確保したのだ。

アフリカへの侵攻が開始されてからも内戦は続き国連軍は複数の勢力から攻撃を受けた。

沿岸部を失つてもなお内戦は続いている。

「あきれられるほど自分勝手な奴らですが、もともと言えば深海棲艦と闘おうとして軍に志願した前途ある人々でしょうが。」

フォボスのマスクの中の表情がどう変化しているのかわからない。少なくとも同意を示しているようには見えなかったが。

「選択を間違えた弱者を救うほど今の世界には余裕などありはしな

い。」

冷たい言葉だがそれは事実だった。彼らがここで生き残っても未来などなかった。カルトは使い捨ての駒のために危険を犯しはざがないし、国連軍にとっては国籍を持たず情報の上では死をなかつたことのできる移民と言う資源のほうが有用だった。

彼らを守るべき政府は社会福祉などどうの昔に捨て去っている。

間違いを許容できない世界で彼らは間違えてしまったのだ。

「彼らの遺体はどうなるんです？」

「さあ。私たちは遺骸に興味などない。埋葬したいならそうすればいい。」

フオボスはそう言うのと竹野から離れて部下からの報告を受ける。

戻つてくると彼は

「道ができた。護衛するからついてきてくれ。」

竹野はうなずいて彼に続く。

その“道”の境界を示すのが血でなければ優雅なパリの道なりだったのかもしれない。

恐らく人だったのだらう肉塊があたりには積みあがっていた。破壊された炎上する戦車からは人間を焼いたときに出る強烈な刺激臭が漂っている。

強烈な匂いに頭がくらくらしてくる。

鼻にも目にも悪い“道”を抜け倉庫の前にたどり着く。

そこでようやく気がついたが遠くにも煙が上がっているのが見える。ヨーロッパの秩序は破壊されていた。

「とんでもない方向にことが進んでいるようですが？これも司令長官の想定通りだとしても？」

フオボスはただ

「われらはパーツであつて、彼の友人ではない。指示を忠実に守ることだけがわれらの誇りだ。」

そう言う。不気味な忠誠心を示した男はただ静かに重厚な倉庫の扉をマスクの奥の瞳で見ている。

書類上の収束

情報部の特殊部隊員の一人が倉庫の警備システムを破壊して扉のロックを解除する。

解除されても扉は自重で固く閉ざされていたがさすがに彼女らの名前に関して、数万馬力まで出るとはいかないがとんでもない力を出せる艦娘の前にはダンベルにすらなりえなかった。

扉が開くと中には報告の通り、通信車があった。

フォボスは先ほど警備システムを破壊した隊員に耳打ちして通信車の展開を進める。

その様子をぼんやりと眺めながら彼れらに与えられた目的について考えを巡らせてみる。

たとえ特殊部隊といっても騒動が始まってからまだ半日も経過していない。つまりニサエルがこの事態を予測していたことはもはや疑いようがない。

彼なら避けられる面倒ごとを無視するほうがよっぽど手間がかかるということを理解している。

にもかかわらず彼は今回あえてその面倒ごとを利用した。

彼は本当に味方であるのか？そんな疑問が再燃する。おそらく今回の事態でヨーロッパでの防衛連合軍の行動は大きく制限される。せつかくまともな形で再建した憲兵隊は崩壊し、数々の設備が破壊されるだろう。どれだけ練度があろうと、どれだけ高い装備を持っていても結局、社会や世論の支持がなければ軍隊など無力なものだ。

広大な領土を誇った英国も数々に抵抗運動で弱体化し、ハプスブルク最後の帝国も妥協を繰り返したが結局は崩壊を免れなかった。

Aaron Mankindがどんな声明を出すのかわからないが、民間人を殺害したと大々的に宣伝するのが目に見えている。

防衛連合軍への非難はさらに強まり新たな人材確保すら困難になるだろう。

「展開完了しました。」

さっきの隊員がそう言う。

「よし。各地の指揮官に連絡をするぞ。」

ラッコエはそう言つて通信車の中には入つて行く。

おそらくそれは最善の策ではない。だが、最善策を待つよりも、次善の策を今実行するのは緊急時としては望ましい。

それがたとえ強化されてしまった無垢な市民を殺害する命令であつたとしても。

そう、今の世界には間違いを許容することなどできないのだから。道を誤ればそれだけでも死に、選択したわけでもないのに戦場に送られる。

悪いのは誰だ？

「どうしたの？」

飛龍がこちらをのぞき込んでくる。

「君はここで死んだカルトの傭兵たちや、これから殺される、選択したわけでもなくただこの時代に生まれてしまったから死んでいく市民たち。この戦争はいつたいなんだと思う？」

彼女は困つた顔をする。

だが竹野は飛龍にはその答えを求めてはいなかった。

のぞき込んでいた飛龍を軽口押しつけ、立ち上がる。

「いずれ終わる戦後をどう生きるのか。考えておいて損はないぞ。」

竹野はそう言つて通信車の方に歩いて行く。

その背中を見ながら飛龍は考える。

戦後。考えたことすらなかった。時には訓練で死にかけ、時には自分に課せられた過剰なノルマをこなして、精神をすり減らして従いたくもない上官の指示に従つた。

そこに余裕などなく、当然未来のことを考える暇などなかった。

彼が上官になつてからもそれは変わらなかつた。

彼のところには面倒ごとが山ほど降ってくる。それを平気な顔して処理していくそんな彼に抱いた印象は、彼の輝かしい指揮とはかけ離れた闇だつた。

その闇と共鳴してしまった。だから本来に組むべき上官にあんな

ことをしたのだろうか。

それを村上は理解していたのだろうか？

なにせよ彼は飛龍に余裕を与えた。少なくとも、自分の献身の意味や、戦争の理由を考えられる程度には。

通信車には予想外の人物がいた。

通信車の中にはアーサー・マクドネルがいたのだ。竹野には状況を理解できずにいると、ラッコエと情報部は全く逆の行動を開始した。情報部はアーサーを保護する一方でラッコエは銃を彼に突き付けた。

ラッコエを拘束しようとする隊員をフォボスが止め、その場の空気は凍り付いた。

フォボスはアーサーを自分の後ろに回し、ラッコエに「銃を降ろしたほうがいい。情報を持った人間が降伏しているにも関わらず殺そうとするなら別の目的を疑われても仕方がない。」

アーサーがどれだけ抵抗したところですでに勝ち目はない。それに状況から察するに彼はカルトとの内通者だとも思われているのだろう。カルトと合流しようと思っていたがそれより早く制圧されてしまったという事か？

「絶対に耳を貸してはいけませんよ。」

ラッコエはそう言う。だがその言い方には含みがあった。

「もしかしてだが。ラッコエ中隊長、アーサー・マクドネルと何かしらの関わりがあったのでは？」

それにはラッコエではなく、アーサーが答える。

「着任当初から面倒を見ていた。ある時までな。」

「あなたの施した教育には感謝しますがそれ以上はありません。私の上司であったほかの数人と何ら変わりはない。組織を裏切るのなら殺してでも止める。それはあなたが教えた事ですよ？」

「君は期待通り優秀な憲兵になった。だが…… まあいい。」

彼は含みのある物言いをして黙り、両手を前に突き出す。

「君の仕事だろ？」

ラッコエは前に出て彼に手錠をかける。

彼はおとなしくラッコエの指示に従い、通信車内の狭い通路を歩く。

しかし、彼は竹野の前で止まり、

「あなたは確かか？」

と少し警戒したような顔をする。

「私は新人の士官ですから恐らく面識はないと思いますが？」

そう言うのと納得したのか、

「なるほど。そうですね。昔、教育係を務めた経験から少しアドバイスをしましょう。上司の不正を調べるときはまずその上司の袖を見なさい。」

そう言いだした。一体何が言いたいのか？

「靴だとかはみんな気にするんです。けれど袖だけは違う。いつもワイシャツがきちんと数センチ出ているような几帳面な上司であるならそれは同様に几帳面で丁寧に不正をしている。アプローチの方法を考える必要がある。」

「上司が不正している前提ですか？」

「不正する奴が幹部になり、不正ばかりして能力が実態とあっていないから不正のうまい奴に騙されて評価を間違える。それでまた能力のない上司の出来上がりだ。愉快的組織だろ？」

アーサーは本当に楽しそうにしゃべる。

「そうだ。私にはこれは必要ない物だ。君に譲ろう。」

そう言つてアーサーは手錠がかけられているにも関わらず器用に本を取り出す。

題名はポケットポルトガル語。

「いざというときはブラジルにでも逃げようと思つていたんだがね。案外仕事が速いようで困つたよ。」

彼はそう言うのと、ラッコエを突き飛ばし前に転がりながらラッコエの拳銃を奪い車から飛び出す。しかし、指揮官は発砲の命令を出さず、あくまで生け捕りにすることを優先させた。

だがそれが失敗だった。アーサー全く後を残さずに消えたのだ。

複数の艦娘に追われていたはずだったが彼は難なく逃げてしまった。

搜索は早期に打ち切られた。パリは交通の要として依然機能しているが、すでにその監視の目は腐っていた。

見失ってから一時間も経てばもはやどこにいるのか搜索するなど無理な話だった。

「作戦は失敗しました。」

そう指揮官が誰かに連絡している。情報部局長かあるいは二サエルだろうか？

何か手掛かりはないかとポケットポルトガル語を調べてみたがただの中古の本で出版はまさかの20世紀だ。

もの好きなのか何なのか？

とにかく彼は煙のように消えてしまった。

そんなこんなで右往左往しているうちに通信衛星の再配置によって情報網は復旧し、米軍の大規模な介入によって事態は沈静化していった。

米軍がパトロールする基地内の端で、竹野と飛龍は見たくもない物を見ていた。

それは、大きな穴だった。

その穴は、丁寧に処理がなされ、多くの軍関係者に見守られ埋葬された憲兵たちの墓から少し離れたところにある、艦娘を放り込んでおくための穴だった。

その穴に、まるでごみの搬入をするように艦娘の亡骸が放り込まれていく。

人間の力では艦娘の皮膚を貫くことはできない。

だから、彼らは人間の遺体より、無残な姿になってしまっていた。刺し傷一つで死ぬる人間とは違い、艦娘は丈夫だった。

けれど人間の残虐なやり方に彼女らは抗えなかった。

頭から薬品をかけられ、意識がある中、体が解ける苦痛与えられるが、それでも死ねずに口内に銃口を押し込まれ殺される。

内部からの攻撃に弱いのは深海棲艦と同じだった。

それだけで不運は終わらない。本部に攻めてきた彼らと違い、各鎮守府を襲撃したのはただの一般人。

どうすれば生物が死ぬのか理解していない人間達は不必要な痛みをただひたすらに与え続けた。

それでも彼らにおとがめはなかった。

裁きようがないのだ。あえて裁くなら器物損壊を理由に罰金ぐらいは請求できるかもしれないがそれもしなかった。もし防衛連合軍がそんなことをすれば抗議のデモという公開処刑の儀式でまた彼女らは殺される。

「暴力こそ至高。残虐性こそ我らの武器。スローガン通り、人間らしいやり方だ。」

これがあのカルトの望んだ結果であるのならいつそ彼らが深海棲艦と戦えばいい。彼らの残虐性が武器となるか試してみればいい。

結局は無抵抗な艦娘を殺すことしかできないとようやく気が付くだろう。同時に命も失うだろうが。

塩酸を打ち込み海を汚染し核兵器まで使ったが結局深海棲艦の勢いを止めたのは艦娘だった。アジアが制圧されヨーロッパにすべての戦力が回れば国連軍も太刀打ちできなくなる。

深海棲艦の戦力の約七割がアジア太平洋側に存在していると指摘する学者は多くいる。

その残虐さで守り切った世界に何が残るのか？

殺人、窃盗、何でもありの終末世界しか残らないだろう。

「ここまでされるまでどうして抵抗しなかったの？」

飛龍はそう聞くが竹野にだってわからない。

死への恐怖に勝る何か彼女らを抑制したのか？

だがそれは一体何なんだ？不自然だ。あまりに艦娘と言う存在の都合が良すぎる。

「飛龍。日本に戻ったら一度心理分析を受けてくれないか？」

「どういふこと？」

「お前は身を守るため上官を殴った。同様にうちの鎮守府にいる艦娘

は上官。いや、人間に反抗の意思を見せた。君はもしかしたらほかの艦娘たちと何かが違うのかも知れない。」

「でも、この子たちも状況がもう少しましだったら抵抗していたかも知れないわよ?」

竹野は首を振る。

憲兵隊が過去数年で確認した艦娘の死因などを調べたが戦死の次に、不明が多かった。そして次点に上官による過度な指導。と書かれていた。表記をぼかしているからどうなのかわからないが、抵抗した艦娘の方が少数であるのは分かり切っていた。

「何もできずに死んだ艦娘の方が多い。少なくともアジア方面軍ではそうだった。」

「わかった。じゃあ受けてみる。けど、私が危険な思想を持っているとか言って解体されそうになったらどうするの?」

飛龍はそう言うが、

「今更だな。私は君に殴られて意識を飛ばされてるんだ。そう言われても大して驚かん。」

と竹野が言うのと飛龍は不機嫌そうな顔をして

「はいはい。そうですね。わるうございました。」

と口を膨らませる。

随分と物腰が柔らかくなったものだ。

二人が黙ると、基地のあちこちでアメリカ訛りの英語が聞こえてくる。ヨーロッパ中に米軍の空挺師団が降下し、秩序が取り戻されつつある。

防衛連合軍と国連軍の対立に中立だった米軍が、カルトの決起から24時間も経たずに派遣を決定したのはどうせ二サエルの仕業だろう。

「じゃあ。帰るか。」

そう言つて、荒れ果てた基地を竹野たちは後にする。

帰りの輸送機には来た時と比べればかなり人数が減っていた。

いままで全く気が付かなかったがこの研修に同行していた新人提督のどれほどが本当に新人の提督だったのだろうか?

そんなことを考えようかとも思ったが席に深く腰掛けるとそんな気力も自然と消えた。目を閉じて重力だけに身を任せ眠りに落ちていった。

「それで。被害は？」

二サエルは山本に聞く。

「まだ確実ではありませんが、憲兵隊所属の130名、司令部施設にいた幹部24名、そのほかに支援の工兵などが28名。制圧に参加した現地の警官が数名なくなつたと聞いてます。」

「思ったよりも死者が出ましたね。」

「予想外の事態にしてはかなりうまく対応した方だと思いますが？それとも本当にカルト殲滅のために意図的に放火したとでも？」

山本が聞くと二サエルは苦い笑いを浮かべ

「そんなしょうもないことに人命を使うほど私は浪費家ではありませんよ。」

二サエルは人命を資源としてしか見ていないというような趣旨の発言を平気な顔でして見せる。

「それならいいじゃないですか。予想していなかった事態にうまく対応するカリスマ指揮官とでも記事を書かせましょうか？」

受話器に手をかける山本を二サエルは制止して

「君もよくないですよ。そんな両極端なことをするのは。予想はしていた。けれどそれはこちらから仕掛けたことではない。別の誰かが仕組んでいたことですよ。」

「別の誰か？見当はついてるんですか？」

「それを調べるため、ある男を捕えようとしたら逃げられた。だから困っているんです。」

「本当に？」

二サエルは笑って

「君は鈍いのか鋭いのかよくわかりませんね。まあ、半分以上目的は達成できました。逃げたのなら追えばいいだけの話ですからね。」

と言う。

まあ、どうせニサエルが何も困っていないことなど山本にはわかっていたが、ずっとそばにいる山本でさえニサエルが今回の騒動でどんな目的を達成したのかさっぱりだった。

鎮守府の歩むべき道

竹野が南鳥島に帰ったのはかなり夜が更けた頃だった。

輸送機を見送りながら執務室に向かう。最初にここに来た時のことを思い出す。

あの時は寂しきよりも驚きの方が大きかった。艦娘の多くはこちらから距離を詰めようとせずとも向こうから寄ってきていた。

人間であるならばゴマすりだとか言われる行為だが、無垢な艦娘たちはそんな下心があったわけではなく。前提に人間に対する好意があった。

だが、今考えてみればおかしな話だ。人間が彼女らにしたことを見れば、人間に対する好意を持つのはおかしい。どちらかと言えば、彼女らは抵抗してしかるべきだ。

確かに、この鎮守府には抵抗した艦娘が多くいる。だが外を見ればそんなことはない。今全世界には数百万の艦娘がいるが、抵抗した艦娘はその中の数パーセント、いやそれ以下かもしれない。

特異なのはここにいる艦娘たちだ。

「飛龍。あの話覚えてるか？」

「心理分析？」

「そうだ。空いてる時間を後で教えてくれ。」

「わざわざ本土まで行くの？」

と飛龍は聞くが、とんだ時間の無駄だ。

「行きたいならいつてきてもいいがさすがに私は同行できんよ。」

「ならアンケートでも書いて送信するの？」

「紙のアンケートで実態がわかるならこうはなってるない。」

竹野は苦笑いして、そう答える。

「わかった。時間空けとくね。あと、はいこれ。」

そう飛龍は竹野の荷物を彼に押し付け空母宿舎の方に歩いて行く。

竹野は荷物を持ち直し、波音を数回聞くと再び歩き出し執務室に向かう。

ふとした時に、寂しさがこみ上げてくる。

こう思うならどこかのタイミングで結婚しておけばよかつたと今更なことを思いつつこれからのことを考える。

何とかして協力者を見つけなければならぬ。

最悪のパターンは二サエルが敵になることで、そうなってしまえば裏の世界を知らない竹野では太刀打ちできない。

それまでに何とかして裏の世界の詳しく、二サエルに忠誠を誓っていない人物を探さなければいけない。

官僚時代に友人にでも声をかければどこかの国の諜報員を紹介してくれるだろうか？

いや、それよりも反米のテロリストの方が確実だろうか？

そんなことを考えながら執務室に入り電気をつけ荷物をソファアールにおき上着を脱ぐ。

机の上にはかなりの数の書類は置かれているかどれも後は竹野が確認の印を押せばいいだけだった。

窓を開け首元を緩め腕をまくってもまだ少し暑いぐらいだったが、テキパキと書類に目を通し今の状況を確認する。

さいわいなことに、竹野が不在だった間に何かトラブルが起きた記録はなく、何度か通商航路の安全確保のために出撃が行われただけだった。指揮官はいずれも長門が務めたようで若干言いたいことはあるが、かなり理想的な指揮を執ったようだ。

ひとまず安堵した竹野は書類をかたづけそのままソファアールに横になると寝てしまった。

翌朝、総員起こしがかかり竹野が立ち上がると天龍が

「帰ったなら言えよ。」

と不満げな顔でこちらを見ている。

「夜遅かったからみんなを起こすのはどうかと思ってな。」

「一応心配したんだぞ。ヨーロッパでの同時多発テロがあつたんだろ。大丈夫だったのか？」

「ああ。それよりもソファアールで寝たせいで全身が痛いことのほうが問題だ。」

そう返しながら、流れるような情報統制に呆れ返る。

そうは思うが、あの複雑な状況を納得が行くように説明するのは難しかったのも事実だ。

ことの全容を理解しているのはおそらくごく限られた人間だけで、あの場にいた竹野もよくわかっていなかった。

「ならいいけど。それと、風呂入って来い。適当に着替え置いとくから。」

「助かる。」

そう言うと竹野は執務室の横の自室に戻りシャワーを浴びる。さすがに総員起こしがかかっているにもかかわらずのんびり風呂に入るわけにはいかず五分もたたずに風呂を出る。

外には天龍が用意してくれたであろう着替えがおいてあった。

適当に用意するといいながら、天龍が用意していたのは軍服一式。気が利くな、と思いつつ素早く着替えをすまして部屋を出る。

外では艦娘たちがランニングをしている。いつからかわからないが彼女たちは竹野が指示することもなく自主的に朝の課業をしていた。

竹野は意欲的に訓練をしてくれる彼女たちを見て、うれしくもあったが、彼女たちから抵抗する力を奪ってしまったような気がしてならなかった。

自分がするべきなのは彼女たちを従順になるよう手懐け、飼いならすことではない。

そう、ヨーロッパで無残な姿の艦娘を見たさらに強く思うようになった。

「おはよう。」

執務室に入り天龍に軽く挨拶をしてすぐに仕事に取り掛かった。

深夜に一通りの仕事を済ませていたため、それほどすることが山積みというわけでもないが、司令部からの命令以外にもこなさなければいけない、いや司令部が言ってこないからこそ、やらねばならない仕事があった。

「提督？いなかった間のこと聞かなくていいのかわ？」

天龍がコーヒーを入れながら聞いてくる。

「報告書に書いてないことでもあるのか？」

「いや、ないけど。どうしたんだ。今日はより一層殺気立っているというか余裕がないというか。」

「そうか？」

冷静であろうとすればするほど表面上の温度は下がり内部の温度は上がる。誰かがそんなことを言っていた。

「その理由も含めて今日の夜話そう。各級から一人代表を集めてくれ。」

「わかった。俺じゃあ頼りないかも知れねえけど、長門とか赤城とかにも頼れよな。どうせ俺らは端に追いやられた仲間なんだし。」

飛龍は顔を崩して笑う。

「それもそうだな。」

竹野も笑う。

一通り事務作業を終えた竹野はその日は夜戦の訓練まで実施して騙しあいの世界を忘れ、単純な力のぶつかりあいを眺めた。

やはり自分はこちらの世界のほうが好きだ。と思いつながら鍛え上げられた艦娘たちの武力の応酬を静かに見ていた。

さらに世が更けて、じきに日付が変わるころ執務室に艦娘が集められた。

風呂上がりのラフな格好で竹野は机の淵に腰掛けて集まった艦娘たちを見る。

彼女らもジャージなどのラフな格好で集まった。

「いつ帰ってきたんだ？」

「昨日の深夜だ。訓練で会ったろ？」

「それもそうだな。で、どんな要件だ。」

長門はそう聞く。

「そう焦るな。おい！蒼龍、出てこい。」

竹野は天井を見ながらそう言うが、天井からではなく蒼龍は床から出てきた。

「ここは二階だぞ？」

長門は困惑しているが気にするのは本当にそこであっているのか？

「私がいなければあなたはやばい奴になっていましたよ。」

と蒼龍は言うがやばい奴はいったいどっちだ？

「君がどこかにいる前提で私は動いている。もうあきらめて普通に出てきてくれ。最初から隠す気はない。」

蒼龍も床下だとか天井裏だとかではなくまともな席についたところで竹野は話を始める。

「最初に言っておくが今から話す内容は絶対に外ではするな。ほかの鎮守府の人間が来た時も同じだ。この鎮守府内だけでとどめておいてくれ。」

「青葉には強く言っておく。」

那智はそういうが、彼女はよく調べず竹野の過去を流布したと言う言われたくない過去がある。同じようなことはしないでだろう。

「続ける。私がヨーロッパに研修に行ったこと、そこでテロが発生して騒動があったことまでは知っているかもしれないが、実はそうじゃない。あれはテロなんかじゃなく何者かが仕組んだ防衛連合軍への明らかな攻撃だった。」

「AaronMankindの仕業ではないと？」

やはり蒼龍はほかの艦娘たちよりも詳しい事情を知っているようだった。

「いや、確かにAaronMankindの信者が各鎮守府を攻撃して多くの艦娘が殺されたのは事実だ。だが同時に行われたヨーロッパ方面軍統括指令センターへの攻撃はカルトの信者ではなく傭兵による計画的な攻撃だった。」

「つまり、騒動の裏で何かが行われていたわけですね。」

竹野は頷く。

「そして、この騒動が起きることを知っているものが防衛連合軍が内にもいた。」

「内通者か？」

「わからない。ただの内通者ならこちらの動きを妨害してくるだろう

が、騒動が起きることを知っていた人物がした行動はその逆で鎮圧の用意をしていた。だからカルトによる蜂起で防衛連合軍がヨーロッパから追い出されるということはなかったし、クーデターではなくテロだと報道されても違和感がなかったわけだ。」

長門は首をかしげる。

「司令長官ですか？」

蒼龍はそう聞いてくる。

「確かに現状最も怪しいのはニサエルだ。ただこの件に関してはあまりに不自然なことが多すぎる。どうして知っていたのに止めようとしなかったのか。どうして私をヨーロッパに送ったのか。なぜただのカルトに過ぎないAaron Mankindに一時的とはいえヨーロッパ方面軍の心臓部を掌握されたのか。言い出したらきりがない。少なくとも今は誰も信用すべきじゃないことだけは確かだ。」

「それを私に言っただ大丈夫だと？」

蒼龍は言うが、彼女が今もニサエルの手駒である可能性は低い。それに、

「君が今もニサエルと通じているなら、私が何をしても無駄だ。この時点で投了だ。」

「ふーん。」

珍しく蒼龍が素の反応を見せる。

「で、どうするつもりなの？」

「誰も信じられないから独自で動く。一人ではやろうとも思ったが私の得意な舞台で戦うわけじゃない。だから協力してくれ。」

「迷惑をかけられるのは今に始まったことじゃないでしょう。あなたは来たこと自体私たちにとってはいいい迷惑です。面倒なことが増えようが関係ありません。」

相変わらず加賀は素っ気ないのか、それともただ口が悪いだけなのか、どちらにせよ協力してくれそうだな。

「私たちにできることはよくわかりませんが、頑張ります！」

と吹雪もいい反応を示す。

長門は何も言わずにただ頷いた。

那智もどんと来いと言った顔で酒を開けようとする。だがさすがにそれはやめさせる。

議論をするのにアルコールを摂取してどうするのか。

終始首をかしげていた択捉と伊19も……まあ、協力してくれるだろう。

各級とは言ったが海防艦まで呼ぶとは思わなかった。

「それでまず最初に何を調べる？」

蒼龍は言うまでもないといった感じだ。

「よし。まずはこいつを何とかする。」

そう言っただけで竹野が取り出したのはポケットポルトガル語と言う本だった。

好都合の側面の不都合

竹野が取り出したその本は黄ばみ、古臭い本だった。

表紙も今では考えられないような古臭いデザインで、何とも言えない。

「その本は？」

蒼龍が聞くと

「これは逃走した裏切りの疑惑がある士官が私に渡したものだ。」

「情報部の介入があったなら取り上げられてもおかしくない物品だけだ？」

確かにそうだ。だが、情報部は軽く確認しただけで竹野にこの本を返した。

「情報部の気まぐれだと思いうことにしておく。とにかく、情報部が追っていた男が、情報部関係者ではない私にこの本を渡したわけだから何か隠されている可能性は十分ある。」

「何か、おかしいことを言われなかった？」

「上司の汚職を調べるときはまず袖を見ろ。なんてことを言っていたが。」

蒼龍は何度か頷いて、竹野から本を取り上げ

裏表紙についていた5mm CDを取り出す、

「そのCDは調べたが、破損していて何も聞こえなかったぞ。古いものだから仕方ないが。」

蒼龍はCDをウイルスに感染してもいいどうでもいいパソコンにつなぎながら答える

「袖は英語でなんて言いますか？」

「sleeveだな。」

「そう、スリーブ。スリーブをまず見ろ。」

スリーブ。CDを包んでいた外装をまず見ろという事か？

「ブラックライトとドライアイスと虫眼鏡を持ってきて。」

蒼龍が言うと、加賀が素早くものを用意する。あいにくドライアイスはなかったが消火用の液体窒素が備蓄されておりそれを使うこと

にした。

ブラックライトを当てると、簡単にその秘密がわかった。

「諜報員としては三流のやり方です。でも諜報員でも何でもない人間に渡すことを前提にしているなら適度な難易度ですね。」

蒼龍はそう評価して、文字列を見る。外装の袋にはびっしりと文字列が並んでいた。

「復号鍵で間違いないですね。後はこのCDに入っているファイルの形式を突き止めないと。」

蒼龍はパソコンを操作してファイルを調べる。

「よし。これで行けそう。」

蒼龍が謎の文字列をメモ帳アプリで開き、さっきの復号鍵で読める形にする。

そうして浮かび上がってきたのは、数字と訳の分からない英字の配列だった。

「これは、なんだ？」

「存在しない企業の出入金記録ですね。」

蒼龍は簡単なことだと言った表情でそういう。

「こっちが取引の日付、こっちがどこからどこに送金されたのか、そしてこれがどれだけの金が動いたのか。」

「汚職の証拠、にしては桁がおかしいな。」

平均しても約2億ドル近い金が二か月に一度程度の頻度で動いていた。

こんなとんでもない汚職はいくら何でもあり得ない。

「どこかの政府が極秘で行っていた計画の資金の記録でしょうね。」

「政府が支援したことを隠すための工作か。」

「まず間違いなくそうですね。世界各地のあらゆる銀行を経由して、少しずつ架空の会社が金を落としていますからこの金がどこに消えたのかも、どこから来たのかもわかりませんね。」

「せめてどの国かは分らないか？」

「根拠はないですが、ここまでワールドワイドに金を回せるのは、スイス、イギリス、アメリカ、ソ連、フランス、年代的に可能性は低いで

すが中国の可能性も否定はできないでしょう。調べてみないことには何とも。」

「頼めるか?」

「私の得意分野です。喜んでやるような仕事ではないですけどね。」

竹野は記録をよく見て、手がかりを探す。

だが。この記録は数年分しかなく、さらに冷戦期の記録であるためこの時代、どこの国も極秘で巨大事業をやっていた。だからなおさら特定が難しい。

ここは蒼龍に任せておくしかないだろう。

「よし。蒼龍の調査を待つ間に、君たちの存在についても調査を進める。」

「どういうことだ?」

長門は首をかしげる。

「まず。君たちは自分がどこで生まれ、どうして艦隊に加わったのか知っているか?」

「知らないな。」

「何も思い出せないか?」

「ああ。思い出そうとすれば私の名前を持っていた軍艦の最期が思い浮かぶが、そんなオカルト的な話では納得がいかないだろう?」

「ああ。確かに君たちは旧海軍の艦艇と強い相関性を持っている。だから、旧艦艇の生まれ変わりだと言う勢力もいる。オカルティズムな話を排除するなら、誰かの意思で、あるいは君たちの意思で相関性を持たせたに過ぎないと考えるのがよっぽどまともだろうな。」

艦娘が神の兵士として天から与えられた存在ならここまでの地獄は出来上がらなかつただろう。

絶対に誰かが、あるいは何かが艦娘を作り出した、あるいは呼び覚ましたのだ。それも、非常に人間にとつて都合のいい形だ。

「そこで、すでに飛龍にも声をかけたが心理分析を受けてもらいたい。」

「比較対象は?」

蒼龍は作業を進めながらそう聞いてくる

「他の鎮守府で死ぬ直前まで虐待された艦娘だ。」

自らの命よりも人間に服従することを選んだ艦娘もいるのだ。

「それは……。」

長門は絶句する。

「君たちは特異な存在だ。大抵の艦娘は死ぬまで追い詰められてもどらだけ尊厳を踏みにじられても、決して反抗の意思を見せない。」

「どうして?」

竹野は首を横に振り

「それがわかれば何も苦労しない。君たちからしてみれば抵抗しないことが理解できないかもしれないが。私たち人間もそうだ。歴史を見ればいつの時代も自由を獲得するため人間は権力者に抵抗した。だが、君たちはまるで抵抗すること自体が間違いだと言うかのように、抵抗するという選択肢をはなから放棄している。それがなぜかわからない。」

「歴史に見るなら、抵抗の意思を砕かれたと考えるのが妥当では?」

加賀がそう言うが、一体いつ艦娘たちの意思を人間が砕いたというのか?

「違う。逆だよ。艦娘は最初から人間に従順だった。自ら弱者になることを選んだ。人間は最初、艦娘におびえていた。自分たちよりも強い力と丈夫な体。それだけではなく、人間並みの知性を獲得しうる能力を持っていた。後は言わなくてもわかるだろう。人間は増長し、艦娘に対して攻撃的になった。人間は抵抗意思を砕いてなどいない。前提に人間に対する好意。いや忠誠心があった。」

「それは……。」

加賀はそれを完全に否定することはできなかった。

自分は最後には抵抗して、この鎮守府に送られた。

だが、彼女が抵抗する前に、その選択肢自体が存在していなかったといわれてみればそんな気もしてくるのだ。

少なくともいえるのは、一度上官の意思に刃向かってから自分の中から大量の不満が噴出したのは確かだ。

「思い当たることがあった顔だな。」

「言われてみればそう感じないこともありません。」

「蒼龍。こういう質問はされたくないかもしれないが、君に出された命令に抵抗したことはあるか？」

蒼龍は表情を変えることなく

「全くありませんでした。命令されたから人間を殺し、命令されたから同族を殺し、命令されたから犯罪者を生かしました。私が殺すことで世界が救われるなら……なんて自己犠牲の美しい言い訳すら必要なく、ただ目の前で失われる命に重みなど感じず、必要性しか考慮しませんでした。」

「前提として命に価値を感じていないのか？だから自分が死ぬほどの脅威を感じても抵抗しないということか？」

「長門さん。それでは人間を攻撃しないことを説明できませんよ。」

加賀の言うとおりだ。命の価値を感じていないなら人間を守っているのも、人間を攻撃しないことも説明できない。やはり都合が良い。

「話は少し変わるが、二サエルから出た暗殺の命令にはどんなものか？」

「彼は暗殺を野蛮な最終手段として考えていました。死というのはどれだけ自然な流れであっても根拠のない陰謀はついてくる。やがてそこからほころびが生じることもある。彼はそれをよく理解していました。けれど彼は私にたった一度だけ暗殺任務出しました。私はそれに失敗しました。」

「内容は？」

「自分が殺されるなんて全く考えていない一般人を葬ればいいだけの簡単な仕事でした。ターゲットは精神科で働く医者でした。何の変哲もない善良な市民を体現したような人間を殺せと二サエルは言うてきました。」

「精神科医？どうしてまた。」

「私には二サエル情報官の目的までは分かりませんでした。何度も言いますが彼の目的がわかっているなら苦勞はないですよ。」

「司令長官が敵であるかもしれないならその精神科医は相対的に味方

ではないのか？」

長門はそう言うが

「現実では敵の敵はまた別の敵ですよ。そう簡単な話ではないですよ。」

「目的は何にせよその精神科医についても調べてみよう。本土への輸送機を手配する。これで分かったと思うが艦娘の存在は人間にとつてあまりにも都合が良すぎる、明確な根拠はないが何か隠されている。」

竹野がそういうと加賀が、

「それは戦争を終わらせる道となりえるのでしょうか？」

と聞く。その声で執務室は静寂に包まれる。

「わからない。隠れている闇を暴いたところでそれは戦況に変化をもたらすものではないかもしれない。逆に士気を下げるものかもしれない。」

「そうですか。」

「でもな。この戦争には終わりが見えない。深海棲艦をどれだけ殺そうとも奴らは消えないし、地球全土を荒涼とした土地に変えてまで戦争を続けても残るのはなんだ？」

「でも、それが人間の計画であるならそれは望んだ結果。そこからまた繁栄するためのビジョンあつてのことでしょう。」

「その世界には少なくとも君たちの居場所はないよ。」

「あら、あなたはそんな状況になっても私たちの味方でいてくれるのかしら？」

加賀の抑揚のない声の中に、不安と若干の期待が見えた。

けれど、竹野は「いつでも君たちの味方だ。」など軽く言えるほど若くも青臭くもなかった。

「どうだろうな。君たちは兵士であり私はその上官だ。わかりやすい関係だな。だが、もし君たちを敵だと司令部が言えば私は君たちの弱みを攻撃して命令を忠実にこなすのかもしれないな。」

これが誰の望む答えでないことはわかっていたが竹野には正直な意見を言った方がいいように思えたのだ。

「そうですか。」

加賀がそれ以上何かを言うことはなかった。

戦争中に無謀な人類史上主義を掲げる Aaron Mankind はまともではなくカルトと呼ばれて当然だった。だが、深海棲艦との戦いが終わった時、次の脅威となるのは間違いなく艦娘だ。都合のいい存在が途端に不都合な存在へと変貌する。

「そうならないためにも君たちの出自を知る必要があるな。君たちが異星人の侵攻部隊でないと証明しなければな。」

竹野はそう、笑って見せた。

それが作り笑いだと誰にもわかる顔で、そう笑って見せた……

公然の秘密

竹野が指示を出してからしばらくは何も進展がなかった。

いつも通りの事務作業に、より高度で専門的な戦術指導。南鳥島鎮守府の評価もかなり改善し、どうしようもない流刑地といわれることも少なくなった。

憲兵隊の大改革をうまく逃げ延びた一部の提督は云われない噂をいまだに流布しているらしいが竹野にとってそんなことはどうでもよかった。

定期的に演習をすることができ、ちゃんと支援や娯楽などが持ち込まれ戦闘マシーンではなく軍人として彼女らを扱ってくればそれでよかった。

どうでもいい奴らのたわごとよりも、艦娘が必要ない軍人となった時自分はどうすべきなのか。それが彼の一番の悩み事だった。

「提督。確認お願いします！」

明石がレンチ片手に書類を渡してくる。

新型装備の実戦テストの報告書だった。

「いつのやつだ？」

「提督が留守の間のことですが？」

竹野は書類に目を通し、

「砲身の強度は？」

と聞く。明石は少し驚くが、すぐに納得した顔で

「整備状況によりますけど、最低でも200発は耐えられる設計です。」

と答える。よほどのことがなければ一回の戦闘で200発も撃つことはないだろう。

「わかった。後は頼んだぞ。」

竹野は胸元からペンを出し、慣れた手つきでサインする。

その足で射撃訓練場に向かい、艦娘たちのものと比べれば明らかに小さい口径の拳銃で訓練に参加し、武道場では駆逐軽巡艦娘相手に試合をして見せた。

「やっぱり、つえーな。」

天龍が汗をぬぐいながら窓のそばで涼んでいる竹野に近づいてくる。

「まだ負けんぞ。」

そうは言っても、竹野の肉体は年相応に衰えが始まっておりモンゴルでの自堕落な生活も相まって昔ほどの機敏さはなかった。

それでも明らかにパワーの違う艦娘を組み伏せられるのは昔よりも最低限の動きを意識しているからだろう。

「お前が秘書業務で衰えたんじゃないか？」

「本気で殺そうとしてた龍田が負けたんだ。だから、俺が負けても問題ない。どちらにせよ、俺が世界水準超えてるのは確定だからな！」

一体その自信はどこから出てくるのやら。

「そうだな。」

自信満々の天龍を置いて武道場を後にする。食堂で鳳翔さんの料理を食べて、海岸を歩き、水平線をぼんやり数時間眺めてみても、竹野の心の中のもやは消えなかった。

自分は誰の味方であるべきなのか？

それだけがわからなかった。それだけだったが、あまりにも致命的すぎる疑問だった。

蒼龍と飛龍は本土につくまで一言も言葉を交わさなかった。

二人は比較的仲が良い。だがこの鎮守府では違った。秘密主義の蒼龍と感情も何もかも常にオープンな飛龍では間が持たなかった。蒼龍が廃人だった頃は面倒を見たが、正気を取り戻してからの蒼龍と気が合いそうにないと飛龍は感じていた。当然蒼龍のほうから話しかけるわけもなく輸送機が到着するまで二人は言葉を交わさなかった。

輸送機がたどり着いた後、蒼龍と飛龍は別れてそれぞれの目的地に向かった。

蒼龍はある男に会うために密会によく使われる料亭に向かった。

人間御用達の料亭に艦娘という異質な存在が入り込むことを嫌悪

した店主に入店を拒否されたが、待ち合わせしている相手の名前を言ったとたんに態度を変えて店の奥にある離れに案内された。

「お久しぶりですね。」

先に部屋にいた男は蒼龍を見て言う。

そして部屋にいた付き人を退室させる。

付き人の足音が聞こえなくなってからようやく男は口を開く。

「ご用件はなんでしょうか？」

そうへりくだってこちらの顔をうかがう様子には、かつての傲慢は微塵もなかった。

この男は、こうやって顔色を伺いながら上の人間の懐に入り込み、自分より下の人間。いや人間だけではなかった。そんなように、弱者を虐げて高級官僚になるに至った男だ。改心しているなどと期待するだけ無駄だ。

この男の弱みをこちらが握っている以上この男の人間性などどうでもいい。

それに、艦娘を娼婦として政治家、官僚、どこかの役員に差し出し、接待の”道具”として利用していたこの男を告発せずに利用し、こんな人間をのさばらせている時点で蒼龍も同罪だ。

二サエルとの接点がない大物官僚をプライドのために使わない、など意地を張っている余裕はすでない。存分に利用させてもらおう。

「この資金出所と、行き先を調べてくれますか？」

選択肢はないが蒼龍は疑問形で聞く。

男は何も言わずに封筒を受け取りCDから取り出した資料の写しを見る。

「これだけの資料で出所と行き先を調べるのは非常に困難だと思いますが。」

「このレベルがむつかしいと言うなら、何のために私の同胞をラブドールにして人脈を作り上げたんです？」

男は不愉快そうな顔をして

「それもそうですね。わかりました可及的速やかに報告します。」

「私を馬鹿にしていますか？そんなお手本のような官僚答弁を聞いた

めにわざわざここまで来たわけではありませんよ。今すぐ調べて明日の朝までに結果を出してください。さもなければ……」

そう蒼龍が返すとさらに不機嫌そうな顔をするが、暫くしてあきらめたのかあちこちに電話をかけ始めた。

蒼龍は腕時計を見て時間を確認すると

「朝には戻ります。」

と言つて料亭を後にする。

同じころ、飛龍は蒼龍が殺そうとしていた精神科医のもとに向かつていた。

久々の街にウキウキしながら電車で揺られ、その医師がいる病院に向かう。

だが、飛龍はかなり無知だった。知ることに関してほかの艦娘より強いこだわりがある一方で、外出を許可されることはなかった。

そんな艦娘が上機嫌な顔で座席に座っているのをよく思わない人間は当然存在した。

アジアでは比較的艦娘軽視の意見は少ないがそれは公開処刑を平気で行うヨーロッパと比べての話で、小さなもめごとや事件に防衛連合軍は目をつむっていた。

「よう。化け物が座る席はないって知らないのかい？」

そう飛龍に話しかけてきたのはいかにも怪しげな男たちだった。

飛龍も昔のような馬鹿ではない。自らの無知が招いた面倒な事態に適切な対応ができる程度には大人になっていた。

だが面倒ごととはこちらの努力とは無関係に事態が進行することであり、それをうまくかわすことができるほど飛龍が賢く大人であったのかと聞かれればそうではないというしかない。

「やめなよー」

飛龍が立ち上がり作り笑顔を向けながらその場を立ち去ろうとしたとき、一人の少年が彼の数倍は大きい大人たちと飛龍の間にたちそう言った。

男たちは不機嫌な顔をするわけでもなく、少し笑ったかと思うと少

年を殴りつけた。

すぐに駆け寄ってきた母親を蹴り飛ばし

「すみません。すみません。」

と何度もいう母親の言葉に全く耳を傾けず、さらに殴りつける。

母親が飛龍に悲痛な顔で助けを求めるが、彼女は動かなかつた。

頭の中を軍法裁判にかけられるのではという心配で埋めて、戦うことを拒否したのだ。

軍法裁判にかけられても竹野が守ってくれると脳内で自分を説得してみるがそれが全くの見当違いで意味のないものだということ。彼女が最も理解していた。

彼女がおびえていたのは行動を起こした後のことではなく、本能的な人間への恐怖だった。

上官を殴りつけた時とは全く別の恐怖。

竹野に人間のいい面を見せられてしまった弊害だった。

「いいのかな？ほら、止めれるもんなら止めてみるよ。」

「あんたたちは法に裁かれる。艦娘を殴りつけるのと子どもや女性を殴りつけるのではわけが違う。」

そう返すので精いっぱいだった。

だが、言い方も迫力も弱すぎた。そのため男たちは増長した。

同じ車内にいた乗客たちはほかの車両に移りこちらと目を合わすまいと興味を抑えてそっぽ向いている。

「自分で自分を化け物扱いするのか。笑えるな。そうだな。ならお前を殴ってもこれ以上罪は重くならないな。」

そう言つて彼らの拳は動くが、飛龍には結果が見えていた。

飛龍に打撃が到達すると同時に鈍い音が出て男はこちら必死に悲鳴をこらえてこちらをにらめつける。

一方の飛龍は一切体制を崩さずに直立していた。

そこが限界だった。飛龍は素早く動き、男たちを拘束する。なるべき傷つけないように動けただけまだましだろう。

次の駅につくと、ほかの乗客が通報したようでも男たちは警察に連れていかれた。

「いめんなさい。」

飛龍は車両に残された母親と自分をかばってくれた少年に何度も謝罪をした。

「謝るのはこっちの方です。大人な対応で立ち去ろうとしていたのに私の息子が。」

そう言つて母親は、子供の頭をつかんで下げさせる。

そうして母親とその子供は隣の車両に移っていった。

車内は再び静かになり、線路の継ぎ目を作る音が周期的に聞こえてくる。

飛龍は山ほど席が開いている車内でつり革すら持たずに立っていた。

私たちは、いつまで虐げられるのか。

そんな疑問が湧いてくる。

理解がないもの、自分たちを知ろうとすらしなもの。

そんな人間の方が多い。苦労して戦った先にあるのは自分たちが自由に暮らせる世界ではなく、仕事が変わるだけだ。自分たちの奴隷的扱いは変わりはない。

南鳥島鎮守府には同じような思いをもつ艦娘が多くいる。

けれど、本土の艦娘はこんな事をいつもされているのに人間に服従することを一切ためらわない。

それを知るためにここに来たのだと切り替え、再び医者のもとに向かう。

「すみません。連絡させて頂いた、竹野の使いですが。」

ようやくたどり着いた町の小さな病院の高齢の看護師に声をかける。

「先生。約束の方が来ましたで。」

と奥のほうに声をかける。

奥からの返事はなかったが、看護師はギシギシと音のなる廊下を歩き先生のもとに案内してくれた。

看護師は何も言わず、けれどこちらがどういう存在でここにいる先生

が昔はどんな人間だったのか知っているようだった。

「飛龍です。今日はよろしくお願いします。」

そう言って診察室の椅子に腰をかけると部屋の奥で何やらごそごそとしていた医者は

「あつた。」

といいながら振り返り、飛龍にその銃口を向けた。

「ちよっー！」

と飛龍は慌てるが、その程度の銃弾で艦娘は死なないことを思い出して席に座りなおす。

医者は銃口を向けながら

「どうして私に、艦娘のカウンセラーを要求した？何を知っているんだ。」

医者は震える手で銃を握りそう聞く。

「座ってください。その銃では私は殺せない。それに私はあなたの命を狙った組織ではありません。」

「信用しろと？馬鹿らしい。あの時もそうだった。味方だと言って近づいて、同僚を……私の妻を殺したじゃないか。」

飛龍の手にはどうしようもなく、竹野に電話をかけてスピーカーにする。

「あー。初めまして。私は竹野。今そこにいる飛龍の上司です。事情を説明します。」

そうして竹野は一部の事実を隠し、嘘を織り交ぜながら説明する。

蒼龍が命を狙っていた事実は隠され、蒼龍が暗殺のさい調べ上げた医者の友人の名前を出して、その友人の紹介できたと平然と嘘を語った。

ようやく医者は銃をしまい、飛龍のカウンセリングを始めた。

カウンセリングを進めるうちに、医者は興奮したのか口早になつていった。

最初の騒動を忘れ、何度も質問がされた。

答えやすい質問に、答えにくい質問。答えたくない質問もあったがすべて正確に答えた。

「うーん。上官への信頼の根拠は明確。ただの上官と部下の関係で必要な接触も過剰なコミュニケーションの強要もない。そうですか。」

医者は満足げだった。

「結果は後日メールで送ります。」

「一つ聞いてもいいですか？」

そう聞いたのは、竹野だった。どうやらすべて聞かれてしまったようだ。

「何で平気な顔で人のプライバシー踏みにじってるのよ！」

飛龍が吠えるのを無視して、

「あなたは、どんな論文を発表しようとしたんですか？」

医者は固まった。

「本当はそれは聞きたかったんですね。」

医者はつぶやく。

「精神科医を騙せるとは思いません。認めます。でも、きっとあなたが導いた結論と私がたどり着いた結論は同じだ。」

「同じ？」

「ええ。すべての艦娘は同じ感性と性格をもち、個性をプログラムされているということですよ。」

医者は小さく頷いて。

「結果は送ります。でも、これが最後です。二度と私のとこに来ないでください。」

と言った。

竹野には聞き出したことが山ほどあったが今は無理だろう。

「気が変わったたら私に連絡を。」

「変わらないと思いますけど。」

飛龍は電話を今度こそ切り、小さな診療所を後にする。

しばらく歩いてから急に胸が苦しくなってきた。

個性をプログラム？

どうして？

私の頭の中で考えられるのはそのプログラムを組んだ何かが許可

したことだけ？

疑問が消えないが仮にそうだとすれば、都合の良すぎる艦娘と、死ぬまで従順であり続け性欲のはけ口にされても文句ひとつ言わない自分の仲間を説明するのに十分だった。

何者かに作られた存在。

そんな自分には後にも先にも自由などない。

記憶の目覚め

蒼龍のほうの調査には進展がなく、安全圏から情報部をつついてみたりしたがいずれも成果はなかった。

頼りはあの官僚の調査だけだった。

「まったく・・・」

と溜息を吐きながら、路地裏に転がっている男数人を見る。

何の情報も持たないネズミを拘束するのに無駄な労力を割いてしまったことを後悔するが今更無駄だ。

懐から銃を取り出してネズミの頭に向けるが、それもやめた。顔は見られたが同じ顔をした蒼龍は世界に大量に存在する。顔がばれようが、名前がばれようが困ることはない。それが艦娘の工作人員の強みの一つでもある。

銃をしまい、路地裏から出て人通りの少ない早朝の東京に再び溶け込む。

そのまま始発の電車に乗り料亭に戻る。

「戻りました。それで何かわかりましたか？」

蒼龍は上着を脱ぎながら離れに入る。

「私の友人はスイス銀行にもFRBにもいます。中央銀行だろうが富裕層御用達の銀行だろうが、調べると言われて調べられないことはありませんよ。」

「友人？よく言いますね。相手の弱みを握って下僕にしているくせに。」

こいつは手広くやっている。いろんな方法で弱みを握る。政治に中枢に入っているにもかかわらず脇の甘い人間を手の中で転がし権力を乗っ取る。影の人間にはなり切れない権力中毒者の常套手段だ。

「人聞きの悪いことを。まあ、否定はしませんが。」

「それで？」

「まずは結論から。金の出どころは、ノルウェー、オランダ、ベルギー、西ドイツにデンマーク。ほかにも複数の国家予算が始まりでした。」

複数の国家が共同で何かを進めていたというのか？

「オランダやベルギーはともかく、西ドイツが巨大な計画を進めることをイギリスだとか、アメリカだとかが許すはずがないと思うのが？」

蒼龍が言うと、男は

「鈍い人ですね。時には慎重に時には大胆に。全ての始まりはアメリカです。何の工作もなくヨーロッパの各国政府に金を送り、そこを起点に資金を動かす。」

「マーシャルプラン？」

「ご名答。マーシャルプランを含む様々な経済支援政策で配られた金の一部がここに記録されていた資金の源泉です。」

あまりに回りくどすぎる。そこまでして隠したかった計画とはいったい何なのか？

「それで、この資金が最後にたどり着いたのは？」

「そこが完全にたどれなくなっていました。」

「どうして？」

「米国政府は税金を使って怪しげな研究をしていることを隠したかった。しかしそれ以上に計画自体の内容を隠し通すことが優先だったようです。この資金が最後にたどり着いたのはある銀行です。名前はレイヴン開発投資銀行。」

聞いたことがない名前の銀行だ。

「聞いたことがない。」

「当然です。私もこの銀行の存在をつい数時間前まで知りませんでしたから。一般的に世界の富豪とアメリカ政府が取引するときを使う銀行とは全く違う米国管理下にありながら米国の銀行ではない特異な存在です。」

「一体どこの銀行です？」

「ポルトガルの銀行です。設立当初の所在地は東ティモール。これは憶測にすぎませんが、マーシャルプランで第二次世界大戦非参戦国のポルトガルまで支援を受けていた理由の一つかもしれません。」

どこまで手が込んでいるのか？

「どこまで手が込んでいるのならCIAが単体で行った計画ではなく

大統領が計画を認知して口を出していた可能性すらあると?」

「可能性の話をするならば十分あるでしょう。私の担当はここまです。」

「何とかしてこの先を調べられませんか?」

「銀行に押し入って、権力だとか暴力だとかを振るい情報を要求するのはそちらの仕事ですよ。」

「それもそうですね。また連絡します。」

男は不満そうな顔をして

「ここまで苦労して手に入れた情報ですよ? 少しぐらい見返りがあってもいいと思うますが?」

「私があなたにしたように弱みを使って他人を脅し、手に入れた情報をまとめただけで苦労したと? 馬鹿らしいですね。」

蒼龍は冷たく言い放ち、男の持っていた封筒をひったくる。

男は笑って。

「それもそうですね。私もあなたのことを言えるようなやり方をしていなかったことを忘れていましたよ。」

とわざとらしく言う。

そんな男を無視して蒼龍は料亭を後にする。

これからのことについて少し考えるが、やめた。竹野に任せよう。

彼は蒼龍の生きる世界の住人ではない。諜報戦の指揮官として彼は十分ではない。だがそれでいい。

下手にこの世界での定石を知っている蒼龍がどれだけ考えたとしてもこの計画を隠そうとしている複数の人間の仕掛けた防衛策を破れはしない。

裏の世界での戦い方を知らない竹野が戦う方がまだ可能性があるのも事実だった。

望んでいたような戦いの舞台ではないが、かつてともに戦うことを望んだ村上と戦うことが出来るのもまた蒼龍には単純にうれしかった。

私は奴隷ではない。

私は奴隷ではない。本当に？

私は化け物ではない。

本当に？

生きているのか死んでいるのかもわからない自分を人間だと自称する魔物が目の前には転がり、自分の手に血がにじんでいる。

その穢れた腕の中で守れなかったまだ幼い少女が次第に冷たくなっていく。

なぜこうなった？

天龍が改二になってから初めての秘書艦の日が来た。

「よう。」

「おはよう。改装後はどうだ？」

「問題ないぜ。」

竹野は目のやりどころに正直困っていた。

改装で雰囲気が変わる艦娘は多い。天龍の場合凛々しさが薄れ笑顔を見せてくれるのはいいのだが、幾分ガードも薄れ目のやり場に困るスタイルを見せてくる。

客観的な事実として彼女の容姿は魅惑的だった。

その美麗な姿に引き込まれていたのか彼女が席について仕事を始めるまでぼんやりと眺めていた。

「なんだよ。」

視線に気がついた天龍がそう言う。

「油断しすぎじゃないか？お前の場合最初からかもしれんが……。」

天龍も竹野が言わんとしていることを理解したのか、

「なっ！」

と慌て始める。

竹野には特に深い意味はなく、感想を述べたに過ぎず天龍にとつてもその発言だけでまた彼女が過剰な反応を見せることはなかった。少なくとも表面上は……

「セクハラって言うんだぞ、そういうのは。」

と不満を表しながら視線を手元に戻し作業を再開しようとしたと

き、自分の手に人間の血液が流れる幻覚を見た。

幻覚か？本当に？

「よいではないか。よいではないか。」

と竹野はふぎけて見せる。

「いつからお代官様になったんだ。ていうか、それ古いぞ。」

天龍は手元から視線をずらし竹野の方を見る。

彼は書類を眺めながら

「時代劇はいいものだぞ。」

と会話を続ける。

いつもならその姿を見るたびに今までの提督とは違うと、安堵したが今回は違った。

今なら殺せる。

そんな考えが頭の中をよぎった。

「あれは仮面ライダーと同じだろ？」

やっぱり殺すしかない。

彼らは抑圧者だ。

どんな善人であっても彼らの秘めている本質的な暴力性は変わることはない。

「不朽の名作になんてことを！それよりも。どうした？」

顔色が悪かったのか雰囲気がいっつもと違ったのか分からないが、彼は天龍に起きていた何かを一瞬で見抜いた。

「ちよつと気分がわりいんだ。」

「なら今日は秘書艦、変わるか？」

「改装でちよつとはしやぎすぎてつかれたのかもしれないねえな。」

そう言っつて秘書艦を続けた天龍だったが、脳内の何かの囁きは止まらなかった。

食堂で鳳翔さんが持っていたが包丁を見て最適な武器だと思ったり、ペーパーナイフで封筒の開ける竹野を見てチャンスだとも思ったり。

けれど、理由はわからなかった。

どうして突然こんな思考に陥ったのかわからない。

午後からは一言も言葉を交わさず淡々と業務を務めることに務め、仕事が終われば竹野と言葉を交わすことなく執務室を後にする。

「どうしたの柄にもなくむつかしそうな顔して。」

龍田がそう小ばかにしてくるがそれを相手する気にもなれなかった。

「うっせっ」

と小さく返し布団にくるまる。

外部の音が遮断されると今度は頭の中の声が大きくなり天龍を苦しめる。

痛みもないのに脂汗が流れ息苦しくなってくる。

必死に意識を逸らしてようやく眠りに落ちていく。

「いい加減起きろよ。」

天龍は提督に起こされる。だがその提督は竹野ではなく、彼よりも若く彼と比べれば頼りない男だった。

夢か？

天龍はその提督に起こされている自分を第三者の視点で見ている。

いつの記憶だ？

疑問はあったが幸せな空気に包まれどうでもよくなった。

そのまま夢に体を任せさらに深く夢に落ちていく。

「何時だ？」

「もう九時だぞ。」

天龍起きあがろうとすると何か違和感があった。

「そのまま寝ちまったのか？」

天龍は器用に体を布団で隠しながら起き上がると

「ちよつとやりすぎたかも。」

と提督はいたずらっぽく笑う。

「獣みたいに盛りやがって。」

そう不満を漏らす、その言葉は数週間構ってくれなかった事に対する不満だった。

「飲むか？」

提督はコーヒーポッドを持ち上げながらそう聞く。

「おう。シャワー浴びてくるから置いていてくれ。」

「わかった。」

天龍は布団から這い出て床に転がっていた服を適当に羽織り執務室にある風呂場に向かう。

短い髪を適当に洗いすぐに出る。

そもそも風呂が好きではない彼女だったが、それよりもせっかくの休日が無駄にしたくなかった。

浴室から出るとは適当に着替えが置いてあった。

そのラフな服を雑に着て髪も乾かさずに脱衣所を出る。

そのまま無言で提督に近づき後ろから抱き着く。

「暑い。」

とだけ文句をいうが提督は抵抗せずにそのまま手元の端末を操作する。

それが仕事であることはいわれなくても天龍にはわかっており無言でその作業が終わるのを待つ。

「よし出かけるか。」

ようやく仕事が終わったのか端末を机に放り出す

「天龍の髪から俺とおんなじシャンプーのにおいがするたび謎の背徳感があるな。」

「変態チックだぞ。」

天龍はそういいながらも提督の髪と自分の短い髪を少し苦勞しながら嗅ぎ比べる。

「わかんねえ。」

「また龍田が女子力ないと嘆くぞ。」

「好きに言わせときゃいいんだよ。」

提督は天龍のことをまじまじ見たかと思うと

「着替えを適当に出したのは俺だけどまさかそんな格好で外に出る気じゃないだろうな?..」

「ダメか?..」

と天龍は何がおかしいのかといった顔で提督を見る。

無言で提督は天龍の手を引いて鎮守府内を歩きほかの艦娘から服を借りて回った。

「これぐらいでいいだろ。」

提督が満足するころには日は西に落ち始めていた。

「しまった。」

と提督は慌てるがこれはこれで自分が姫様にでもなったようで楽しかった。

「鳳翔の店で飲もうぜ。」

「いつもと同じじゃねえか。それでいいならそれでいいんだけど。」

「この格好で女子力ないとか言った奴らを驚かせてやる。」

とノリノリで天龍は鳳翔の店に向かう。

「それは天龍の力じゃないと思うんだけど。」

と呟く提督を無視して敷地内にある鳳翔の店に向かう。

「あれ？天龍さん？」

鳳翔はいつもの雑な格好ではない天龍を見てすぐにどういうことか気がつき、邪推をしないことに決めた。

一方の天龍は褒めてほしかったようで、立ち上がってみたり必要もないのに歩き回ったりした。

「褒めてもらえなくて残念だな」

提督はけらけら笑う。

「提督と天龍じゃん。」

鈴谷だ。鈴谷ならきつと。

そう、反応をまつが鈴谷は笑顔のまましばらく固まり何事もなかったかのように話し始める。

「提督！そう言えば頼んでた本買ってくれた？」

「経費では落ちないからもう少し待って。それまでの間鈴谷は図書室にある戦術とかの本を読もうね。軽空母への改装も近いし。」

「ええ。めんどいな。」

「おい鈴谷！どうして俺の服装に関して何も言わない？」

天龍がそういうと鈴谷はまた固まって

「え。いやあ。いつも通りカツコイイじゃん。」

「かつこいい？」

「かわいくて女子力も高いと思います。」

鈴谷のギャルもどきのしゃべり方が崩れる。

「そうかなあ。そうだよなあ。」

と天龍は半ば脅して勝ち取った称賛の声に満足したようだ。

いそいそと逃げていった鈴谷は熊野のもとに戻り

「絶対あれは提督のセンスだって。あの適当な天龍があんなお上品な格好できるはずないって。」

天龍が来ていた服は誰が見ても美女のそれだった。男らしさも確かにあったがそれをうまく利用し、センスのいい大人の女性がそこにはいたのだ。

「間違いなくそうでしょうね。天龍さんがあんな格好自分からできるはずがないですもの。いつもみたいな痴女のような格好とは全然違いますわね。」

「ダルがらみしてまで褒められたいものか？」

提督が聞くと天龍は

「みんな俺に女子力がないとかイケメンだとか言つてさ、俺もお姫様で居たいときもあんだよ。」

「そう言ううまくいかないところも含めて天龍は愛おしいんだよ。じゃなきゃここまで惚れてない。」

「なんだよ突然。」

天龍ははぐらかすが、提督は真剣な顔で

「天龍。俺は君と本当の意味での自由な恋愛をしたい。上司と部下じゃなくて。艦娘と人間なんて区別もない世界で。だから、これをとっておいてくれ。」

そう言つて提督が取り出したのは小さな箱だった。

箱といつても布で包まれた豪勢で上品なものだった。

一度天龍は似たようなものを見たことがある。

ケツコンカツコカリの時だ。

「全部終わった後で、俺が君からこれを受け取つてその指の装備品と取り替える。それまで持つておいてくれるか？」

「おう。まかせとけ。でもいいのか？なくすかもしれないぞ。」

「頼りないなあ。」

そう言つて提督天龍に軽くキスして

「こんなことを言つたすぐ後に仕事があるのがすごく不本意だ。」

と言つて店を出ていく。

自然な流れで行われた愛の告白だったが、当然店の中のほかの艦娘が気づかないはずもなく提督が去つたあと小一時間問い詰められた。

疲れて眠つた次の朝、そわそわして執務室に向かう。

何となく入りずらかつたためノックしてみるが返事はない。

扉を開け、中に入った天龍は呆然と立ち尽くすしかなかつた。

室内は散らかり艦娘が二人床に転がつたまま動かない。

そして提督が銃を構え執務机に座つていた。

「なんだよこれ？どういうことだよ？」

天龍が聞くがその問いに返事は帰つてこなかつた。

提督の銃は火を吹きその弾が天龍に当たる。その程度で天龍が死ぬはずもないが提督は何度も撃ち続けた。

天龍は提督には近づいて銃を取り上げる。

するとようやく提督は口を開き今までになく弱々しくかすれた声で、

「俺達が存在する限り君は幸せになれない。どうか殺してくれ。」

そういうのだ。

「何言つてんだ。説明してくれ。」

天龍がそう怒鳴るが提督はうわ言のように

「頼むから殺してくれ。俺を一瞬でも本当に愛してくれたなら殺してくれ。」

と言う。

「何があつたんだよ？」

天龍は床で息絶えている自分の同胞を見ながら聞く

「俺が……殺した……。」

意外にも衝撃を受けることはなかつた。

「どうして?」

「最初からこうなる運命だった。戦争が終わっても幸せな日々なんか来やしない。天龍……すまん。」

「なんで関係ない艦娘を巻き込んだ!」

天龍が怒鳴るが提督にはもう届いてはいなかった。

「失望と失意の中で死ぬ情けない私を許してくれ。」

提督は天龍から銃を奪い自分の頭を打ち抜く。

やっぱりこの男も人間で、まがいものの愛でしかなかった。

戦争さえなければ生まれることすら許されなかった命など人間からしてみれば無意味で空虚なものでしかないのだ。

全て嘘だった。

嘘だった……本当に?」

天龍は動かなかった。愛していたからこそ動けなかった。

本当ならば自分が介錯するべきだったのに。

提督の手から銃を取り上げ安全装置を元に戻す。

安らかそうな顔の提督の頬に天龍はキスをして、自分も死ぬ準備を始める。

大量の睡眠剤を摂取し、目を閉じる。

もう二度と目が覚めることがないように。

「はあはあはあ……」

「大丈夫か?」

不幸にも目が覚めてしまったようだ。

「提督。俺はあんたを殺しちまうかもしれないねえんだ。」

竹野は首を傾げる

「それまたどうして?」

「提督を殺したただ一人の艦娘がいただろ。あれは俺だった。」

竹野は少しも驚くことも、疑うこともせず

「それで?」

「それで? 責めたり貶したり、慰めたりしないのか?」

天龍の性格からして、言葉が足りていないだけだと竹野には何とな

くわかった。

本当に彼女の意思で提督を殺したのなら流すのは涙ではなく血だ。「君が本当に日常での悲劇的な死を知っているならまったく意味のない慰めの言葉なんて必要ないだろう?」

戦場での死は、日常だ。

だが日常での死は悲劇だ。

それがたとえ止めなかつただけでも。

自分が手を下していようがなかりうが、彼女を誰も裁こうとしないし、誰も責めない。

ある意味法は免罪符となりえたが法は彼女をさばきはしない。

励ましと元気を出せなどという無意味な言葉、それがどれほどの自尊心を破壊するのか、竹野はよく知っていた。

「忘れろといっても忘れられず、反省しろといってももう手遅れ。ただ責められただけなのに与えられる言葉は自分が納得できない擁護の数々。体中が焼けるように痛んで毎日眠れなくなる。」

解決法はただ一つの。竹野がここに来てよく眠れるようになったように、

「激痛を真つ正面から受け止めて、これ以上ない痛みと後悔に身を置け。絶対に逃げるな。どれだけ逃げても痛みの元凶は殺してしまつた相手ではなく自分の心の中に住んでいる。逃げるだけ無駄だ。」

竹野ができるアドバイスはその程度だった。

事実がどうであつたのかいずれは知ることになるだろうが、今は天龍がこれ以上間違いを冒さないようにする必要がある。

竹野には最低限提督としての責任を果たすことしかできなかった。なぜか?

簡単だ。

竹野は涙を浮かべる天龍の目線の先にいるであろう彼女の愛した男ではなかつたからだ。

「しばらくは秘書艦の当番も変わってもらえ。私がここに来てから少し負担をかけすぎた。ゆつくり休め。」

そう言つて竹野は部屋を出ていく。

天龍は涙を拭って大きく息を吸うと

「何勝手に人の部屋に入ってたんだよ！」

と竹野に向かって吼える。

「ばれたか。」

竹野も振り返り笑う。

それは戦時下でできる精一杯の明るい振る舞いだった。

反乱者たち

蒼龍は執務室の異質な空気感をすぐに察知した。

秘書艦として竹野の傍にいた天龍と彼の間いつものとは違う深刻な空気が流れていたのだ。

「まあ。いろいろと。」

竹野はそうごまかす。

「私に隠し事ですか？」

隠し通せるとでも？と言った言葉を含み蒼龍は言う。

「君意外にこの鎮守府には情報戦のプロはいません。この鎮守府で起こる些細な問題を全て調べる暇ありませんよ。」

「そうですね。」

蒼龍は天龍の方をちらりとだけ見て竹野に向き直り封筒を渡す。

「資金の出どころはアメリカでした。WW2後の経済支援政策でばらまかれた資金の一部が様々な銀行を経由してレイヴン開発投資銀行へ流れました。」

「その後は？」

「アメリカは経済支援を行う見返りにポルトガルに銀行を作らせその経営権を完全に掌握したものとみられます。つまり、この銀行は完全にアメリカ政府の管理下にある銀行で、極秘計画の資金源を管理する銀行だったわけですから人脈と賄賂でこちら側に引き入れることが出来る職員は所属していないでしょう。こっちの動きを露見させるだけです。」

竹野は蒼龍の話聞きながら封筒の中の書類を見ていく。

「東ティモールか……」

「東ティモールがどうかしましたか？」

「ちょうど今日大スンダ列島への敵攻勢を受けて退去命令が出た。チャンスかもしれないな。」

「向こうに派兵するんですか？」

「前の作戦で情報部は偵察を強化しているし、なにせ今の敵には侵攻部隊がない。司令官がいらない深海棲艦はそう簡単に熟練兵を補充で

きない。百人ぐらいなら派兵しても防衛に問題はない。」

だがはたして勝てるのだろうか？ここの管轄とインドネシアあたりでは管轄が違う。

管轄と言うほど大層なものではなく縄張りと言った方が適切なのかもしれぬが、なんにせよいま大スンダ列島に侵攻してきているのは間違いなく敵の熟練部隊だ。

「勝てるんでしょうか？」

「勝算はない。報告を聞く限りすでに一部の島では国連軍駐屯部隊がゲリラ戦を開始している。一か月もしないうちに制圧されるだろう。目標は侵攻の遅延とレイヴン投資開発銀行の調査だ。」

「相手がプロなら情報を廃棄してから脱出するでしょう。苦労して島を守っても手に入るものは何も無いと思えますが？」

竹野が良く知らない情報戦の世界で戦うには相手のミスをも血なまこになって探すほかない。

何も見つかからない確率の方が高いことに間違いはない。

艦娘の命を危険にさらしてまですべき作戦ではないかもしれないことは重々承知だった。

「だからだ。相手は人間の組織だ。ミスを絶対に犯す。そのミスにかこつちの勝機はない。」

蒼龍は特に言い返そうとはしなかった。

「なら可能な限りの情報を集めます。」

「頼む。私は適当な遠征理由をでっちあげる。」

「出撃する艦娘には真の目標について教えますか？」

「当たり前だ。こちらの目標を知らず陥落することが確定している拠点にとどまらせるわけにはいかない。」

「わかりました。」

この鎮守府で最も敵に内通している可能性があるのは蒼龍だった。けれど彼女は知っている。自分が内通者ではないことを。

そしてニサエルという人間もよく知っている。

欺瞞に満ちたあの男がはたして本当に竹野の動きを補足しているのだろうか？

飛龍はテトラポッドを眺めながらおぼろげに海を見ていた。大して傷ついたわけではない。知っていたことだ。自分たちはあまりにも人間と違いすぎる。

進化論で自分たちを定義するための中間種が存在していない。進化の過程を説明できない自分たちをどうすればいいのか？

「こつちに顔も出さずに悩み事か？」

竹野は飛龍に話しかける。

相も変わらず勝手にずかずかところらに踏み込んでくる。

「さすがに今回の悩みは理解できないでしょう？」

飛龍は明るく言う。

「共感出来たらおかしな話だ。」

ヒトは科学と実感、どちらの側面からも自我を強固に形成している。

しかし、艦娘は社会に認められず、科学で自分たちを定義することも出来ない。

「艦娘の研究が禁止されているのは知っているか？」

「禁止されてるなら装備開発局をどう説明するの？」

「艦娘それ自体の研究は禁止されているが装備を研究するのは何の問題もない。」

飛龍にはよくわからなかった。研究できないのに艦娘を量産し戦場に送り出すことなどではしない。

「まさか妖精達しか私たちの出自を知らないとでも？」

「全く持ってその通りだ。妖精が艦娘を建造し傷を治す。彼らは人間に従順だが意思疎通を図ることはできない。だから人間は艦娘を理解できない。」

「だからと言って禁止する必要はないと思うけど？」

「生物学だろうが、物理学だろうが、量子力学だろうが、あらゆる分野において艦娘と言う研究対象は魅力的で破壊的だった。」

飛龍にはそれが理解できなかった。

「それなら一層研究すべきじゃないの？全く分からないんだけど。」

「多くの学者が研究にとりつかれ挫折し命まで絶ってしまった。君たちはあまりに美しくそして合理的だった。君たちを作り出したのが自然だろうと、別の学者だろうとあるいは別の文明だろうと、科学者たちにとってそれはどうでもいいことだった。だが、彼らは艦娘を研究することで自分の無力さと無意味さをいやというほど知ってしまった。」

「私たちの体が美しい？」

「ただ美人だとかいうそんな世俗的な話ではない。もつと本質的な美しく完成された生命体と言う意味だ。例を挙げるならばその強固な表皮だ。優しく触れれば人と同じような柔らかさだが拳銃程度なら何の問題もなくはじき返し自分の腕ぐらいある弾丸ですら致命傷にならない。どうしてかわかるか？」

「すごく丈夫な皮膚をしているとか？」

「そんな簡単に強引な結論だったなら研究者が自殺したりしない。円柱と角柱、どちらが壊れやすいかわかると思うがそれと同じだ。皮膚全体に衝撃が分散され攻撃を無効化する。数えきれないほど多くの細胞がまるで一つのパーツの様に配置され、たとえ損傷しても修復できる。」

「いつ調べたの？」

「扶桑が五右衛門風呂で復活した後だ。妖精は君たちを建造し、整備し、強化する。けれど修復するのは君たち自身だそうだ。理論も何も説明出来やしない。今の人類でははるかに及ばない技術だ。アインシュタインがたとえ100人いたとしても実現不可能なオーバートクノロジーだよ。」

「だから私たちは創造物ではないと？」

「生命倫理の話を持ち出したくはないが、たとえ君たちが創造物だとしても君の人格は人間にとってあまりにも不都合すぎると思わないか？」

「都合よすぎる主張じゃない？とんでもないテクノロジーを持って私たちを作り上げた創造主が人格をコントロールできなかつたとしても？」

「やけに今日は切れるな。その通りだ。だがそんなことを言い出したなら人間だってそうだ。都合よく解釈することではしか正気を保てない疑問も存在する。」

いつもそうだ。自分たちのことを知ろうと思えば思うほど今まで形成されていた都合のいいストーリーが崩れていく。

整地されていない荒い地肌に敷かれていた絨毯が消えていく。心地いいことではない。

艦娘と提督の間にあつた、そんな都合のいい馴れ合いの世界を自ら捨てた飛龍とここにいるすべての艦娘がいずれ直面するであろう必然の絶望だ。

隠されていたわけでも、知らなかったわけでもない。

目の前にその疑問は常にあつたがそれを無視し続けていた。

艦娘もヒトも。生命倫理だどうこうと難しい話ばかりを引っ張り出し最も単純で最も重要な結論を放棄し続けるために。

「それでもいつかは知らなければいけない!」

「そうだ。だが今はその時ではない。」

そして、その導き手は竹野ではなく……

「いずれ君も知るようになる。馴れ合いのストーリーに生きる必要はない。だがその馴れ合いのストーリーを破綻させるタイミングを間違えればあるのは混沌と死だけだ。」

竹野の口調は次第に強くなり珍しく感情をあらわにして飛龍の疑問を押し戻そうとしていた。

「わかった。信じる。」

そんな竹野を見て飛龍は曇りも含みもない声でそうとだけ言った。

防衛連合軍ヨーロッパ支部統括指令センター

がれきの中から重要書類を発掘する作業が終わりようやく残骸の撤去が始まった。

しかし、今なお銃を持った兵士が工事現場を監視している。

米軍が Aaron Mankind の掃討作戦を実施したがそれは一時しのぎにすぎずまたそこから生まれた憎しみがカルトを強化す

るのだろう。

士気も装備も何もかも失ったヨーロッパ方面軍にもはや未来などないに等しかった。

襲撃から数週間で職員の四分の一が軍をやめた。

機能不全に陥るのは当然の事態であり特に被害がひどかった憲兵隊では部隊のほとんどが死亡したためラツコエが憲兵隊の事実上の長になってしまった。

彼女は突然の昇格に驚きを隠せなかったが報告を聞いて絶望した。

ヨーロッパ方面軍では数少ないある程度の士気を持っていた憲兵隊はその多くが抵抗の末に殺害されていた。

憲兵隊にはもう百人も残っていなかった。

失意のなか仕事を続けるラツコエだったが死亡した隊員のリストを見ていくうちにおかしなことに気が付いた。

「どうしてこんなにも多くの上層部の人間が死ぬんだ？」

幹部の9割以上が殺害される異常事態が起きていたにも関わらずだれもそのことに触れようとしていなかった。

ラツコエには嫌な予感がした。

憲兵たちがここまでの被害を出したのは士気がどうかではなく単純に上官を守ろうとして殺されたのではないかと。

カルトからしてみればヒトの兵士は洗脳されてしまった仲間であり必要性がなければ殺さない。

彼らが狙うのは艦娘の命だ。

にもかかわらず艦娘の死者は全体でも数千程度でありどうにも説明がつかない。

決定的だったのは移動中の幹部が殺害されていたことだ。

「こんなあり得ない。」

ラツコエは研修生の名前を漁り竹野の連絡先を調べる。

そして受話器を上げ番号を入力しようとしたがその直前で動きを止める。

信じたくないことだがこの騒動が防衛連合軍内部の動きであるならば会話が傍受されていて何ら不思議ではない。受話器を置いた

ラッコエは心を静め方法を考える。

自分が動けば怪しまれる。手紙で送っても途中で検閲されるだろう。

誰かを差し向けるのが最も望ましいが……

「気が付いたようだな。」

悩んでいるラッコエの前にスーツ姿の女が立っていた。不自然にジャケットの前を開き、脇腹から銃のホルスターをのぞかせている。

一方のラッコエは装備を付けたベルトを丸ごと上着と共にポールにかけており丸腰であった。それでも

「誰だ？何の用でここに来た。」

と強く言い返す。

「私は情報部のムーンだ。何があり得ないのか詳しく聞かせてもらおう。」

英雄の限界点

竹野が立てた作戦は承認された。

それが逆に不自然に思える。

確かに苦勞してひねり出したそれっぽい理由だったがまさかここまですぐに承認されるとは思わなかった。

実体のよくわからない何かがうごめいているような感覚に陥るが、竹野にはその実体のない何かを知るすべなどなかった。

「提督！遠征の準備が出来ました。」

遠征準備を指示した吹雪がそう報告してくる。

「ご苦勞。すぐに出発してくれ。くれぐれも目標を見誤るな。バリクパパンで私の到着を待ってくれ。」

出来ることなら竹野もすぐに出発したかったが鎮守府の指揮権の一時委譲などに手間取りすぐには出発できそうになかった。

「了解。出撃します。」

吹雪が敬礼をして部屋を去る。竹野も慌てて敬礼を返し吹雪を見送る。

敬礼したのは久しぶりだった。

その間にも加賀が無言で山のような書類を着々と処理していた。

再び沈黙が流れキーボードへの入力音とペンの音だけが執務室には響いていた。

それから数時間の間無言で作業を進めようやく一通りの書類作業が終了した。

引継ぎのために本土へ戻る必要もありそれだけで終わりではなかったが。

「それじゃあ行って来る。戻るのは一週間後ぐらいだ。」

本土からそのまま東ティモールへ向かうため大荷物の竹野を加賀は

「どうかご無事で。私達だけを残されても困りますから。」

そんな可愛げのない言葉で見送る。

可愛げがあっても心がない言葉よりはうれしいものだ。

「わかってる。」

そう言つて、竹野はいつものように輸送機に乗り南鳥島を後にした。

ラッコエは机の裏に銃でも設置しておけばと後悔しながら吸い込まれそうなムーンの目を見つめる。

「もう一度聞く。何があり得ないことなのだ？」

ムーンの言葉には圧があった。

「あり得ないことばかりの世界であり得ないと言つてなにが悪いんでしょうか。」

「あり得ないと嘆くことは許されるだろうが、あなたが知ったその事実は非常に不本意な結果をもたらしかねない。」

「何があり得ないことなのか知っているのにわざわざ聞くななんて性の悪い女ね。」

ラッコエは机に置いてある資料をムーンの方に投げつける。

ムーンは銃を取り出そうと動くがその書類を見て動きを止める。

「なる程。これが流出することを恐れていたのか。」

ムーンは納得したようにうなづいて、銃を取り出し何の躊躇もなく発砲した。

発砲音を聞きつけた警備兵がラッコエの部屋に入るとその部屋は激しく燃えていた。

3日後 バリクパパン

「無事に到着できたようで何よりだ。」

竹野は先に出発していた部隊と合流して最後の打ち合わせをしていた。

「現時点でマカツサルは上陸こそされなかったものの沿岸砲撃で甚大な被害が出ており補給以外には使えない基地となっています。」

「展開中の航空戦力は？」

「艦娘の艦載機と無人偵察機が60機程です。」

相変わらず蒼龍の仕事は早かった。

「厳しい戦いになるな。」

分かってはいたことではあるが

「どうした村上そんな弱気になって？」

「私は竹野だ間違えるな。」

「俺たちにとつては村上だ。命を投げ出しても構わないと俺たちに思わせるのは村上という男だけだ。」

そう言うのは昔の仲間だ。艦娘が登場するまでの地獄の一年をもに戦った戦友たちだった。少し手を貸してもらうために呼び出したのだ。

今思ってもただの官僚上がりによくついてきてくれたものだ。

「わかったよ。」

竹野は苦笑いしてそのむさくるしい男たちを見る。

到着した時からすでに沈みかけていた日が完全に消え作戦前の晩餐をして夜は更けていく。

晩餐と言っても体調を万全に保つため、雰囲気だけのごちそうだったが。

翌朝、そのむさくるしい男たちに見送られ竹野は最低限の装備を積んだ小柄なコルベットに乗艦して海に出る。

こうして海に出るが、それは伝統的にそうしているだけで本当は竹野が現場に行く必要などなかった。

三十年ほど前、国連が環境に関する研究を最優先するよう各国に通達するまで人々は宇宙の時代が来ることを信じていた。

その遺物として地球軌道上には光速通信衛星が多数存在しており地球の裏と通信することになってほとんどラグはない。

戦線がそれなりに安定していた一時期、安全な場所で指示を出していた士官たちは戦場がわからなくなり艦娘の被害を拡大させた。

そうならなかったための自戒という意味もあるのだろう。

竹野はそこまでかたくなに出撃しようと思わずに態度ではなく実力で責任を果たすタイプの指揮官だったが、戦場でなければ気が付けないことがあることや戦場でなければ発揮できない能力があることもまたわかっていた。

「手早く済ませるぞ。テイモール島に上陸後すぐに昨晚の男たちが降下してくる。彼らが調査を終えるまで深海棲艦を抑えつけろ。」

「どれだけの間耐えればいいのか?」

朝潮がそう聞いてくる。

至極当然の疑問ではあったがこの作戦で最も憂慮すべき不確定要素について竹野は明確な回答ができなかった。

「作戦に先立って銀行の図面を探したが見つからなかった。だから捜索にどれだけ時間がかかるかわからない。」

「わかりました。そうであるなら命令あるまで彼らを援護します。」

朝潮はそう力強く言ってくれるが、竹野はそうもかたくなではなかった。

損害を出さないことが最優先の目標であり最悪何も見つからなくてもいいのだ。

足跡は消えてしまうかもしれないが、飛龍を調べたあの医師も何かを知っている。

次はそこを当たればいいと楽観的に見ていた。

「気負うな。俺たちはドロップアウトした部隊だ。失敗してもひどいことはおこらんさ。」

そう適当なことを言う竹野だったが艦内のディスプレイを注意深く見ながら最も気を張っていた。

予想通りマカツサルはひどいものだった。

燃料タンクは破損しすでに部隊を駐屯させておく能力を失っていた。

コルベットは港内に散らばっている残骸を押しつけながら接岸し、竹野は軍施設に向かう

「第991派遣軍司令官の竹野です状況は?」

「マカツサル基地司令のマカードです。ほとんどの設備は使い物にならなくなり砲撃陣地も破壊されましたが、一度補給を約束した限り責任は果たします。」

マカードはまだ若い司令官だったがそうはつきりと言い切った。

竹野は大丈夫だと言い少しい顔をしかつたがそういう訳にもいかなかった。

この基地が自分たちが復路に着いた時まだ機能している保証などなかった。

復路では補給ができないのであれば、ここで燃料を満載にしておかなければティモール島での戦闘に大きな制約がかかる。

「大変なところ申し訳ない。」

苦勞して送り出した部隊の目的がティモール島の奪還ではないと知った時あの基地司令は何というだろうか？

「司令！敵部隊がまた接近中です！」

悲鳴を上げながら兵士が一人駆け込んでくる。

竹野は腰の無線をとり

「吹雪。そっちの状況は。」

と聞く。

「補給のために装備を解除したところです。」

「出撃できるか？」

「港湾設備が破壊され再武装には少し時間がかかります。すみません。」

「よし聞け。動ける艦は全て堤防に向かえ。」

竹野は階段を駆け上り屋上に向かう。

マカード司令もついてくる。

「無茶です！補給中の艦が動かせないのに応戦するなんて。」

「前の攻撃の時、敵は何隻いましたか？」

「八十から百十隻程度でした。」

「なる程。」

正直情報不足で何とも言えないが不利であることだけはすぐに分かった。

「赤城です。動ける艦は12隻しかいませんが本当に応戦を？」

「応戦しなければ補給中の無防備な艦が攻撃にさらされるだけだ。コルベット！3D戦闘支援システムを展開してくれ。」

「ハミルトン、砲術長だ。了解した。システム展開完了まで5分かか

る。」

赤城をはじめとした12隻は拳を握り地平線に目を凝らす。

戦闘はすぐに始まった。赤城から発艦した雷撃隊が接敵後すぐに戦闘状態に突入したのだ。

赤城以外に千代田も艦載機を上げていたが千代田の初撃は回避されてしまった。

「ハミルトンだ。展開を完了した。」

ハミルトンから連絡が入るなりすぐに竹野は端末を立ち上げ詳細を確認する。

半径五キロ程度しか監視できないため多くの場合有用ではないが今回は違った。

レーダー設備が破壊されたこの基地は敵が接近するまで気が付くことができなかった。

すでに交戦が始まっている状況ではゲームチェンジャになり得るほどに性能だけは優れていた。

しかし性能だけいい兵器が役に立たないことは戦争ではよくあることだ。

「確認した。赤城、敵は93体だ。いずれも脅威は低いがなにせ数が多い。慎重に対処してくれ。」

そうはいったが九対一ではいくら練度があっても分が悪い。

「比叡射撃開始します。」

敵はすぐに砲戦圏内に侵入して堤防の方でしきりに煙と水柱が上がる。

比叡は初弾を的確に命中させた。だが彼女の視界の先に移ったのは沈みかけた敵ではなかった。

「おかしい。」

比叡は堤防を飛び降り急いでその場を離れる。赤城も動く、間一髪のところですべての艦娘は攻撃をよけたが堤防は跡形もなく吹き飛んでいた。

「ハミルトン。被弾した、浸水を確認3D戦闘支援システムの展開維持は困難！」

「待つてくれもう少しだけ。」

そんな竹野の願いもむなしく遠くから何かが飛来してくる。

「シエルターに急げ！」

竹野がそう叫ぶころには工廠への爆撃と機銃掃射が開始されていた。

「吹雪対空戦闘！」

「開始しました。」

基地内のサイレンが響き渡り対空砲の展開が急がれたがほとんどが無駄だった。

展開される前に対空砲の多くが破壊され戦闘要員が機銃掃射で殺されたからだ。

「赤城状況を報告！」

「敵の数は不明です。艦載機の損耗が激しく私自身も発着艦に支障はないですが被弾しました。」

絶対的な情報優勢が防衛連合軍唯一の勝ち筋にも関わらず敵に奇襲を許し、敵戦力を見誤り、とにかく防衛連合軍の監視網はずさんな管理でその能力を発揮できていなかった。

「ハミルトン砲戦用意！」

「了解。ハミルトン砲戦準備」

「マカード基地司令！陸戦用意」

「ああ分かった。」

敵はすでに揚陸を開始していた。

赤城をはじめとした最前線の部隊も善戦はしていたが数の不利があまりにも決定的すぎた。

「赤城。後退しろ。」

「了解。」

竹野は階段を駆け下りながら指示を出す。

「吹雪。当初の目的は忘れて出撃しろ。」

実体の分からない何かを探すためにティモール島へ部隊を派遣する余裕などすでになかった。

マカツサルはそれなりに大きい町だった。

それは今の状況ではマイナス意外何の要素も持っていなかった。人間が深海棲艦への憎悪を増せば増すほど深海棲艦の人間に対する憎悪も大きくなっていった。

最初から深海棲艦は無抵抗の市民を惨殺していた。だがそれは彼らにとつても不本意な使命だったように思えた。

しかし近頃の深海棲艦はその使命以上の憎悪によって突き動かされていた。

逃げまどう市民に対してその体が飛び散る程大きな弾丸を打ち込みたつた一発で人は死ぬにも関わらず深海棲艦はその頭が砕け散るまで打撃をやめはしなかった。

陸戦を開始した防衛連合軍の部隊もその侵攻を止めることはできず、防衛陣地の形成すらままならないうちに死者をひたすらに増やしていった。

すでにハミルトンとの通信は途絶したが先ほどの93体の敵が偵察部隊に過ぎなかったことはすぐに分かった。

少なくとも一万を超える深海棲艦の大部隊が攻撃してきていた。その大きな流れの中で竹野が連れてきた百にも満たない部隊では何もできなかった。

竹野は優れた戦術家ではあったがそれは全戦全勝の神のような力を持った人間であるという意味ではなかった。

「赤城。撤退準備だ。」

「ですが！」

「撤退だ！聞こえたな！全部隊撤退準備！ここをいち早く離れる」

「竹野提督。輸送ヘリを要請しましたお急ぎを。ヘリは可能な限りの市民を乗せてここを離れます。」

マカードは地下の戦闘指揮室で竹野に言う。

「あなたはここに残るんですか？」

「何もできないからと言って守るべき人を見捨てて逃げることなどできない。あなただってここが自分の基地であればそうするでしょう？」

マカードの意思は固かった。

竹野は何も言わずに敬礼をして地下壕を出る。

輸送ヘリに乗り込んだ軍服の竹野を市民は鋭い目で見ていた。

軍人が戦場から逃げるのを良しとする市民などいないことは分かっていた。

しかしそうして多くの優秀な指揮官が死んでいくのを竹野は見えてきた。

そうして指揮官を失った艦娘たちの悲惨な結末も。

竹野はコックピットに移動して無線を借りる。

「吹雪。準備は？」

「全艦再武装完了。本当にこれでいいんですか？」

「私たちがここで玉砕したとしても結果は同じだ。取り残された市民の余命が少し伸びるだけだ。」

マカツサルを母港にする部隊すら帰ってこない。大スندا列島で敗北したことなど戦闘報告を読まずともわかった。時間を稼いでも無駄だった。

ヘリが離陸し窓からは街のあちこちから煙が上がっているのが見える。

竹野が無線機を調整していると50代の女がコックピットに入ってきた。

「お願いです！どうか！どうか！あの船を守ってください！」

女はそう叫ぶのだ。竹野が窓から港の方を見ると古臭い赤い船が港を出ようとしていた。

「お願いです！あなたに少しでも軍人としてのプライドがあるならあの船を。」

叫んでいた女は搭乗していた兵士にコックピットを追い出される。

「私の娘がああ船に乗っているかもしれないんです！」

そう後ろで叫ぶ声が聞こえるが、竹野の意思は船を見つけた時点で決まっていた。

「吹雪。赤い船が見えるか？」

「見えますけど。これを護衛しろと？」

「物分かりが良くて助かる。」

例えその船が遅く護衛が困難だろうとも、ここで絶望的な防衛線することとは違った。

「今の燃料でここにとどまれるのはどのぐらいだ？」

「風向きが変わることなども考慮した安全圏に収めるなら30分が限界です。」

「わかったありがとう。」

「聞いたな？三十分で敵の包囲網を食い破ってその船を沖に出す。」

「了解。」

「その赤い船。こちらは第991派遣軍司令官の竹野だ。応答せよ。」

「こちらファロ。用件は？」

「脱出を支援する。現在の周波数を維持。タイミングはこちらで指示する。」

「支援感謝する。だがそう長くは待てないぞ。こっちは人が山ほど乗せてるんだ。」

「のんびりやっているとこっちの部隊も壊滅しかねない。信じてくれ。」

「了解した。」

「千歳ハミルトンからの偵察情報が切れたのは知ってるな？」

「偵察機ですね任してください。」

竹野は端末を開き映像を確認するがこの端末の電池にも制約があり本当に時間の余裕がなかった。

「よし。敵の攻撃部隊は町全体に砲撃を加え、一部の地区に上陸を開始している。知つての通り艦娘だろうが深海棲艦だろうが陸上に上がればいいのだ。だが航空隊の攻撃力は変わらない。無茶な注文をするが空母各艦は魚雷の信管を時限式に切り替えて上陸した敵の足元に滑り込ませろ。圧倒的な数的有利を持った敵は数で抑えようとしてくるだろうからそのすきについて一点突破する。敵が引き付けられたら全火力を持って敵を攻撃！ほんの一瞬しか防衛網を破れないがそのすきに船を逃がす。わかったか？」

「了解しました。空母の皆さん、訓練の成果を今こそ提督に認めさせる時ですよ。」

「ああそうだ。たのむぞ。」

竹野の指示のあとすぐに作戦は開始された。

赤城は発艦させた雷撃隊を家屋の間を縫うように移動させ攻撃機の実際の数をごまかす。

航空隊が見えない以上敵は被害の大きさからしか部隊の規模を把握できない。一発で一体倒せば敵は大部隊だと誤解してより作戦の精度が高まる。

飛行隊がようやく敵を捕らえた時、そこに移ったのは目をそらしたくなるような地獄だった。

恐らく人間であっただろう肉塊がそこら中に散乱しており腕を引きちぎられているにも関わらずかろうじて生きていた人間を深海棲艦は処刑した。片腕を失って逃げようとする人を踏みつけ脳天に人を撃ち殺すにはあまりに大きすぎる銃弾を撃ち込んだ。

だがそうやって感情的に動いていた深海棲艦達にはあり得ない敵の襲来に驚愕した。自分たちの目線の先には爆撃機でも戦闘機でもなく雷撃機がいたのだ。そこで彼らが回避しようとしていたら少しは変わったかもしれないが彼らはなめ腐った様子で雷撃機に攻撃を浴びせた。

だがそんな甘い攻撃が竹野にしごかれた艦娘の放つ雷撃隊に当たるはずがなかった。魚雷投射後さらに高度を下げて地面すれすれを飛び深海棲艦の背中の方に抜けていく。

彼らが安心したのもつかの間。自分たちの足元に魚雷があることに気が付いた時にはもう遅すぎた。

自分たちが処刑した人々と同じように彼らもただの肉塊となった。

「攻撃成功。」

「千歳?」

「敵部隊の一部が移動したのを確認しました。」

「よし第二段階に移行する。比叡、榛名敵防衛網を食い破れ!」

そうして、さっきまでの一方的な航空戦とは打って変わって敵味方が入り交じる混戦に突入した。

「主砲。撃ちます!」

比叡は苛烈な砲撃で遠くの敵を吹き飛ばし強靱な拳で近寄ってきた敵の小型艦を薙ぎ払う。

近づいてきた戦艦には容赦なく魚雷をねじ込んだ。

空母たちも混戦の中でも誤爆なしで攻撃を続け機銃掃射で敵をかき乱した。

ただ、蒼龍の戦い方は全く他とは違った。

艦載機を自分の支援に全く使わなかったのだ。

蒼龍には竹野が見込んだ素晴らしい戦闘センスがあった。艦載機の練度も南鳥島鎮守府でも上位10人に入るほど高かったがそれでも蒼龍にとつては艦載機は足手まといにかならなかった。

どこから持ち出したかわからない短刀で敵を切り刻み、まるで重力などないといわんばかりに水上で跳躍しあつという間に周囲を深海棲艦の遺骸で埋め尽くした。

それが蒼龍の教えられた戦い方だった。

しかし深海棲艦はその遺骸をよけながら蒼龍にまた接近してくる。

蒼龍は水上でまた跳び接近してきた深海棲艦の脳天を水面にたたきつける。暴れる深海棲艦の口に爆撃機用の爆弾をねじ込み敵がいるほうに蹴り飛ばす。その深海棲艦が吐き出した爆弾で周囲の深海棲艦も被弾した。混乱する中に蒼龍は突貫しまた死骸の積み上げる。

蒼龍が異常な戦い方をしている間も着実に部隊は防衛網の傷を広げていく。

「そろそろだ。ファロ、道は作った全速力で離脱せよ。」

「感謝する。」

船が港を出ると、敵の攻撃はより一層激しさをましたが船尾を追いかけるようにして部隊は徐々に撤退し防衛範囲を狭くすることで対応した。船が港を離れてしばらくすると敵はあきらめたのか、それとも損害が割に合わないと思ったのか攻撃をやめた。

だが、その日、マカツサルでは70万人の民間人と4700人以上の防衛連合軍軍人が死んだ。

竹野が救えたのはあの船に乗っていた1398人だけだった。

ト書きなき世界

出港から十数時間が経ち、ようやく吹雪たちに守られながらフアロはバリクパパンに入港した。

そのころになってようやく深海棲艦の部隊がマカツサルから撤退した。

それが確認されたあと救助部隊が編成され、輸送機数機がバリクパパンから出撃した。

彼らは無事に帰ってきたが、輸送機に乗っていたのも彼らだけだった。

「お疲れ様です。」

その夜、蒼龍は竹野の部屋にやってきて言う。

「肉体労働をしたのは君たちのほうだろうか？」

「わかりやすい肉体労働をしているだけで責任から逃げられるんです。どちらの負担が少ないのかは好みでしかない。そうでしょう？」

「それで？まさか私とすでに失われた命について女々しい議論をしに来たわけじゃないだろ？」

女々しい議論。その言い草は死んでいったあの基地の軍人への冒瀆だ。だがそれをわかつた上で自虐としてそんな言い方をしているのだろう。

「ええ。フアロと言われて何が頭に浮かんできますか？」

「ポルトガルの地名だな。おそらくあの船はポルトガル船籍だった。」

「その通りです。あの船の航行報告を確認しましたが護衛もなしにインド洋を突っ切っていました。ただの旧式の船ができる芸当ではありません。」

インド洋の制海権は太平洋よりか幾らかましなだけで安全な航行ができる確率は極めて低い。

どんなからくりがあるのかわからないがまず間違いなく偶然近くにいたポルトガル船籍の船ではない。

「よし。あの船に乗り込むぞ。」

「騒ぎが起きますよ?」

「最悪騒ぎが起きたとしても、ここは防衛連合軍の軍政下の町だ。奴らは騒ぎを憲兵たちに訴えないだろう。奴らにとって憲兵に船を捜査されることは非常に都合が悪い。俺たちが奴らにとらえられなければ何も問題は起きない。」

「もう少し思慮深いかと思っただんですが。」

「何か問題はあったか?」

竹野は荷物の中から拳銃とマガジンを取り出し蒼龍に渡す。

「私は持つてますからいいですよ。」

そう言つて蒼龍は上着の内側に忍ばしていたホルスターを見せる。

「君も同じ考えじゃないか。」

「あなたを守る余裕はないかもしれませんよ。」

「相手が人間であるなら守ってもらふ必要はない。」

竹野はズボンに銃を突っ込み固定して上着を整え腰の銃を隠す。

「行くぞ。」

蒼龍は呆れたように頭を振り黙つて竹野の後を追い部屋を出る。

「現在警戒警報が発令中です。」

ホテルのフロント係がそう制止してくる。竹野は軍服を着ていなかったし、蒼龍も袴をはいているわけでもなく、ごく普通の薄手の上着を着た女性にしか見えないかった。

「軍関係者です。」

そう言つてIDを見せる。実際のところ民間人が機械も使わずにそのIDが本物であるかなど判断はつかないが、わざわざ身の危険を冒してまでおかしな嘘をつく人間などいない。

「失礼しました。お気をつけて。」

フロント係は優雅な動作で二人を送り出す。

「私たちが宿泊している倉庫のような場所とは大違いですね。」

蒼龍が自嘲めいて笑う。

「そんなにひどいのか?」

「倉庫に放り込まれたなら不満はありますが、さして支障はありません。ですがあの倉庫には負傷してうめいている艦娘が山ほどこいまし

た。悪意を持ってあんな場所に放置しているわけではないでしょう。ただ損傷した艦が多すぎたんでしよう。」

「戦闘報告はまだ確認していないがこの前の作戦で敵の攻勢用部隊に確かな損害を与えたはずなんだがやはり別の攻撃部隊がいたんだな。」

「数を減らしておいたからこそ、この程度の地獄で済んだ。そう考えるしか救いはありませんね。」

たった一隻の船を守るため竹野の部隊も中破が8という、それなりの損害を被っていた。

「詳しくは南鳥島に戻ってからだがどうにも納得がいかないな。」

そんなことを考えているとようやく波止場に止まっているあの赤い船を見つけた。

赤と言っても鮮やかなわけでもなく薄汚れた赤で逆に印象を悪くしてしまうような塗装だった。

「見えるか。」

蒼龍は単眼鏡を取り出して船の方を見る。

「甲板に三名ほど。中はどうかわかりませんが昼間乗っていた大勢の人はただ避難するために乗り込んだ人々で間違いないでしょう。殺しても構わないならここから狙撃しますか?」

蒼龍はそう言いながらえらく現代的な弓を取り出し矢をつがえる。

「さて。騒ぎを起こさずに情報を奪えるならその方がいい。敵も情報が奪われたことを知らなければ対策のしようがないだろう?」

「了解です。」

蒼龍はその弓を小さく折りたたみ上着の下にしまう。

そして二人は闇に紛れながら船に近づき無警戒にも降ろされていたタラップを登り船に乗り込む。

蒼龍は誘い込まれているのではと警戒したが船に乗っていたのは事情を完全には知らない雇われの船員であるようで意識が低い様子だった。

ハンドサインで意思疎通をしながら貨物室に下りる。貨物室の扉は避難のために乗船していた一般人が開けるには難しいものだった

が蒼龍からしてみれば時代遅れの簡単なものだった。

貨物室にたどり着くとそこに人の気配は全くなかった。

「予想よりもひどいな。」

だがそこにあったのは膨大な量の文書だった。

そう、この船はレイヴン開発投資銀行の機密書類を乗せた脱出船だったのだ。

「私もです。せいぜい機密文書すこしと飾られていた多少価値のある絵画だとかを持ち出すために来た船かと思っていました。」

「つまりレイヴン開発投資銀行はつい最近まで東ティモールと云ういっつ攻め落とされてもおかしくない場所で業務を続けていた。そういう事か？ どうして拠点を移さなかったんだ？」

「さあ？」

「まあいい。可能な限り調べてみよう。」

そうやって二人は資料をあさり始めた。

膨大な資料だったが共通点はなく、一見すれば普通の銀行の取引記録にしか見えない。

だがこの銀行が普通の銀行ではないことは分かっていた。

そんな前提で書類を見ていたからこそあることに気が付いた。

「蒼龍。これを見てどう思う？」

「不自然なまでにクリーンな取引ですね。」

「やっぱりそう思うよな。」

出入金記録を見てもどれも自然で怪しいものがない。だがそれもおかしい話だ。膨大な取引の中で全く怪しい取引がないのだ。

「次はこれを見てくれ。」

「明らかに不審な取引ですね。侵攻の影響で余裕がなくなっただんでしようか？」

「いや違う。この雑な取引がある時点からさっきのようなクリーンすぎる取引に変わった。蒼龍、1995年以降の取り引きをよく調べてその取引先を記録してくれ。」

「まさか、ある時点でこの計画がアメリカの手を離れたとでも？」

連邦政府の手の中にこの銀行があったころは行員に黙っておくよ

うに言っておけばよかった。だが状況が変わり連邦政府の支援を受けられなくなり、ごまかす必要性が生じた。

そう考えればつじつまが合う。

「分からない。だがその可能性も浮上してきた。」

蒼龍と竹野は大急ぎで取引相手を調べる。

期間を絞っても膨大な数だったが幸い日が上るまでに大体の書類を調べ終えた。

「じきに日が上る。とつとつここを出るぞ。」

「了解。」

蒼龍も竹野も銃を抜き、警戒しながら貨物室を出る。

来た時とは違い敵の配置を把握できないまま船を進むため耳を澄まして敵の動き把握するしかなかった。

今になって応援を連れてこればよかったと思う竹野だったが今さら何を言っても無駄だ。

そうやって予測が不十分な時ばかりねつらたかのように不都合なことが起きるものだ。

統計に基づかない経験則でしかないが世の中にはそんなものを大真面目に研究している人間もいるのだ。

「マーフィーが現れたな。」

そう言つて竹野は手に持った銃を目の前に現れた船員に向ける。

船員はとっさの事にも閃わらず一瞬で反応して射線を切るがそれよりも竹野は早く反応し足首を打ち抜く。

だが船全体に銃声が響き渡り状況が悪化するんのは目に見えていた。

「蒼龍、突破する。すまない頼めるか？」

「あなたが私の司令官である以上、たとえ私が銃弾を受けても無傷ですまない体だったとしても喜んで命令に従いますよ。」

その蒼龍は口ではそう言ったがその目はその命令に納得などしていなかった。

「倫理や道義を通すことが出来る程の余裕がないのは私の責任だ。すまない。」

「だから構わないと言ってるじゃないですか。」

蒼龍はそう言うのと物陰からでて船員の銃撃にさらされる。全く彼女は動じずに船員を次々に殺害していく。

竹野も援護したがほとんど無意味だった。

竹野が目指したのはせいぜい脱出のための安全確保だったが蒼龍は殲滅を目指して動いていたのだ。

竹野が肩を撃ち戦闘不能にした相手だろうが関係なく射殺した。

戦場では何も間違っていない判断だということは竹野にもわかっていて。

例えば肩を打ち抜いたとしても死ぬかもしれないと思った人間に多少の痛みなどないも当然なものだからだ。

「蒼龍。もう十分だ。相手に増援を送る余裕はないし、もう目撃者も残っちゃいない。」

そう、止めようと背後から肩に手を置いた竹野に蒼龍は反射的に銃口を向ける。

そして大きく目を見開き立ち尽くした。

蒼龍の体には傷一つなかったが彼女の服はボロボロになり、肌的大部分が露出していた。

彼女に上着をかけて

「帰ろう。」

と言い。蒼龍から銃を取り上げる。

彼女は無抵抗に銃を手放しとぼとぼとホテルに戻った。

フロント係は蒼龍の姿を見るなり、急いで着替えを用意してそれを蒼龍に着させた。

部屋に戻り、焦点の合わない目をしていた蒼龍に

「しばらく君はほかの艦娘と同じように一兵士として過ごせ。君にばかり負担がかかりすぎた。」

そう言われて蒼龍はようやく気力を取り戻し

「待ってください。今回の事は私の心が弱かったばかりに起きたことです。どうか見捨てないで……。」

そのとき竹野は初めて年相応の蒼龍を見た。

艦娘に成年を越えたものはいない。どれだけ熟練の兵だろうが生まれてから十年かそこらでしかない。

親に愛されようとする子供。親以外の大人からの信頼を得ようとする反抗期の少女。

それと何も変わらない。ただ彼らの日常が戦争の中にあつた結果、いびつな形で愛情を求めてしまっているに過ぎない。

第二次世界大戦でホロコーストに賛同した子供たち、戦争を万歳三唱で迎え入れた子供らと何も変わらない。

殺すことで親が喜ぶなら、子供らは喜んで殺人鬼となる。

そんな当たり前の事を今まで竹野たち軍人は艦娘だからと大丈夫だという根拠のない理論で無視してきたのだ。

「蒼龍。私は君が私にとつて都合の悪いものを殺してくれるからそばに置いてるわけじゃない。」

「化け物には化け物なりの役割があります。」

そういつた蒼龍の顔から彼女の子供としての側面は消えていた。

「そうだな。だが、ヒトの軍人にも彼らなりの役割がある。その役割を果たせなければ当然怒られる。いや、怒られる、で済むだけまだましな方だ。取り返しのつかない死を招いたり、国家の崩壊を招くこともある。そんなことが起きたら誰も許しちやくれない。もしかしたら今日の君の行動が、あるいは私の行動が世界に破滅をもたらすかもしれない。だから何だつてんだ。責任なんてくそくらえだ。部下を守るという役割を果たさずに10万も艦娘を殺しておいてのうのと生きてる私だとか戦略部の人間だとかそんな奴が偉そうに説法たれることが出来るようなしような世界だぞ。そんな世界に君が果たしたいと思う役割なんてあるのか?」

「だとしてもー」

「繰り返す気か? ちょっと大人になって気が付いたんだろう。自分がヒトを殺しても何も解決しないと。だから命令を破つてあの医者を生かしたんだろ。殺す理由が見当たらないターゲットはあの医者が最初じゃなかった。違うか?」

「それは……」

「化け物には化け物なりの役割がある。どうせ誰かの言葉の受け売りだろ？」

「……」

「その言葉を否定した結果、こんな訳の分からない司令官がいて好き放題してる鎮守府に飛ばされたんだろ？自分の過去を否定するな。私は君に愛情を注ぐ資格のある人間じゃない。だから、ここは君の生涯の一部分にすぎない。頼れる人間、信じたい人間。そんなのが現れる世の中にするために今はこんなクズの部下として働いてくれ。できんな？」

「……はい。」

蒼龍はうつむきながら小さく返事をする。

しかし見る見るその顔は歪んでいき、泣き出してしまった。

飛龍に言わせれば抱き着くのが正解らしいが、そうとも限らないだろう。

竹野はお茶を蒼龍の前に置き、無線をいじり情報を集める。

案の定、あの船は通報などせず静かに港を離れたようだ。

これで敵に不審な二人が何かをかぎまわっていたという情報がわかってしまうだろう。

今できるのは手に入れた情報が敵にこちらの動きをばらすに値するものがあることを祈るばかりだ。

精神年齢

「提督。帰港早々に申し訳ないですが少し問題が発生しました。」

輸送機に乗って蒼龍たちよりも早く南鳥島に戻った竹野を加賀が出迎える。

「歩きながらでいい。何があったか説明しろ。」

「はい。二日前こんなメールが届きました。」

そう言つて加賀は端末を竹野に渡す。

アドレスは見たことがないものだったが送信元が誰なのかはすぐに分かった。

「艦娘の生態系における特異性。論文か？」

著者は8名の学者。その中にあの心理学者の名前もあった。

「ええ。そしてほかの七名について調べましたがいずれもすでに死亡していました。」

「まさかだが……」

「そのままかです。二日前、医者との連絡が途絶したため青葉を情報収集のために本土に派遣しましたがあの病院の看護師によればもう一週間は見ていないそうです。」

「看護師はほかには何と？」

「彼の友人と同じ末路を迎えたのだろうと。」

「つまり死んだと？」

「そうか考えて問題ないでしょう。」

情報源。それもかなり重要な情報源を失った。

「手詰まりつてわけじゃあない。加賀、ここに書かれた取引先が何者か調べてくれ。」

そう言つて加賀に今回の遠征で得た情報を渡す。

「私は蒼龍さんのように特殊な教育課程を経ているませんがどうやって調べると？」

「奇遇だな。私もそんな教育を受けた覚えはない。そのせいで何度出し抜かれたことか。」

加賀は微笑んで

「わかりました。」

と言って加賀は去っていく。

加賀がいなくなったあと竹野は執務室には向かわずに射撃訓練場や演習場を見て回る。

そして執務室に戻り

「なんだかこの鎮守府には私が足りない気がしてきたよ。」

と秘書艦をしていた瑞鶴に嘆く。

指揮も戦闘訓練も戦術に関する講義も全て艦娘で運営されており竹野が指導しなくても十分戦える戦力が維持されていた。

「そうなってくれると私もうれしいんだけどなあ。」

瑞鶴はふてくされた顔で肘をつき、ペンを啜っていた。

「そういうえは君は男性恐怖症だとかだった気がするが大丈夫なのか？」

「提督さんから男を感じないから問題ないです。」

何とも失礼な話だ。たまにしか現れない唯一の男である竹野が色恋沙汰とかけ離れた人間だったのがよかったのだろう。

精神疾患への対処で正解はない。いつもそううまく行くわけではないことはわかってはいるがもう心配しなくてもいいだろう。

「なるほど。えらく失礼な言い草だ。」

とはいっても彼が村上と名乗っていた時代にはそれなりの仲だった人間もいた。

だが、多忙すぎた彼とその女性との間には溝ができ気がつけば彼は一人になっていた。

官僚だった彼は体裁のために自分の彼女がほかの男と肉体関係まで持っていることを知りながらわかれようとはしなかった。

彼女が別れを切り出した時も何の感情も湧かずに別れた。

彼女は冷たい男ね。と言ったが、竹野は体裁のため彼女は金のため相互に利用していただけだった。

「どうせ彼女なんていたことないでしょ。そんなだと偏屈おじさんまっしぐらだよ。」

「彼女はいたよ。まあ付き合ひ始めた時からすでに愛し合っていたか
定かじゃない関係だったけどな。」

「ふーん。」

瑞鶴はその回答に興味を失ったようで気のない返事をする。

「瑞鶴はどうなんだ？過去の最低な男どもじゃなくて将来君のそばに
いるかもしれない誰かの理想像はあるのか？」

「へっ？私？うーん、どうだろ。未来の話をされてもなあ。」

瑞鶴は考えたこともなかったといった風な顔をして言う。

「戦争が百年ぐらい続いた例はあるにはあるがその時代は今みたいな
総力戦だったわけじゃない。君が生きてる間にこの戦争は終わる。
いや終わらせる。」

「なんか。変わったね。」

意外な返事が返ってくる。

「変わった？」

「なんかさ、昔の提督は未来のことを言いながら何かに縛られてた。
今思えば大勢の部下を失ったあの戦いに縛りつけられてたんだなっ
て。あの子たちに報いなきやって思って動いてたんだよね？」

「否定はできない。贖罪の意識から再度軍に加わった、そう思われて
も仕方ない。」

「でも今は違うんだよね。なんかこう、わかんないけど自分を私たち
を呪縛から解くために働いてるのかなって。」

竹野は複雑な顔をする。

「そうなのか？」

「全然納得してないね。私の思い込みかもしれないから忘れて。」

瑞鶴はそう言ってまた書類と向き合って仕事を再開した。

竹野も仕事を始めたがすでに完成した書類に目を通しサインする
だけの仕事だった。

「お茶にする？」

時刻は三時を周り瑞鶴が圧をかけながら聞いてくる。

「あ、ああ。」

彼女はやはり書類仕事が嫌いなようで待っていたとばかりに席を

立ち執務室に置かれているティーポットをガチャガチャといじり始めた。

おそらくそんな幼さを見たからだろう。

変わったといわれても実感はないがこの鎮守府の弱さを持った艦娘たちを見て、昔の部下たちにかけられていた記憶の魔法が解けたのだろう。

彼女らは精一杯頑張って竹野に認めてもらうために強くなろうとした。

戦争が終わることを望みその中で手柄を上げようと働いていた、彼のもとにいた多くの有能な士官とは根本的に違ったのだ。

艦娘は化け物ではない。けれど、彼女らはバックグラウンドもなく急に大人になれる存在だった。

そんな都合のいい話がないことに誰も気が付かなかった。もちろん気が付いたものもいただろうがそれを黙殺するしかなかった。

「瑞鶴。君は何歳だ？」

「え？私は6歳だけど。」

「人間の6歳児がどんな生活をしていると思う？」

「国によるけど少なくとも恵まれた国の6歳児は安全な場所で教育を受けてる。」

「その通りだ。例外はあれど、親の愛を受けながら多くの大人に守られて生きている。未来を担う世代だと教えられてな。」

「…」

「君の生活はどうだ？愛を注いでくれるものもいなければ、安全を確保してくれる大人もいない。逆に大人を守るため危険を犯すことを強要される。」

「それが艦娘として生まれたものの運命だから。」

瑞鶴は悲しげな目をしていた。

「そんな目を6歳児にさせたくない。そう思ったから変わったのかもしれないな。」

「六歳児って。」

瑞鶴は笑う。

「ああそうだ。思考回路と体だけは大人だが、心の年齢は6歳児だ。あまりにも理不尽が多すぎて、心が成熟するしかなかった六歳児だ。」
「仕方ないよ。私たちは艦娘。誰が何と言おうが兵器に過ぎない。」
「それはヒトが君たちに戦闘を強要するための言い分だ。ヒトは君たちを作ったわけでも君たちの存在をよく理解しているわけでもない。君たちが兵器だという根拠はどこにもない。」

瑞鶴は浮かぬ顔をして

「でもそう思う人は多くない。同じことを言っていた人を見たことがある。私を保護するって言った人も結局は私たちを保護する自分がかわいかっただけ。制御できる可哀そうな者たちが欲しいだけ。私たちが自立すれば保護だ何だと言っていた人たちも手の平を返して弾圧してくる。」

「だろうな。君たちが自由に生きる権利を獲得すればそれはヒト達にとってとんでもない不利益を生み出す。」

「提督は私たちが人間に反旗を翻した時、どっちの味方をするの？」
「ここに来た当初、龍田に「君たちが既存の人類の社会を破壊して人類から権利を奪い取ろうとするなら敵対せざるを得ない。」そう言ったんだ。だが、今は同じことを君の目を見てはつきりと言うことが出来ない。」

「はつきりしないね。」

瑞鶴が竹野をそうやって煽るが彼は実際どうすべきなのかわからなかった。

瑞鶴はコーヒーを注ぎ竹野の前に置く。

「そう言えばやけに執務室のガムシロップの消費量が多いが誰の仕業かわかるか？」

竹野は瑞鶴に聞く。

最近では竹野は執務室にいる方が珍しいが、それでも気が付けるほど異常な速度でガムシロップが消費されているのだ。

「長門さんだと思う。秘書艦業務で執務室にいることも多いし。それにあの人……ね。」

瑞鶴はいたずらっぽく笑う。

「なる程な。それとなく言っておいてくれ。艦娘が生活習慣病にかか
るのかは知らないけど気を付けろってな。」

「了解。」

瑞鶴はコーヒーを混ぜながら生返事をする。

「出かけてくる。」

そんな瑞鶴を執務室に残して竹野は演習場に向かう。

「やってるな。」

竹野はそう、探していた艦娘に声をかける。

「おう！なんだ提督？」

天龍は元気よく返事をする。

「あれからどうかと思っただな。」

天龍は艦装の一部を外しながら護岸に座る。

「難しく考えるのは俺の性に合わない。すぐに未来を見ろって言われ
ても無理な話だ。少なくとも俺はあいつを愛してたと思う。」

「彼がどんな人間でどんな過去を抱えているのか知らないのか？」

「そうだ。俺は提督の過去も知らなかったんだぜ？よくあんな大胆な
行動ができたと自分でも思うぜ。」

天龍は恐らく蒼龍と同じで記憶をいじられたのだろう。

それをしたのがヒトなのか、はたまた妖精なのかそれは分からない
が天龍がやけに素直だったのは記憶を消されてヒトの恐ろしさを知
らない無垢な艦娘だったからという理由ではないのだろう。

彼女が持っているプログラムの中で芽生えたごく小さな個性がそ
うさせたのだろう。

「それならいいんだ。その提督を悪く言っただけで済まなかったな。」

「おう。じゃあ俺は訓練の続きがあるから。」

天龍は艦装をはめなおしてまた海に出ていく。そんな天龍の姿を
見て

「強くなったな。」

と感想がこぼれる。

「第15回負荷実験終了しました。」

ボードを持った実験助手が白衣を着た主任に話しかける。

「結果を報告。」

主任は振り返るもせずそう言う。

「被験者は自殺。理由は他と同じく Homo fictusとの共鳴です。また今回の実験によって管理番号0028の破損を記録。管理番号0028はプロトコルに従って処分します。」

「ご苦労。」

報告を聞いた白衣の男は何度か頷いたあと、

「次の実験準備を始めてくれ。」

と今度は別の実験助手に言う。

「少し早すぎませんか？すでに9名が死亡、4名が身体に致命的欠損を負い、2名が精神疾患で施設送り。ここらで一度データ収集を止めては？」

主任は少しイラついた声で実験助手に言う

「君は大学で論文の書き方を習わなかったのか？たった15回の実験で何がわかるというんだ？たった15回で信用できるデータが得れるとでも言いたいのか？」

「それは。ですが倫理的問題が。」

「いいか？これは戦争なんだよ。アメリカは第二次世界大戦中、ソ連と共闘したが仲良しこよしで手を取り合っていたか？そうじゃないだろう。ソ連の腹の内を探り、核開発だって独自に進めた。同じだよ。Homo fictusを戦争に利用する必要がある。だが、この戦争が終わった時速やかに彼らには歴史から退場してもらわなければならない。倫理がどうこう言うのはすべてが終わってからでいい。彼らの死は悲劇ではない。彼らは英雄なんだ。彼らは未来のために殉職した。彼らの功績を墓標に刻むのはその時でいい。」

実験助手にはこれ以上何も言うことが出来なかった。

それが正解ではないことは分かっていたのに。

妥協した協力者

「提督。解析が完了しました。」

「早いな。」

「ほとんどは蒼龍さんの『善意の第三者』のおかげです。」

「事情すら教えずに脅迫する。さすが蒼龍と言った感じだな。」

竹野は苦笑いをする。

「それで？何がわかった？」

「これが個人名まで特定できた出資者です。見覚えは？」

「あるに決まってる。」

そこには防衛連合軍ヨーロッパ方面軍副指令サイモン・ガナフィットをはじめとした高級士官たちの名前が並んでいた。

「なあ。嫌な予感がするんだが。」

だが、どうにもおかしい。

「加賀。この前の騒動でサイモン・ガナフィットは死んでたりしないか。」

「少々お待ちを。」

加賀は慣れた手つきでデバイスを操作して名簿を表示する。

随分板についてきたものだ。

「やっぱりな。」

サイモン・ガナフィットも、ほかの士官たちもこの前の騒動で亡くなっていた。ガナフィットは頭と胸に二発ずつ撃ち込まれて、部屋にはほかの弾痕はなく四発全てを正確に命中させていた。

まず間違いなくプロの犯行だ。そしてこんなことをする可能性がある人物は絞られる。

「わきが甘すぎる。」

サイモン・ガナフィットは恐らく謀略だとかに長けた人間ではない。ほかの士官たちも同じだろう。ただ防衛連合軍の高級士官であったから敵に引き込まれたに過ぎないのだろう。

だが二サエルの監視の目をすり抜けることはできずに殺された。

ストーリーとしてはよくできているが、二サエルと言う人間が暗殺

などと言う劇的な要素を使うと思えないのだ。

「裏切り者が司令長官に殺された。つまり司令長官は味方？」

「裏切り者をただ粛清したわけではないのなら二サエルの策の可能性もある。何かほかの目的のためにあえて殺人という手段を選択した可能性もある。」

「司令長官は一体何を？」

「そもそも、彼は裏切り者に気が付いてもそう簡単に殺しはしないだろう。情報部の手にかかれば『噂』を作り出したり、『陰謀論』を作り上げることも出来る。スパイだとわかった士官に与える情報を完全に制御して都合のいい情報だけを流し続けることなど彼にとって容易い。無能なスパイほど恐ろしいものはないからな。」

「つまりスパイの身元が割れている以上、殺す意味も価値もないということですか？」

「その通りだ。そもそもあの騒動で殺された高級士官のほとんどがスパイだったと知ることが出来るのはごく少数だ。私たちと謎の組織、ほかにも二サエルや情報部の一部の人間なら知ってもおかしくない。が死んだ士官の関連性を見出すことも意味を理解できるのもごく少数だけだ。」

「あの騒動は何者かに対するメッセージでしょうね。」

蒼龍は執務室の扉を押しながら言う。

帰ってきて早々に着替えを済ませたようで艦娘と言われなければ分からないほどに一般人の特徴をつかんでいた。

「メッセージですか？」

その問いに竹野が答える。

「敵組織に対する宣戦布告。あるいは、無能なスパイを粛清し、座席を確保したかだ。」

「座席？」

「二サエルは防衛連合軍を見限って別の組織に籍を移そうとしているのかもしれない。だがその組織に座席の空きがなければ困るだろう？」

「自分の席を確保するためには殺しすぎだと思いますが。」

加賀は聞くがそれは違う。

「敵組織からしてみればニサエルが味方になるならば素人のスパイを生かしておいてリスクを作る必要などない。仮にこのニサエルの暴挙に誰かが気が付いても問題にならない。」

ニサエルにしてみれば情報部の警戒網も陳腐なものに映る。

だからこそ暗殺という劇的なメッセージを使ったのだろう。

「それはつまり?」

「司令長官が裏切った可能性がある。」

ニサエルの裏切りはあまりに致命的すぎる。

防衛連合軍の機密情報すべてにアクセスできるうえに、CIA、アメリカ政府の機密情報まで大量に保持している。

さらに、ニサエルと言うプロパガンダと謀略の天才を相手にすることになる。

一体どこにどんな罠が仕掛けられているのかわかったものではない。

下手に動けば世論からの攻撃でまたも軍を去ることになる。

「嘆いても仕方ありません。私たちの勘違いの可能性もありますから。」

加賀がそうフォローしたが蒼龍は無慈悲に真実を伝える。

「これを。」

蒼龍が示したのはメールでのやり取りの記録だった。

騒動の一週間後から始まったやり取りはもはや疑う必要もない程明確な裏切りの証拠だった。

「こんなものどうやって入手した?」

「司令長官は慎重すぎたんです。司令長官が使った回線は中国のPMCのもので。ですが残念なことに中国の会社が持っている情報は中国政府に“友人”がいる人間にとって公開されているのと同じです。」

「“友人”ねえ。」

慎重すぎてミスを犯す。まあ、あり得ない話ではない。

「可能性の話をするならば私が裏切ったか司令長官が裏切ったかで

す。」

蒼龍が竹野が思っていたことを見透かしたかのように言う。

「その通り。君が裏切った可能性も否定できない。」

仮に蒼龍が裏切っていたとするならばうまく誘導することも出来るだろう。

あえてそれを自分から言うのを見れば蒼龍が裏切っている可能性は低いと思いたいが、陰の世界で生きてきた人間ならそう言った心理の穴をついてくる可能性もある。

「どうやって証明する？昔の私のように善意を簡単に信じることはできないぞ。」

「信じてくれとは言いません。私だってあなたを完全に信じているわけではありません。それでも私が裏切っているだけならそれこそ司令長官にとってミジンコ程度の脅威でしかないでしょう。あなたに嫌疑をかけたところで現場レベルの問題は生じてもそれ以上ではありません。」

「なるほど。それもそうではあるな。」

そう竹野が難しい顔をして蒼龍のほうをみる。

だがその蒼龍は目線をせわしなく動かし何かを警戒しているようだった。

「加賀ほかに報告は？」

竹野は自然な会話を続けながらも机の裏に仕込んである拳銃に手を伸ばす。

蒼龍も少しくたびれた上着の内側に手を伸ばし、竹野に目で合図を送る。

「少々お待ちください。資金の流れですが時期によって額がかなり変動していました。」

加賀は全く何も気がついていない様子で報告を続ける。
そしてついに状況が動く。

執務室の扉が許可もなく開き、二人の女が入ってくる。

当然、竹野と蒼龍の銃口が正確に二人の脳天を捉える。

しかし、発砲することはなかった。

「ムーン？」

蒼龍が困惑した様子で声を出し

「と、オーマー少佐？」

続いて竹野も驚いて言う。

目の前に立っていたのは予想外の組み合わせだった。

ムーンだけが来たのなら納得がいく。防諜に失敗して二サエルからの刺客が送り込まれたのだと。

だが、オーマー・ラツコエがいるというならば話は別だ。

余裕がなくて調べることが出来なかったがどうにもこの女は別の怪しさがあるのだ。

あの衛星通信車の中での行動がどうにも憲兵隊の動きとは思えなかった。

憲兵は警察組織であり、即決で殺害を実行するとは思えない。

情報部がいくら胡散臭い組織だろうと、あの場で降伏の意思を見せたアーサー・マクドネルを捕縛するのは非常に合理的な判断だ。

逆に言うならばオーマーが仮に本当に憲兵隊の人間であるならば警告もなく殺害に移るのは感情に流されたとしたか説明できない。

そして不自然にも何故オーマーが感情に流されたのか説明するよ
うにアーサーがフォローした。

確かに彼らにとって都合のいい質問をしたのは竹野だ。だが竹野
という人間は気になったことをすぐに口に出して聞く。

そのことを知っている人間であるならば容易に竹野の発言を誘導
できただろう。

あの時はアーサーの動きにばかり目が行っていた。

その後は暗号がどうのこうの時間で時間を奪われ忘れていたが、もしや
オーマー・ラツコエは……？

「すみません少し驚きました。」

竹野は平静を装い銃を降ろし二人を席に誘導する。

「では遠慮なく。」

ムーンはマナーなど全く気にしないと言った様子で席に腰を降ろ
す。

ムーンがどういうタイプの諜報員なのか知らないが、社交ダンスを優雅に踊ることが出来る淑女なスパイではないのかもしれない。あるいはこちらがそう思うようにまたも仕込まれているか。

「それで？こちらの許可なく上陸したうえで執務室に許可もなく押し入る程重要な要件とは？」

「私は先日、オーマー・ラツコエの始末をニサエル・フラメル・アダン司令長官に命令されました。そして私はその命令を無視して全く別の死体とオーマー・ラツコエの私室に放火。その後検視結果を待たずに逃走しました。匿ってください。」

どうにも話が見えてこない。冗談を言っているような顔でもないが、言っていることが天下の情報部幹部ムーン様のやることとは思えない。

無計画すぎる。

「杜撰な嘘でだませると思われているのなら非常に不快ですが。」

「私がニサエルをだまして動くことが出来るほど聡明だと評価してくださるのはうれしいことです。ですが私はあえて無計画で彼に喧嘩を吹っ掛けたのです。どうせ回りくどい計画を立てるよりも頭を空っぽにした方が時間を稼げる。計画の実態を把握することよりも計画それ自体が存在しないと証明することの方がよっぽど難しいですから。謀略とは存在する可能性それ自体が脅威になり得るんです。」

ムカつく女だ。

「だとしても、私があなただを匿ってどんなメリットが？」

「どうせあなたはニサエルと敵対する。あの日、あの情報を受け取った時点でそうなることが運命づけられているんですから。あなたは軍事力を。私には情報網と情報戦のノウハウがあります。情報を開示するつもりは全くありませんが協力関係になってもデメリットはないでしょう。」

こちらが隠しているつもりでもムーンはある程度こちらの動きを把握してここに来たのだろう。

あのディスクのことがどこからばれたのか。

あの精神科医に接触したのがまずかったのか？

蒼龍が決定的な尻尾をつかませはしないだろうが、ほかの特殊教育を受けていない艦娘に同じことを要求するのは酷な話だ。

「デメリットはないように見える。でもそれは現実がボードゲームでないのだから幻想にすぎない。情報で不利である以上、主導権がそつちにある。こつちは実質的な傀儡軍だ。そんな物に成り下がる気などない。」

「その程度は見破れる頭はあるようですね。」

「官僚時代に馬鹿らしい権力闘争に明け暮れていたからな。メリットデメリットで語る一見すれば頭のよさそうな論法にはほとんどの場合裏がある。」

「そうですか。ですがあいにくこちらもあるあなたの部下になる気など全くありませんよ。」

「あんたみたいなじゃじゃ馬を制御できる気がしないからそんなことはこつちから願ひ下げだ。」

ムーンは首をかしげる。

「話が見えてきませんね。」

「そつちが話を見えないようにしているのだからこつちも膠着状態にさせてもらっただけだ。」

ムーンは不機嫌な顔はしなかったものの明らかにイラついていた。結局その顔も本心が現れているように見えるだけかもしれない。だから信用ならない。

二サエルはこんな奴らと一体どうやって信頼関係を築いたのやら。「そちらが何かしら誠意を見せないのであればとつと二サエルに突き出すまでだ。」

「それは困りますが、できないことを言わない方がいいですよ。嘘ばかりついていると本命の嘘が通りませんからね。」

「本命の嘘」などと言うのは実に情報部員らしい。

「では、あなたの本命の嘘とはいったい何でしょうか？」

「私の真の目的には興味を失いましたか？」

ムーンは微笑む。答える意思などないことは分かっていたが。

また手詰まりだ。

ムーンも余裕そうな顔をしているが彼らも竹野の保護を受けなければムーンは簡単に殺されるだろう。

だがそれが弱みだと認めるとこちらの交渉材料を増やすことになるだろう。

「それを聞いても教えてくれないだろう。どちらが譲歩するのか。それだけの話。」

「ならばあなたは何を私に求めますか？」

「オーマー・ラツコエの本場の所属と、以後の調査にこちらの艦娘を同行させろ。」

「なる程。しかしそれでは私があなただのお仲間を言いくるめるかもしれませんよ。」

「彼らは素直すぎる。だから君みたいなねちっこい人間に絡めとられはしないでしょう。」

ムーンは感情の読めない顔でしばらく考えたのちに

「こちらの条件は二サエルが裏切ったことを示す明確な証拠の開示。それが無理ならば精神科医佐藤喜一がこちらに送った未発表論文を見せてください。」

メールを開示すれば蒼龍の情報屋まで露見するだろう。飛龍が直接乗り込んだことで得ることが出来た論文の方が情報それ自体の価値は高いがこれからムーンと共闘するならば反抗手段を早期に失うのはよろしくないだろう。

「では未発表論文を開示する。」

「わかりました。オーマー・ラツコエはC S I Sの対外職員です。もつと言うならばM I 6の命令を受けたC S I Sの命令を実行している職員です。」

突然の暴露に慌てたのはオーマー少佐だった。

「正気ですか？訂正します。私はブルガリア国家情報庁所属の対外エージェントです。」

恐らくそれがばらされてもいい別の身分だったのだろう。今更無駄なことだが。イギリスからカナダそしてブルガリア、一体誰の命令

なのかわからなくなりそうだ。

「あなたを救出するようにM I 6から要請があつたわけでもないのに救出したんです。別にあなたの身分がばれようと私には痛くもかゆくもありません。」

「了解した。つまりオーマー少佐と打合せされたような会話をしたアーサー・マクドネルはM I 6の工員で本来は別の誰かに私の持っている情報を渡すはずだったわけだな。確かにあそこまで決定的な証拠を見ればどんな馬鹿でも敵の正体を知ることが出来るだろうな。」

ムーンは否定もせずに頷く。

これでわかった。ムーンも二サエルに騙されている。

あのディスクは決定的でも何でもなかった。

蒼龍がいなければ気が付くことすらできないような証拠とも言えないものだ。

謎の組織の実態も目的も当然わかりはしない。

せいぜい税金を無駄にしたなどと大騒ぎするためのスキャンダル程度にしかならない情報だった。

しかしムーンはそれを知らない。そしてラッコエも情報の内容までは知らない。

「では互いに協力していきましょうか。」

竹野が手を出すとムーンも立ち上がり手を握る。

「期間は分かりませんがよろしくお願いしますよ。」

二人の間には明らかに壁があつたがこの際仕方ない。そうせざるを得ないのだから。

「お久しぶりですねキング。」

二サエルにからかわれたアーサーは苦笑して

「私はそんなじゃありませんよ。ところで順調ですか？」
と聞く。

今度は二サエルがアーサーの方を見て笑う。

「順調以外の回答があるとしても？ 私は彼らの保母ですよ。彼らの出方

など簡単に分かる。今もどこかで私を失脚させようと頑張っている事でしょう。」

「止めなくても?」

「私は彼らに失脚させられるのを待っているのです。」

「どうしてまたそんなことを。」

「その方が上手くいく。それだけの話です。」

アーサーにはさっぱりわからなかったがどうやら何かあるらしい。

shock and awe

協力関係の構築から2か月が経過した。

もちろん調査は進展した。ムーンはニサエルの側近として働いていただけあつて凄まじい情報網で調査を進めた。

予想外だったのはラツコエのほうだ。オーマー・ラツコエはルールにうるさい憲兵隊員としての像を確立していた。しかし、彼女はMI6がわざわざ手間をかけて送り込んでいた諜報員。最初の一週間はお堅いキャラを演じていたがその化けの皮もはがれ、法律を当然のように破り捨て倫理も道理も何もない計算された蛮行で強引に調査を進めた。

かき乱されていることに情報部は気がついていたが、それが誰の仕事なんだものか特定することはできていなかった。

内部の事情を知る曲者二人に加えてラツコエが強引にMI6を動員した結果、すべてを隠しながら防諜することはいくらニサエルと言えども不可能だったようだ。

だが、得られる情報はどうでもいい軍事機密だけ。

防衛連合軍が設立された時には計画は完成していたと考えるしかない。

だから防衛連合軍には竹野たちが求める機密など存在しない。

最も重要な機密は設立にCIAが関与しており、連邦政府が何かしらの目的のために設立したことだが、どうにも連邦政府は防衛連合軍に単なる暴力装置としての役割しか求めていない。

つまり、連邦政府は防衛連合軍のことをある程度は命令を聞く傭兵軍団とかとも思っているのだろう。

結局、何も見つからないまま防衛連合軍に対する調査は終了した。

ムーンは最初から防衛連合軍を調べても何もないと知っていた様子だったが。

「それで？もう一度聞かせて下さい。」

防衛連合軍への調査からアメリカ連邦政府の調査へと切り替えて

から二週間ほどが経ち執務室にムーンがまたしても音も許可もなく入室してきた。

そしてとんでもないことを言い出したのだ。

もはや竹野には聞き返すことしかできなかった。

「防衛連合海軍総司令部を強襲します。」

何を言っているんだ？情報戦での勝利が絶望的だからといって何もないとわかつている防衛連合軍に強襲を仕掛けて一体何の意味がある？

竹野は全く理解できなかった。

恐らく原因はムーンが可能な限り竹野に情報を渡さずに計画を進めるためだったのだろう。

しかし、作戦を立てる側としては情報がなければ作戦の立てようがない。

「だからそれがわかりません。あなた方が出した結論は謎の組織と防衛連合軍の関係はない。そうではないんですか？」

「手段を選んでいる場合でなくなりました。」

手段を選べない程追い込まれているということなのだろうか？

「一体何が起きたんです。」

「送り込んだ諜報員の大半と連絡が途絶えた上に、とんでもない規模のカウンターアタックが来しました。」

「被害は？」

「何とか対応しましたが、これでこちらからは手が出せなくなりました。申し訳ありませんが情報戦では完全に敗北しました。」

「そんな中で強襲などしても正当性の主張ができないと思えますが？」

「私を馬鹿だと思っているんですか？MIGがこちらについてくれている以上、未だにそれなりの勢力を持っている国家の大半をこちら側に引き入れることは容易い。そうなれば国連軍も恐らく同調してくるでしょう。後は防衛連合軍の勢力ですが、村上傑の名前を使いましょう。」

「あまりそれには賛成できません。私の名前を出せば、防衛連合軍内

部の意見もそうでしょうが、何よりも国連軍の協力を取り付けることが出来るとは思えません。それ以前に、せめて敵の脅威がどれほどのものかわからないと誰も説得できませんよ。それに、私は二サエルを拘束するのに十分な証拠を持っています。まずは二サエルを拘束するのが先決では?」

竹野が言っていることは至極真つ当な意見だった。

だがそんなことムーンも百も承知している。

目的がわからない戦闘に協力するものはいない。

ましてクーデターをするのであれば単純に選挙で勝つよりも多くの指示が必要となるにも関わらず、支持を集める根拠をムーンたちは持っていない。

それよりもまずは二サエルを拘束して尋問すべきだと考えるのも当然のことだ。

「それだけでは不十分です。二サエルを殺すには根から枯らすしかありません。」

「根?」

二サエルは派閥に所属しているわけではない。

ただ彼をこき下ろすネタがなかったために彼は司令長官であり続けているに過ぎない。

そんな根無し草の彼の根とはいったい何なのか?

「CIAですよ。彼はCIAの協力者であり続けています。」

「私はそこら辺の裏事情は知りませんがCIAに防衛連合軍の最高人事ができるほどの影響力があると思いませんか?」

「CIAがねじ込めたのはせいぜい情報部オセアニア方面統括管理官が限界でした。でもそれは二サエルには十分すぎるポジションでした。勢力を拡大しつつあったAaronMankindを叩き潰し、その手柄をMI5に譲りその借りを使って今度はオーストラリアから破格の値段で石炭と鉄鉱石を買いたたきそれを日本にあるアメリカの軍需企業の工場に流したわけです。」

「あの価格崩壊はあいつのせいなのか?」

竹野は知らなかったが、ヨーロッパにいたラッコエが反応するあた

りりともない価格崩壊が起きていたのだろう。

「ですが、おかげで防衛連合軍の充足率は回復しました。そうなるは無視できない存在になるわけです。順当に行けば情報部トップがいどころでしたが、少しだけ賢い権力欲まみれの元帥が二サエルを表面にして自分が権力を握ろうとしました。ですが当然うまくいくはずありません。」

「二サエルに挑むことが無謀だということはよくわかった。」

ムーンは目を細めて

「そんな化け物と対峙してもらったために私はここにいますよ？」

しかし、竹野が言えることではないことは重々承知だがムーンだけでは頼りなく思える。

「私たちはできて援護射撃程度です。情報戦での勝ち目など最初からないとわかっていましたから。」

「匿ってくれと言うことは嘘で、本当は私の持っている兵力を利用したくて私に近づいた。あなたの目的はそれで間違いないですかね？」

ムーンの表情筋の一つも動かさずに

「その通りです。あなたのような少しだけ戦果を挙げたことのある一般人にへりくだってお願いするのはあなたが間違いなく兵力を持っているからです。おだてれば乗ってくると思っていた私が早計だった。ただそれだけの話。こうやって手の内を見せるのも、あなたのしようもない自尊心と信条を知った今、『お願い』すればあなたは協力してくれると見切ったの事です。」

不快だ。だがそれだけで拒絶するほど竹野は子供ではないし、拒絶した後一人で問題を解決できるほど大人でもなかった。

ムーンは微笑んで

「少し言いすぎました。あなたが私の能力に不信感を抱いていたようでしたので私がどういう人間がわかるような返答をしたまです。」

どうにもその柔らかい物言いと喋る内容があっついていない。どうせ本心ではこちらの事を簡単に扇動される虫けら程度にしか思っていないのだろう。

「わかりました。続きを。」

そんな甘い人間でないと主張しようかと思つた竹野は結局そうはしなかった。

自分は虫けらではないと必死になつて主張する方がよほど虫けらに見えるからだ。

「はい。あなたの名前を使うことは承諾したということで構いませんね。」

「つまらない信条とバツサリ切られることが目に見えるため反論はしません。」

ムーンは頷いて話を続ける。

「CIAが彼の支持基盤と言いました。詳しく言うならば元CIAの防衛連合軍の情報部員が彼の支持基盤です。支持基盤と言うよりも信者と云つた方がいいかもしれません。無駄に能力が高いのが非常に厄介ですが。」

「頭だけは切れる人間を暴力でたたき出すわけですね。」

「その通りです。警戒すべきは私と同じように戦闘訓練も受けている潜入要員達です。天体の名がついているニサエルの側近は全員がタフだと思つてください。」

「艦娘の力でねじ伏せれない程ですか？」

「何度も言わせないでください。ねじ伏せることが出来る部隊を集めるためにここまで来たんです。憲兵隊にはあらかじめ抵抗しないように手を回しておきます。彼らは司令長官という席に座っている人間が嫌いなわけですから恐らくニサエルと内通することはないでしょう。」

「AaronMankindに報告が入る可能性は？」

「AaronMankindとは別の組織に情報が流れてそこから親玉の組織に連絡がいくことはあるかもしれませんがそれを気にしては何もできません。時間が勝負です。少数で機動的に敵が対応する前にすべてを焼き尽くせばいいという考えです。」

本当に武力に物言わせた過激なやり方だが既成事実化して大々的に報道する用意を整えているあたり竹野だけではできない作戦だと認めざるを得なかった。

「計画の実施は2週間後。艦娘たちに特殊訓練を実施してください。私は本土にわたって準備を進めます。この二週間の間、全ての艦娘をほかの鎮守府とは接触させずに通信設備は故障だとか適当な理由を付けてあなたが監視できる範囲で使用させてください。」

「うちの艦娘が裏切り者だと?」

竹野が不満そうな顔をする

「そうではなく。計画が露見したとき誰が漏らしたのかはつきりするでしょう? 私から見ればあなたかオーマーのどちらかが漏らしたことになり、あなたから見れば私かオーマーどちらかが漏らしたことになる。千数百の艦娘の裏切りの可能性を簡単につぶせる。やらない方が怪しいですよ。」

ひどく合理的だが冷たいやり方だ。

「わかった。」

「お願いしますよ。」

その数時間後、M I 6が手配したステルスヘリでムーンとオーマーは本土に向かった。

「よかったの?」

蒼龍が聞く。

「さあな? 結局奴ら、最後までどこで二サエルの裏切りを知ったのか言わなかった。本土に着けば対艦娘の特殊部隊に囲まれて逮捕なんてこともあるかもな。」

「冗談に思えない。」

蒼龍が言うが竹野は真顔で

「冗談を言っていないからな。」

と答えた。

「正直私も状況を把握できてない。あの二人は私なんか足元にも及ばないレベルだった。監視してる風を装ったけど結局提督に報告できることは何もない。もしかしたら堂々とこっちの動きを逐一報告されてたかもね。」

「そうじゃないと祈るしかない。」

竹野はいつものように勘で計画に乗ったかのように装っていたが、実はそうではなかった。

蒼龍が出てきたメールの記録について実は裏で調べていた。

竹野には中国人の友人はいなかったが、外務省に友人がいた。

中国は内戦寸前の状態であり日本の支援で内戦の推移が変わってくる。

派閥の対立は激しくなっているが派閥のトップも中国共産党の幹部であることに変わりはない。

そんなルートでメールが本物か調べさせた。

もちろんその会社の実態があるのかも調べさせた。ペーパーカンパニーに証拠があると言われても怪しすぎる。

結果はメールは本物、その会社は確かに独自の回線を全世界に張っていた。

ニサエルの裏切りは確定だが裏切りに気が付いた竹野を始末するためにムーンが動いている可能性は高い。

もちろんそうであっても大丈夫なように小細工を仕掛けておいた。

九十九里浜のワグナーに大規模な演習を申し込んでおいたのだ。

当然苦しい言い訳になるだろうがニサエルもおおごにして陰謀論にかき乱されるのは嫌だろう。

上陸して即逮捕という事態は避けられるはずだ。

全ての会話を録音して信用できる元国連軍のジャーナリストに渡した。

あえてその通話は暗号化せずに情報部に盗聴させた。それ、だとか、あれ、だとか抽象的な言葉ばかり使った会話である以上、事情を知っている人間しか意味を理解できないように配慮もしておいた。

昔嫌っていた、料亭にボースレコーダーを仕掛けて同僚を蹴落とした上司を思い出す。

こうはなるまいと当時は思ったものだ。

まさかこんな形であの女と同じことをするとは思ひもしなかった。

昔を懐かしみながらも防衛連合海軍総司令部ビルの凶面を見る。

いかに効率よく制圧するか？

何分で情報部の特殊部隊が到着するのか？
そんな昔では考えられないような物騒なことを考えていた。

それぞれの前哨戦

「いいか。相手は対艦娘の特殊部隊だ。常識は通用しない。こちらの優位はないと思え。」

竹野がそう言うのはもちろん根拠があつてのことだ。

恐らく大和級の艦娘ですら対策なしにはいともたやすく殺されてしまうだろう。

それは深海棲艦と同じで艦娘には明確な弱点が存在するためである。

主砲を好き勝手に使える屋外、特に海上では確かに圧倒的にヒトが不利だ。

しかし近距離かつ、主砲をそう簡単に使えない屋内では話が別だ。当然艦載機も使えるわけがない。

その状態ならば竹野にも艦娘数体と戦って勝つ自信がある。

「敵は恐らく君たちの急所を的確に狙って来る。耳、目、口、鼻。ほかにも弱点はあるかもしれない。相手はそういった部分しか狙ってこない。」

もちろん防弾のゴーグルでも使えば多少の対策はできるが、恐らく対艦娘に編成された特殊部隊であるなら装備品ごと打ち抜ける程度の銃を携行しているだろう。

それに当然向こうも対抗策として艦娘に特殊訓練を受けさせているだろう。

ムーンからの報告では本部ビルを守っているのは憲兵隊所属の対艦娘制圧特殊部隊のユニットが3つ、情報部の保有する特別介入ユニットが5つ情報部強制捜査班が一つ存在している。憲兵隊の特殊部隊はこちらと茶番を演じることに同意したが情報部のユニットは懐柔のしようがなかったらしい。

「容赦はするな。敵は無力なヒトではない。ただし、攻撃対象は情報部の特別介入ユニットのみだ。それ以外を攻撃すれば戦術勝利は得られてもこつちが最終的に押しつぶされる。」

そう、訓練は始まったが予想通り艦娘たちの動きは甘かった。いつ

もの臙装を外し拳銃だけで竹野に勝利できるものはついに現れなかった。

蒼龍はいい線まで行ったが殺人術を極めていた竹野にはかなわなかった。

しかし、そもその話、近接格闘で暗殺するなど論外であるため蒼龍が近接格闘術を教わってていること自体が無駄であるように改めて思う。

その夜、竹野は射撃場に一人で向かった。

普通の射撃場には仕切りがあるが大口径砲から出る爆風でどうせ破壊されることが目に見えているためここには設置されていない。

銃を構えて射撃場の端から端まで走りながら目標を打つ。

さも当然かのようにすべてをど真ん中に命中させる。

耳に響いた銃声が収まりつつある時竹野は一つの気配に気がついた。

「誰だ？」

竹野はあえて誰なのか断定はしなかったが、その声は決して対象がわからぬまま発せられた言葉ではなかった。

「長門だ。少しいいか？」

彼女は臙装を外しセンスの悪いTシャツ姿で竹野の後ろに立つ。

竹野はマガジンを交換しながら

「何だ？」

と返事をする。

「どうにもわからない。あの二人が本当に信用できるのか？」

竹野は銃を構え今度は腰を落とし理想的な姿勢で立て続けに発砲した。

ターゲットには円を描くようにして弾痕が残る。

「さあな。」

竹野はチェンバーに弾がないことを確認してから銃を置き長門の方に向き直る。

「さあな。だど？」

「ああ。調べようがないからな。」

もちろん嘘だ。調べようはどれだけでもある。二サエルの裏切りが事実である確証もある。だが、ムーンがこちらの味方である確証はなかった。

だからそれなりの対策を立ててはいるが万全とは言えない。

そんなことは長門に言う必要はない。

「提督の采配を怪しむわけじゃないが、本当に賭けるだけの価値があるのか？」

水面下での戦いを知らない長門がそう思うのも自然な話だった。

「価値どうのこうのじゃない。やらなければならぬこつちの首が締まっていくだけ。二サエルの裏切りには何かしら対処しなきゃならない。」

「提督は今の私たちには必要だ。」

だが長門の発言に竹野は首を傾げる。

「それはないな。君たちはすでに自立している。自立できる要素が山のようにここにはあったからな。上官を殴れる飛龍に、はなから指揮官を信じていない吹雪、一度自信を砕かれた武闘派の君や若干危ういが意思を持っている天龍。いずれも今さら敢えて”ヒト”の指揮官が必要だとは思わない。」

長門が不安そうな顔をする。けれど、それが竹野の本心だった。特殊な環境は彼女らには自立を強要した。自立してくれたおかげで勝手な行動ができるわけだが。

「私が死んだら君がここを引き継げ。中越にうまく話を通しておく。さすがに二サエルも無事では済まない。同じことは繰り返されないさ。だが間違えるな。そもそも私は死ぬ気など毛頭ない。」

補足して少しだけ長門を安心させておく。

「わかった。この長門に任せておけ。」

長門が射撃場を出ていく。

拳銃を武器庫にしまい、アサルトライフルを取り出す。

竹野が小銃をメインにして戦ったのはビスマルク諸島戦役のみだったが、一年近く死体の山で敵をせき止めた戦場での教訓は相当な

ものだった。

覚醒剤で心を保ち戦いを続けるものがほとんどだったが竹野は本来兵士に覚醒剤を配布する側の人間でありそれがどんなものか理解していた。運悪く彼のいた部署が解体されてしまったために人柱となってしまうた彼は配布された覚醒剤を使うことはなかった。

そうして保たれた冷静な頭で理論を本で学びながらも地獄の戦場で本当の戦闘を学びうまくそれらを融合させていった。そうして完成したものはいかに素早く、そして低コストで相手を殺すのかという殺人術以外の何物でもなかった。

そのころには仲間が死ぬことにも敵を殺すことにも何の抵抗も感情も抱かなくなっていた。

司令部がビスマルク諸島の放棄を決め、ようやく本土に戻った竹野がPTSDを発症することもなかった。

ただ一年間出向していたかのような顔で防衛省に戻った。

そんなことを思い出しながら竹野はライフルを構える。

久しぶりだったがあの忘れることも出来ない一年の経験はすぐに思いつき、マガジンを変えるころには狙いを外さないと自信を持つと言えるほどに感覚を取り戻していた。

二サエル退屈さを必死にこらえてチェスの駒を動かす。

彼と向かい合って座る山本はむつかしい顔で盤面を眺める。

二サエルはチェスを含めたボードゲームが嫌いだった。

勝てないから嫌いなわけではない。ルールの決まった戦争や闘争が彼の性に合わなかったただけの話だと彼は十分理解している。

こちらのポーンを敵陣に忍び込ませ破壊工作をしたり王族を毒殺したり、クイーンと恋に落ちるように命令したりできない。

どこまで行っても退屈なゲームだ。ゲームに興じるだけ無駄だと二サエルは判断していた。

裏の世界にはルールなどない。どんなに汚い手だろうとそれが実力として評価される。

城壁さえ作っておけばひとまずしのげる単純な戦いが無い分攻撃

側が明らかに有利で厄介で常人がその世界に乗り込めば恐らく勘で防衛を固めるしかない。

すべての弱点を防ぐにはとてつもない処理能力と速度が必要だからだ。

それを容易く行うニサエルにとってチェスの盤面の情報量は拍子抜けするほど少ない。つまらないと思うのも当然のことだった。

そんな世界に身を置いて一方的に欺くだけ欺いて裏切り者を徹底的に排除してきたニサエルが単純なルールの殴り合いで負けるわけがないのもまた当然だった。

嫌いなだけで誰も苦手とは言っていないのだ。簡単すぎてつまらないなんて天才ぶるつもりはなかったが、必要性にかられなければ絶対にやらなかっただろう。そもそも彼に人生自体ゲームをして遊んでいられるような人生ではなかった。

しかし、一度山本とチェスをしておく必要があるのだ。本当にわずかな変化しかもたらさないだろうが99%から100%に変わるというのであればそれはとてつもない変化だ。

それにリスクもコストもほとんどない。ほんの一時程度が消えるだけだ。

「チェック。」

「降参です。どちらにせよ次の手でチェックメイトですよ。ですが突然どうしたんですか？」

「気まぐれです。」

この四年で初めての気まぐれ。そんなものが嘘であるということなど山本は言われなくてもわかっていた。

プラスチックの安そうな駒を眺めながら山本は考える。

この安っぽい駒がニサエルとチェスの関係を教えてくれる。

ニサエルはチェスになど興味がない。

ならばどうして突然勝負を挑んできたのか？

自分の命をかけた改革ですら彼は不安も興奮も示さない。そんな人間がゲームという究極の無駄に手を出すはずはない。また彼は自分の立ち位置について悩み自らの優位性をゲームで示すような人間

でもない。

チエスで勝とうが負けようが関係ない。何がどうであれ彼は防衛連合軍でもつとも頭が切れる人間だからだ。

なにも生み出すことのないただ無駄な時間を彼が過ごすとはどうしても思えなかった。

「私はあなたと数年間過ごしましたが、無駄だと言ってほぼすべての食事を合成スナックで済ませようとするあなたが私と気まぐれで時間をつぶすとは思えません。」

山本は思ったことを口に出す。

だが二サエルは感情のない笑みを浮かべて笑った

「私のことを理解していないようですね。」

子供が同じことを言ったなら自己同一性が確立できていないと考えて終わりだが、それを20年程前に子供時代を終えた男言ったのなら意味は大きく変わってくる。

理解者がいないと嘆いているのではなく、誰も自分を理解できないと確信しているからこそ適当な言葉が気に食わない。そういった意味だろう。

気まぐれだということは嘘だがそれ以上二サエルを問い詰めても無駄だろう。

村上に似た奇妙な不気味さを感じる。純粹無垢で正義を振りかざす村上と、ひたすらに邪道を走る二サエル。

真逆の人間に見えるがそうではない。根拠はないがこの二人には通じ合ってしまう何かがある。

それが自分にとって脅威となるのかわからないしどうでもいい。どうせ今のままでは山本に防ぐ手立てはない。

東京は世界最大の都市としてとんでもない数の道路が立体に交差していた。

深海棲艦の脅威が出現する前、徐々に人口を減らしつつあった東京だがアメリカの大都市がことごとく陥落したことに加え太平洋の島々で大量の難民が発生した。

中国での権力闘争の激化による政情不安定、自衛隊の温存による最低限の安全確保に成功していたことも手伝って難民の多くが日本を目指した。

ほかの主要国の損害と比べてほとんど被害を被っていない日本政府が難民受け入れを拒否するわけにもいかなかった。

難民だろうと例外なく潮の流れが襲いかかり、違法な物品が持ち込まれることはなかった。

おかげで経済と秩序の一時的な混乱はあったが東京に国連軍司令部が設置されて軍都として何度目かわからない急激な発展を遂げた。

何本もの道路が敷設されていたが常に渋滞が発生している。

「進みませぬね。」

助手席でオーマーがめんどくさそうな顔をする。

ムーンが信用できるのかはさておき、いま彼女と争っても無駄ではない。

ムーンと協力関係になったことは正直想定外だった。

彼女が二サエルを裏切っていなければ自分の命がなかったと言いつけるだけの脅威だ。

戦闘力といい諜報能力といいオーマーの自信を少しだけ揺るがすには十分だった。

抵抗の意思を見せるだけ無駄である以上、気を許したわけでもないがいちいち気を張っているほうが無駄だ。

「軍用車の優先通行権でも行使しますか？」

ムーンの問いに困惑気味に返す。

「そんなことをすればすぐに拘束されるのでは？」

またしてもムーンは抑揚もなく会話を続ける。

「そうなればそうなったでなんとかできるでしょう？」

オーマーはこの話が無駄であると判断して話題の変更を試みる。

「情報部の部隊がどうにもきな臭いと思いませんか？」

「どういうことですか？」

少しだけ興味を示したようにも見えるがやはり考えは読めなかった。

「情報部の特殊部隊の配置状況が簡単に分かったことが怪しいと思いませんか？」

ムーンは浅くアクセルを踏み、少しだけ前方に進んだ車との距離を詰める。

「特別介入部隊の配置を特定できたのは想定内です。ですが強制捜査班の配置に関しては欺瞞工作の可能性があります。まあ、どうせ信用できる情報が存在しているわけがないわけです。」

「それは竹野提督に失礼では？」

「あなたがそんなことをいうとは思いませんでしたよ。私は彼の持つ部隊を利用したいだけ。作戦が失敗したのならそこまで。別の宿主を探すだけです。」

「どちらかと言うとあなたは脳味噌までいじくって制御を乗っ取る寄生虫の中でも卑怯で面倒なタイプですね。」

「面白い冗談ですね。」

ムーンがそう言うが、オーマーには全く冗談を言ったつもりはなかった。

オーマーに言わせればムーンは信用していないし、竹野は頼りにしていない。

いざとなればSASを使って速やかに二サエルを葬る準備はしていた。

二サエルを拘束して軍事裁判で捏造した証拠で有罪にできればそれが一番だが下手をして二サエルを逃がしてしまうことのほうが問題だ。

「まあ。そちらの判断に任せます。あなたのほうが二サエルのことをよく知っているでしょうし。」

そんなことを言いながらもオーマーはSASをしつかり日本に回国させていた。

ムーンもそういう世界だと割り切っているだろうから気にやむだけ無駄だ。

結局のところ誰も純粋な協力関係を築いていない。そんなものだろうが、それで果たして二サエルの隙をつけるのか誰にもわからない。

か
っ
た。
。

殺意の欠けた戦闘行為

竹野は輸送船の重厚なエンジン音で目を覚ます。
非常な騒音だが案外落ち着く音だ。

「今どこです？」

竹野はお世辞にも寝心地のよくないベッドから体を起こし船橋に上がって聞く。

「あと二時間で入港です。」

恐らくはM I 6かどこかが手配したであろう船員がそう答える
「引き続きよろしくお願いします。」

竹野は階段を駆け下りて貨物庫に向かう。

基本はコンテナ船が使われているが今回は巨大な屋根付きの貨物
区画を持つ輸送船をわざわざ手配した。

おかげで荷下ろしにいつもの数倍の時間がかかってしまったが。

貨物区画に艦娘が乗り込みいつものように護衛の艦娘が数名の随
伴する形だ。

合計で1000名近くの艦娘で東京中の通信施設を攻撃し、一方的
にこちらの情報を流す。

二サエルの得意分野では絶対に戦わずに暴力で解決するという、一
見すればA a r o n M a n k i n dの主張を肯定するかのようなや
り方だ。

もし仮に意味もなく情報部員以外の人間を殺せば彼らと同じに
なってしまう。

あくまで自分たちは行動は危険人物を排除するためだけだと主張
を通すために正当性だけは失えない。

「お疲れか？」

貨物室ではまだほとんどの艦娘が眠りにについている。
すでに起きていた蒼龍と飛龍を連れて甲板に出る。

「自信のほどは？」

飛龍が挑発的に竹野に聞く。

だが、竹野は珍しく自信なさげに

「さあな。」

とだけ言う。

指揮官としては間違った対応であることは百も承知だが、なにせい
つもとは舞台が違う。

戦場と言っても戦うべき相手も装備も違う。

一つでも間違えば集まってきた憲兵隊に制圧される未来もある。

しかし、飛龍にはその心配だけには見えなかった。

竹野は何かもっと重大な決断を迫られているような顔で水平線を
見ていたのだ。

「解決できるかはさておき、私達も悩みぐらいは聞くよ?」

飛龍が気遣ってそう言ったことを瞬時に悟った竹野は表情を変え
ていつものように目に光をとます。

「いつもとは違う相手との戦いを前にちよつと億劫になっていただけ
だ。装備を確認しておけ。お前たちも今回は一味違う作戦をするこ
とになるかならな。それにしても少し意外な組み合わせだな。」

そう言つて竹野は飛龍たちの方を見る。

「他の鎮守府では一般的な組み合わせですよ。」

蒼龍は事務的に答えるが、南鳥島鎮守府はかなり事情が異なる。

「そうだな。ほかの鎮守府ではな。」

決して仲が悪いわけではないが、あまりにも思考、判断のやり方が
違う。

蒼龍が異常すぎるだけではあるが、飛龍の判断基準も若干おかし
い。

「仲良くしている分には構わないでしょう?」

「君には普通の世界に戻ってほしいと思う反面、ニサエルと戦うため
には裏に人間であつてほしい。そんな考えがあるから何となく君が
ほかの艦娘と同じようにしていることに違和感を覚えるのかもしれないな。忘れてくれ。私が解決しなければいけない問題だ。」

蒼龍は相変わらず地味な私服で不満そうな顔をする。一方の飛龍
ははかま姿で少し身震いをする。

「冷えるだろう。戻りなさい。作戦開始まではまだだいぶ時間がある

「からな。」

竹野はそう言つて二人から離れる。

そうしてもう何度目かわからない違和感の正体について無駄だとわかりながら思案する。

輸送船が接岸してから半日が経過した。少しづつ艦娘を降ろし、あらかじめ決められていた配置につかせる。

情報で分断を図るために東京中の通信施設を破壊せずに制圧するのにはかなり骨が折れた。

ムーンが交渉で味方につけた通信施設も念のために制圧下に置き万全の体制を整えた。

ここまでは順調で情報部との戦闘もなかった。

しかし、そううまくいくことばかりではなかった。

計画が二サエルに露見したらしい。

だがそれは正直問題ではなかった。作戦の実行までもう10時間もなく、確証がない状態で二サエルが反乱の可能性を示唆したところで無駄だ。

すでに二サエルの舌は封じた。世論戦などさせはしない。

情報部の特殊部隊との戦闘が完全に避けられなくなったがこちらにも考えがある。

恐らく二サエルの支配下にはない部署の部員に避難指示を出し、先手を打っておく。

あくまでこちらは二サエルを危険人物と断定し、排除のために表立って行動していることをアピールしておく。

二サエルが退避する可能性も考えて大急ぎでヘリポートに強襲し支配を確立。機動的に包囲網を縮小し物理的な退避路をふさぐ。

こと戦術行動に関して竹野が二サエルに後れを取ることはない。

まあ、仮にこれで後れを取ってしまったのならもう竹野たちに勝ち目はない。

「手は打ちました。突入のタイミングは予定通りでお願いします。」

竹野はそこで慌てることはない。二サエルがこちらの計画の概要

を把握することぐらい想定内だ。

何なら作戦の詳細な計画が漏洩しても問題はない。

堅実な計画を組んだ分いつものようなイリユージョンとはならない。
い。

恐らく死者が出る。それが艦娘なのかヒトなのか？

些細な問題だ。

「現在時刻フタマルマルマル時計合わせ。作戦を開始する。第1から第4班速やかに行動を開始。」

竹野の指示で本部近くで分散して止まっていたトラック四台が走行を開始する。

一方の竹野はこれもまたM I 6かどこかが用意したであろう指揮通信車から指示を出す。

すでにここら一带は総数300の艦娘の制圧下にあり交通規制も実施されている。

大々的に作戦を実行した結果市民は落ち着いた様子で野次馬となっている。

トラックは高さ2 m程度のメインゲートを強引突破で破壊しビル入り口の前に停車する。

こちら側の完全停車を待たずにガラス張りの入り口の向こうから銃撃が飛んでくる。

ガラスが粉々に砕け散りトラックにも多数の弾丸が着弾する。

だがこの程度は想定内だ。向こうだって通じると思って仕掛けてきてはいないだろう。

「第1から第四班突入開始。その他全班は私からの指示がない限り現状を維持せよ。これから指示を出す班は指示通り……」

竹野は手早く変更点を指示する。

運用している部隊の数がとても一人で管理できる量ではないが通信施設の制圧をただ維持するだけの部隊にそこまで支持は必要ない。

おかげで何とか指示は間に合っていた。

加賀は指示通り突入を開始する。

小口径の拳銃や自動小銃程度では傷が一切つかない体に改めて驚く。

しかし敵も手練れ。効果がない弾丸だと割り切って錯乱以外の成果を求めていない。

だが、こちらでも対人戦闘を数週間で叩き込まれた。その程度の錯乱で隊列を乱すことはない。

「扶桑を戦闘に陣形を取りなさい。突入するわよ。」

加賀の指示で隊列を組み移動を開始する。すでに大部分が破壊されているガラス製の扉を蹴破り柱に隠れている特殊部隊員を射殺する。

倒れた敵の脳天に確実に一発入れてエレベータに向かう。

一班はエレベーターで司令官室に向かい二班はバックアップ、第三班がビルのコントロール室の制圧に向かい第四班が念のため入り口で待機する。

裏口は疎か、地下道もふさいでいる。そのためニサエルが逃走できる可能性は極めて低い。

そのうえ蒼龍指揮下の即応部隊も待機している。

無難で堅実。その作戦が何を意味するのか、加賀は竹野と同じ結論にたどり着く。

だがいつもの鉄仮面がはがれることはない。動揺しても感情が隠し通せるのは表情筋が死んでいるだけかもしれない。

とにかくもう妄信することはない。竹野はよくしてくれたがそれだけ。任務で返せばいい。信頼も尊敬も必要ない。

「加賀さん？」

「コントロール室の制圧が済みましたか？」

「え？」

声をかけてきた綾波が驚いた様子で言う。

「いえ……ただ上の空な様子でしたので。」

「そう。問題ないわ。」

加賀はいつもの顔で答える。

指揮官を任された以上任務は果たす。

『コントロール室、制圧完了』

無線からそう聞こえてくる。

「行きましょう。」

エレベーターのコントロールを奪い敵の移動を制限してこちらだけ一方的に素早く動ける。

エレベーターを使うと言うリスクを飲むだけの価値はあるとの判断だ。

扶桑と比叡が扉の前に立ち、扉が開いた時即掃射を食らっても耐えられるように並ぶ。

「ポイント2到達。」

『了解だ』

報告を手早く済ましアサルトライフルの最終チェックをする。

異常がないことは分かっているが気が紛れてちよいどいい。

エレベーターの表示に目をやり目標の階への到着のタイミングを予測する。

ポーン

と気の抜けた音とともに扉が開く。

扶桑と比叡はライフルを構えながら少しづつ前が出る。

「ポイント3到達。」

『コントロール室からの報告によれば30階から40階にある監視カメラのほとんどが破壊されたようだ気を付けろ。』

ここは32階。直接35階に向かうの危険すぎるとの判断で途中で降りた。

「了解です。聞いたわね。最新の注意を払って進む。陣形はさっきと同じ。」

扶桑と比叡を盾にして前進する。地の利を利用されないように凶面は叩き込まされたが相手もそれは予想していたようであった。ころにバリケードが構築されていた。

だが艦娘の前にはあまりにも無意味だった。

バリケードの中に手りゆう弾でも仕込んで安易に破壊できないようにしたとしても、手りゆう弾では艦娘にかすり傷ぐらいなら作れる

かもと言った程度にしか効果がない。

「ライトクリア」

「レフトクリア」

順調にフロアが制圧されていることを確認して階段に向かう。

コントロール室の制圧はできたが各階に設置された手動隔離装置で階段は隔壁で閉鎖されていた。ある程度艦娘の攻撃を意識しているのか今度は扶桑が蹴っただけでは破壊できなかったが馬力のある艦娘で同時に蹴り飛ばすと壁の固定の方が破壊された。

階段をゆつくりと登りながら33階に向かう。

厄介なことに警備上の理由で本部ビルは一階ごとに階段の場所が変わる。

今度も隔壁があつたがこれも破壊する。今度は隔壁の破壊と同時にフラッシュバンが投げ込まれる。

しかし映画のように視界を数秒奪えるような代物ではなく少し驚かせる程度にしか効果がない。

知らなければ驚くことだが加賀は冷静にフラッシュバンを投げ込んだ人物を投げ込んだ隙間を狙って射撃する。

この反撃は予想外だったようで完全には見えないが隔壁の隙間から血を流してもだえている人物が見える。

隔壁を蹴り飛ばしその人物を確認する。まだ息はあるようだ。

「所属は？」

「答えると思うか……ゴツ」

挑発的なまなざしがゴーグルの奥に見えたと思うと男は口から血を吐いて息絶えた。

急所に一発ですぐに死ぬ。その感覚が加賀にはわからない。

「行きましようか。」

そう言つて立ち上がりながら頭に一発確実に入れる。

円形に広がるように加賀を取り囲み警戒していた艦娘たちは隊列を元に戻す。

再び戦艦二人に先頭に置き行動を前進する。

だがそれもすぐに止まらざるを得なかった。敵が見えない場所か

ら銃撃を始めたのだ。

それも今までの軽い攻撃ではなくそれなりの威力を持った攻撃だ。もし弱点となる目にでも当てられたのなら致命傷となることは避けられないだろう。

「二度引いて立て直しましょう。」

と指示を出し着弾する弾の向きや音を聞き敵の位置を予測する。しかしそれもうまくいかない。

相手はこちらがそうするであろうことを予測して揭示用のボードなどを適切に配置して音の反響を意図的にコントロールしていた。

完全に相手のホームでの戦いだ。

とはいっても加賀も対人戦を想定して訓練を受けている。制圧射撃を繰り返し徐々に前衛の二人を移動させる。

比叡がようやく敵の姿を捉えて発砲する。

だが敵はそれよりも早く比叡に対して発砲、その弾丸は比叡の胸のあたりに着弾して防弾チョッキをいともたやすく貫いた。

しかし、艦娘。それも戦艦級の装甲を抜くことは叶わず、徐々に修正され目のあたりに一発と胸のあたりに二発ほど着弾したようだが比叡が落ち着いて反撃したことで勝敗は一瞬でついた。

「どれだけ練度が高いの？」

だが加賀はその様子に戦慄して、改めて特殊部隊の脅威を認識した。

だがそれも対策法を知らない艦娘を知識量で殴ることが出来たからだ。

こちらの知らない弱点を狙って攻撃して状況を把握させる間もなく制圧する。そういった戦いをされなかったために教育された。

「大丈夫？」

加賀は無表情なまま比叡に容体を聞くと彼女は親指を立て問題ないと言った様子でこちらを見る。

「気を付けて。敵はこっちを十分殺し得る。」

比叡もさっきの戦いで少し危機を感じ取ったのかそう警告する。

比叡だって回避行動をとったのだ。にもかかわらず敵はあと一秒

もあれば確実に比叡の目を打ち抜いていた。

『十分脅威は認識できたようだな』

そんな会話のすべてを聞いてか聞かずかは知らないが竹野が言う。『奴らは人間だからまあだいい。練度は高いが撃てば死ぬ。だが情報部強制捜査班は艦娘も取り込んでやがる。うちの蒼龍のような輩がいるかもしれない。気を付けろ。』

「了解。」

竹野は謎の不信感を覚えていた。こちらは兵力を隠す気などはなからないのだから敵がこちらの出せる兵力を把握している前提で動いている。

ファーストコンタクトは強制捜査班の艦娘だと思っていた。

小火器程度では負傷すらしない。威力偵察を兼ねてこちらに損害を与えることも出来るだろう。

にもかかわらず敵はすでに数名の特殊部隊員を死なせてしまっている。

戦車に向かって小銃しか持たない兵士を立ち向かわせて後ろに戦車を待機させておくというのは完全な間違いだ。

相手にだつて指揮官はいる。一体どういうつもりだ？

「ムーン何か情報はないんですか？」

「今掴んでいる情報では強制捜査班の動きを完全に把握することはできないな。封鎖は確かに迅速だったが強制捜査班は独立した指揮系統を持っている上に優先通行権を持っている。こちらの監視から逃れるのはそう難しいことではないだろうな。」

強制捜査班が逃げたというのか？

二サエルには何か手があるということなのか。

やはり違和感がある。

「加賀。わかっていると思うが気を付けろ何かがおかしい。」
『了解。』

竹野からの不安なお告げを受けてから数分、33階にいた数名の伏

兵を殲滅し終える。

危ない場面は多々あつたが決定打にかける。

戦闘員一人一人からは明確な殺意が見える。

だが彼らの後ろにいるであろう指揮官の殺意が見えない。

多くの艦娘が気がつくことができない指揮官の殺意だが最低限の指揮をできるように竹野に教育されていた加賀にはその殺意を少しだけ感じとることができた。

だが今回は何も見えてこない。

彼女の経験不足かあるいは……

階段を上りまた同じことをする。フロアの構造は少し違うが敵が戦い方を変えることはない。

対処に慣れてきた加賀たちは危なげなくフロアを制圧する。

次のフロアに司令長官がいる。

「ポイント5通過。」

『少し待機しろ』

竹野にも何か思うことがあつたのであろう。加賀たちを制止する。

少しして考えを決めたのか竹野は

『私が直接出向いてニサエルを拘束する』

と言ってきた。

それは作戦全体を司る指揮官がすべきではないことであり、現場の指揮官に対する冒涇だ。

だが加賀はそんな意味のないことを言いはしなかった。

そんなこと竹野が一番わかつている。現場の意向を無視され、数千キロ離れた安全地帯の人間の決定で部下10万を殺された彼にそんなことをいう必要はない。

「了解です。三班、準備は？」

『問題なしです。』

明石が無線の向こうで言う。

それを聞いて加賀はハンドサインで移動を指示する。

エレベーターホールを中心に扇状に展開して竹野の到着を待つ。

またもエレベーターは気の抜けた音で到着を伝える。

「なっ！」

扉が開き中から出てきた竹野の姿に加賀は絶句した。

血まみれで倒れていたわけでも銃口を頭に突き付けられていたわけでもない。

ただ自然体で拳銃だけを持ち、防弾ベストすら着ずに立っていたのだ。

「正気ですか？」

「私の出した答えだ。これが最善策だよ。」

加賀は必死で言葉の意味を理解しようとする。

「司令長官があなたの説得で考え方を改めるとでも？」

竹野は笑って

「彼がそんなことで動く人間ならここまで苦労させられていないさ。」

加賀はセーフティーすら解除されていない竹野の銃と顔を見比べる。

「なんだ？」

「いえ。殺意もまとわずに敵地に乗り込む、それが正しいことだとは私にはどうしても思えません。何か考えあつてのことなのでしようが私はお勧めできません。」

「私は正気だし、これが今私が持っている情報から導ける最善策だ。」
「つまり戦術的に間違っているとは理解されているのですね。わかりました。可能な限りの護衛を致します。」

加賀は呆れたように少し微笑んで言う。

「私の職域ではないことは分かっている。わがままに付き合ってくれ。」

「了解です。」

二人の正義

司令長官室に到着するとニサエルは手で警備の兵を退室させた。

「やはりあなたは軍人に向いていない。正義を愛する人間にも権力闘争のために他者を虐げる人間になることもできない。半端な人ですね。」

ニサエルは上機嫌な様子で言う。

「お前はこうなるようにすべてを仕込んでいた。その満足げな顔すら嘘だろ。」

さすがの竹野も安易にその言葉を信じたりしない。

「大正解。おめでとうございます。」

ニサエルの顔から感情は一瞬で消え、感情を一切含まない無機質な声でこちらを称賛する。

「どうして裏切った？」

「私がそれを認めなければあなたはただの妄想激しい異常者ですよ。」

ニサエルは余裕な顔でこちらを馬鹿にするように言う。

「本気で隠す気だったのか？中国政府に調べが入れば簡単に証拠が露見する。お前が私の思った通りの人間ならばそんなミスを犯すと思えない。」

「単純なミスですよ。買いかぶりすぎです。」

棒読みでそう発言して、それが嘘であることすら隠そうとしない。

考えが読めるとは最初から思っていなかったがやはり最初にあつた時同様、底知れぬ不気味さがある。

腹の内が読めないなんてものじゃない。表情もボディランゲージもすべてが不自然に一致する。

感情を偽装していることに大半の人間は気がつきもしないが、散々騙されてきた竹野は理論ではなく勘と経験でニサエルの異常さを認識していた。

「目的はなんだ？」

「裏切っていることは確定ですか？私がはめられたという可能性は十分あると思いますか？」

「この程度の策にはまるようであれば遅かれ早かれ情報部の狂犬どもに寝首を搔かれている。」

「私の実力の評価を改める気はないと?」

「ここで言い争いをしても言い負かされるのが目に見えている。持ち帰って検討させていただけのならば再度評価をし直すか?」

「そうですね。わたしはあなたの官僚答弁を聞くためにここに誘導したわけではありません。本題に移りましょうか。座ってください私は今更あがいたところで逃げられない。そうでしょうか?」

「考えうる限りの逃走経路はふさいだ。」

「山本くん。」

二サエルは山本に目で合図を送る。

山本は少し混乱してどちらが味方なのか吟味している様子だったが相変わらず慣れた手つきで紅茶を用意する。

「どうぞ。」

戦闘員でもないのに本当に肝の座った男だ。

伊達に修羅場をくぐり抜けていないだけある。

「ありがとう。」

「それと、私はあくまで中立です。どちらの飲み物にも毒などは入れていませんよ。」

「そうですか。元カノと今カノで優劣はつけられないと?」

二サエルが山本に微笑みかけると山本も微笑んで

「私が二股、いや三股をしていない保証ありませんよ。」

そう切り返す。

くだらない言葉遊びの一つから見ても二サエルも山本も食えない奴らだ。

全くもって嫌になる。

「それで?」

「私は防衛連合軍を裏切ります。あなたの言う通りですよ。」

二サエルは簡単にその事実を認めた。

だがそれを認めたことで生じる謎もまた複数ある。

「どこまで説明してくれるのかも、その説明のどこまでが本当なのか

もわからないが、考えを聞かせてくれるか？」

「それではあなたが得る情報は何もないというのと同じですよ。」

「わざわざ忠告どうも。」

「私はこの腐敗しきった組織にも現状維持のために虐殺すら厭わないCIAにも嫌気がさした。ただそれだけの理由です。もつと言えはこの文明自体に嫌気がさしました。」

「嫌気がさしたということには納得だ。なにせ私も数年間この組織から逃げていたわけだからな。けれどこの組織を裏切ってどこに行くというんだ？まさか深海棲艦の肩でも持つつもりか？」

「ふふ。」

竹野はその表情ですべてを理解した。

陰謀論者が深海棲艦は米軍の新型戦闘マシンだと大騒ぎしたことを覚えている。

多くの人間が深海棲艦というものを直接目撃するようになってそんな話は消えていった。

彼らがどこから来たのかそれだけがわからないまま深海棲艦と艦娘の対立関係だけが確実なものとなり双方の出自を気にしている暇ではなくなった。

戦局が安定しても三つ巴の戦いになることを防ぐため艦娘に関する研究の多くが握り潰され今も謎の味方という立ち位置にある。

「深海棲艦が何者か知っているか？」

「そりゃそうでしょう。艦娘が何か、そしてこの戦争がどうして起こったのかも知っていますよ。」

艦娘が本当は敵でした。

などという論文が発表されることを恐れているという通説自体がニサエルが描いた陰謀論だ。

一つ陰謀論を形成してやれば陰謀論者はその土台固めに注力する。仮に隠したいものに関連する情報が漏洩してもあらかじめ作られた陰謀論を補強するための材料にしかならないだろう。

「正直に言って薄々気がついてた。あんまりにも艦娘という存在が都合よすぎだったからな。」

「ある程度の知識人は知っていますよ。この戦争が深海棲艦と言う理解不能な存在との戦いなどではないと。あなたは所詮ある程度賢いだけの人間です。私と戦っても、自分が相手にならないことを知っているだけましですね。」

ニサエルの言葉一つ一つには全く重量がなく認識しようとして強く思わなければ言語として理解できないような不気味さがあった。

「けれど同じことです。あなたのつまらない的外的な推理を聞く気はありません。単刀直入に言います。私と一緒に防衛連合軍を裏切るつもりはありませんか?」

「その質問のためにここまでではいろいろと用意して舞台を作ったのか?」

「私とその程度の人間だとおもうならそう思っておけばいいでしょう。」

ニサエルは竹野の性格を見極め、ここに来るように仕向けた。だがそれはあくまでおまけ程度でしかないのだろう。

もつと別の目的を持っているのだろうがそれを教えるつもりは一切ないように見える。

ニサエルのめぐらしている策の底が見えない。

「回答だが、もちろん断る。」

しかしニサエルは少しも慌てることなく笑って

「でしょうね。でも私がほとんどゼロに近い可能性のために時間を割くと思いますか? 私はあなたをある程度の確率でこちらに引き込む自信があります。そしてあなたには私にそうさせるほど魅力的な力がある。」

「何がほしい?」

「一つ話をしましょう。歴史上で最も有能な戦術家は誰ですか?」

「諸説があつて無意味な問いだが答えるなら、カルタゴのハンニバルか?」

ニサエルは一瞬微笑む。相変わらずその表情が本物かわからないが、恐らく望んでいた回答だったのだろう。

「百点の回答ですね。私が何を言いたいかあなたならわかっているで

しよう。カルタゴは世界最強の戦術家をもつてしてもローマを倒せなかった。ミジニコがどれだけ賢かろうと象には勝てません。同じです。戦う相手を間違えれば部分的に勝利を重ねても勝てはしません。」

「深海棲艦と人類とはどうにもならない差があるからお前も勝ち馬に乗れと?」

「数字だけを見れば逆転は可能でした。ですが私はこの数年で理解しました。人類は一つになることなどできやしない。深海棲艦と言う共通の脅威が出現してもなお内部で争い、傷つけ、殺しあっている。万に一つの可能性を信じるのが無駄だとよく理解させられました。」

竹野は何かがおかしいことに気がついていった。決定的にずれている。

理論立てて考えれば何もおかしいことはない。だが致命的に何かが違う。

「パクスロマーナを作るために文明をも滅ぼすとも言うのか?」

「そんな規模のものではありませんよ。今、世の中はヨーロッパ中心ではありません。」

「ならどうしてヨーロッパで Aaron Mankind が暴れさせた?」

「それも私のせいだと?」

ブラフではなく確信した様子で言う竹野に少しも驚くことなく問う。

「ならあんな大規模な行動を見逃すほどあんたが無能だと?」

「いつも思いますがあなたは私のことを過大評価しすぎです。」

「軍事の分野で過大評価しすぎて困ることはない。」

押ししても引いても反応がない。何を隠しているのか見当もつかない。

「あなたの能力はこんな組織で腐らせておくべきではないでしょう。私と来てください。」

二サエルは少し強い口調でそう要求してくる。

「勝ち馬に乗って最終的に勝てばいい。恥も外聞もなく、ただどちらが勝つか見極めることしかできない。その程度の人間のために時間をかけすぎたようだな。あんたの相手などせずに失地を取り返しに行けばよかった。あんたの策にのせられて、なれない土俵での戦いに時間をかけすぎたな。」

「その程度の人間に負けて泣くのはあなたですよ？」

「どれだけ竹野が強い言葉で二サエルを叱責しても無駄だ。」

竹野のくだらない感情論で動くぐらいなら最初から裏切ったりしないだろうからだ。

さっきの強い口調もそうだ。怒り悲しみ苦痛喜び。感情など二サエルにとっては有用なツールでしかない。

「加賀。」

交渉は決裂したと判断して竹野は加賀に目で合図を送る。

加賀が動くこうとすると二サエルが言う。

「あなたの違和感の正体を教えてあげましょうか？」

それを聞いた竹野が加賀を制止する。

「違和感だと？何を言っている。」

「凶星だから止めたんでしょ？とっさの判断がまだこちらの世界の人間とは比べ物にならないほど陳腐ですね。」

「答えろ。どちらにせよお前は拘束される。」

二サエルの表情に焦りが出ることはない。竹野が彼のことを強く睨み付けていたころにはもう勝敗がついていた。

二サエルは誰にも警戒させることすら許さずに銃を取り出しその銃口を山本に向ける。

竹野は全く反応できなかつた。

自然体なままで銃を取り出したのだ。

殺意を感じるなどと言う表現で表されるように、人間は危機をある程度予測する。だがその予測はあくまで経験に基づく計算結果の一つに過ぎない。

数値さえ与えなければ今までの経験で大量の公式を保持している相手でも警戒させることはない。

二サエルは表情、目線、仕草、口調、呼吸。その他すべての発する情報を自分にとつて都合のいいものにコントロールしていた。

「山本を殺してどうなる?」

「殺してどうなるというよりも彼が死んだほうがあなたが結論を出しやすくなるでしょう。」

「何を言っている?」

「あなたが私の見え見えの足跡を安直に追いかけてなかったのは単純にあなたが優秀で用心深いからではない。違いますか?」

「……」

「あなたは根本的に私を否定できない。何故なら、私とあなたが望むものが同じだからです。だから私を追い詰めて計画を炙り出すことをためらった。違いますか?」

「そんなわけ……。言わせておいていいんですか提督?」

加賀がそう聞くが竹野は沈黙を続けるしかなかった。

「くだらない人類など滅ばばいい。あなたは4年前ソロモン海でそう思った。その後も軍をやめなかったのは復讐の機会をうかがっていたから。ここまで間違いはありませんか?」

「……」

「提督?」

加賀の声色からは困惑が見て取れ、山本の顔からは明らかな動揺が見て取れる。

「しかし、あなたは結局猿山の大將に過ぎなかった。あまりにも対人間の戦い方を知らなかった。官僚の権力闘争などと言う私たちの住む世界から見れば赤子の遊び程度のものしか知らないあなたには我々のような人間を騙して、文明を滅ぼす力などなかった。」

「文明を滅ぼそうとしたわけじゃない!」

竹野が放った精一杯の反論は二サエルに向けられたものと言うよりも自分に向けられていたもののように見えた。

「口ではそう言ってもあなたはヒトという種よりも艦娘という種に可能性を感じていた。」

「艦娘が純粹無垢であるのはまだ未熟だからだ。いずれは艦娘も間

違った判断をする。それが知性を持った生物の性だ。」

「そうです。ですがあなたにはその単純で明快な理屈すら否定できるほどの憎しみがあつた。制約ばかりの世界に対する深い怒りがあつた。既存の社会に対する怒りが。」

「それは……。」

「村上陽介。知っていますよね。あなたの父親なんですから。彼は理不尽に殺された。あなたの怒りはそこからきている。違いますか？」

犯人は大学院生だった。しかし、彼は殺害の理由を語る前に留置所内で自殺した。

「犯人はあなたの父親に人生の梯子を外された。」

「当時は仕方なかったことだ。」

「けれどあなたの父親はそんな社会の中で可能な限りの手を尽くしている数少ない人物だった。理不尽に立ち向かっていた人間が殺されることなど到底納得できることではないでしょう。そうでしょう？」

竹野、いや、村上にとって父は尊敬に値する人間だった。

官僚らしく理不尽の中で苦勞しながらも可能な限りの手を尽くしていた。

だが手を尽くしてもどうにもならない問題があつた。

「20世紀。人類は大量の資源と地球環境を代償に野望を追い求めました。より便利に、より強く、より裕福に。」

二十世紀の人々が少しでも我慢をしていればこうはならなかった。そんな考えが当時はまん延していた。

自分たちにはどうしようもない過去のせいで未来を奪われたのだ。

「COP34の議決で大規模な火星入植計画もとん挫しました。言い方は悪いですが主要国は地球の限界を知っていたから宇宙にはけ口を求めていた。それを無視して中小国家が大騒ぎして全員が不幸になった。夢のために資源を消費にする時代から、資源のために夢を消費する時代へと変わったわけです。」

COP34で到底実現不可能な数字を押しつけてきたのは中小国家たちだった。

けれどそれはあくまで発言者が誰であつたかだけの問題だ。

「何を言っている？中小国家が悪いとでも？」

「誰が悪いということじゃありません。けれどチャンスを奪い、夢を奪ったすべての人間には死んでもらわないと。中小国で決定を指示した人物、国家の方針に反対しなかった主要国の愚民たち。すべて死んでもらいますよ。」

文明に嫌気がさした、その言葉の意味がわかった。

「神にでもなろうってのか？」

「私は敬虔なクリスチャンではありませんからそれもありでしょうね。ですが私は自分を神というほど馬鹿ではありませんよ。退屈なバチカンの言うような終末が来る前に人類を間引かねばならない。深海棲艦も艦娘もそのための道具にすぎません。主要国。いや、列強と呼んだほうがいいでしょうか？彼らは昔のような冷酷な決断を放棄して人権などというくだらないもの守った。だから列強も無慈悲な調整の対象となっただけです。」

「そう言う事か。安易な方法への逃げだな。」

「あなたは勘違いしている。同種族の中ですら意思を統一する能力がない人類が安易な逃げをして何が問題なのでしょうか？我々の計画が完遂されたとき残された人間たちには充分すぎる地球のキャパシティは残ります。誰が私たちを否定できるんです？スペイン人に殺されたインディアンの権利獲得運動を相手にしている人間が一体どれだけいると？滅ぼされた民族に発言の機会はありません。」

二サエルは人間を選別する気のようにだ。

生きるべき人間と、死ぬべき人間を決定する作業を彼らは行う気だということだ。

「人を選別する資格を誰が保有していると？」

「資格など必要ない。地球にあるすべてはあくまでも自然物です。後から出て来た法なんてものが最初から権利などよりもつと自然にあつた気に食わない人間を殺すという現象を制限した。法の根拠となる政府が破壊されたときに殺人を罪として裁くことはできません。政府があつてこそ殺されない権利があるんです。」

「私が賛同するとも思ったのか？」

二サエルは大きく頷いて

「あなたが我々に加われれば日本人を生かしましょう。数も一億ほどでちようどいい。アングロサクソンと日本人、同じ島国出身で仲良くできるとしよう。」

「断れば殺すと?」

「優秀なら残して不要なら切り捨てる。究極まで資本主義を突き詰めればそういうことになります。債権や事業が、人命に変わるだけです。命に値段をつけるといって究極の作業を共にしませんか?私はあるあなたが不良債権ではないと判断した。同様に日本人でもインディアンでも必要なら残します。」

「噂は聞いていましたがここまで最低な人間だとは思いませんでした。」

加賀が物凄い圧で二サエルをにらみつける。

山本は双方の出方を伺いながら警戒していた。

「君が山本君の目が気になって決断できないなら少しタイミングが早いが引き金を引いてもかまわない。そこに立っている艦娘たちも処分してあげます。あなたの裏切りが露見することはあり得ません。なんならムーンのように偽物の死体を用意しましょうか?」

「お前の首を引つ提げて防衛連合軍幹部に復帰という筋書きか。」

二サエルは笑顔を浮かべて銃口を山本から外して自分の机に向かう。

少しでも動けば射殺されると理解していた山本と村上は二サエルの動向を見守る。

彼は机の隅に置かれたウッドブロックカレンダーに手をかけ曜日
のブロックを引き抜いて手の中でくるくると回す。

「曜日と言う概念すら否定できる。魅力的な世界です。アメリカが頑
なに使い続けているヤードポンド法や華氏も統一できる。」

二サエルはブロックをゆっくりと戻す。

「決まりましたか?」

彼は微笑みながら聞く。

おそらくこれが最後のチャンスだ。村上がどちらにつこうと結果

は変わらない。

ならば敵の内部に入って少しでも多くの人を救うべきなのかもしれない。

いや、それはただの言い訳だ。

空気が変わったことを感じとりニサエルが握手しようと手を伸ばす。

ほんの数m先で差し出されたその手を見て彼は結論を出す。

「くたばれウジ虫が!!」

平穏だった室内は突如銃声と硝煙に包まれた。

村上の弾丸はニサエルに命中したがバイタルラインを大きくそれて太ももに命中した。

ニサエルがよけながら発砲した弾は村上の左肩を打ち抜く。

そうしてニサエルは机の裏に回り込み身を隠す。

「あなたはいつも詰めが甘い。」

「何だと?」

「あなたが依頼した航空支援は来ません。」

「だからどうした?」

ニサエルは机の裏で村上を馬鹿にしたかのように笑う。

「どうして私がこんなリスクの高い場所で仕事をしていると?」

高層階で、ガラス張りの部屋。確かにニサエルが自分から好んで選ぶ部屋ではないだろう。

「長官室はここだと決まっているからだろ。ハツタリはよせ。見苦しい。」

「やはり、あなたは低い知能の深海棲艦と戦うのがお似合いですね。」

ニサエルがそういうと同時にガラスが割れて強力なサーチライトが照射される。

一瞬で視界が奪われて部屋には爆音が響き渡る。

視界がなくなると何が起きたか一瞬でも理解できた。

へりだ。

航空支援が来ないというのはこういうことだ。

ニサエルの行動に意味がないわけがなかった。

違和感すべてを調べなければ勝てない相手だった。

どうしてあんなに簡単に憲兵隊が同意したのか、どうしてあんなに早く航空支援が承認されたのか。

すべてを調べなければいけなかった。

竹野は爆音と爆風が止んだ部屋でビル風の風切り音を聞きながらただ茫然と立ちつくしていた。

絶望の中での一手

1945年7月16日 アメリカ合衆国ニューメキシコ州アラモ
ゴード砂漠

強力な化け物が産み落とされた。

それは兵器というにはあまりにも強力で、その破裂音は神に対する
一方的な独立宣言だと、とらえることもできた。

けれど私には現実が見えている。

この兵器はやがて我が国を苦しめる。

ナチスは倒れ、ジャップももう虫の息だ…… だから何だというの
だ？

平気な顔で数千万人を殺すスターリンといつまでも仲良くできる
とでも？

我々が散々馬鹿にしてきたアジアの国が日本と同じように突然成
長を始めたら？

現実とはそんなものだ。いつまでもこの圧倒的な兵器が我が国だ
けの技術であるはずがない。

KKK？くだらない。人種はアイデンティティではない。

アングロサクソンが生き残りたければほかを滅ぼすしかない。

そうしなければかつてのモンゴルのように同化されてしまうだけ
だ。

私はグッとこぶしを握りこむ。

「神は死んだ。」

だからどうした。ニーチェよ心配するな。今ここで私たちがアメリ
カ人が自由のために殺したのだ。

必要のない存在は淘汰されるだけ。

神でさえ……

「損害報告は終わりか？」

将校の一人がうんざりした顔で聞く。

だが情報部の報告は終わらない。

「いえ。まだまだあります。口頭で伝えておかなければならないほど重要な損害が……」

村上が到着してからかれこれ三十分以上損害報告を聞かされている。

衛星、早期警戒管制機、情報収集船。

どれも情報優勢という唯一の勝ち筋のために必要な装備品だった。その多くがほんの数時間で失われた。

稼働機は全てやられ、各地の港湾設備も攻撃をうけアメリカとの貿易ルートも苛烈な攻撃にさらされ防衛部隊が瓦解、おそらく補給はしばらくできないだろう。

「聞くが、どうして高高度で活動している警戒機がやられるんだ？」

そんな疑問を投げかけた士官に横の士官が耳打ちする。

「司令長官が裏切った。聞いてないのか？」

驚いた様子で士官は聞き返す。

「どうしてだ？」

「また村上が余計なことをしたらしい。」

おそらくこちらに聞こえるように言っている噂話を完全に無視して村上は報告を確認し終える。

そして立ち上がる。

「お待ちくださいー！」

情報士官が慌ててこちらを引き留めようとするがそこらには目線もやらず村上は答える。

「現行も、予備も、全部暗号がばれている。今何か手を打っても無駄だ。それよりもやらなきゃならないことがある。」

情報士官は黙り込んだがほかの士官が村上をにらみつけて言う。

「敵に電話でもして、私もすぐに合流しますってか？お前の名声なんかとつくの前にうそだったとばれてるんだよ！調子になるなよ！」

「そうか……。」

村上は何も答えなかった。

なぜならそうやって自分を非難した将校は昔、彼がかばってやった

将校だったからだ。

彼はソロモン海の真相を知っている。それでも非難してきたのだ。何を言っても無駄だ。

村上は痛いような視線の主を探すことなく会議室を堂々と出ていく。

会議室の外ではオーマーが申し訳なさそうな顔で立っていた。

「すまない。」

SASでも待機させておいて安心しきっていたのだろう。

あるいは英空軍が出撃していたら少しは状況がましだったかもしれないとでも思っているのだろう。

「私たちでは相手にならなかつた。それだけの話です。ムーンは？まさか彼女もグルでこつちを扇動したとでも？まああり得る話ですが……」

聞いてみたがどうやら違うようだ。

オーマーは首を横にふり、明確にそれを否定する。

「盛大に騙された後にこんなことを言っても信じてくれないでしょうが少なくとも私はムーン程度にここまでうまくやられるような人間ではありません。」

「そうですか。なら今彼女はどこに？」

村上は追及はしなかつた。いま彼女を責めても無駄だ。何の解決にもならない。

「CIAに報告しているところです。」

「つらつらと人の秘密を暴露しないでもらいたいですね。」

ちやうど噂の人物が現れて文句を言う。

「ムーン。あなたまで裏切ったのかと思って心配しましたよ。」

ムーンは呆れた顔をして

「ニサエルが私を仲間に引き込もうとしたことは一度もありません。私はとるに足らない多くの人間と同じなんです。どれだけ背伸びしてもアピールをしても彼が私のことを認めることはありません。」

そう言う。

「そうですか。ニサエルの本当の目的についてはお気づきですか？」

ムーンやオーマーの実力に関して少し疑問視し始めていた村上は彼女を試す。

「これですね。」

ムーンはタブレットに表示されている記事を見せる。

反体制的なメディアの書いた記事には『防衛連合軍最高司令官の裏切り』と言う文字が踊っていた。

「報道規制は当然敷かれていたと思うのですが？」

村上は少しも慌てることなくムーンの推理を引き出そうと試みる。

「偽情報を流して戒厳令が敷かれている理由はごまかしていました。にもかかわらずこの速さで情報が漏れた。だとするとこの記事の情報提供者はニサエルだと思われまます。」

「どうして彼がそんなことをする必要が？」

「血判を押しすることを要求されたからではないでしょうか？」

「こういったやつらはなぜこうも訳の分からない言い回しをするのかはさて置いて、やはりムーンも相手が悪かっただけで能力のない人間ではないようだ。」

「つまりニサエルは敵にとつても明確な脅威であつて、二重スパイとさせないために裏切りを大々的に広報させたということですね。」

「計画を考えて実行したのはニサエルでしょうが、恐らく敵は何かしらの証明を求めていたのでしょね。」

「BBCだかCNNに報道させるのではなく利用しにくい反体制的なメディアに報道させたところも含めて計画でしょうね。」

ニサエルは暗殺と暴動を利用して村上を利用したのだ。

流石に分かりやすいパンくずを安易に追いかけるような人間ではない村上も結局ニサエルにとっては利用できる愚者でしかなかった。

「もしあなたが敵に加わったとき自分が操れる人間なのかどうかの見極めも含めてこうも面倒なやり方をしたんでしょう。」

ニサエルの行動にはすべて裏がありその裏面は一つであるとは限らない。

本当に厄介で厄介で仕方がない。

「それでこれからの方針は？」

オーマーがため息を一つついて切り替えた様子で聞く。

「まずは損害確認でしょう。軍事面はさて置いてどれだけの作業員が信用できるのか、どの部隊が裏切っていたのか。私はそれを調べます。あとはこちらのネットワークがどれだけ生きているのかも調べなければいけませんね。」

「次期司令長官の人事への工作もお願いできますか？」

「了解です。誰を任命するようにさせれば？」

「中越中将を指名させてください。」

ムーンは廊下の先から通行人が来ていることを見ると小さく頷いて何事もなかったかのような様子でまどついていた貫禄を消して歩き出す。

通行人はとるに足らない存在に化けたムーンを意識の片隅にも置くこともなくすれ違う。

オーマーは感心した様子で口を開けている。

「では私も。」

それから少しだけ話しをしてオーマーと別れる。

村上は会議室に戻ることはなく通信室に向かい南鳥島鎮守府に連絡をしておく。

「長門か？ 私だ。」

『そうだ。提督か？』

「ああ。ニサエルが逃走した。そっちの部隊は問題ないか？」

『そうか。色々問題は起きているがまだ戦力を温存しておく余裕ぐらひはある。もともと備蓄は多いほうだったからしばらくは戦えるだろうがこんな補給状況が続くならば厳しくなってくると思う。』

長門の報告は現実的なもので彼女らしいともらしくないとも言えた。

意地というのか、強がりというのか。彼女は厳しいだとか難しいだとか言うことはなかった。

だが今回は違った。他者の命を預かる指揮官となることの意味を理解できたようだ。

「成長したな。」

『どういうことだ?』

長門は本当にわかっている様子で聞き返してくる。

「こういうところは成長していないようだ。」

「現状は理解した。おそろしくしばらくそつちには戻れない。もしかしたら二度と戻れないかもしれない。」

『逮捕でもされたのか?』

「そうじゃない。もしかしたら南鳥島を放棄することになるかもしれない。」

『ここを放棄するということは』

長門の声から動揺が見て取れる。

南鳥島は本土防衛の重要拠点だ。南鳥島の放棄が本土での戦闘に直結するとまではいわないがそんな重要拠点を捨てざるを得ないということはこちらの劣勢を示すことその他ならない。

「司令部の奴らはまだ何とかなると思っているようだがどうにもならない。戦術と情報の優位で戦ってきたのにそれがなくなった。恐らく今までのやり方では時間稼ぎすらできない。」

『なるほど。撤退の準備を進め進めておけばいいのか?』

「そうしてくれ。また連絡する。今度はもしかすると戦闘用の回線かもしれないが。」

『そうならないように祈ってくれ』

長門は電話越しに少し笑っているようだ。

なにがおかしいのやら。

「じゃあな。」

そう言って電話を切る。

村上は通信室を出てそのまま防衛連合軍本部ビルを出る。

タクシーを止めて永田町まで走らせる。

運転手は何度か二サエルの裏切りが真実かどうか聞いてきたが

「それを知れる立場にないから困惑している。」

と答えておいた。

もし仮に身分がばれそうになっても今回は村上の名前で半

ばクーデターのような作戦を実行しているため、いざとなったら騒動を聞きつけて急いで九十九里浜から駆け付けた竹野という別人を名乗ればごまかせる。

首相官邸前に止めろとでも言えば面倒なことになりそうなため桜田門あたりで下車してそこからは歩いて向かう。

タクシーが走り去ったことを確認してから上着を脱いでかばんに押し込む。

あんな報道がされた直後に防衛連合軍の軍服で永田町を歩けばたちまち報道陣に取り囲まれる。

すでに若干視線を集めてしまったが仕方ない。

足早にそこを離れて首相官邸に向かう。

現内閣でそれなりにかかわりがあるのは法務大臣の先生だけだ。

アポなしで直撃しても追い返されることは目に見えているが、本人と出会えたなら一時間ぐらいはこちらに時間をよこしてくれるだろう。その程度の借りはあるはずだ。

腕時計を見ながら永田町の周りを歩き回り時間をつぶす。

「お久しぶりです。」

予想通り老婆は姿を現した。

「あなたは？」

SPが警戒した様子でこちらを見る。いつもの散歩コースでいつもと違うことが起きているのだから警戒しなければおかしいのではあるのだが。

「元防衛省の村上です。」

「ああ。あなたね。そう。村上。そんな人いたかしら。」

露骨に嫌そうな顔をして白を切る。

SPは余計なことに口を出さず何も言わずに警戒を緩める。

いちいち政治家のくだらない人間関係に深入りしたくないということだろう。

「少しよろしいですか？」

「2時間後に閣議が始まるのでそれまでなら問題ありませんよ。」

いやそんな顔はしているがそれだけでわざわざ接触してきた人間

を追い返すような人物ではないことはわかっていた。

「それで？」

官邸の一室に通されSPが退室したことを確認してから大臣は話を切り出す。

「次のサミットに私を同席させてはいただけませんか？」

「G20に、もう政府関係者ではない人間を出席させると？無理だということはあるあなたが一番知っていると思いますか？」

大臣はこちらの目的を探ろうとしているが、村上はもう一議員程度に考えを読まれるような人間ではなかった。

「そちらの長官が裏切ったことに関係する何かですか？」

「知っているなら話が早いものです。一刻も早くアメリカの諜報関係の責任者と会合を行いたいのですが何かしらのつてなどはございませんか？」

「つてなんて言われてもこっちが持つてるのは外交チャンネルだけですよ。」

「そう言えばお孫さん結婚するらしいですね。国際結婚。いいですよ。ね。」

大臣はギョツとして動揺を隠せない。

このタイミングでそんな話を持ち出してくるということは裏でどんな話が進んだのか知っているということだ。

「こういう時代です。政略結婚なんてものが起きても仕方ないでしょう。」

「責めようってわけじゃありません。その結婚で作った人脈を使ってほしいという話です。」

「私に接触してきたのはそれが目的ですか？」

大臣は抵抗することをあきらめて緊張を解き聞いてくる。

「コネだけで見えるなら外務大臣の力が一番借りたいものです。ですが私が接触しても相手にされないでしょう。それに信頼に足る人間ではないかもしれません。」

「変わったんですね。青臭い考え方が抜けたようで。」

「今の私なら権力闘争に勝利できるでしょうか?!

大臣は笑って

「勝利ですか。なんだか貴方らしくない。いつだって中途半端にライバルを追い込んで最後には手を差し伸べていた青年はもういないのですね。」

と少し悲しそうな顔をする。

「昔の私のほうが好きでしたか？」

「そうかもしれないですね。今のあなたは何かが抜け落ちたようで不気味です。」

「十年もあれば人は変わります。」

村上はそう冷たく返す。

大臣はよく知った素直で愚直男はそこにはいないことを悟った。

自分がそうなると予測していた人間の人格が想定と違うものだったことに対する不快感なのか、それとも権力を維持するためにあえて目を背けていた裏世界から想定外の使者が来たことに対する不快感なのか。

その不快感に対処することはない。自分はそうして権益をこれからも守っていくのだろう。

「CIA日本支部の責任者との会合をセッティングしましょう。」

「感謝します。サミットの件もお願いします。それまでにすべてに処理を終わらせておきます。」

「サミットに乗り込むのも変更なしですか？」

「ええ。もつともサミットでするのは事後承認程度ですがね。」

「同意が得られるとでも？」

「日本とアメリカ、カナダ以外はもう名ばかりの大国です。この三国には先に話を回しておきますよ。」

一礼をして村上は部屋を出ていく。

その背中を見送りながら静かに目を閉じる。

「一体何をたくらんでいるのやら。」

上澄みの悪と、泥だらけの正義

村上が恐れていたことがついに起きた。

各地で戦線が次々に崩壊したのだ。

陸戦のように明確な戦線ではないがぼんやりとした勢力域というものも海にもある。

それが次々に失われた。

理由は明白だった。

情報不足と戦闘支援システムの不具合だ。

高度な支援システムは軒並み使い物にならなくなり戦闘能力はさがり、通信はすべて傍受されこちらの動きは筒抜け。

一方で衛星や哨戒機は使い物にならなくなり敵の動きはさっぱりわからない。

支援システムの不具合も何かしらバックドアが仕掛けられていたと考えていいだろう。

物量と純粋な戦闘能力で艦娘を遥かに凌駕している深海棲艦にあらうことか人間の指揮官がついてしまったのだ。

艦娘と人間のように深海棲艦と会話して戦闘計画を立てて作戦を実行しているのか何かしらの方法で深海棲艦を誘導しているだけなのかはわからない。

だが間違いなくこれまでのようにはうまくいかない。

明らかに戦力が不足している。

第二回緊急作戦会議

「それでは配布資料の四ページをご覧ください。概算での戦力差です。」

「艦娘三千八百万体、深海棲艦約二億七千万だと？勝てるわけがないだろう？」

数字のインパクトも強いが何よりも、こちら側の新兵の割合が高すぎる。

「直近で熟練兵が失われたのはどこです？」

「大スンダ列島での撤退戦で指揮官を失った部隊が今回の侵攻に対処したようで……」

「まさか指揮官なしで今までとは違う敵と戦闘させたのか？」

情報将校は黙り込む。

「そう責めるな。君ほど優秀な人間には理解できないのかもしれない。だがそういう時もある。責めたってどうにもならない。起きてしまったことは仕方ないのだよ。」

そう言つて村上との間に割つて入つたのは防衛連合海軍元帥ポーク・ラツセルだった。

二サエルに失脚させられた前元帥の忠犬だったが失脚後は元元帥の残した派閥などを切り売りして人事に干渉、権力の座に返り咲いた。

しかし二サエルが対処していないということはその程度の人間だ。能力は決して高くない。

それに、さっきの発言一つでどうして権力の座にいられるのかわかった。

こいつは身内で傷を舐めあつて聞こえのいいことを言つて権力を維持している。

改めて手を打つておいてよかった。もし仮にこんな奴が司令長官になつたのなら大変なことになる。

「竹野提督でしたっけ？あなたの言いたいこともわからなくはありません。そこで私から提案です。この場で司令長官を決めて非常時にリーダーシップを発揮する人間を決めませんか？このままいけば二サエル前司令長官の任命した中越中将が司令長官として指名されます。ですか裏切り者が選んだ次期司令長官は信用できません。」

「待つてくださいいラツセル元帥。二サエルは狡猾な男です。あえて優秀な人間を司令長官の席につかせないための策であることは十分に考えられます。」

ラツセルは待つていたというような不快な笑みを浮かべて答える。「狡猾？あなたがうまくしてやられただけじゃありませんか。上司に何も報告せずに行動して最悪な結果を招いておいてよく言いますね。」

私はあなたのしりぬぐいをしてあげるといつているのですよ。村上少将。あつ！違いましたね。竹野提督。」

やられた。あまりに対処すべき事案が多過ぎて小物の相手を後回しにしたことが災いした。

比較的戦線が安定している時なら司令長官を任命後すぐに失脚させても問題ないが、首脳部の混乱は今絶対避けるべき事態だ。

この会議に集まっている人間で中越に票を投じる可能性のある人間を計算する。

結果はわかり切ったことだがとても相手にならない。

近海警備群司令となつてからもしくはらくは苦労したらしい。

4年前第一艦隊司令であつたことがいまだに足を引っ張っているのだ。

「私は異論ありません。信用されていないのに要職を与えられても困るだけです。」

中越も状況が悪いことを理解している様子で、最低限裏切り者ではないと印象をつけるため仕方なくこの提案を受けるしかなかった。

「では決議を取りましょう。」

結果は言うまでもない。全会一致でラッセルが任命された。

村上もここで余計な抵抗をする無駄さをよく理解していた。

会議は踊るされど進まず

そんな言葉がお似合いな無駄な時間だった。

具体的な話は何も進まずにラッセルが激励の言葉をかけるだけ。

敵が本格的に行動を開始する前にいろいろと手を打たないと本当にまずいことになる。

「ため息ばっかついてるともつと疲れるよ」

ホテルの一室で報告書に囲まれて頭を抱えていると飛龍がそう話しかけてきた。

「いろいろとあるんだよ。」

「肩でも揉もうか？」

「艦娘の握力でもまかれると人間の骨は容易く折れるんだぞ知ってたか

？」

飛龍はあきれた顔で

「加減ぐらいできる。私のこと何だと思ってるの？」

「一度腹部にきつい打ち込んできた女。」

「事実だからといって傷つく人もいるんだよ。」

あなたはその傷がつかないほうの人間では。

出そうになったそんな言葉を咀嚼して飲み込む。

「君も疲れてるだろ。自室に戻れ。」

「ここ数日トレーニングしかしてない。知ってるでしょ？その程度でつかれるほどみんなやわじゃない。」

本土に連れてきた艦娘の大半は九十九里浜に送りほんの一部の練度の高い艦娘を手元に残していた。

全員が高い技量を持った艦娘だ。ここで遊ばしておくにはもったいない。

「そうだな。でも私もこの程度でつかれるほどやわじゃない。いいから戻れ。」

そう飛龍を諭すが彼女は聞かない。

「心配なの。提督は自分が思っているよりもずっと弱い人だから。」
「……」

一度泣き顔を見られたのがまずかった。

「大穴に向かって愚痴を叫ぶよりは私に話してくれたほうが気が楽になると思う。それに私は単純で馬鹿だし、提督を騙して利用したりできない。」

少し前の自分なら飛龍に少し心の内を明かしていたかもしれない。だが今となってはそれは無理な話だ。

「本当に大丈夫だ。」

普通の声色でしゃべろうと懸命に挑んで出た言葉は弱々しかった。
「全然大丈夫じゃないじゃん。」

「出ていってくれ。」

「いやだといったらっ？」

飛龍は引き下がらない。

「命令するまでだ。自室にて待機せよと。」

飛龍は不機嫌な顔をする。

「それは命令とは言えない。感情を根拠にした従う価値もない命令。」
飛龍を少し賢くしすぎたようだ。

「感情的になつていないと?」

「怒りに任せて命令を下すのも、絶望して無気力に命令を下すのも一緒。提督の言う指揮官としての心構えにかけてる。」

うまい返しだ。

こう言われては指揮官として誠意を見せなければならなくなる。

「本当にたくましくなったな。」

暴力ではなく口で抵抗の意思を示すようになったが、本質は変わっていない。

彼女ならきつと…:

「なら」

「いずれ私が何をしたらかわかると思う。でも今はまだその時じゃない。でも安心してくれ。私は人類も艦娘も裏切るつもりはない。」

飛龍は悲しそうな顔をするが仕方ないことだ。たとえ教えられないような事実があつても誠意を見せることは不可能じゃない。

「今はそれで満足しとく。信じてるからね。もう裏切らないでね。」
「わかつてる。」

飛龍の顔には不安が色濃く出ていたがそれをぬぐうことはできない。

継続的な痛みも心を成長させる。飛龍にはもつと強くなつてもらわなくては困る。

部屋を出ていく飛龍を見送つてまた資料に目を戻す。

そして携帯電話を取り、ある人物に電話をかける。

「初めまして。」

『この番号にかけてくるとは何者だ?』

声の主は怪訝な声で明確な不快感を示す。

「私は元国連軍少将の村上と申します。今は竹野という名前で防衛連合軍に所属しています。」

『なるほど。蒼龍の紹介だな？』

「そう言う事です。」

電話の相手は蒼龍が利用している高級官僚だった。

艦娘を娼婦として売買し、人脈と富を築いた根っからのクズだが本人は艦娘に手を出すどころか客観的に見て美形である艦娘の容姿に関心も示さないことからただの汚い男と侮ることはできない。

『私を利用するのは高いぞ。』

「何をこそ望みますか？」

『防衛連合軍の提督職に就いている人間に私が求めるものなど艦娘しかないだろう？ そうだな。ちょうどこの前ある客が比叡を完全に壊してしまつてね。金剛型四体で手を打とう。』

「私は蒼龍の紹介で来ました。彼女と同じやり方であなを利用させてもらいます。」

『つまり艦娘擁護派の急先鋒である君が私のやっている汚い商売を黙認すると？』

「いつの話です？ 私は自らの武勲のために艦娘10万を無意味に殺した男ですよ？」

『馬鹿にしないでくれ。ソロモン海で何が起きたのかぐらい知っている。』

「こいつはどこまで知っているのだろうか？」

『甘ったれた理想を捨てきれずにモンゴルに逃げ、帰ってくるなり大騒動。まったく若いとは恐ろしいね。』

村上は若さからはすでに数歩離れているのだが否定はしない。皮肉を言っている相手に大真面目な返答をしてもさらに馬鹿にされるだけだ。

「私がいま対峙している敵は自分の理念や理想を守りながら戦える相手ではなかった。ただそれだけです。」

『そうか。必要なら悪魔とでも取引すると。では要件を伺おう。』

男に要件を話してしばらく、電話の向こうは静かだった。

やれば彼の身に危険が及ぶことが容易に予測できる案件だった。

その為できる出来ないの判断以上に結論が難しい。

『できるならばやりたくない。脅されているから仕方なしにやるべき案件でもない。』

「ならどうする？やられる前にやるか？」

暴露された側が暴露した側の暴露を後出しでも全く相手にされない。

人脈で遥かに劣る村上ではこの男を封殺することはできない。

『いや。この案件受けさせてもらおう。』

「もう少し手間取るかと思ったのですが。」

『私が拒否したらどうするつもりだった？』

「その豪華なイタリア料理ごと吹っ飛んでもらうだけです。ガス爆発とでも適当に理由を付けなければいいでしょう。」

男は電話口で愉快そうに笑う。

『すべて監視している？』

「もつとも、あなたは監視に気づいたうえで協力的に演じておられるようですけど。」

『それはどうだろうな？』

「こちらが取れる手段は非常に少ない。だからあなたを始末する以外に打つ手がない場合もあることを覚えておいてください。」

こんな脅しで男の動きを抑制できるとは思わない。

おそらく隙を見せれば死ぬのはこちらだ。

『少し勘違いしていたようだ。』

「・・・？」

『君は正義を妄信して私を傲慢で最低な権力者だと決めつけるような人間ではなかったのだ。』

「最低な権力者だとは思っていますよ？」

『だが私がとって食えるような人間だと勘違いしてはいない。君は素直な偽善者よりも厄介な、卑怯な善人だということだ。』

「独特な響きですが不思議と違和感はありませんね。」

『私が約束を守る人間には見えないだろうがに私だって良心はある。たまには善行をして自己満足に浸らないと精神の均衡を保てない。今回の件はある程度信用してもらって構わない。』

そう言われても信用などできない。それでも何もないよりはましだろう。

「信じられませんね。期待はせずに連絡待ってますよ。」

村上は電話を置きため息をつく。

「私は飛龍のように優しい言葉で励ましはしませんよ。」

「あんな化け物相手にしてよく疲れないな。」

蒼龍にそう嘆く

「あの程度ではつかれていられませんよ。工作人員に休息できる時間があるといますか？」

「ないな。家族、愛人、自分の子供すらも敵と見なして生きることほどれほど苦痛なんだろうな。君にとつて私は敵なのか？」

「どうなんでしょうか。あなたがニサエルの元へ走ったりすればあなたと私は最悪の最後を迎えることになります。私は誰の指示を受けているわけではありません。」

蒼龍はあり得ないことといった口調で村上にそう言ったが、彼は少しも笑うことなく

「その時はここを撃つて私の息の根を確実に止めてください。」

と言って自分のこめかみを叩く。

「そうならないことを祈ってます。」

蒼龍には今はそうとしか返せなかった。

決別と出会い

第四回緊急作戦会議

二サエルの裏切りから二週間。戦線は崩壊していたがそれはまだ局地的だった。未だに敵の大規模攻勢はなく、決定的な敗北はなかった。

幸いと言うべきなのか不気味な準備期間なのか、真偽は分からないが、この二週間で間違いなくインフラが攻撃を受け、補給線の一部が寸断されていた。

にもかかわらず……

「竹野少佐。どう責任を取るおつもりですか？」

未だに責任の所在について話し合いが行われている。

ラッセル司令長官を始めとしてほとんどの高級士官たちが村上を責め立てた。

竹野という偽名をなぜいまだに認めてくれているのかわからないが。

「責任ですか。」

謝罪をして済むならば安い頭なんぞ何度でも下げてやる。だが責任を認めれば村上は軍を去らねばなくなるか、あるいは塙の中で生活することになるだろう。

もしそうなれば敵の望み通り、文明の崩壊は免れない。

村上と同様に有能な指揮官はほかにも居た。中越もそうだ。

だがここまで腐りきった防衛連合軍に付き合ってくれる有能な人間はもう他にいなかった。

残った有能な指揮官たちは着実な戦果を無言で上げ続けもう司令部に何の期待もしていなかった。

二サエルは確かに異常だった。だがそれでも裏切るまでは的確な指示を出していた。

ラッセルによって馴れ合いだけとなった司令部にまともな人間なら期待しないだろう。

「そうです。あなたが私たちのことを信用せずに独断で動いた責任で

す。」

「ならば私をこの会議から追い出せばいいではないですか。責任だとなんだと言って私をとつと更迭してしまえば私の耳障りな進言など無視できます。」

それができないことぐらい村上は知っている。村上を敵視する士官も多いが同様に村上の受けた仕打ちを把握している士官も当然のことながら残っている。

その士官たちは村上を救うことを諦め組織に絶望しながらもまだ防衛連合軍という組織なのか、あるいは軍隊という組織そのものなのかどうかは分からないが未練を残しているのだろう。

そんな者たちに村上が光を与えればラッセルの無言の支持者たちはたちまち反旗を翻すだろう。

その状況を知っているラッセルは村上を無視できないのだ。

唇を固く結び苛立ちをあらわにする。

久々に素直に感情を表出させる人間を見た気がする。

「実力以上に評価される素人はこれだから。いいですか？あなたは広告塔にすぎません。国連軍は人員獲得のために元々軍人ではなかった人間をあたかも戦場で輝く英雄のように宣伝した。その誇大広告はその広告塔自体までも騙すほど効果的なものだった。しかし、あなたには実力も何も無い。マーク少将や、中越大将の力がなければあなたの活躍などあり得なかった。そのうえ今となってはただの戦犯だ。戦意高揚のプロパガンダにも使えない。今や子供ですらあなたが戦犯だとわかつている。にもかかわらずあなたは面倒な陰謀論者を抱え込んでまるで宗教のように軍内で暴れまわっている。その村上教は競争をあきらめた終わったやつらを中心に支持を集めて面倒ごとの種となっている。終わった奴らも私たちの戦力です。彼らを利用するためには意思なき窓口係になつてもらいたい。今のまま駄々をこねるようであれば迷惑以外の何物でもありません。」

言わせておけば好き勝手に言ってくれる。

だが否定するだけ無駄だ。こいつは小物だがソロモン海での出来事を知らないはずがない。

詰めが甘かったのは確かだがただの広告塔で能力のない指揮官とまで言われるいわれはない。

「私は南鳥島に帰れと言われるまで一士官として必要な意見を述べただけです。」

村上是立ち上がり会議室を後にする。これ以上ここにおいても進展はない。

村上がいない方がまだまともに議論が進むだろう。

ただ、まともに議論が進んだところで何か変わるとは思わないが。

廊下で退屈そうにしていると中越がゆつくりと近づいてきた。

「会議はいいんですか？」

「一番最初に抜けておいて何をいう。」

中越は笑う。

「それで。あなたはどうか考えますか？」

「この状況を打開する作戦などない。わかっているだろう。今しなければいけないことは」

中越の言葉を村上是さえぎる。

「いえ。それ以上は結構です。」

中越が何を言おうとしているのか聞かなくてもわかった。

熟練の指揮官ならいま出すべき結論は一つしかない。

けれど、それは中越が背負うべき責任ではない。彼は手を汚すべきではない。

「またそうやってすべての責任を背負う気か？」

「あなたが証言しなければソロモンで不名誉を背負うことになったのは私だけでした。今回は黙っていてください。」

「私はそれでも君を守る。必要な人材だからだ。君がそれを拒絶しようとも私の考えは変わらない。」

村上是冷たい声で中越を突き放す。

「私はもうあなたに守ってもらうほど弱くありません。飛龍を頼みます。」

少し驚いた顔をしている中越に近づいて、彼の手の中に紙を押し込む。

「これは？」

「人事の知り合いに掛け合って飛龍に異動の辞令を出させました。」

「どういうことだ？私は会議室でほんの少しだけ見た程度だが飛龍は君のことを慕っている。あの手がつけられないじゃや馬の手綱をまた中途半端なところで手を離す気か？」

「飛龍はラッセルの挑発に乗りませんでした。元々賢い子です。精神的にも成長している。もう扱いきれないじゃや馬ではありません。理不尽な命令をする指揮官ならまだしも、あなたなら飛龍を十分に上に扱える。私は感情に流されてこんな辞令を出させたわけじゃありません。ただ、私と一緒に地獄を突き進むのは彼女の使命ではなかっただけの話です。」

中越は少し考えるそぶりを見せて

「わかった。」

と答える。

「私は彼女を殴りつけることになるでしょう。けれど、もう彼女に間違った道を歩かせないでください。」

中越はそれを聞いてから渡された紙を開く。

「どういうことだ？」

そこに書かれていたのは中越にとって予想外の内容だった。

「いずれわかります。」

「わからなければどうするんだ？」

村上は愚問だといった様子で不気味に笑い

「なるようにしかありません。」

とだけ言った。そして

「もう一つ頼みが。ラッセルはじきに自分が不十分だと気が付く。その時私は人の道を外れる。その時は積極的に私を批判してください。けれど、決して私の事を止めようとしないでください。注文が多くて申し訳ないですが、その紙は完璧に処分してください。」

中越は苦笑いをする。

「私たちの友情の終着点だな。マークと一緒に地獄で待ってる。なるように生きていつか地獄で会おうじゃないか。」

村上は背を向けて

「さようなら中越中将。」

と中越の方に顔を向けることもなく立ち去る。中越も自分は大將だなどという野暮な指摘はせずに村上を見送る。

ポケットからたばことライターを取り出し最後にもう一度紙に書かれた言葉を見て喫煙室に入った。

その紙が燃えるのを見ながらたばこの火をふかす。

村上が何を考えているのか少しだけ考えてすぐにやめる。

ぼんやりと揺れる火をただ眺めて彼はいつもの仕事に戻っていた。

第五回緊急作戦会議

「何かないのか？そろそろ結論を出さないと敵の攻撃が再開されるぞ。」

ラッセルの目には焦燥が浮かんでいた。

二サエルの裏切りから三週間、大スンダ諸島の攻勢から二か月以上が過ぎて敵の再編がすでに完了しているのが明白だったからだ。

にもかかわらず今まで慌てていなかったのは彼の尊大な自尊心が思考を邪魔したからだろう。

だがそれも終わった。希望的観測の余地などなかった。

「まずはこの敵部隊を叩く。誰か、艦隊を動かしてくれ！」

「ラッセル司令長官。敵部隊の兵力は2000万。その上、部隊の構成すらわからない。打つ手なんかあるはずがない。」

「なら、あなたの作戦は何です！竹野提督！」

ラッセルは声を荒げる。そんなことをしてもどうにもならないのに。

「損害を受け入れることしか私たちにはできません。」

士官たちは全員黙り込む。だがラッセルだけは立ち上がる。

「そんなことできない！」

村上は静かに目を閉じてラッセルのむずがゆい理想論を聞く。

崩壊目前の国家の指導者のようにうわ言のように攻守一転の一手

が存在していると信じて疑わない妄想だとも言えた。

「ならその一手が存在すると信じていつまでも言っていることですね。」

ラッセルの道化の仮面に一瞬の不安が生じたことを村上は見逃さなかった。

そのまま会議は何も進まぬまま終わり村上はまたも一番最初に会議室を後にする。

だがいつものように情報部や仮のデスクに向かうことはなく移設された司令長官室に向かった。

物陰から扉を見ながらラッセルを待つ。

彼は会議が終わってから一時間ほどして部下数人を連れて戻って来た。

「司令長官。少しよろしいですか？」

ラッセルは動揺していたが妄信的な部下たちはそのことに気がつくことはない様子だった。

「わかった。はずしてくれ。」

ラッセルは長官室に入るとブラインドを下ろし扉にカギまでかけてようやく席につく。

それでもふてぶてしい態度を変えないことがないことだけは評価に値する。

「私がどうしてここに来たのか分かりますか？」

「私の助言が君にとって不愉快でそれを認められないあなたは抗議のためにここまで来た。違いますか？」

本当にくだらない。そんなわけがないことぐらい自分でもわかっているだろう。

「いちいち否定する気にもなりませんね。私が言いたいことは余計なことをしてくれるなどということだけです。あなたは強引に司令長官の席を奪った。だがあなたが対処できないことが山ほど起こり打つ手がなくなった。これからも同じことが起きるでしょう。名声も何もかもくれてやります。だから私の傀儡になって下さい。」

「口の聞き方に気を付けろ！」

もちろん村上がそんな制止を聞きはしない。

「あなたは傀儡の司令長官となればいい。汚れ仕事は私がする。」

村上はラツセルの目をまっすぐと見る。

彼の目は村上を直視することができずに視線をそらす。

「責任すらとらなくていい。ただ司令長官の席に座り私から言われた通り書類にサインして、でかい態度でふんぞり返っていいればいい。自分の力不足ぐらいあなたが一番わかっているはずだ。」

「私が責められることは本当にならないのか？」

ラツセルの態度は一変して擦り寄ってくる。

「今防衛連合軍内に内紛の兆しがあると気付かれるわけにはいかない。こうなってしまった以上、各国政府との交渉での顔になってもらうしかない。出来ればあなたの首を今すぐに飛ばしたいですがそう言うわけにもいきません。だから責任などとらせません。」

「わかりました。ではまず何をすればいいでしょうか？」

「村上傑を再度軍務に復帰させてください。」

ラツセルは首を傾げる

「それはあなたでは？」

村上はその疑問に答えることはない。

村上という名前で大々的に動けば批判にさらされるだろうし、動きにくくなることは間違いない。わざわざ偽名を使ってまでも軍務に復帰したにもかかわらず、そのすべてを無駄にする行為と言っている。

だがそれでいい。そうすることが彼の使命だったからだ。

「私は竹野です。私のしている仕事は村上が引き継ぎますので私があなたに会うのはこれが最後です。」

ラツセルはそれ以上追求することはなかった。

必要ない質問は自分の身を滅ぼす。そのことをよく知っていた。

「そういうことにおきます。」

二つ目の仮面

第六回緊急作戦会議

会議の空気が変わったことにすべての士官は気付かざるを得なかった。

今まで存在感を消していた竹野から殺気があふれ、肩の階級章は彼が竹野などというふざけた身分を処分したことを示していた。

「竹野提督は責任に耐え兼ねて軍を辞めた。代わりに……紹介する必要はないと思いますが、村上傑少将がこの会議には参加します。」
ラッセルがそう発言して席につくと会議が始まる。

言いたいことは山ほどあるだろう。ヨーロッパではある程度騙せたがここは違う。

四年前、ソロモン海で敗北するまでこの会議室にいる幾人かは彼の部下だったのだから。

「いろいろと言いたいことはあるだろうが私からいうことは何もありません。挨拶もそこそこに今は対策を考えることが優先です。」

村上の茶番を見て士官たちはこの会議を支配する人間が誰から誰に移ったのかも聞かなくてもなくわかった。

「それで、村上少将あなたの考えは？」

士官の一人が聞くと村上は山本に目で合図を送り資料を配らせる。
「どういうつもりだ？」

案の定最初に口を開いたのは中越だった。

「どういうつもりも何もそうしなければ軍が壊滅する。必要な犠牲だ。」

「十億人もの人々を見捨てるのが作戦だというのか？」

「少なくとも死守命令を発動して軍を壊滅させるよりはましな戦略です。」

村上の提案は恐ろしいものだった。

オセアニア、インドネシア、アフリカ、スカンディナヴィア半島、ブリテン島、南アメリカ大陸沿岸部からの完全撤退。

それも軍を引き抜くだけで、住民の避難プランがない計画だった。

「戦略的に必要のない土地の放棄は仕方ないことです。」

村上の声からは何も感じ取れなかった。

まるでそこで死んでいく命につゆほどの関心もない様子だった。

「君の興味は土地と資源だけか。よく分かった。議論の余地もない。」

中越は椅子に深く腰をかけ目を瞑って無言のまま存在感を放つ。

「あなたはもう少し賢明な人間だと思っていました。代案もないのに一丁前な道義心と理想論だけは持ち合わせている。俗に言う老害というやつですか？」

中越は安い挑発に乗りはしなかった。沈黙を貫き、断固として意見を变えない姿勢を見せる。

「村上少将。ではこれでどうでしょう。避難する時間を稼いで、順次撤退していくのです。」

士官の一人が中途半端な代案を出してくる。

「愚策です。十億の人間をどこに、どうやって、避難させるんです？」
二サエルが裏切ってから仮に半年敵が動かなくても十億の人間を避難させることなどできはしない。

もし仮にできるのであれば村上はもっと早くこの会議でそれを提案していた。

村上の中で十億の犠牲を出すことは決定事項でありその提案をするのはどのタイミングでも良かった。

「それは……」

村上はあきれたような顔をして士官にさらに詰め寄る。

「仮に避難ができたとしましょう。無防備な市民を乗せた船を守りながら危険海域を抜けるために私たちが払う損失がどれだけあると思います。兵力が減れば守れる土地も減る。私がさっき上げた地域以外からの撤退もしなければならぬ。そしてその作戦でまた兵力を失い、やがては軍は壊滅する。死守命令をして時間を稼ぐのは交渉のため。相手が交渉に応じない勢力であるならばそんな命令ただの自己満足だよ。」

実際は交渉は不可能とまでは言えない。

しかし、交渉できたとしても二サエルが仲間に入り圧倒的に優勢で

あると容易に予測できるこの状態で一体何を交渉材料にするのか？

こちらで人を殺処分するから士官だけは許してくれとでも言えば交渉してくれるかもしれない。

そんなことをしても敵にはこちらを生かしておく必要性などないから契約は履行されないだろう。

「二つ話をしましょう。勇敢なカウボーイの話です。カウボーイは人の亜種とみられる原住民を殺しつくしました。そうして強大な国家を作り上げた。カウボーイはその国の国民たちから英雄と呼ばれた。死んでいった原住民の亜種はカウボーイの物語の舞台装置ではない。人間とは自分以外の犠牲なら美談や、ひどい時なら差別と軽蔑の対象にする。死んで当然の民族だとね。家族を殺されたと大騒ぎする人間もまとめて殺してしまえば声など上がらない。確かに一時的には信用を失うでしょうが、どうせ半年も経たずにみんな忘れる。涙を流しながらニサエルを批判して各国の連携を呼びかければ面白い。」

「狂ってる。そんなの狂気だ！本国に報告させてもらう。」

「批判なんてこの会議に必要な。この会議内容を外部に漏らすようなら破滅してもらうだけだ。」

声を挙げた士官に村上は自分の携帯電話を見せる。

そこにはその士官が艦娘を強姦している動画が表示されていた。

「こんなものどこで……」

士官は動揺する。

村上はあの官僚の行動を抑制するため、定期的に彼に仕事を与えていた。

ほんの数分で彼はこの動画を入手して見せた。仲間内で動画を回したりしていたようだ。

艦娘自体を回したりもしていたようだがいちいち構ってはいきりがない。

規律を厳格化すれば裏でこういうコミュニティーが出来上がるのは普通のことだ。

「もう騙されるのはごりごりなのでね。信頼なんかより鎖で拘束した

ほうが手っ取り早いと思ひましてね。」

「村上少将少なくとも昔のあなたはそんな人間ではなかったはずですよ。」

別の士官が今度は困惑交じりに聞いてくる。

彼は昔の部下だ。熱い男でありながら、柔軟で優秀だった。

「君は弱みに心当たりがないからそんなことを聞くのだろうか無駄だよ。本人に弱みがなくとも結局厄介な人間関係は付きまとう。少し話は変わりますが妹さんは元気ですか？最近では敵のインフラ破壊も激化しています。内陸部のデンバーといえども送電網の破壊を心配しなければいけない。不安だろう。心中お察しするよ。」

困惑は怒りに変わり、やがて絶望となる。ここで何かを言えば入院している妹が殺される。

村上の言葉の裏に何があるのか誰にでもわかった。自分の知っていた上官は変わり果て、絶望的に高い壁となって自らの前に立っている。

彼の能力は知っている。四年前と関係性は何も変わらない。なら従えばいいじゃないか。それしかないじゃないか。部下と上司、昔と何も変わらない。同じはずなのにどうしてこんなに悲しいのか。どうしてこんなにつらいのか。

「そうですね。余計な感情論でした……。」

誰も村上に口出しはできず会議は形骸化して機能不全に陥った。

しかし、村上一人の力ですべてを処理することなど到底不可能だった。

何とか威厳を保っているがニサエルのような化け物には決してなれない。速やかな士官の成熟を祈るかここにいる士官を更迭するしかない。

中越がうまくやってくれることに期待しておこう。

「現場には配置転換のための部隊移動だと言ってごまかしてください。下手な正義感に振り回されたくはない。」

村上は無慈悲にそう告げてまたしても最初に会議室を出ていく。

中越はほんの少しだけ心配そうな顔で村上を見送りようやく沈黙

を解く。

「私が一番衝撃を受けているよ。人は変わるがそれが原因で能力が落ちることはない。私では彼に反論できなかった。きっと彼の言い分は正しいのだよ。多数を救うために少数を見捨てるしかないときもある。今回は種を救うために民族を見捨てる。スケールが少し、いやかなり大きくなったただけだ。そう割り切るしかない。村上の判断を否定できない以上私たちは最善を尽くすしかない。」

「ですが!」

中越は首を振って

「躊躇して悩んでいる暇はない。敵には村上よりも慈悲がない。みんな死ぬか他人の血が全身にこべりついたままそれでも生きるかだ。」

中越はうまく士官たちをなだめる。

しかし、それもそう長くは続かないだろう。きっと村上は無慈悲な決断をこれから何度もするだろう。

そのたびに脅迫して協力を取り付けていけば、やがて手痛いしっぺ返しを食らうだろう。

二サエルの改革では防衛連合軍の膿を全て出すことはできなかった。膿を出しきるには出血を伴う治療が必要だ。

本当にさよならだ村上。

そう頭の中でつぶやいて中越は村上の支配を打破するための策を巡らせ始めた。

「どういうこと? 本当に何があつたの?」

会議室を出た村上は飛龍に詰め寄られる。

「聞いてたのか?」

「答えて!」

飛龍の語気が強くなるのを見ても村上は無反応だった。

「飛龍大尉、君に辞令が出たのを忘れていた。」

そう言って村上は書類を渡す。

「どういうつもり?」

「異動なんてよくあることだ。君の能力が認められて本土の部隊へ異

動になった。それ以外にはいかなる理由も存在しない。」

「本音を言つて！」

「本音？粘着質な元部下に絡まれて面倒に思っている。」

村上のあまりにも酷い回答を聞いても飛龍は落ち着いて質問を返す。

「提督のやり方には口を出さない。けど私にぐらい本当のことを教えて。何を隠して、何のためにそこまで傷つこうとしてるの？」

飛龍は本当に成長した。

「邪魔だ、どけ。」

しかし、どれだけ冷静で核心をついた質問でも相手がまともに取り合わなければ意味などない。

「どくわけないじゃん。」

飛龍は通路に立ちふさがるがそれなりの広さがある通路を一人でふさぐことはできなかった。

飛龍を押しつけ通路を進むと彼女は何も言わずについてきた。

「答えるまで離れない。」

彼女は宣言通り一日中つきまといしまいにはホテルの部屋にまで上がり込んできた。

「そろそろ答えてくれてもいいんじゃない？」

「君は私が変わってしまったことを認めたくないだけだ。あそこまで二サエルに馬鹿にされれば性格の一つや二つ簡単に変わる。どうしてくだらない仁義や正義を守っていたのか今となっては不思議ではない。すべてが馬鹿らしい。」

飛龍は少しだけ返答に困った様子だったがそれでもまだこちらを信用している目をして聞いてくる。

「ならどうして軍をまたやめないの？どうしてここに残るの？」

「どうせ軍をやめたところでこの空虚な心は埋められない。」

村上はもう出ていってくれと祈った。だが飛龍はまだこちらを信用した目でそこに立っていた。

「嘘だってわかるに決まってるじゃん。本音をいうまで帰らない。」

その言葉は飛龍にとってある種の願望のようなものだったのだろ

う。

「ならこの空虚な心を埋めるため多少役立つてもらおうかな。」

村上のその言葉を聞いて飛龍の顔がパット明るくなる。

しかし数秒もせずとその顔は絶望に包まれた。

「出会った時から思っていたんだ。こんなわがままな艦娘を犯すことほど楽しいことはないとな。顔も体つきも、申し分ない。だが艦娘は皆従順すぎて犯しても何も楽しくない。君のような艦娘はその点最高だ。」

村上は軍服の上着を脱ぎ飛龍の顎をなぞり。いやな目つきで飛龍の体を執拗に見回す。

顎をなぞっていた手を首、肩、胸へとおろしていき彼女の胸を揉む。

「なかなかいいものを持つてるな。」

村上のそんな言葉に飛龍は答えられなかった。

恐怖で体が固まる中で弱い力で村上を押し返すが彼は動きを止めることはなかった。

「出会ったときはもつと暴れたのにここでしおらしくなられてもつまらないだけだよ。せつかくこんなのも用意したのに。」

村上は飛龍の前で小さな瓶を振る。

それが艦娘用の睡眠薬であることはすぐに分かった。

「まあいいさ。趣味じゃないが多少の慰めにはなる。」

村上は飛龍の胸をぎゅっと握りつぶすように揉んだかと思うと彼女をベッドに押し倒した。

覆いかぶさると無抵抗な飛龍の唇を奪い着物をはだけさせる。

飛龍は涙目になって目でやめるように懇願するがもちろん、村上にはやめるつもりなど一切なかった。

「提督…… やめて……。」

消え入るような声で懇願しても無駄だ。

「いいねえ。だけでもうちよつと強く抵抗するといいいんだけどなあ。それに、色気のない下着だな。」

袴の下から飛龍の下着を引っぱがしてそれを眺める。

「睡眠薬で眠らされてからするかこのままするかどっちがいい？」

村上は飛龍に最悪な質問を飛ばす。

そうして自分は立ち上がり上裸になる。

視線を飛龍のほうに向けると急速に近づいてくる何かが見えた。

その何かは村上の顔に衝撃とダメージを与えたが思ったよりも衝撃は小さかった。

「最っ低！」

飛龍はそう吐き捨てる。村上から下着を奪い返して部屋から大急ぎで逃げ出す。

村上はそんな飛龍を見送りながら口内の出血点を探っていた。

「ビンタにしては強力だったな。」

村上は苦笑いしてベットに腰掛ける。ベットにはまだ飛龍の体温が残っていた。

恐らくこれが人の温かさに物理的にも精神的にも触れるのは最後だろう。

いやな最後だ。

「百両役者ですね。」

蒼龍がまたしてもどこことなく現れてそう茶化す。

「ひどいな。渾身の演技だったのに。」

村上の返事は弱々しかった。

「思ってたよりもきついな。」

「それは飛龍だつてそうだと思えますよ。信用していた人間に突然襲われたら復帰できない心の傷を負うことだってある。心の強さなんて誰にもわからないんですよ。」

蒼龍の言うこともよくわかっている。

だからこそ必死に感情を押し殺すしかなかった。村上には悲しむ資格などないのだから。

「これでもう後には退けなくなつた。後は別々の道を行くだけだ。きっと飛龍なら私の期待に応えてくれる。」

村上の目にほんの一瞬狂気が映り、消えていく。

どうして死人を見ているかのような気分になるのか、蒼龍にはわからなかった。

計画通りのエラー

村上は強引な方法で作戦を推し進め各地から部隊を撤退させていた。

いったいどんな方法を使ったのか知らないが国連軍にも協力を取り付けていた。

部隊の大移動は各地で確認されていたが報道規制によってその事実は隠された。

情報部、CIA、MI6などが状況に介入してすべての問題は闇に葬られた。

ジャーナリストを数百単位で始末する暴挙も報道されなければ起きていないも同じだ。

だが勘のいい士官は気がついたことだろう。しかし勘のいい士官のほとんどは同時に賢くもあつた。

必要もないのに身投げなどしない。

だが村上は知っていた。賢い士官の中にも自分が飛び込む釜の中の温度を予想できないものがあることを。

昔は彼もそうだった。死地だろうが、無謀な勇気を引っさげて差し出す必要もない命を差し出すのだ。

少将になって新たに与えられた執務室の窓から村上は港のほうを見る。

「エラーをうまく利用する。そうして生み出されるのが英雄……なのだろうな。」

そうボソツと呟いた。

オーストラリア パース

オーストラリア防衛の最重要拠点であるパース海軍基地は朝から慌ただしかった。

原因はほかでもない。

司令部からの移動命令だった。よくできた作戦計画を添えて説得力を増した命令だった。実際に作戦を実行してもそれなりの成果は

得られるかもしれない。

しかしアムンゼン基地司令は司令部がこの作戦を実行するつもりがないことを知っていた。

つい先日、英国政府がオーストラリアに避難していたイギリス政府関係者や一部の金持ちをカナダにも移送した。

司令部はオーストラリアに住む8000万の人々を見捨てたのだ。

不思議と怒りは沸いてこない。きっと自分が司令部にいてもこれしか手がないことがわかっていたからだろう。

「やな役回りだな。」

ため息交じりにそうぼやくとそばで控えていた不知火がそちらもまためんどくさそうに発言する。

「私にどうしろと?」

若干の怒気を含んだ声だがアムンゼンは特に気にすることなく不知火に絡んでいく。

「不知火ちゃん!こっちに落ち度がないのにやりたくない作戦やらされたらどう思う?」

「それでもやるのが軍人です。それが嫌なら出世してください。」

不知火は雑にあしらったが長い付き合いでこの男が司令として優秀なことは知っている。

オーストラリア東岸からの撤退戦でこの男はタスマニア島をうまく用いて予想されていた損害の半分程度で撤退を成功させた。

国連軍が影響力を増す中でもうまく立ち回りそれなりの連携を維持していた。

総兵力45万近いこの基地を三十代の若さで任されるだけのことはある。

不知火がアムンゼンに初めて会ったのは3年前。初日からなれなれしく、だらしがなかった。

「司令長官がラッセルになったらしいから出世は無理だね。」

「ラッセル長官に直訴してみれば?この作戦ではだめです。って。」

「この作戦はラッセルのじゃない。あんな奴にこんな作戦を立てる能力はない。」

不知火は作戦資料を見る。よくできた作戦でやりたくないと言いつつ理由がわからなかった。

「ならこの作戦のどこが問題なんですか？」

「本当にこの作戦を実行するならば何も文句はない。でもこの作戦はこつちを納得させるためのものでしかない。」

「では作戦の真意はなんですか？」

「オセアニアの放棄。ぐらいかな？」

一瞬不知火は固まったがすぐにいつもの様子に戻る。

「何を馬鹿な。」

「最近通商破壊が激化して鉄の輸出が激減したらしい。対応しちやいるが敵は衛星を使ってこつちの輸送船を正確に狙ってくる。いつ襲われるかわからない鈍足で巨大な輸送船を守りながら日本や大陸に向かうのはむづかしい。この基地もやがて物資輸送が滞ってジリ貧になっていく。そんな風に全体が毒で破壊される前に壊死しかかった腕でも足でも切り落とすつてことだ。」

「避難はどうするんです？」

「避難などできやしないから避難させないということなんだろう。命からがら逃げてきたハワイやニュージーランド、太平洋の島々の人々はここで死ぬことになる。」

資産家や研究者は避難させる気だろうが、受け入れ先の政府が必要としていない難民は深海棲艦に惨殺される未来しかない。

「深海棲艦に人間のような加虐趣味がないことだけが救いだな。」

「珍しく嘆くだけですな。」

アムンゼンは執務机に突っ伏して腕を伸ばす。

「やりようがないからな。抵抗すれば被害が増える。手勢数百だけ率いて最後の抵抗するぐらいなら許してもらえるかもしれないがな。」

文句を言っても更迭されるのがおちだろう。

そうなるくらいならばれない程度に小さな抵抗をさせてもらおう。

「このリストに載っている人間を避難させてくれ。」

「人の価値をあなたが決めるの？」

「そんな大それたことじゃない。生きる価値がある人間を決めるん

じゃなくてこんなところで死ぬべきじゃない人間を決めてるんだ。」

「同じことだと思えますよ。」

不知火の指摘が耳に痛い。

「皆いかれてるんだよ。俺も所詮はその一人。いかれてることはわかってるけどな、死ぬべきじゃない人間と言っているほうが気楽なんだよ。」

「合理的。ですけどらしくないですね。」

「どうしてほしいんだよ。」

アムンゼンは乾いた声で笑う。

「私は訓練がありますので少し空けます。」

そう言うのと、不知火は秘書艦のデスクから立ち上がり無表情にアムンゼンの机の上に報告書をおいて執務室を出ていく。

それなりの付き合いだから分かるが彼女は不機嫌だった。

理由はわかってている。彼女も自分と同じなのだ。賢いからこそ撤退しかないことを知っているが、一方で武人として満足できる戦いを望んでいるのだ。

「少し話してみるか。」

アムンゼンは作戦計画の中に見覚えのある名前を見たのだ。

村上傑少将とは面識こそなかったがよく知っている。

国連軍随一の戦術家で、輝かしい戦果を上げていた。その戦術は行き当たりばったりのものではなく緻密に計算された戦い方で彼の戦術から多くを学んだ。

彼なら何か面白い案を出してくれるかもしれない。

「もしもし。私は防衛連合軍パース海軍基地司令のミレット・アムンゼン大佐です。村上少将でしょうか?」

『はじめまして?ですか?』

「ええ。もつとも私は昔からあなたのことを知っていました。」

『それで。ご用件は?』

「はい。私たちに出された指令についてですが、あの作戦は偽物ですよね。」

村上はそれを聞いても少しも慌てることなく答える。

『突拍子もないことを言いますね。』

「あなたも知っているでしょう？この基地は放棄される。違いますか？」

『仮にそうだとして、あなたが抵抗して何になるんです。』

アムンゼンは違和感に気がついた。

声には抑揚がなく、かつてのように善良で熱い男は電話越しにはいないのかもしれないという考えが頭を支配していく。

「武人として守るべき人々に何も伝えずにこの基地を去ることはできません。」

『武人？それはあなたがそう思い込みたいからそう名乗っているだけでしよう。あなたはそんなよくわからない概念である以前に防衛連合軍という組織に属する一パーツに過ぎない。命令を拒絶したければそれ相応の権力が必要です。あなたにはそれがない。』

「しかし昔のあなたも同じだったはずですよ。」

『昔の私は勇敢と無謀をはき違い、危険な綱渡りがたまたまうまくいったために能力があると勘違いしてしまった。そのひずみが限界を迎えたのがソロモン海での惨劇です。』

「昔のあなたならこんな作戦に同調したりしないでしょう！」

『最大多数の保護のためインドネシアだろうが、ノルウェーだろうが、見捨てなければならぬこともある。それが現実です。被害を小さくするのが私たちの仕事だ。君はそんな私を変わってしまったと嘆くのかもしれないが本質は何も変わらない。』

「いまなんと？まさかオセアニアだけではいいのですか？」

『私にはそれを答える必要がない。』

「上層部の独断で生き残る人間を決定するつもりですか？」

『それを言うなら君がここに電話をかけたことも全く同じ行為ですよ？どうせなるべく多くの人々を助けられないかとも聞くつもりだったんでしょう？一体どうやって助ける人間を決めるんです？あなたによくしてくれた人間だけを助けるのですか？倫理の話をおひとまず無視して答えても、そんな都合のいい作戦はない。』

「……あなたなんででしょうか。」

『作戦を考えたのが誰なのか聞いていたのであれば、その通りです。』
「違います！実質的な撤退指示を出した人間は誰なんです！」

『権力と当人の能力とを吟味すれば数人に絞ることができると思いますが。要件が済んだのならもう切りますよ。くれぐれも変な気を起こさないことだ。いつでも君の首ぐらい飛ばせる。物理的な意味も含めてだ。』

通話が切れたことを電話が主張するがしばらく受話器を戻すことができなかった。

「いったい何があったというのか。」

「提督……どうしたのですか？」

タイミング悪く執務室には入ってきた榛名が駆け寄ってくる。

ハイライトの消えた目でずっと壁を見ている提督が異常に思えたのだろう。

「ありがとう。少し落ち着いた。」

榛名が淹れたコーヒートをブラックで流し込みようやくやくまともな思考回路が戻ってきた。

自分がどうするべきなのかを考える。

何をどうあがいても映画のように全員が助かり、大手を振ってシドニーを凱旋することは不可能だ。であるならば上層部の決定に従って撤退するべきか？

恐らくそれも正解ではない。どう対応しても正解とはならない。

ならば少しぐらい自由にやらせてもらおう。

「突然のお電話申し訳ございません。防衛連合軍パース海軍基地司令ミレット・アムンゼン大佐です。初めまして中越大将。」

ブリテン島 ブリストル難民指定区

「ビクトリアお姉さん。はい、これお礼。あんまりおいしくはなかったけどね。」

ヴィクトリアスは腰を曲げて目の前の小さな女の子に視線を合わせる。

少女、いやまだ幼女と言うべきだろう。

そんな子供にフィッシュアンドチップスは早すぎたのかもしれない。

「私の名前はヴィクトリアスよ。はい。これは紅茶。苦いかもしれないけどあつたまるわ。それと任務で少しここを離れなきゃいけなくなったの。その間はお母さんを支えてあげるのよ。」

そう言つて少女の髪をワツシヤワツシヤとなでる。

少女の母は右足と左目を失つた状態でこの難民キャンプに来た。

船団護衛中に遭遇した未登録の輸送船にこの少女は乗っていたのだ。

顔と肌、訛りから見てアイルランド人だろう。

祖国は深海棲艦の占領下にあり、父親も恐らく動員され戦死したのだろう。

「うんわかった！」

少女ははにかんで笑う。

ヴィクトリアスは少女が見えなくなってから小走りで基地に向かう。

彼女が所属している部隊は本来ならばもう出撃していなければならなかった。しかし、提督は少し頼りないが優しい人で作戦前に一声かけておきたいというヴィクトリアスの要望に応え出発を半日遅らせてくれた。

「遅いな。ヴィクトリアス。」

「ごめんねArk。」

若干ご機嫌斜めなアークロイヤルをなだめつつ艦装を装着している。

その時だった。砲撃音が聞こえてきたのだ。

沿岸部が砲撃されているのはもう日常茶飯事だったがそれなりに海から離れたこの鎮守府にまで砲撃音が聞こえるのは珍しい。

『国連軍第189装甲師団から協力要請が来た。遠征用の予備弾薬はおいてすみやかに出撃してくれ。』

ドックの天井に設置された古びたスピーカーから提督の指示が飛

ぶ。

「了解。Victorious 出撃！」

「Ark Royal 続いて出撃する。」

ヴィクトリアスはドックを出たその瞬間に茫然と水面に立ち尽くした。

今まで戦場で取り乱したことはなかった。

「何だこれは……」

アークロイヤルは案外冷静で直掩の戦闘機を速やかに上げる。その戦闘機からもたらされる情報は信じがたいものだったが。

「軽く百万はいそうだな。」

飛来する攻撃機もゆうに1万機を超えているだろう。

「Victorious 直掩を上げる。お前なら自分に攻撃を仕掛けてくる攻撃機だけを落とすぐらいできるだろう？」

「さすがにこの数だと防ぎきれかわからないけど。」

アークもヴィクトリアスも軍人としての意地を見せ自分を鼓舞して前進を始める。

「おい提督指示をくれ。」

『……ガ……ジジツ……』

しかし無線に返事はなかった。

「まさか！」

ヴィクトリアスが気が付いた時には遅すぎた。

敵は頭を真っ先に切り落とした。

高高度から誘導爆弾を落として鎮守府施設を直接攻撃したのだ。

「嘆いてる暇はない。私が指揮を継ぐ。全艦速やかに出撃、深海棲艦は陸上も進めるが陸上は国連軍のテリトリーだ。ある程度は時間を稼いでくれる。私たちはエイボン川を北上して敵本隊を損害覚悟で押しとどめる。」

『国連軍第198装甲師団師団長のパーシルだ。この際伝統なんてどうだっていいクリフトン吊り橋を土台の崖ごと吹き飛ばせ。もともと狭い川だ。それで川からの侵攻経路はつぶせる。運河にでも入られたらたまったもんじゃない。』

「了解です。聞いた通りだがこっちで指示を付け加える。運河の入り口を守る部隊も必要だ。隊を二つに分ける。いつも通りで。私はクリフトン吊り橋の破壊に向かう。ヴィクトリアス、運河の守りを頼めるか？」

「わかった。でもそれでいいの？」

「どちらにせよ死ぬのは変わらない。」

アークロイヤルはどうやら開き直ったようだ。

『パージルだ。あらかじめ伝えておかねばならないことがある。私達は配置転換と装備の点検のため通常時の3分の1程度の兵力しかない。時間はそんなに稼げない。そちらの援軍はいつ来る？こんな大規模な侵攻なんだまさか見殺しってことはないだろう？』

「残念ですがこちらの指揮官はすでに死亡しています。援軍の要請は難しいかと。」

『そうか。こっちは手がいっぱい飛行隊の一つも回してくれないぞうだ。』

ヴィクトリアスは黙り込んだ。ここまでやられて気がつかないのなら馬鹿だ。

自分たちが見捨てられたことぐらいわかった。移動命令が出たのはこのためだ。

『Victorious集中しろ。余計なことは考えるな。私とSwordfishで何とかしてやる。』

アークロイヤルの声が聞こえる。

悩んでもどうにもならない。

「ごめんArk。ネルソン指揮頼める？私もあつちに加勢する。」

「まかしておけ。私はビツクセブンだぞ。」

その姿と艦装には自信が溢れ本当に頼もしいのだが、どうしてこんなに不安なのだろうか。

「うん。まあお願い。Ark死ぬ未来が決まってるならどっちにいても同じでしょ。」

『まあいい。来るのなら急げ、待ってやらないぞ。』

ヴィクトリアスは機関をぶん回して大急ぎでアークロイヤルに追

いつく。

彼女に近づけば近づくほど攻撃は激化していく。

機関性能が低下して落伍した艦娘の顔には恐怖が浮かんでいた。しかし立ち止まることはできない。

「Ark! やつと追いついた。」

その声をかけると一瞬こちらを見て

「よく来たな。実に燃える戦場だ。」

口ではそう言ったがその顔は険しかった。

すでに敵部隊の先行隊とこちらの戦艦部隊は混戦に入っていた。川幅は十五メートルあるかないかぐらいでお世辞にも戦いやすい戦場ではなかった。けれどそれは相手とて同じこと。

「Fire! 薙ぎ払ってやる!」

ウォースパイトが強引に敵を薙ぎ払いながら前進していく。

近づく小型艦は吹き飛ばし、隙を見せた敵戦艦の口に直接砲撃を叩き込む。返り血で真っ赤に染まった艀装には次第に傷が増えていく。当然ウォースパイトの体もどんどん傷ついていく。

「まだ、まだ沈まない!」

そこには気弱な淑女はいなかった。

「ここから出て行きなさい!」

ウォースパイトは次々に深海棲艦の死体を積み上げていく。

もちろんほかの戦艦も奮闘していた。

だが敵の物量はあまりにも圧倒的過ぎた。

技量や戦術ではどうしようもない差があった。

艦娘一体が敵を100体倒せたとしても足りないだろう。

「補給はまだ?」

ウォースパイトが叫ぶと混戦の中で占守が弾薬箱を彼女のもとに届ける。

強引に弾薬を装填する。装填が完了するまでの間は王笏で敵を殴りつける。

それでも足りなければ副砲で弾幕を張って敵を押し戻す。

主砲の装填完了までの時間は稼げたが、短期間での連続射撃で主砲

は大きなダメージを受けていた。旋回装置が故障して仰角と俯角しか動かせなかった。

艀装のほとんどがともに動かないにもかかわらず体をひねり射角を合わせて、射撃を繰り返す。

だが、そこまでだった。

気がつくと同前線を張っていた戦艦たちでいまだに立っていたのは彼女だけだった。

すでに息絶えているもの、声も出せずにうつろな目で死と生の狭間を徘徊しているもの、意識はあつても戦意を喪失したもの。

前進するために無理をした結果だった。

「ドケツテ……イツテルノ。」

そんなボロボロの彼女の前に戦艦水鬼が立ちはだかった。

戦艦水鬼だけではない。その後ろには強力な深海棲艦が大量に並んでいた。

それでもひるむことなく、ウォースパイトはすぐさま副砲で応戦するが当然効くはずがない。

「やるじゃない……」

「バカニシテルノカ？」

「バカにするも何も、お前は馬鹿だ。」

アークロイヤルは Swordfish を深海水鬼に向けて射出する。時代遅れの複葉機が何かできるわけもなくすぐに撃墜される。

しかし、深海水鬼が一瞬隙を見せたその時

「All-out salvo!!!」

ウォースパイトの砲門全てが火を噴いたのだ。

戦艦水鬼は一瞬慌てるが自分に被害がないことを確かめて嘲笑する。

「バカハオマエチダ。」

「やっぱり馬鹿だな。」

戦艦水鬼は倒れてきたクリフトン吊り橋に押しつぶされる。その程度では死にはしないがシェフィールドが下敷きになって動けなくなっている戦艦水鬼の口に魚雷をねじ込む。

「フガッ！ンゴッ！」

何かわめいているがそんなの無視だ。

設定した時間どおりに魚雷は起爆され頭を粉々に吹き飛ばした。後ろにいた深海棲艦もがれきの下で徐々に力を奪われていくだろう。数十トンはあるであろう瓦礫をすべて吹き飛ばして立ち上がることもできるほど深海棲艦は手のつけようのない化け物ではない。

「やっぱり馬鹿だな。」

アークロイヤルがそう笑ったがウォースパイトは苦しそうな声で「思ってたよりは、馬鹿じゃなかった…みたい…ね。」
と言った。

振り返ると腹部に大穴を開けたウォースパイトが王笏を杖にして必死に立ち上がろうとしていた。

戦艦水鬼は自分に被害がないことを確認して嘲笑しながらも確実にとどめをさしていたのだ。皮膚全体でのダメージ分散がほとんど機能しないほど痛めつけられていたウォースパイトが戦艦水鬼のゼロ距離射撃をまともに食らって耐えられるはずがなかった。

「大丈夫よ。高速修復材を使えば。」

ヴィクトリアスは言葉の途中で途中でハツとした。

鎮守府施設は破壊されたのだ。修復などできるはずがない。

「ありがとう。でも私は満足。これで時間は稼げるでしょ？もう行って。沈むとこなんて見られたくない。」

最期の最期まで不運な不沈艦として漂流した戦艦HMS War spiteのようにはなりたくないのだろうか。

いや、きつとそうではないだろう。彼女は同じように最期まで抗って見せたのだ。ただでは終わらないと鮮烈な最期を飾ったのだ。

離れていくアークロイヤルとヴィクトリアスを静かに見送りついに彼女は再び、水面に膝をついた。水深は30cmもないようで、腿を不快な泥の感触がなでる。

しかし、不思議と痛みは感じない。

水面に全身血まみれの姿が映るが、それが自分の血なのか振り返り血なのかさえわからない。

お世辞にもきれいな水とは言えなかったがそれで十分だ。ウォー
スパイトは自分の顔を洗い、返り血を落とす。

「これが、戦場で倒れるということなのね。」

深海棲艦は橋の残骸に行く手を阻まれ彼女の周りだけは静寂に包
まれて、周囲にはほかの艦娘も静かに横たわっていた。

自分が守れなかった者たちだ。それでも守れた者たちは確かにい
たのだ。

彼女は最後に少しだけ微笑んだ。

戦場には似つかわしくない静かで安らかな最期だった。

「Arkこれからどうするの?」

「一度運河まで退いて最後の防衛ラインを構築する。可能な限り戦っ
てテンプル・ミーズ駅までのルートを守守する。私たちが生きている
限り、敵に運河を使用させるな!」

アークロイヤルは無線を使って全体に指揮を飛ばす。彼女は本当
にたくましかった。

「わかった。」

ヴィクトリアスもまるで買い物を頼まれたかのような軽いノリで
彼女との心中を承諾した。

大英帝国最後の日 前編

ヴィクトリアスはアークロイヤルと共に川を南下して運河にたどり着いた。運河の入り口には国連軍の戦車とイギリス陸軍の戦車が並んでいた。

「イギリス陸軍第2機械化師団のナセルだ。そちらの指揮官は？」

「指揮官は死亡した。現在は私が指揮をとっている。」

アークロイヤルはそう答える。

「直接会うのは初めてだな。パージルだ。」

ナセルの隣に立っていた少し小柄な男が口を開き軽く挨拶をする。

「君たちが橋を落としてくれたおかげで敵は一時的に侵攻を停止した。だが恐らくすぐにまた動き出すだろう。我々には部隊を再編する時間もなければ防衛戦を構築すること時間もない。何としてでもテンプル・ミーズ駅とバス・ロードを守る。」

ナセルが状況整理と、作戦を伝える。

「バースは安全なのか？」

パージルの質問にナセル歯切れが悪そうに答える。

「正直に言えばわからない。でも今できるのは安全だと信じるしかない。」

戦いが始まった最初のころは通信が出来ていたが今はもう通信網破壊が済んだのか、信じたくないがすべての受信局がもう存在していない可能性もある。

「了解した。地上戦は飛行隊で支援する。すでに私たちの損耗率は25%を超えています。全滅だと数値上判断されても戦闘は続けるしかありませんが、これ以上の損害が出れば飛行隊の発着艦に問題が生じます。空母は護衛艦がいなければただの的です。」

「わかりました。我々も万全とは言えませんが、半日ぐらい稼いでやりますよ。」

パージルはそう言うがヴィクトリアスは艦載機からの報告でパージルの師団が壊滅的被害を受けていたことを知っていた。ただでさえ数が少なく火力が出ないのに数万単位の損害無視の波状攻撃を繰

り返し受け耐えられるはずなどなかった。

「前線は私達が張ります。まだこつちには最新の戦車が360両あります。」

ナセルは力強くそう言ったがたかだか360両で何ができるとい
うのか？

ヴィクトリアスもパージルも恐らく気が付いていたであろうがその指摘はしなかった。指摘してどうにかなる問題ではなかったからだ。

最後まで戦うことを誓って三人の責任者は握手をする。

そうして別れて準備に取り掛かる。

「Ark。どうする？」

「捌ける間は運河の上で戦闘して、捌けなくなれば運河の水門を破壊して貯水を放出する。」

接岸されている船は水位が下がれば着底して横転するだろう。そう
なれば運河で好き勝手に動きまわるのは難しくなるだろう。

「水位が下がった後停泊している船を片っ端から破壊して重油をばら
まけ。この運河を火の海にしてやる。私たちが目立てば目立つほど
敵は集まってくる。そこで一気に焼き払う。」

「なら敵のヘイトをわざわざ買ってやるんだな。任せておけ。目立つ
ことは得意だ。」

ネルソンが胸を叩く。確かに何もしていなくても目立つ彼女だが
そう言う事ではない。

戦果を挙げて敵の脅威となる必要があるのだ。

「第189装甲師団の防衛ラインが崩壊。敵は橋の残骸を陸上から迂
回してこちらに接近中です。」

シエフィールドの警告を受けてヴィクトリアスは速やかに残りの
直掩を全て射出する。

艦載機の補充だけはなんとかできたため艦戦は十分にあった。万
全とはいえないが、空母としては文句なしに戦えそうだ。

「こちらの戦闘機はまとめても300に満たないのに相手は戦闘機だ
けで10000は軽く超えているな。」

アークロイヤルは愉快そうに言う。

攻撃機も合わせれば敵航空部隊は30000は超えているだろう。そのすべてがこちらに向かって来る。

「対空戦闘用意！」

可能な限りの対空砲の角度を調整して射撃を開始する。過剰すぎる量の敵機は回避行動を満足に取れない様で、味方との事故や、対空砲弾で面白い程落ちていく。

その攻撃をしのいでも戦闘機部隊が運動エネルギーを失った無防備な敵機を一撃離脱で排除していく。

連携不足の敵に対してブリストル鎮守府の面々はもう何度も死線を潜り抜けた仲間だった。

互いをよく知り合っている部隊と、新兵を寄せ集めた部隊では戦闘力に圧倒的な差がある。

「敵機11時方向、仰角33°。対空砲弾、Fire! まずい! 敵機直上!」

ネルソンがお騒ぎするがヴィクトリアスは冷静に敵を排除する。

「撃墜した。Atlantia、秋月! 弾幕をもっとも張って!」

「こっちだって! ツッ! やってんの!」

敵の圧倒的な物量に早くも優勢が揺らいできた。

艦戦の損害は少なかったが補給できなかった対空砲や主砲の弾薬が不足し始めていた。

「ふっぐっ! まだ、まだ戦ってやる!」

摩耶に爆撃が直撃してさらに弾幕は薄くなっていく。摩耶の艦装は火と煙を出しながら彼女の体力を奪っていく。

「1時方向敵急降下爆撃!」

「ふっぎけるな! 見えねえんだよ!」

摩耶は煙で視界をふさがれているにも関わらず、統制された一斉射撃で敵の爆撃隊を薙ぎ払う。

しかし全滅には追い込むことはできずに爆撃機は攻撃の最終段階に入り急降下して加速していく。

「摩耶! 敵機直上!」

シエファイールドの警告は遅すぎた。

最初から目標は決まっていたのだ。弱った敵を倒し頭数を減らす。「ガアッ!!」深海棲艦のくせに…。小癪なことしやがって。」

「9時方向、雷撃隊多数。2，6時方向からも来てるぞ。雷撃コースを弾幕でふさげ！摩耶は回避だ！」

アークロイヤルの指示が飛んだがもう誰も対処などできなかつた。「避けられるかよ…。ちきしょー。」

先ほどの爆撃で機関も舵もやられた摩耶に回避のすべなどなかつた。

彼女の足元に大きな水柱が上がり、摩耶は大きく傾いた。

「どうせみんなすぐに来るだろ？ちよろい人生、いや艦生だったなあ。」

摩耶は力なく右腕をうなだれ、傾斜を大きくしていく。

そこに執拗な雷撃が行われ、ついに摩耶は浮力を完全に失って轟沈した。彼女めがけて降下していた急降下爆撃機が水面に接近するがもうそこに摩耶はいなかつた。

攻撃を中止した爆撃機を秋月は逃がさなかつた。摩耶が最期に残してくれたチャンスなのだから。

「なっ、なんてことを。」

「秋月まだ来るぞ、弾幕を張るんだ！」

動揺している秋月にアークロイヤルが声を張り上げる。

「はい！敵機雷撃機4時方向。仰角12。射撃開始！」

多大な犠牲を払いながらも艦隊は奮戦し、敵航空隊の攻撃をしのぎ切った。

けれど、航空戦の結果、制空権を喪失し、絶望的な状況で砲戦に移行していくこととなった。

ヴィクトリアスは矢筒のほうに手を伸ばしてハツとした。

残りの艦載機は一飛行隊中隊だけ。

彼女は最後の部隊を空に送り出す。

満足げにその飛行隊を眺めていると

「その弓なら十分殴り合えるだろ？」

そうアークロイヤルが言ってきた。戦艦のように戦えないだろう。けれどまだヴィクトリアスには十分な燃料と戦意があった。

「もちろん。」

「艦隊、後退を始めろ。」

アークロイヤルの指示をネルソンをはじめとした艦娘が後退を始めめる。

ネルソンは鬼神のごとく活躍で敵を薙ぎ払っていた。こちらの心配などすべて吹き飛ばして、単艦で戦艦水鬼四体を相手取りダメージを負いながらもまるで何もなかったかのように射撃を続ける。

彼女がいなければ今ごろ艦隊は脱兎のごとく配送していただろう。

「余は各艦がその責務を全うすることを期待する！ 怯むな、私に続け！」

戦場での彼女は圧倒的だった。

そんな彼女に率いられる戦艦部隊の士気は異常なほど高く、量的な不利を一切見せつけなかった。

「ネルソン。水門を破壊しろ。もうここらでいいだろう。」

「了解した。各艦聞いたな？ 水門を破壊しろ！」

ネルソンの怒号とともに運河の流れが急激に変わる。今まで静かだった水面が大きく揺らいで勢いよく流れていく。水位はさがり、接岸されている船がどんどん傾いていく。

「戦艦部隊だけで敵を止めておく。重巡と軽巡、それに駆逐は船を破壊して重油をそこら中にまき散らすんだ。」

ネルソンが余裕の笑みを浮かべて戦艦以外を下がらせる。戦艦だけで何とか埋めることができるほど狭い運河だったからよかったが、そう長くは持たないだろう。

『ナセルだ。無事か？』

「まあなんとか耐えている。」

『そうか。すまない。こちらはもう限界だ。だがただで死んでやるつもりはない。一矢報いてやる。』

「分かった。あなた方と戦えて光栄でした。」

『私もだよ。パーズル、君たちも戦えて光栄だった。』

しかしその返答はなかった。

『神よ国王を守りたまえ！』

その通信の直後に大きな爆発が起きた。恐らく残っていた爆薬や弾薬を爆破したのだろう。

敵の攻勢がほんの少しだけ弱まる。だが戦線がまた新たな深海棲艦で埋め尽くされるまでにそう時間はかからないだろう。

「敵がスパイクアイランド方向からも接近しています。」

シエフィールドがまた警告を飛ばす。

「来るぞ。」

アークロイヤルは一本だけ残してすべての艦載機を射出する。

敵は少数ですでに手負いだったが、戦艦も混じった部隊で、空母と随伴していた駆逐艦では火力不足だった。

ヴィクトリアスはそのすべて頑強な装甲で多少の砲撃を耐え、弓を鈍器のように振り回しながら副砲で的確に急所を狙う。

アークロイヤルは弓を捨て、両手で相手の口をこじ開けその中に艦載機用の爆弾や魚雷を放り込む。

「私がお前たちを躡けてやろう。」

アークロイヤルは戦艦を殴り飛ばし、おおよそ空母とは思えない動きで敵を圧倒した。だが知れは空母の適正な運用方法ではなかった。

「ガハッ！鉄の味だ。」

蓄積されたダメージが吐血として彼女に現れ、次第に動きが鈍くなっていく。

「Ark！そろそろ下がったほうが！」

「あつ、ああそうだな。」

彼女はその声につられてほんの一瞬だけ、ヴィクトリアスが心配で彼女のほうに目を向けた。

もう言うまでもないだろう。その一瞬の間にアークロイヤルの右腕は引きちぎられていた。

「まって！Ark！」

アークロイヤルはすでに存在しない右手に防御の指示を出し、左手で攻撃した。

差し違える形でアークロイヤルが崩れ落ちる。

ヴィクトリアスは残った敵を掃討してアークロイヤルのもとに駆け寄る。

「いい戦いぶりだった。」

「Ark。あなたは。」

アークロイヤルの傷は致命傷だった。

「これを……」

それでも彼女は左手で矢筒から最後の一本を抜きヴィクトリアスに手渡す。

「これは？」

「Fairry Swordfish。この機体が何と呼ばれていたか知っているか？ ストリングバッグだ。空戦中以外なら何でもできる汎用性からそう呼ばれたんだ。これで運河に火を放て。焼夷弾を積んである。」

「いつもいつも、Swordfishばかり。そうね。Arkが言うようにいい機体なのか確かめさせてもらうね。」

「そうしてくれ。火を放ったあとは、あの難民の子供を探して逃げるんだ。」

アークロイヤルは驚きの提案をしてきた。

「私だけ逃げるなんてできない。」

「みんな死んで、誰も助からなかった。では、あまりにも虚しすぎる。何のためにここまでしたのか。勲章なんかいらさないが、せめて私たちが守った何かが欲しい。いろいろ迷惑かけた。最期の迷惑はこれぐらい厄介じゃないと。」

ヴィクトリアスはアークロイヤルに微笑みかけて

「わかった。」

とだけ返事をする。その返事を聞いてアークロイヤルは目を閉じる。

ヴィクトリアスの腕の中の彼女から力が抜けていく。そっと水面に彼女を横たえるとゆつくりと沈んでいく。

濁った水が彼女を飲み込んだのを確認してからヴィクトリアスは

動き出した。

「もう十分追い込めたかしら。」

ネルソンは運河の中央部まで後退し、敵を大量に誘い込んだ。

しかし運河が広くなればなるほど、敵に圧力が強まった。退路を確保しながら後退していたつもりがいつの間にか四方を敵に囲まれていた。

「複縦陣で敵中央に突撃する！聞こえなかった？複縦陣だ！いくぞ！」

ネルソンは自分の足元が重油にまみれていることに気がついて最後の抵抗を試みる。敵の中央を強引に切り開いてこの場を抜け出そうとしたのだ。

「Shooter！」

ネルソンの砲撃で戦艦部隊の最後の悪あがきが始まる。

この戦いの中で最高の士気の中で狂ったように戦艦娘たちは砲撃を繰り返し、道を切り開いていく。

「ビッグセブンの力をとくと見よ。そして恐れおののけ。」

戦艦水鬼が束になってネルソンに襲いかかるがそれでも彼女は止まらなかつた。ほかの艦娘が次々に力尽きて落伍していく中でも彼女だけ突出して、進み続けた。

けれどシエフィールドはネルソンがどうなるか知っていた。

どこまで行っても敵は途切れることはない。

陸も川も深海棲艦で埋め尽くされていた。

「進むんだ！突破するんだ！」

もう誰も彼女の後ろにいないにもかかわらず怒号を飛ばし、射撃をとめることはない。

戦艦水鬼を1ダース倒してもまだ進み続けていた。

だが、終わるのは突然だった。

「ミライ？キボウ？ソナモノナイヨ。」

ネルソンは目の前に現れた敵につかみかかろうとしたが振り上げた腕は弱弱しく宙をつかんだ。

欧州水姫の腕がネルソンの腹部を貫通していた。

「ほう…これが…沈む」と言うこと…これが…戦いで死か…暗く…暗くなって…そう…か…。」

自分の体を貫いている敵の腕に興味深そうに眺め、ネルソンはそうつぶやく。

欧州水姫はネルソンの体から勢いよく腕を抜く。

支えを失ったネルソンはその場に崩れ落ちて重油まみれの水面に吸い込まれていく。

その重油をみて欧州水姫はぎよつとするがもう遅かった。

ソードフィッシュが上空を通過していく。

運河は火に包まれて、そこかしこで深海棲艦の悲鳴が聞こえる。

「Arkたちの無念は果たせたかな？」

ヴィクトリアスは副砲だけ残して艀装を外し、急いで難民キャンプに走る。

大英帝国最後の日 後編

「ニーヴ。ニーヴーどこにいるの?」

難民指定区は大騒ぎだった。急いで逃げだすもの、その場でとどまり略奪を行うもの、声も上げられずにその場でうづくまるもの。

三者三様な姿ではあったが誰も冷静な人間はいなかった。

そしてそのだれもがヴィクトリアスを睨め付けていた。

当然だ。どれだけ美化しても彼女がしたことは敵前逃亡の他ならないのだ。

ヴィクトリアスはそのことをよくわかっていた。

それでも、この時間は彼女一人で稼いだものではない。だから、何としてでもあの戦いが意味のあるものだったと言えるようにしなければならぬのだ。

「ヴィクトリアス、ニーヴは母親とB28のテントにいる。」

厳しい視線の中で一人の男がそう教えてくれた。

「ありがとう。」

ニーヴとヴィクトリアスの関係を難民たちはよく知っていた。

男は、死の恐怖や、理不尽な暴力に対する怒りをヴィクトリアスにぶつけるよりもニーヴを助けることの方が有意義だとそう思っけて口を開いたのだ。

ある意味では恐怖のその先まで感情が進み冷静になっていたのかもしれない。

男に感謝を述べて言われたテントの方に走る。

艦装を外して、体は軽はずなのにうまく体が動かない。

すぐに死ぬことはないだろうが、動作に支障が出る程度の損傷は蓄積されている。

「ニーヴー!」

テントの中でニーヴはベットの背に体重を預けて座っている母の手を握っていた。

「早く逃げるのよ。私も追いつくから。」

「嘘だ!ならお父さんはいつ戻ってくるの?」

二人はもめていた。当然と言えば当然だ。ニーヴは、両親をどちらも失うにはあまりに若すぎる。

母はヴィクトリアスを視界の端にとらえて話しかけてくる。

「ヴィクトリアスさん。娘をどうか逃がしてやっていただけませんか？」

ヴィクトリアスは無言で頷いた。

「あなたは？」

そしてそう聞く。

「私は後でいきます。病人は運河から出る船で脱出することになると聞いています。」

ニーヴの母は聡明だった。

ありもしない避難方法を顔色一つ変えずにすらすと答えた。

後でニーヴがこのことを知れば何というだろうか？

いや、そんなことを考えている暇はない。そもそもここを離れたとして、どこまで行けば安全なのかわからないのだ。バスまで行けば安全なのか、それともロンドンまで向かわなければならぬのか？

「わかりました。ニーヴは誰に引き渡せばいいですか？」

ニーヴの母は複雑な顔をして枕もとの小さな袋を取る。

「図々しいお願いだとはわかっています。それでも、娘をあなたが育ててくださりませんか？ 私たちにはろくな親戚がいないのです。もしあなたが無理だというならこの袋を開けてください。」

ヴィクトリアスはその小さな袋を受け取って、ニーヴを抱き上げ彼女の母に言う。

「わかりました。私はひとまずロンドンに向かってみます。ニーヴ、きつとまたお母さんに会えるからそれまで私といてくれる？」

ニーヴの母が彼女の頭をそつとなでる。嬉しそうな顔で無邪気に笑っていたのはニーヴだけだった。

その言葉に『天国で』という意味が内包されているのに気が付かなかったのはテントに残っていたほかの病人を含めても、ニーヴだけだった。

イギリス ロンドン

「国王陛下。本当によろしいのですね。」

「何度も言わせるな。私はここでこの国の最期を見届ける。君たち近衛も早く逃げろ。ヘリは十分にあるはずだ。」

「残念ですが我々のヘリは各大学の優秀な生徒たちを保護するために飛び立ったところです。」

「バカなことを。」

「あなたがわがままでここに残ると決めたのなら、私たちはあなたが拒絶しようところに残ります。それが近衛兵の仕事です。それに、この国では王は絶対ではありませんから。」

「それもそうだったな。もういい。聞いたこちらが間違いだった。」

ジョージ7世は不満を述べながらもその顔は笑っていた。

MI6もジェームズ首相も、みんな国王への忠誠を誓いながら自分たちは真つ先に逃げ出した。

それでもイギリス陸軍も海軍も最後まで戦った。

ロイヤルネイビーの壊滅の報を受けてから今日まで、いつも怯えていた。

今日、栄枯盛衰を繰り返してきた大英帝国がついに終わるのだ。

みつともなく亡命政権が樹立されるだろうがそれは受け継がれてきた英国ではもうない。

「一人にしてくれるか。」

「はい。」

ジョージ7世は王室師団長を退室させ一人になる。

窓からロンドンの市街地を見る。

新旧が入り混じりながらこの町は生きてきた。ある時は世界商業の中心として、ある時はがれきの下で爆撃におびえ、それでもこの町はイギリスのものであった。

今まで幾度となくロンドンは燃えてきた。それでも敵兵がロンドンを踏み荒らすのは初めてだ。

まだ静かだが、一日もすればこの町は虐殺の舞台と化するだろう。

ジョージ七世の前にはいつも通りの曇り空といつも通りのロンド

ンの街並みが見えていた。けれど彼の目にはもつと多くのロンドンという町が見えていたことだろう。

ジョージ七世の傍を離れた王室師団長は舞踏会場で報告を受ける。

「師団長！ヘルフォルトの第一装甲師団は首相の命令を無視してこちらに来る準備はできていると！」

どうやら若手の士官が勝手なことをしたらしい。

「やめさせろ。」

「しかし！」

若さゆえか、無謀なことを忠誠心と正義感で覆い隠してしまうのだ。

それでは軍隊はまともに動けない。

「ドイツのヘルフォルトからロンドンに着くまでどれだけかかる？ユーロトンネルは爆破されて使えない。まさか英仏海峡を渡れども？」

この撤退を主導したのは防衛連合軍だ。支援を頼んでも拒否されるだろう。

「それなら！」

「第二機械化師団も国連軍第189装甲師団も第199空挺師団も壊滅した。第3、4、5歩兵師団も壊滅した。イギリス全土に上陸を受けているんだ。もうどこにも救援を出す余裕はない！」

イギリス攻略のための敵兵力は推定で1500万。これでも敵全体では一割にも満たないそうさ。

対して防衛用の戦力はほとんどなかった。

一時は120万の国連軍と、80万の防衛連合軍が展開していたが、今となつては撤退しそびれた国連軍1万5000に防衛連合軍8000だけしか残っていないかった。

「……見捨てられたのですか？」

「そうだな。どうやら首相やMI6の連中は知っていたようだがな。」

舞踏会場には重々しい空気が流れる。

「正装で戦いたければそれでもいい。防弾チョッキを着て正気な装備

で戦うのもいいだろう。逃げたいのなら逃げてもいいと国王陛下がおっしゃった。逃げたいなら好きにしろ。私からの指示は一つ。戦うのであれば無謀な戦闘であつても近衛兵として最後まで戦え。」
逃げたいと思つても逃げることもできないことを知っているのに卑怯な聞き方だつた。

へりさえ残つていれば逃げることはできただろう。もつとも王室師団長にはそんなことのためにへりを使わせる気は毛頭なかったが。

「God save our gracious King...」

どこからともなく、だれかもわからないが一つの歌声から少しずつ合唱が広がっていく。

「Long live our noble King...」

その合唱はジョージ七世にも聞こえただろう。

陛下が何を思つたのかは定かではないが、バッキンガム宮殿で楽器もなしに演奏されるその無秩序な合唱に、人類それ自体の終焉と言う不吉な予感がしたことだろう。

演奏が終わると兵士たちは各々武器を持ち、配置へと散っていく。

ジョージ七世はその兵達を見送つた後に舞踏会場に入る。

部屋の中はほのかに火薬のにおいがした。

恐らくは気のせいだろうが、おおよそそこは舞踏会をひらけるような場所ではなかった。

ジョージ七世は侍従たちに宮殿の清掃を命じて自室に戻る。

静かに腰を降ろし、ただ無意味に時間を過ごす。

そうして時間が経ち、爆発音で彼は宙を漂つていた意識を体に戻す。

英国の王は正装に着替えて玉座に座つた。

隣には王妃が静かに座っていた。こんな状況でもいつものように柔らかな表情で微笑みかけてくる。

けれど玉座の間は二人でいるには少し大きすぎる。

砲声の中で募るのは恐怖ではなく寂しさと虚無感だけだった。

砲声はどんどん近くなっていく。ついには宮殿全体が大きく揺れる。

どこかに砲弾が直撃したのだろう。

開拓者に追い回されたインディアンはこんな気分だったのだろうか？

「同じことか……。」

「何がです？」

力がなければ滅ぼされる。そんなこと、力の理論を振りかざして世界をかき乱した大英帝国が一番理解していた。

今回力がなかったのは自分たちのほうだっただけのこと。

「空虚な繁栄だったのだな。まさか国教会などという都合のいい宗教を作ったのに神が怒ったのか？」

乾いた笑い声を玉座の間に響かせる。

「先祖の事を悪く言うものではありませんよ。」

王妃は上品にそう返す。

「そうだな。」

王はそれに同意を示し玉座の間はしばし沈黙に包まれた。

「第三班はビッグベンに登って偵察だ。ダートフォードの砲撃陣地との連絡が途絶えた。敵は予想通り川を上ってきた。じきに接敵するだろう。国王陛下万歳。」

師団長は正装姿で馬に乗り、正気ではない装備だった。

そもそもこんな防衛戦自体がまともではない。しかし選択肢はない。虐殺されるぐらいなら戦って死ぬ。ただそれだけのことだった。

「出撃だ！バグパイプをならせ！」

儀礼でしか使うことのないバグパイプを引っ張り出して音楽隊に演奏をさせる。

彼らはまだ、ブリストルの陥落を知らなかったが、自分たちがブリテン島に残っている最後の部隊であるとそう直感していた。

戦時下で動員された市民合わせて約5000人の兵士達がバツキンガム宮殿を出ていく。

それがあまりにも少なすぎる戦力とわかりながら師団長はただ送り出すしかなかった。

戦端を開いたのは当然深海棲艦だった。さすがの敵もバツキングガム宮殿に対する精密爆撃は行わなかった。

しかし、その雑で圧倒的な物量の攻撃で部隊は壊滅した。

少し離れた場所で指揮をとっていた師団長も爆風で吹き飛ばされた。

前線の兵は一発も敵に打ち込むことなくこちらの射程外から飛来した砲弾で人間らしい死に方さえ許されなかった。

戦争はロマンティックで荒々しい男の冒険。そんなものではなかった。

砲弾によって男なのか女なのか、人なのか別の何かなのかさえ見分けがつかないほど酷い有様だった。

おそらく遺骨の一つすら回収できないだろう。

「師団長。せめて国王陛下だけは尊厳のある死を迎えてほしいと思うのは間違いでしょうか。」

先ほど無謀な正義感を振り回していた若い兵の目にはもう戦場への憧れや、正義の渴望はなかった。

「いや。間違っていない。ここを頼めるか？」

「はい。」

師団長は馬に鞭打って宮殿まで走らせる。

後ろで大きな爆発音が一つ聞こえたと思うと若い兵士たちの姿はすでになく大きなクレーターがそこに開いていた。

やっとの思いで宮殿に到着した師団長は、乱れた衣服を整えてから玉座の間に入り王の前の平伏する。

「王室師団長。状況は？」

「最悪です。尊厳も何もありません。あれは人の死に方ではない。」

「あとどれぐらいで敵はここにたどり着く？」

「もう30分も持たないかと。」

王はここでいいだろうと、そう思った。

「王室師団長。この宮殿に火を放て。せめて尊厳ある死を望む。この願いは聞いてくれるか？」

「私はあなたを守れない。ならば殺すのが私の役目でしょう。王であ

るあなたが望むのであれば私はその命令に従うまでです。」

「そうか。王妃よ。最期に私と踊ってくれはしないか？」

王は立ち上がり王妃の方を向いて手を差し伸べる。

王妃は微笑んで

「私はあなたの妻ですよ？どうして拒絶するのでしょうか？」

そう言つて王妃は差し出された手を取つて立ち上がる。

王室師団長は点火の準備ができたことを報告に来たが二人の様子を見て何も言わずに立ち去る。

師団長は無言で点火スイッチを押し、そのまま屋上に上る。

瞬く間に宮殿が火に包まれる。意図的に燃やしたのだ。そう簡単に火は消えないだろう。

玉座の間のあたりからも火が噴き出す。

それを見て師団長は王室旗を下ろす。いつもならば英国旗を掲揚するがそれは必要がないだろう。

敵に旗を燃やされるぐらいなら自分たちで燃やす。

師団長は王室旗を素早くたたみ、それを持って燃え盛る宮殿の中に戻っていく。

キリスト教では火葬はタブーだがバッキンガム宮殿という最高の棺があるのだ。それで十分だ。

カナダ オタワ 英国亡命政府

「ジョージ七世が崩御されたことをM I 6が確認しました。王位継承法に基づいて英連邦の王位を継承することになります。」

「父は死んだのですね…… そうですね。」

まだ成人を迎えたばかりの皇太子にはあまりに重い役職だった。

「私の称号はジョン二世にしていただけませんか？」

「本気でおっしゃっているのですか？」

「ええ。私にはその名がふさわしい。私は卑怯にも国民を見捨てて逃げたのですから。」

「しかし！」

「私は王ですよ。形式上の王であることはわかっています。ですがこのぐらい聞いてくれてもいいじゃありませんか。」

世界に散らばったイギリス国民がジョンという名を聞いて何を思うだろうか？

「後悔しませんか？」

「これでも最低限、王として生きるということを学んできたつもりです。一度決めたことから逃げはしない。」

イギリスはジョン2世の即位をロンドン陥落の同日に発表した。

批判にさらされたジョン二世は少し前に成人したばかりとは思えないほど気高く振る舞いその批判をすべて受け入れて英連邦の団結を呼びかけ続けた。

しかし、翌朝タイムズの朝刊の一面を飾ったのは『大英帝国の落日』だった。

三途の海峡

彼女がロンドンに到着したとき、ロンドンはその姿を大きく変えていた。

ビッグベンは階にしてみると5階あたりに砲撃受けそこから上は崩れ落ちていた。バッキンガム宮殿は炎と煙で色を変え、そこにあったはずの街並みはすべて失われていた。

軍による組織的抵抗はすべて粉碎され、深海棲艦による虐殺がそこかしこで行なわれていた。

頭蓋骨ごと脳を握りつぶされ殺害される。

人間目線でみれば真正正銘の虐殺だが、実際はそうでないだろう。深海棲艦にとつてこの行為はただの作業に過ぎないのだろう。彼らには一切悪意がない。

砲弾を節約するために素手で殺すことを選択しているだけなのだ。

遺体は一か所に集積され、一切の尊厳もなくただ衛生上の問題のために焼かれていた。少し離れた郊外でも人肉が焼ける異様なにおいに包まれていた。

「ビクトリアー…なんか臭いよ。」

彼女はこれにおいがあるのか知らないのだ。

悪意のない純粹無垢なその言葉がどれだけ多くの人々の死を冒瀆しているのか彼女は知りもしないのだ。

「そうだね。ここを離れようか。」

ヴィクトリアスは何も言わずに彼女を後ろから抱きかかえ、かつてロンドンだった町から背を向ける。

もし完全に見捨てられているわけでないならばポーツマスに多少の避難船があるかも知れない。

だがもし完全にこの島が見捨てられていたのならドーバーに向かって自力で渡った方がいい。

軽く三十キロはあり、ニーヴを抱えたまま渡り切るのは多少リスクがある。

ならプリマスならどうだろうか？あそこなら確実に何かしら残っ

ているはずだ。

ロイヤルネイビーが壊滅したと言っても旧型艦の一隻や二隻残っているはずだ。

だがどうやってあそこまでたどり着くというのか？

ロンドンにたどり着くため半日もかかり、到着したときにはもうロンドンに陥落していた。

今は大丈夫でもきつとプリマスももう持たないだろう。

誰かに期待するのはやめだ。

「ニーヴ。泳げる？」

「うん。泳ぐの好き。」

それが嘘だというのはすぐに分かった。今の時代まともに泳いだことがある人間のほうが少ない。

それでも手段がないのだ。

ヴィクトリアスは待たせていたバスに戻り状態を報告した。

同乗させてもらう代わりに護衛をすることになったのだ。

「そうか。ならどうする？今のガソリンじゃそう遠くには逃げられないぞ。」

「ドーバーに向かってください。」

「ユーロトンネルはもうないぞ。」

「わかってます。」

「それしか手段がないのか。」

この島が見捨てられたことにほとんどの人間が気がつき始めていた。

支援は一切来ない、情報もない。そのうえ敵ばかり増えていく。

そんな状況はただ軍が劣勢であるだけでは起こりえない。

組織的に見捨てられたのだろう。もちろん英国政府の関与の上で。

「これでも今考えられる手段の中では正気な部類です。」

「昔はドーバー海峡は有名な遠泳コースだった。一般人が何の装備もトレイニングもせずに横断すればどうなるかわかっているのか？」

「このバスに乗っているほとんどが死ぬでしょう。どちらにせよこの島に残っていても希望はない。それならまだ自分で自分の命を決め

られるほうがいいでしょう?」

「そうだな。」

運転手は納得していなかった。納得したくない、信じたくない。そんな気持ちが働いていたのだろう。

それでもまだこの男は賢明なほうだった。

自分たちを守れなかった艦娘に汚い罵声を浴びせるのがある意味正常な反応だ。

けれど男はそんなことをせずにヴィクトリアス側について、ほかの乗客にドーバー行きを承諾させたのだ。

ヴィクトリアスが最初に出会った指揮官よりよっぽど勇敢だ。

勇敢だからと言ってそれが無条件で喜べるものでないとヴィクトリアスは体に教え込まれていたが。

バスの中には重苦しい空気が流れていたが運転手は幹線道路をうまく避けて、なるべく安全にドーバーまで車を走らせる。

ようやくたどり着いたドーバーは異常な様子だった。

港には大量の水死体が浮いていた。

その水死体をかき分けながらフランスに向けて泳ぎだしていく人間や、今にも壊れそうな簡素ないかだを作って海に出ていく人間もいた。

「いかだを作るのはどうだ?」

その様子を見て運転手がそう提案してくる。

「無駄ですよ。今から大急ぎでいかだを作ってもそんなもので海峡を渡れるはずがない。それに私達より前に来た人たちが材料となるものを使い果たしている。ここにあるものでは時間をかけてもまともないかだは作れませんよ。」

「そうか。何かアドバイスはあるか?」

「意志を強く持つことです。今の時期の水温から考えて正直絶望的な展開しか見えません。何とかして渡り切ることが出来たとしても衰弱のためにそのまま命を落とすこともあるでしょう。」

難民のために高度な治療を受けさせてくれるほど今の世の中は甘くない。

「わかった。俺は動けない母を見捨ててまでここに逃げてきたのに結局は何も成せないまま死ぬしかないわけだな。」

運転手は悲しそうに目を細める。

「誰が生き残れるのかわかりません。私達にはそれを決める力が無い。見捨てられ、今は神頼みするしかない。」

ヴィクトリアスは力のない自分が嫌いだった。どれだけ技術を磨いても戦局に何の影響を及ぼせなかった。

守ろうと思つて手を差し伸べた難民の子供一人守れない。

自分の部下も、指揮官も守れない。

手を指し伸ばしたものが全て手の中から零れ落ちていく。

「そう悲しそうな顔をするな。あんたも俺たちも神からしてみれば所詮道端の石ころに過ぎなかった。そんだけの話だ。」

「それでも私には……」

「気にするな。君には何の責任も義務もない。みんな、誰かを責めたくて仕方ないんだよ。それがどれだけ意味がないことなのかわかった上でも。」

運転手はそう言つて靴を脱いで海に飛び込む。

そして何も語らぬままフランスに向けて泳いでいく。

それなりの経験と知識があつたようで、カエル泳ぎで泳ぎ去つていく。

それも見送つた後ヴィクトリアスは水に手を付ける。

「うそでしょ……。」

水温は推定15度程度。トレーニングもしていない人間が支援なしで渡り切れる確率はほぼゼロだ。

一時間もあれば全身が硬直して機能不全となり、二時間泳げば体中のエネルギーを使い果たし、三時間もすれば深部体温も危険な域に入るだろう。

鍛え上げた人間がどれだけ速く泳いでも対岸に着くまで十時間以上かかる。

ニーヴを担いで泳げばニーヴだけは助けられる。けれど……。

いや、今言われたばかりだ。自分には助けたいものを助けられる力

がないと。

「ニーヴ寒いかもしれないけど我慢してね。」

そう言つてヴィクトリアスは羽織つていた上着でニーヴを包み、肩に彼女を背負う。そうして静かに海に入る。

水は冷たいが艦娘である彼女にとつてそれはそこまで大きな問題ではない。

艀装はなくとも極めて強靱な体を持っている艦娘にとつて環境がどうであれ遠泳など容易い。

子供一人担いでも泳ぎ切る自信は十分にある。

「わかったー！」

そこからはひたすら海を泳いだ。

深海棲艦はほとんどがブリテン島攻略に駆り出されているのか、ドーバー海峡は静かだった。大量の遺体が浮かび、中にはバスで見た人間もいた。

ニーヴもそれが遺体であることに気が付いたようでヴィクトリアスの上で静かになっていた。

彼女の足は水についており、痛みもあるだろうに本当に静かだった。

日が落ちてまた日が昇り、12時間が経過してようやく海岸がはつきりと見えてきた。

海岸線は鉄条網などで強化されており、戦車を潜ませておくための大型の塹壕がそこかしこに存在して、監視塔には数人の兵士が見えた。

その兵士たちが見張っているのは深海棲艦だけではない。

難民も拘束の対象だ。もう難民を受け入れる余裕はないのだ。

ヴィクトリアスは監視塔から見えない場所に上陸して鉄条網をくぐり抜けて軍の管理下にある海岸線から数キロの立ち入り禁止地区を慎重に抜けてようやくフランス国内に侵入した。

ニーヴもようやく元気を取り戻して口を開き

「ねえねえっ……ここはどこなの？」

「ここは、フランスだ。料理がおいしい国だ。」

「フィッシュアンドチップスじゃない？」

ニーヴは少し訝しんだように聞く。そんなに不味かったのだろうか。

「違うから安心して。まずはどこか泊まれる場所に向かわないと。」

ニーヴは難民だ。防衛連合軍は比較的難民には優しい。もつとも、防衛連合軍は国連軍と逆の立場に無条件で立つ傾向があるためそれが優しさなのかどうかは甚だ疑問だが。

現在地はカレーとダンケルクのちょうど中間地点だが、どちらに向かうべきか。

カレーもダンケルクも国連軍が極めて強い勢力を持っており防衛連合軍の影響力は低い。

だが、予定ではヴィクトリアスの部隊はブレストで補給のちダンケルクで指令まで待機することになっていた。

そうならばダンケルクに向かった方がいい。

「ニーヴこれからまた歩くけど大丈夫？」

「足とお手手がジンジンする。」

ニーヴは元気になった代わりに、年相応の反応をして駄々をこねる。

しかしヴィクトリアスの体は彼女を背負ってまた10km近く歩くのは正直なところ難しかった。

ドーバー海峡を横断するために予想以上に体力を消費しており、若干の頭痛とめまいの症状が出ていた。

「そっか。じゃあ何か暖かいものを食べていこうか。」

そうはいつてみたものの、ヴィクトリアスが持っていたのはポンドだけ。ユーロに両替する必要がある上に、濡れた紙幣を渡すなどが難民か、あるいはそれに相当する望まれない住人だという印象を強く与える。

どうするべきか考えていると、ニーヴの表情から無邪気な顔が消えていた。

「大丈夫。歩けるよ。」

子供が無邪気にわがままをいうのは、平和だからこそだ。

わがままを言っても許されると本能的に感じる事ができる相手だからこそわがままを言つて迷惑をかけるのだ。

ヴィクトリアスはその対象にもなれなかった。

悲しさよりもむなしさが残った。

「そう。なら向かおうか。」

そうしてヴィクトリアスは歩き出す。

肉体を酷使し続け、エネルギーが足りない中でようやくダンケルクにたどり着いた。

平和な時代のこの町は知らないが今となつては大規模な軍事都市だ。

あちこちにバリケードが築かれて、何度も市街地戦が繰り返されたためにあちこちが損傷していた。

日常の中を戦車が走りまわり、小さな商店までもが物騒な品々を陳列していた。

清掃が間に合っていないのか、深海棲艦や人間の血が壁や地面にこびりついていた。

「やつと着いた。」

そんな街を歩き、ようやく防衛連合軍の施設にたどり着いた。

「ご用件は……ヴィクトリアス。あなたはこの鎮守府所属の艦娘では……ないですよね。」

ちようどどこから帰ってきた女性の士官が話しかけてくる。

施設の前でボロボロの艦娘と幼女を見ればそんな反応になるだろう。

「ひとまずあなたは入渠してください。基地司令に話を通しておきます。君はこつちにおいで。」

その士官はヴィクトリアスをドッグに押し込みニーヴをどこかに連れていく。ヴィクトリアスの傷は十数分で回復する程度だったが精神的な疲労がひどかった。

数時間前まで死体に囲まれながら海峡をわたっていたとは思えない。

本当に長い一日だ。

「大丈夫だろうか。」

ようやく一安心できるところまで来た。そう思っていたのだが妙に落ち着かない。

司令部はニーヴを始め難民に死んでほしかったのかもしれない。本当に撤退が必要だったのかヴィクトリアスにはわからない。だがとてつもなく大きな力が働いているように思える。

入渠を終えて基地司令と面会することになったヴィクトリアスに基地司令は一言

「基地司令のマツカトニーだ。正直に言おう。君たちの存在は不都合だ。」

そう言った。

「ある程度は予想していた返答だな。」

「情報部は生き残りの存在を許容しないだろう。だが私は君たちのような功労者にそんな仕打ちをするのは間違っていると思う。一時的な避難先を用意する。そこでしばらく待機していてくれないか？その間に上層部と交渉してみる。」

マツカトニーはヴィクトリアスにそう微笑みかける。

「ありがとうございます。」

やはりこちらの存在を鬱陶しく思う組織がいるのだろう。

「裏口から出て、ここに書かれた場所に迎え。それと機装は置いていけよ。国連軍のパトロールに見つかったら厄介だ。」

「わかりました。」

ヴィクトリアスは隠し持っていた副砲を司令に預けて執務室を出る。

監視の目を盗んでニーヴと合流した後、裏口から静かに出る。

「どこいくの？」

「ここは安全じゃない。だからもつとも安全な場所に向かう。」

「わかった！」

ニーヴはあの士官にお菓子をもらったようで上機嫌だった。

上機嫌でスキップしながらニーヴと歩いて行く。

途中で国連軍のパトロール部隊も見かけたがそんなニーヴを見て

微笑みながら走り去っていただけだった。

「ここか。」

そうしてたどり着いたのは小さな酒場だった。

命をかけて守った世界の微笑み

一週間前 防衛連合海軍本部ビル 臨時士官執務室

「情報の整理が完了しました。」

ムーンがノックもせずに入室して端末を操作しながら村上の前に立つ。

恐らくムーンに調べさせていた損害状況の調査結果だろう。

「報告してくれ。」

「はい。二サエルの指揮下かどうかは分かりませんが、情報部強制捜査班所属の戦闘要員及びサポートスタッフが全員行方をくらましました。」

「他には？」

「襲撃当時現場の警備をしていた部隊の尋問は済みましたが彼らは目的を知らなかったと考えてまず間違いないでしょう。他にもタイタンやマーズなどの高級情報官の尋問も行いましたがこちらに関して は確証が持てませんので全員権限をはく奪しました。」

「諜報ネットワークはどうなっている？」

「改良のちに再構築を完了しました。裏切り者から情報が漏れる可能性はありますが、こちらの通信が筒抜けになることはないでしょう。」

「誰も利用しなければ情報が漏れることはない。けれど、何も進められない。少しの漏れは見逃すしかないでしょう。報告はそれで終わりですか？」

「少しお耳に入れておきたいことが。」

ムーンが珍しく心底めんどくさそうにいう。

「なんだ？」

「こちらを。」

ムーンが差し出してきたのはフランス語の報告書だった。

「Aaron Mankindの新派閥か。これはひどいな。」

Aaron Mankindを擁護するつもりはないが少なくとも彼らはヒトとして最低限の論理回路を介在させていた。

だがこの報告書に書かれている奴らは違う。

「まるで野獣だな。」

旧派閥は人の暴力性に救いを求め、艦娘や深海棲艦を狂った戦術をもって撃退することを説いていた。

だがこの新派閥にはそんなゴールがなかった。

ただ艦娘の人権を否定して、集団で彼女らを襲い強姦する。そのくせして捜査に手が差し迫った時に言うのだ。

「艦娘は人間じゃないから自分たちは無罪で一人で歩いていた艦娘が悪い。」
と。

むちゃくちゃな言い分だが今の世の中で警察の執行能力は知れている。

法は艦娘の命よりも人が自由であることを優先する。

「これを見せて私にどうしろと?」

「ヨーロッパに向かうのなら気を付けたほうがいいということです。こいつらは見境なくこちらを攻撃してくる。それに安易な快樂に流れた若者が構成員の多くを占めており、Aaron Mankindが繰り出してくる私兵ほどではないですが厄介です。」

戦闘訓練を受けていなくとも若い男が数にも言わせれば大抵のことはできるだろう。

もちろん戦闘規則で拘束されている一般的な艦娘を前提にするのであればだが。

蒼龍なら戦闘訓練を受けた軍人五十人ぐらいを相手にしても簡単に制圧してしまうだろう。

「一応覚えておく。」

ムーンが報告を終えて部屋を出ていこうとしたとき電話の呼び出し音が鳴る。

『準備ができたぞ。約束の時間に遅れるな。』

電話の相手はあの官僚だった。こちらの返事も待たずに電話は切れる。

「ムーン。護衛を何人か見繕ってくれ。この前話した計画が進展しそ

うだ。」

「忙しい人ですね。」

そう文句を言いながらもムーンは手早く仕事を済ませる。

こういうところはさすがニサエルがそばに置いていただけある。

「出発はいつです？」

「可能な限り早く。」

「了解です。」

現在 ダンケルク

「オーマー中佐、報告は聞いた。リカルド・マクシユメル・シユレインの娘ニーヴ・シユザリロ・シユレインがここに来たんだな？」

村上は電気の消えた会議室に入るなり話を始める。

部屋の隅で気配を消していたオーマーは立ち上がり資料を渡す。

「これが詳細です。」

ニーヴの父は深海棲艦を利用しているすべての元凶たる組織の幹部だ。機密保持の観点から仮に組織Xとでもしよう。

アイルランドの有名な資産家である彼は組織Xに出資して取り入れたのだ。その記録がレイヴン開発投資銀行に残っていた。

数少ない組織Xの手掛かりだ。その娘は交渉材料としてこれ以上ないものだ。

「ニーヴを追跡しろ。それとヴィクトリアスも保護しろ。彼女はもしかすると……。」

「了解です。ニーヴとヴィクトリアスはNew Saviorを名乗る組織の……アジトに相当する場所で監禁されているようです。特別介入ユニット運用の許可を。」

「さてその新しい救済者とやらについて詳しく教えろ。」

「Aaron Mankindによる先日の蜂起が失敗して彼らの組織は弱体化しました。そのためAaron Mankindが活動の規模を縮小、見世物にするための艦娘の需要が減りました。一方で、ニサエルがああ蜂起の裏でターゲットにしていたのは組織Xと内通しているもののみで艦娘を売買していた人間の多くが生き残りました。」

結果彼らは浮いた在庫の処分のために艦娘を性風俗の商品として販売、AaronMankindが下等生物扱いしていた艦娘を市民たちほかの娼婦と同列には扱えないために売人たちはNewSaviorを自称する組織を作り上げ上手い具合に心理を利用して艦娘と性行為することを正当化したわけです。」

「つまりはマツカートニーは昔から同じようなことをしていたわけか。」

「彼の轟沈報告のうち3割が虚偽です。そのさらにいくつかは自分のドールとして利用していたときに死亡したようです。」

轟沈を出せば出すほど出世は遠のく。だから一定以上に轟沈を出したものが出世をあきらめて別の手段で稼ごうとした前例はいくつかある。

だが、どれだけ乱暴に扱えば死に至らしめることができるのだろうか。

生殖器官の強度は人と変わらない。だから銃弾を撃ち込めば死に至るが……はあ。

「痛ましいことだな。」

ここでマツカートニーを逮捕しても無駄だろう。

ほかの売人が取引量を増やすだけだ。

これを見ているとあの官僚のやっていることがずいぶんましに見える。

問答無用で政治家や権力者の夜伽をさせられることになるが命までは奪われないだろう。確かに理性も知性もない野獣では情報屋として利用することすらはばかられる。

一方の軍は戦争に問答無用で艦娘を送り込み、死ぬことまで強要する。

その上、上官によつては貞操まで無茶苦茶にされる。どちらがましなのか。

同じ穴の貉同士意味のない非難の応酬を繰り返すことは無駄だ。

「敵がニーヴの価値に気がついていて可能性は？」

「情報が不足している今確かなことは申し上げられませんが売人は商

品の確保に躍起になっていちいちチェックなどしていないと考えていいと思われず。」

「需要があるということなのだろうな。」

「艦娘を人間と認めなければ聖書に反することもない、顔もいい、体つきもいい、誤って殺してしまっても問題はない。逆にどうやったら需要がなくなるの？」

ひどい話だがこれは現実だ。

「そうだな。後は頼む。」

村上は部屋を去る。

オーマーには見慣れた報告だが、村上にとっては耐え難いものだろう。

人間はそう簡単に変われない。良い方にも、悪い方にも。

オーマーが作戦を開始したのは村上の許可が出てから一時間ほどだった。

『All Station, This is HQ Radio Check。』

『A1, loud』

『A2, loud』

『A3, loud』

『All Station, This is HQ Attack Ack』

『copy』

蒼龍は久々の装備見ても何も胸が踊らなかった。当然だ。

この装備でやってきたことには何の誇りも持てないことばかりだった。

深海棲艦を殺すことが明確な正義であるとは思えないが少なくとも深海棲艦を殺すことに政治的な理由も宗教的な対立といった理由も介在していなかった。

今回の作戦は危険なカルトから艦娘と少女を救出するという一見

すれば正義のような行いだが実態は異なる。

艦娘が強姦されようが無垢な少女が犯されようが軍は関知しない。今回はその少女に利用価値があるから保護することになっただけだ。

そしてそういう時、情報部の動きは極めて素早く正確だ。

「A1一階正面から侵入開始。」

蒼龍はそんなことを考えながらも扉を蹴破って中で酒を飲んでいる数人に銃口を向ける。

彼らを殺す必要はないが、目撃者を生かしておく意味もない。

この町で誰かが死んでも親族ですら死因を知ることはない。

深海棲艦に殺されたかどこかのカルトに殺されたか、はたまた難民にたつた一ユーロのために殺されたか。

死因など知っても何もならない。死という結末を抵抗なく受け入れられなければこんな町にいつまでも住んではないだろう。

出てきたガードマンを速やかに射殺して客は体格ごとに脅威度をつけて危険なものから射殺する。

ガードマンがSMGで抵抗を試みるが当然艦娘も装甲を破れるはずもなかった。

脳幹に一発づつ正確に射撃して弾薬を節約していく。

こんな時に弾薬の値段や戦闘服の汚れを気にしている自分の最低さに嫌気がさす。

「クリア。バックヤードに移動する。」

サプレッサーを使ったがそれなりに大きな音が出たため逃走している可能性も考えたが幸いプレイルームとでも言うべきだろうか？それとも彼らを強引に宗教だと定義して懺悔室とでも呼ぼうか、そんな場所で好き勝手に艦娘で性処理している人間は蒼龍が銃弾を撃ち込むまで熱心に腰を振っていた。

十字架や拘束具は宗教的な意味よりも性的な属性を強く持ちただのSM用品でしかなかった。

性処理に使われていた艦娘は救出に歓喜したが彼らには、解体あるいはこんな汚れ仕事をする運命しか待っていない。

年齢層は様々で、十代から五十代まで。顔がいいのもいれば悪いのもいる。人畜無害そうな顔した人間もいかにも悪そうな人間もいた。しまいには女までいた。

けれど彼らからは宗教特有の匂いがしなかった。

ソーブランドにくるような感覚でここに来ているのだろう。

献金と称した利用料だけでそれなりの財を築けそうだ。

「私はフランス政府の人間だぞ！君たちの行動は政府に承認されていないはずだ！」

蒼龍は大騒ぎする男のほうを見る。

年齢は三十歳程度だろうか。優秀そうには見えない。

だが身なりがほかの人間よりいい。情報が得られそうさ。

蒼龍は男の太腿を撃ち抜いてから聞く。

「ここに少女が来なかったか？」

「何を言っている？それよりも貴様！よくもやってくれたな！」

蒼龍はもう片方の太腿を撃ち抜きもう一度質問を繰り返す。

「少女が来なかったか？」

男はぞつとして素直に自白する。

「マツカトニーが用意した艦娘と一緒に少女が来ていた。どこに居るのは知らない。それでいいか？」

この男に情動的な価値がどれだけあるかわからない。

「HQ this is A1 情動的な価値があるかは判断できないが政府に関連する人間を拘束した。」

『A1 背後関係はこちらで調べる。拘束の必要はない速やかに殺害せよ。』

その無線を聞くなり蒼龍は引き金を引いて男を殺す。

乾いた銃声の一つ鳴りなんの感慨もなく男の命を奪う。

「さてどうするか。」

入手できた凶面には存在しなかったプレイルームの存在から考えるに凶面は何の意味も持たないだろう。

しかし、情報部の監視の目を抜けて大規模な改装ができるとは思えない。

A2とA3は出入口を固めているに過ぎない。もし仮に地下室でも存在していれば挟撃されかねない。

現時点で敵の戦力を推定するに脅威とはならないだろうがこの作戦は若干の情報不足の中で実行されている。

可能性はできる限り潰すべきだ。

「隊を分ける。那智、半分を率いて二階に上がれ。残りの半分は一階で待機。指揮は私がとる。」

蒼龍はどうにも足音の反響がおかしいと気がついていた。

それだけで地下があると考えるのは早計だが情報部の特別介入ユニットの練度ならば奇襲でもされない限りこの程度の敵に負けることはありえない。

それに屋内戦闘である以上数が多いことが有利になるわけでもない。

「了解した。」

那智隊が二階に上がるのを見送って蒼龍は小銃を握りなおす。耳を澄まして感覚を研ぎ澄ます。

「10時方向。5メートル2メートル下方。」

蒼龍は小声で指示を出しハンドサインを出す。

やはり何かがいる。

「銃を捨てろ！この艦娘の命が惜しいならば動くんじゃない。特殊部隊を送り込んでくるぐらいだ。殺されたくないんだろ！」

蒼龍が示した方向から声がする。

プレイルームにいなかったことから考えてヴィクトリアスのことだろう。

はつきり言って司令部にとってヴィクトリアスの命はそこまで重要ではないだろう。

だが、

「銃を捨てて。」

蒼龍はそう指示を出す。

「よし。いいじゃねえか。って艦娘かよ。聞いたことねえぞこんな奴ら。」

床板を持ち上げて地下から上ってきた男はヴィクトリアスの肩を担ぎながら出てくる。口からチューブをねじ込まれ反抗はできないようだ。

衣服ははだけ、乱暴された形跡はあるが、もしかするとすんでのところで救出できたのかもしれない。目にはいまだ鋭い光がともっており薬で鎮静化されている割にははつきりと意識を保っていた。

そんなヴィクトリアスの気迫もあつてか、想像通り敵はニーヴのために自分たちが来たとは思っていない様子だ。なら利用させてもらうだけだ。

「どうする?」

出てきた男の一人がそんなことを言う。

「そちらが望むなら安全を保証する。以後関わらないと約束するなら言い値を払う準備ができています。」

蒼龍はとんでもなく下手に出る。

相手にヴィクトリアス価値をさらに誤認させる。

「どうやって保証するんだ。お前らにとって俺たちなんか簡単に制圧できるだろ。」

「ならこいつらを地下に閉じ込めればいいんじゃないか?」

「すぐに抜け出せるだろ。」

「抜け出せばこいつを殺す。それでいいだろ。」

男たちはこそこそ話をするが丸聞こえだ。

「必要なら逃走完了まで待つ。」

蒼龍は最低限の提案で相手を警戒させないように場をコントロールする。

「わかった。地下室に入っておとなしくしてろ。」

最後まで従順を演じて地下室におとなしく入りニーヴを保護する。会話しながらモールス信号でA2とA3、那智隊にも指示を出しておいた。

今頃ヴィクトリアスも保護されているだろう。

相手が馬鹿で助かった。

装備もなく、艦娘の殺し方も知らない民間人が艦娘を殺せるわけが

ないことに気がつかなかつたのだろう。

『All Station This Is HQ パッケージ2の保護を確認。AIは状況を報告せよ。』

「This is AI パッケージ1を保護。」

『了解した。全ユニット撤収。』

「AI了解。」

蒼龍は手早く証拠の隠滅のために死体を集積し薬品で処理をして外に出る。

ぼんやりと焦点の合わない目で空を見上げるヴィクトリアスを車に押し込み車体をたたいて出発の合図を出す。

ゆっくりと走り出した車の荷台に飛び乗ってニーヴを乗せた車両を取り囲むようにして情報部のセーフハウスに移動する。

マツカートニを泳がせる方針が決定したため基地には戻れない。

蒼龍は手にこびりついた血液を見ながらぼんやりと昔を思い出す。

大義のため無抵抗な市民を殺し続けたあの日々を。

ヴィクトリアスには太陽がまぶしすぎた。

今までも太陽のことをまぶしいと思ったことはある。

けれどそれはブリテン島がいつも曇り空であったからで、今のまぶしさとは違う。

ほんの数日で自分が置かれている状況が変わった。

軍に見捨てられ、ボロボロになってたどり着いた場所司令官に裏切られ、守りたいものは自分の力で守ることもできず、全てが終わった後、抜け殻となった自分だけが地獄の一步手前から強引に引き戻されたようなものだ。

今さら恩着せがましい。

それなら最初から守ってくれればいいじゃないか。

太陽のまぶしさのせいで目が痛い。

頬に涙が垂れる。

自分はこんなにも弱かったのだろうか？

そんな筈はない。

そんなはずはない……

許さない。

認めない。

全て壊してやる。

司令官も、艦娘も深海棲艦も

いや、無理だ。子供一人守れないものが壊せるはずがない……

それならば、自分自身だけでも壊してやる。

「うあー！」

ヴィクトリアスは叫びながらそばにいた蒼龍から銃を奪い銃口を啜えて引き金を引く。

初めて選択できた。与えられたものではない大きな選択だ。

誰にも邪魔できない。誰の命令でもない。

体が軽い。自分を縛り上げる鎖が壊れていくようだ。

見かけの状態とは全く違い、ヴィクトリアスにとってこの瞬間が今まで生きてきて一番の自由で幸せな時間だった。

選択と決意

「なんで。」

ヴィクトリアスは引き金を確かに引いた。

だが自分はまだ生きている。

「なんでも何も、あなたの精神状態が危険だと警告されていたから手を打っただけ。」

「へ？」

ヴィクトリアスは間拔けな声で蒼龍のほうを見る。

「それに相手が誰であれ武器を奪われるような失態はしない。」

奪われるどころの前に信用できない相手の目につく場所に無防備に武器を置いたりしない。

つまりヴィクトリアスはまたしても選択肢を与えられたわけではなかったのだ。

「それじゃあ……私は勘違いしていただけ……？」

そんな様子を見ていた蒼龍は肯定も否定もせずにヴィクトリアスから銃を取り上げマガジンを装填する。そしてスライドを引き、ヴィクトリアスにそれを差し出す。

「いつでも最善の選択肢が目の前にあるわけがない。もうあなたは軍に戻って素晴らしい道徳心を持った指揮官の下で働くなんてことはできない。私たちと来るか、それともさつきと同じ選択をするか。選択しなさい。」

ヴィクトリアスは蒼龍の方を見る。

彼女の目は単純な興味で支配されており、こちらの選択に干渉する意思はないように見える。蒼龍から銃を受け取ったヴィクトリアスは銃口を手で包み込み発砲する。

銃声とともに手に手に衝撃が走る。手の上には潰れた銃弾が残り実弾であることは疑いようがなかった。

「そうか。」

ヴィクトリアスはそう呟いて目を閉じる。

考えてみれば苦痛しかない人生、いや艦生だった。

引き金を引くだけの単純な工程ですべてを終わらせられるのにも関わらず、ヴィクトリアスの手からは力が抜けていく。

「私は、私は。」

ヴィクトリアスの目からは涙がこぼれる。

そんな涙の中に蒼龍は初めて人を殺した日の自分を思い出す。

命令通り人を殺しその夜、潜伏先のホテルの一室で一人で泣いた。しかし上官は自分を慰めることもなくまた新たな標的を指定してきた。

それから大勢殺した。相手が紛うことない悪人であれば多少まじだったかもしれないが殺した相手の中には艦娘の権利などを求める活動家などもいた。自分が守ろうとした相手に殺される恐怖と裏切られたことに対する憎しみが向けられるたびに吐いて、泣いて、やがて何も感じなくなった。

優しさでは暗殺者を作れない。冷酷である以前に合理的な男だった。

いや女だったか？記憶があいまいで思い出せない。しかし。自分を指導した人間はそんな奴だったということだけは思い出せた。

思い出しても無駄なくせに中途半端にそんな記憶に執着してしまう。

「心が動くうちに目一杯泣けばいいよ。」

蒼龍は聞こえないようにぼそつと呟く。

そうして今度こそ目を閉じて、軍用車特有の荒々しい揺れに身をゆだねて眠りにつく。

その間も車は走り続け、ダンケルクから十数キロほどのなんの変哲もない一軒家にたどり着く。

変哲があればセーフハウスとして問題ではあるが。

「HQ This is A1. パッケージ1および2がLZ35に到着。」

『AllStation This is HQ. 作戦完了を宣言する。全ユニットに続いて護衛行動ES2の開始を宣言する。』

それからほどなくして情報部のステルスヘリが飛来して来る。一

軒家の畑にヘリが着陸すると、ニーヴとヴィクトリアスを收容してまた飛び去っていく。

あの二人はこれからどうなるのだろうか。自分の父親がしていることを何も知らない少女に、仲間を殺した男に命を救われた艦娘。

二人は何も知らない。知ってほしいとも思わない。

そう祈っても無駄だろう。蒼龍の願望がどうであれ世界はなるようにしかならない。

作戦が終了したころ村上也も要件を澄ましてパリに戻ってきた。

想定よりはるかに難航したがなんとか目的は達成できた。

「それで？」

しかし村上には休む暇もなく、オーマーの報告を聞く。

「作戦は成功しました。New Saviorのアジトにいた33名を殺害、艦娘14体を保護しました。」

「保護した艦娘は？」

「記憶削除のちに軍務に復帰させる予定です。」

艦娘の記憶を都合よく抹消するプロセスはある研究所によって完成されていた。

研究は禁止されていたが、艦娘をコントロール可能な兵器として運用するための研究は裏で行っていたのだ。

そう。天龍が参加させられていた研究だ。

「ろくでもない研究ばかりすすむな。」

村上が呆れたように言う。

「そのろくでもない研究のおかげで彼女らを殺処分せずに済むんです。」

オーマーは卑怯なことをいう。だがそれも事実であった。

「そうだな。ヴィクトリアス以外の記憶は消せ。彼女はやはり飛龍たちと同じで特別だ。」

「それはつまり……」

南鳥島鎮守府の真実と言えればいいのだろうか。

あの鎮守府は特別な場所だった。

そして艦娘も特別だった。

彼女らにはしなければいけない仕事がある。

「この話は、やめだ。」

村上は一瞬語気を強めて明確に回答を拒絶した。

オーマーはその気迫に一瞬固まるが頷いて別の話題を提示する。

「それで目的は達成出来ましたか？」

「及第点といったところだ。」

「いよいよですか。本当に大丈夫ですか？」

「しっかりと準備はした。」

そういうことじゃない。

「違う。あなたが大丈夫かと聞いているんです。」

「なら聞くが君が変わりが務まるだけでも？」

オーマーにできることは何も無い。村上はこの数か月でオーマーやムーンを置き去りにしてはるか先に行ってしまった。

こちらが経験で積み上げたものを圧倒的な才能でひっくり返してしまった。

そんな奴でなければニサエルと対峙することなどできはしないのだが。

「それはそうですが。あまり無茶されると。」

「心配するな。気にする必要はない。」

気にするなという言葉の中に全く別の意味が含まれていたことにオーマーは気づけなかった。

「それでブリテン島での損害についての報告は？」

「信用できるデータから算出した損害の最低値ならすでに出ています。」

「よし報告しろ。」

「まず人的損害ですが、軍人12万人以上、民間人2500万人以上の死亡が確認されています。難民の全数把握は不可能ですので最大で3000万人程度増える可能性があります。経済損失はドル換算で450億ドル程度だと思われます。研究及び学術の損失は軽微で交換不可能な資料が失われたとは聞いていません。ただ文化の面にお

いて損失が非常に深刻で未確認ですがバツキングダム宮殿が焼失したとの報告を受けています。」

「国王も死んだらしいし、おそらくそれも事実だと考えるべきだろうな。」

ブリテン島での数千万、下手をすれば数億の命はやりようによつては十分に延命可能な命だった。だが結局は延命に過ぎない。しかしそれを世間は容認しないだろう。

やはりここは”英雄”と言う最強のプロパガンダを使うべきだろう。

「マニラに情報部の連絡要員を送れ。」

マニラ 太平洋方面軍東南アジア軍団司令部

中越はアムンゼンと会っていた。

アムンゼン指揮下の部隊は順調に配置転換を進めマニラまで艦載機の損失損失のみで切り抜けてきた。

昔の村上やマークを感じさせる素晴らしい指揮だ。

「まずはここまではほとんど無傷で移動してきたこと。見事だ。」

「ありがとうございます。ですがこれでオーストラリアの人々は死ぬことになります。」

「電話口でも聞いたが君は司令部が大勢を見捨てたことを確信しているのだな?」

「ええ。まず間違いなくこの作戦は偽造です。」

中越が困った顔で沈黙してもアムンゼンの視線は揺らがない。

「認めよう。だが司令部が決定したのは君の想像するものよりもっとひどい。オセアニア、インドネシア、アフリカ、スカンディナヴィア半島、ブリテン島、南アメリカ大陸沿岸部が撤退の対象だ。これで死ぬのは十億人近くだ。国連軍と各国政府には通知済みだ。これを報道しようとしたジャーナリストが大勢、情報部に殺害された。」

アムンゼンはそれを聞いて悔しそうな顔をする。

「私が司令部の人間だったとしてもこの計画から目を背け無言で承認してしまおうでしょう。こうでもしなければ守り切れない。」

物量差は挽回できず練度も下がり続けている今の軍では現在の勢力圏を維持できない。そんなこと算数ができる人間ならわかるはずだ。

「私だって何も言い返せんだよ。」

優秀な指揮官であればあるほど村上の行動がいかに合理的な判断であったのか、そしてこんなとんでもない計画を実行する村上の手腕がどれだけのものかわかってしまうのだ。

認めたくないのと同時にこれ以外の、いや、これ以上に優れた策が思い浮かばないのだ。

「私たちがこの計画を妨害すればいずれ人類は滅ぶ。この作戦は私たちが手を出せる領域ではない。」

「それでも軍人としてのこんなことを知って何も言わず見過ごすわけには行きません。」

「だが……」

アムンゼンは中越を制止して作戦計画書を取り出す。

「私の独断で動かしてください。世論がこの惨状に気がついてからでいいのです。」

よく読まなくてもそれが避難計画であることが分かった。

「絶望的な状況の中だからこそ、少しだけの希望があってもいいではありませんか。」

中越のことは見るアムンゼンの瞳には”英雄”のそれがあつた。

「君は大人になるべきだ。」

けれど中越は彼を”英雄”にする気にはなれなかった。

英雄をそばで見えてきたからこそその結論だ。

「大人になることがいつも正しいことではないはずですよ！」

だが、”英雄”は凡人に止められないからこそ”英雄”なのだ。

「そうか。君に世界の人々を背負っていく覚悟があるのか？」

「覚悟がどうだとか知りませんが、やらなければいけないことはおのずとわかります。」

英雄というのも一種の精神病だ。自分の正しさを信じて疑わない。

自信から来る妄信、他者の評価から来る全能感。そんなものが人を

変えていくのだ。

「わかった。力は貸す。だが覚えておいてくれ。君の怒りも正義感も利用されかねない。」

中越はそれだけ助言して作戦計画書に目を落として具体的な助言を行う。

「海南島の防衛連合軍軍政地域で補給と調整を行って待機だ。一週間もすればインドネシアの人々も避難を始めるだろう。おそらく避難船は支援を受けられない違法な航行をすることになる。その船を支援する。」

「確実性にかけると思いますが？」

「今から軍内部に手を回して輸送船を用意することなどできるはずがない。できたとしても調整が間に合わん。続けるぞ。距離だけで考えるならマラッカ海峡で活動するのがいいように思えるが残念ながら今の敵は高度な指揮を受けている。つまりこんな大勢が逃走しそうな経路はふさいでくるだろう。それを予想してシンガポール基地には司令部から監視兼アドバイザーとして幹部が送り込まれた。つまり強力な戦力を持っているインドネシア基地は動かない。よってここに構えるのは死に行くのと同義だ。」

「ではどうなの？」

「司令部はフィリピンの保持を決定している。つまりフィリピン領パラワン島は防衛の対象だ。ここに来て書類ばかり見ている司令部の馬鹿さが役に立った。君にはカリマンタン島とパラワン島の間の護衛を頼む。モールス信号ならアマチュアで使っている人間もいるだろう。それを使って呼びかけを行う。君たちの部隊であれば若干の戦力不足でも戦えるだろう。」

「わかりました。では調整を済ませて出撃しますタイミングは？」

「こつちから知らせる。」

そう言って中越は立ち上がって部屋を出る。

電話で連絡手早く済ませて作戦の準備を進めることにした。

ニサエルは無心で壁紙のシミを眺めていた。

いつもならば相手のありとあらゆる仕草を観察して抜き出せる情報すべて抜き出してやるのだが、今回はそううまくいかない。

「久しぶりだな。」

「久しぶり、ですか？私はあなたに会うのは初めてですよ。」

ニサエルは本当に目の前の男と会うのもしやべるのも初めてだった。

ではどうして男がそんなことを言ったのか？

「まさか君が私の秘密について知らないということはないだろう？」

当然知っている。だが答える意味もない。事実を語ることが信用につながるというのは安直すぎる。

嘘を織り交ぜ存在しない真実なんてものを形成してそこにたどり着かせる。

雨降って地固まるとはよく言ったものだ。

人間は目の前の退屈な経験からよりも劇的な物語から多くを学ぶ。

「またつまらないことを考えているな。言っただろ。君は私を出し抜けないし私も君を出し抜けない。」

「そうですね。」

ニサエルは心のこもっていない単調な声で返事をしたかと思うと資料の束を机に置く。

「もう終わったのか？」

「その程度の仕事本来なら半日で終わります。どこかの誰かが余計にこちらを待たせさせなければ今ごろほかの仕事に移っていますよ。」

「仕事以外のことの意味を見いだせないのが私たちの唯一の欠点だな。」

「欠点？笑わせないください。必要ないものを人生から排除できないことのほうが欠点ですよ。」

男がまたごちゃごちゃと言っている。

優秀な男であることは間違いない。こうやって傲慢な印象を与えること自体が相手の策である可能性も否定できない。だからムカつくのだ。

それでもニサエルは少しも表情に出すことなく微笑んで言う。
「あなたとはうまくやっていけそうだ。また一緒にお仕事させてもら
いましょう。」

変わり始めた戦争

ブルネイから北北西に148海里の洋上

「発 マニラ通信基地 貴隊はすぐに南下を中止して行動目的及び可及的速やかにマニラ基地にて説明せよ。とのことです。」

「Nothing Hard（感度なし）とでも返しておけ。」
「了解です。」

士官たちが浮足立っている。状況としてあまりよろしくない。

たしかに今自分たちがとっている行動は英雄的なそれだ。

成功すれば極めて高い名声を得る。

しかしアムンゼンは若いながらもこの状況が望ましくないことを知っていた。

こんな状況では引きの判断を誤りかねない。部隊の全滅は戦線のさらなる後退を意味し司令部はフィリピンの放棄に踏み切るだろう。せつかく救った命も助けられず貴重な戦力を無駄に消費することになる。

「いいか、引きの判断を誤るな。私が引けと言ったらすぐにフィリピンまで北上してあとは近海警備群に任せる。ここで下手に損害を拡大するわけにはいかない。」

インドネシアやアフリカから移動してきた部隊が近海警備群の指揮下に入り近海警備群の兵力は150万を突破していた。さらに南島島鎮守府や九十九里浜鎮守府などの曲者指揮官の鎮守府が暴れまわっているため敵は依然として日本近海への侵攻ルートは確立はおりか近海警備群へのプレッシャーを与えることすらできていなかった。

「まあよくわからんが私たちにとっては都合がいい。敵部隊はフィリピン侵攻に踏み切れていない。敵が体勢を立て直す前に回廊を作る。敵とのコンタクトは7時間後だ。全隊増速せよ。」

アムンゼンには広域での戦略はこの際どうでもよかった。

自分の行動が軍人のエゴでしかないことをわかつていたからだ。

合理的かつ冷静に考えるのであれば人々を見捨てるのが最適な

回答だ。

避難民はやがて難民となり、治安の悪化や生産性の低下や公衆衛生の低下を招く。

難民を兵士として最低限雇用できるヨーロッパと違いアジアでの難民はただ支援物資をむさぼるお荷物でしかない。

それでも助けなければいけないのはなぜか？

それは自分たちが軍隊であるからだ。

軍隊は軽蔑や恐れの対象となってしまうと機能できなくなる。

もし大勢を見捨て何もしなければ

それを村上は分かっているはずなのだ。村上は支援なしで戦うことがどれだけ無謀か知っている。

にもかかわらず今回彼は無慈悲な決断しか下さなかった。

それがどうしてかわからない。

彼が正気を失っていると言えば簡単だが、そうであるならば中越大將が村上の行動を黙認したことが謎だ。

中越大將であれば村上を制止することは容易いはずだ。

「不知火。今回の司令部の動きどう思う？」

「知らないわよ。」

相変わらず不知火の機嫌は悪い。

実際のところただ荒っぽい性格であるだけなのだがこの際どうでもいい。

「なんかないのか？」

「私の考えが聞きたいの？」

「何かの参考になるかもしれないからね。」

「そうね。いくら何でも動きが早すぎると思う。」

アムンゼンは首を傾げる。

「この作戦が作戦が浮上したのは二サエルの裏切りからしばらくたってからだ。その間に守備隊の損害は膨らみ続けていたにも関わらず司令部は有効な手を打てなかった。けれどこの作戦が実行されてからの動きはとてつもなく早い。それはつまり司令部が会議というファクターを通していないのではないのでしょうか？」

「つまり誰かの独断？あるいは恫喝で司令部を強引に動かしている？いやだれかではないな。村上の独断あるいは恫喝だろうな。」

しかしそうなるとうして中越はこちらにそのことを教えなかったのか。単純に忘れていたからだろうか。それとも何か理由があったのか。

「だとするならば、どうして中越大将は私にそのことを教えなかった？」

「憶測で語るならば、中越大将が村上少将と共犯関係にある、あなたを真実から守るためにあえて隠している。あるいは中越大将は別ですで行動を起こしてその計画が漏洩することを恐れたか。」

「別の計画か。」

「例えば防衛連合軍の司令部に対する強制執行を計画しているか。」

「強制執行だと？防衛連合軍の上位組織など存在しないぞ？」

「防衛連合軍は国連軍から分離した組織。その新しい組織に国連軍が抱えていた大問題も引き継がせると思う？」

国連軍を制止するのは誰かという問題だ。国連軍は安全保障理事会で最低一国でも常任理事国の同意を得られれば解体されないのだ。しかも厄介なことに戦争初期でパニックになっていた各国は国連軍に対して大幅に譲歩して柔軟な対応が可能ないように国連憲章第七章の改変に踏み切り完全に抑制装置が外れたのだ。

最初は各国から人員を借りる形だったのが自分たちで募集を始め、さらに兵器の購入ルートまで自立させてしまった。加盟国が分担して資金を出しているにもかかわらず加盟国の意向を平気で無視する組織が出来上がったのだ。

結果アメリカは国連軍から距離を置いてしまった。

そんなことが起きた後に設立された防衛連合軍に何の抑制装置も取り付けられていないはずがないのだ。

「それはそうだが防衛連合軍司令部に影響を与えられるのなんてそれこそ…… 連邦政府…… か？」

「それぐらいしか考えられません。」

確かにそれなら筋は通る。しかし中越司令にそんな力があるとは思えないのだ。

防衛連合軍内の軍人から支持を集めていると言っても所詮は猿山の大将に過ぎない。

「背後に誰かがいるかもしれないな。だが誰だ？」

『アムンゼン司令至急CICへお越しください。繰り返しますアムンゼン司令至急CICにお越しください。』

だがそれを考えている暇はないようだ。艦内放送が流れて隊は戦闘態勢に移行していく。

少なくとも現時点では中越は明確な敵ではない。それだけで十分だと考えるしかない。

「不知火。死ぬなよ。」

「期待に応えて見せますよ、司令。」

不知火はそう答えるとウエルドックの方に走っていく。

アムンゼンも階段を駆け下りてCICに向かう。今日は長い一日になりそうだという直感しながら。

「All Station This is HQ radio check」

『HQ 通信監視部より報告。全部隊通信状況はクリア。』

「Copy 作戦を開始する。第一班は最大船速にてクダツに突入港湾整備を実行せよ。本隊は計画通りに護送船団を組め。各艦対空対潜監視を厳となせ。」

「司令！情報部によると前方16海里に敵艦隊の目撃情報アリです。」
「情報部？まさかあいつらが素直に支援してくれるとでもいうのか？」

「いえそれどころではありません。どうやら作戦について知っていたようで複数のルートからクダツに救助部隊が来るらしいというわさを流すなどの工作を数日前から実行していたようです。」

「どういうことだ？」

「やるなら中途半端は許さないということなのかもしれません。」

「続報です。情報部偵察機からの観測情報です。全て推定値ですが、駆逐艦、二級2000、ハ級4500、イ級12000。軽巡へ級800、ト級が1200。重巡、ネ級300一部改在り。戦艦、夕級1

50、レ級40。正規空母はなし。代わりに護衛としてヌ級軽空母400を発見。観測時点での時間1036。速度を26ノットで北上中。敵偵察機の離陸の確認はなし。情報部はこの艦隊を697艦隊と命名し暫定の脅威度判定をDとする。とのことだ。」

「戦闘前に脅威度判定まで出してきたか。動きが早すぎる。ますますわからんな。第234、235水雷戦隊へ697艦隊を護送船団接近前に葬れ。第96航空艦隊は攻撃機を上げて援護してやれ。第236、237水雷戦隊は空いた穴を埋めろ。」

情報部の動きが気になるがそれはひとまず置いておく。

数はそれなりだが主力艦が少ないことから偵察部隊に過ぎないのだろう。

こちらも40万を超えるなかなか巨大な兵力だがつい最近アムンゼンの指揮下に入った部隊も連携は期待できない。もしこの偵察部隊が所属する艦隊の主力部隊が近海にいればかなり手を焼くだろう。衛星監視システムがハッキングの影響から立ち直れていない状況で敵の正確な位置を正確に把握するのは難しい。

出来るだけ力量を知っている部隊でかたをつけたいがそこに固執すると損失を生む恐れがある。

いずれにせよ艦隊すべてをうまく使わなければ護衛などできない状況が訪れるだろう。

『234からHQ コンタクト』

どうやら始まったようだ。敵は2万程。対するこっちの兵力は二個水雷戦隊で4000程

数の差は5倍ほどあるが訓練施設もなく、連携も取れていない深海棲艦相手ではこの程度の兵力差なら問題はない。

それに今送り出した部隊の力量はよく知っている。

『発第102航空艦隊、鳳翔。5時方向に不審な航跡を確認。各艦対潜警戒せよ。』

「五時方向だど？どっからきやがったんだ。」

この艦隊発見の方を受けてから転進してきたのか、あるいはすでに敵制圧下にあるジャカルタから来たのか。

『発第102航空艦隊、鳳翔。敵潜水艦を発見爆撃開始の許可を。』
「第102航空艦隊。直ちに爆撃機を離陸させる。潜水艦に対する攻撃を許可する。第435水雷戦隊へ船団の突出部となり取りこぼした潜水艦の対処及び弾受けをしろ。輸送船に一発当てさせるな。」
艦娘であれば被弾をしてもこの船やほかの輸送船に収容すれば済む話だ。輸送船一隻沈められると助けられる避難民が4桁ほど減ってしまう。

無常な判断だがそれぐらいしないと厳しいものがある。

『第102航空戦隊加賀です。敵潜水艦の大半は力級と断定しました。現在火力投射を続行中です。』

「H Q了解。」

『こちらブリッジ。雷跡を確認。以後揺れに注意されたし。』

やはりうち漏らしが出たようだ。

「機銃手、魚雷を破壊しろ。こっちの艦隊はこの船を除いてただの商船だ。回避には期待するな。」

そうなのだ。大急ぎでばれずに用意するには商船を借りてくる意外に手はない。そうやって隠したのもどうやら無駄だ様だったがそれは今だから言えることだ。

それから細かい指示を与えたりしてしばらく南下を続けていると突然アラームが鳴り響いた。

「警告！FCコンタクト！方位34！衝撃に備え！」

対艦ミサイルが飛来してきたのだ。

「SeeRAMで迎撃しろ！」

砲雷長の怒号が飛ぶが

「間に合いません！」

と無慈悲な返答が帰ってくる。

「3・2・1・着弾！」

船に轟音が響き大きく揺れる。

「損害報告！」

「右舷後方上部に被弾。浸水は確認されていませんが複数の通信装置がやられた恐れがあります。」

こんなことさすがに想定外だ。確かについ先日深海棲艦側が高度偵察機を飛ばしたりしていることが確認されたが対艦ミサイルを配備しているなど聞いていない。

SeaRAMが機能しなかったのもそのためだ。誰も使い方を知らないのだ。ミサイルなど深海棲艦との戦闘では使い物にならないそれが常識だったのだから仕方ないがそんなことを言っていないとうにもならない。

「ミサイル防衛体制を取れ！いま最も近い海岸まで何海里だ？」

「73海里です。」

「取舵一杯。なるべく海岸から距離を取れ。」

敵が仮に占領地で深海棲艦以外の兵器生産を始めたとしてこの短時間で船舶を作るのは無理がある。

開発期間を仮にゼロだとしても船の製造期間をゼロにすることは物理的に無理があるのだ。

信じたくはないが深海棲艦とかいう謎の技術を持っている敵だ、対艦ミサイルを数週間で開発したとしてもおかしくはない。

地对艦ミサイルならミサイルと発射装置だけの生産で物理的な矛盾は生じない。

ならば地上から距離を取るのが正解だ。幸い敵の第一波攻撃は艦娘数十万の圧倒的な弾幕によってほとんどが破壊されていた。

被弾したのは司令船への一発とそれぞれ別の輸送船に一発ずつで2発合計で3発命中したようだが輸送船をも被害は軽微だった。

「輸送船団は地上から一定の距離をとって北上する。情報部にボルネオ島西岸を偵察させろ。第95、96航空艦隊は輸送船団から離脱、ミサイル発射地点への空爆準備を開始せよ。第42艦隊と第153巡航艦隊は沿岸砲撃の準備だ。本艦はこれより敵ミサイルの有効範囲に関する調査を行う。」

「正気ですか？」

「ただの輸送船でやるよりはましだ。」

「それはそうですが。」

「ここで前進を止めれば敵はどんどん北上してくる。そうなればミサ

イルの射程範囲は広がり、クダツに残された人々も殺される。安心しろ。自分の命を引き換えに避難民を救うなんて自分に酔ったことは考えていない。」

「それならいいですが。」

「船団を組みなおす。輸送船の護衛を少し削り先行する本艦の護衛についてもらう。敵のミサイルが飛んで来たら撃ち落とせ。幸い敵のミサイルは超音速兵器ではない。通常の弾丸でも迎撃は可能だ。」

第一波で打ち込んでこなかっただけで超音速兵器がないとは限らないのだがそんなことをあえて言う必要はない。

そんなことを言い出したら敵が弾道ミサイルを持っているかもしれないという悲観的な妄想で東京から逃げ出す羽目になってしまう。

「やると決めたらやり切る。無茶な作戦を実行できるかもしれない作戦にするのが指揮官の仕事だ。やるぞ！」

「了解です。」

下士官たちはそんなアムンゼンを見てシドニーからの撤退戦を思い出していた。

渡り鳥

村上は去っていくCIA職員の中を見送りながら報告を受ける。「そうか、アムンゼンが動いたんだな？」

村上の問いにムーンは答える。

「ええ。アムンゼンは隷下の艦娘を率いてマニラを出港後司令部の命令を無視して南下を開始、その後海南島で補給後カリマンタン島に進路を取りました。それで会合はうまくいったんですか？」

「まあ…… ほどほどだ。報道工作は？」

「反体制的なメディアへの工作も含めて順調に進んでいます。」

アムンゼンを戦争の英雄として祭り上げ、彼を司令部の重要ポストに入れ、防衛連合軍に新たな風が吹いていると世論を勘違いをさせる。

防衛連合軍の信用を短期間で取り戻すための壮大な茶番を演じようというのだ。

「わかった。では私も仕事をしようか。」

「また汚れ仕事ですか？」

ムーンは心配そうに聞く。

「十億人以上殺した私の手に汚れる余地は残っていないさ。」

「だといいますが。」

彼にかかっているストレスは計り知れない。にもかかわらず不思議と彼の顔には疲労は浮かんでいなかった。

シャルルドゴール空港には情報部が用意した早期警戒管制機が待機していた。

「村上少将お待ちしておりました。」

一目でわかった。それは防衛連合軍の装備ではなく米軍の持つ最新装備だ。

「連邦政府の動きが早いのか、それともあつちの既定路線にこつちが誘導されたのか。どっちだと思う？」

「私では知りえないことです。言えるのは今のCIA長官は生え抜き

のバケモノです。」

「なるほど。」

村上は決心したかのようにタラップを上っていく。

機内に入った村上は会議室に入り一連の報告を受ける。

「現状はこんなところですよ。」

「アムンゼンの作戦はこのままだと失敗するということだな。」

「申し訳ありません。情報部には全面的な支援をさせていますがいかんせん敵が予想をはるか上回る戦力を機動的に投入してきています。」

「パース海軍基地艦隊の南下に合わせて敵部隊70万が北上を開始しておりこの部隊が戦域にたどり着けば間違いなく殲滅されます。」

「作戦終了予定日時とその艦隊が戦域に到着する日時を教えろ。」

「終了は4月17日。敵の到着予想は4月15日です。」

「あと一日半か。」

海路で部隊を輸送するのは無理があるだろう。となると……

「ワグナーに例の件がどうなっているか聞いてくれ。」

「九十九里浜のワグナー大佐ですか？」

「ああ。」

「了解です。」

クダツから西北西に58海里

「敵艦載機多数。補足しきれません！」

「情報部からの報告によれば南から大部隊が接近中とのことですよ。」

「交戦中の各部隊、もう抑えきれないと言ってきています。」

「CICでは悲鳴が飛び交っていた。すでに司令船自体の被害馬鹿にならず、通線設備は虫の息だった。」

「きりがなし！進路をクダツに向けて直進しろ！」

「そんなことすればこの船が沈みますよ。」

「今の速力で蛇行して航行しては艦娘も一緒沈められてしまう。作戦に失敗した上にここで兵力を失ってたまるか！」

だが。

直進を始めたその時だった。

「輸送艦に魚雷が多数命中。4隻が速力低下で落伍し始めました……。」

ミサイルをたたくために飛ばした艦戦に未帰還が多数出たために制空権は損失。ミサイル攻撃は止んだが深海棲艦の艦載機の攻撃に対処しきれず空母たちが集中的に攻撃された。さらに商戦を守るために集中体形だったのもまずかった。砲戦の適正距離に空母が多数存在していたのだ。

撤退戦ならそれでもよかったが今回は攻撃側。最初から空母をたたかれないように配置を考えるべきだったのだ。

「第222航空艦隊にまだ艦戦が残っているはずだ。出撃させられないのか？」

「第222艦隊は被害が甚大であったために轟沈を出しながら戦線を離脱しました。艦戦は残っていてもそれを射出する艦娘がいません。すでに彼女らは戦闘する体力を残していません。」

「近海警備群はまだ来ないのか？」

「今の戦況で支援を頼んでも来てくれる艦隊などいませんよ。商船の乗組員をこの船に移して船を放棄。その後作戦を中止して最速で離脱すべきです。」

貴重な輸送艦や艦娘を損失して何の戦果もなし。

そんなこと許されるのだろうか？

自分の傲慢が作ったこの事態の代償を艦娘に背負わせるのがどうしても許せない。

「続行だ。工程の5分の4は消化しているんだ！難民を救助すれば近海警備群もこちらを支援せざるを得なくなる。」

「司令。ラッセル司令長官からお電話です。」

アムンゼンは恐る恐る受話器をとる。

『村上からの伝言を伝える。君の役目はひとまず終わりだ。艦隊をまとめて全速力でクダツに向かえ。交戦は許可しない。以上だ。まあ気にするな奴はいかれてる。君程度で相手にはできないさ。』

「くそが!!!」

アムンゼンは受話器を地面にたたきつける。

受話器のプラスチックカバーは砕け散り中の配線や基盤がそこらに飛び散った。

まだ自分の責任を問う電話のほうがましだった。

自分には能力があると思っていた。

だが結局村上は自分をうまく扱うために冷酷な人間を演じ、あえて失言してオセアニアだけに被害がとどまらないことを伝えたのだ。

自分はまんまとそれに乗せられた。

「司令？」

「あつ……。」

アムンゼンから出たのはそんな間抜けな声だけだった。

「司令！味方爆撃機と大量の輸送機が戦域に侵入してきましたがどうすれば。」

アムンゼンは黙り込んでいた。

「司令！指示をくださいー！」

失意のアムンゼンにはその言葉は届かない。

「終わったよ。私も作戦も。もう不要らしい。」

状況の責任を全てとれるほどアムンゼンは大人でもなければ真の意味で絶望したことがなかった。

アムンゼンは所詮本当の意味で戦争を知らないもやしっ子でしかない。

司令船は戦場の中でもずば抜けて安全で、砲弾の衝撃を肌で感じたのも今回が初めてだ。

アムンゼンの優秀さは軍人としてのものではなく棋士と言った方がいいものだった。

それが村上に付け入る隙を与えた。

「準備攻撃用意！」

村上の指示で爆撃機のウエポンベイが開いていく。

ソロモンの時と同じで空海の連携で打撃を加える作戦を取ったのだ。

だが地形的な有利がなければ同じようにはいかない。そのため村

上は狂気の一手を繰り出した。

「マスタードガスの散布を開始。」

「本当にいいんですね？」

「国連軍はヨーロッパで化学兵器を大量に使っている。何を今さら。」
村上はそう言うが海上に薬物をばら撒くのと沿岸部だけで限定的に使用するのではわけが違う。

「わかりましたよ。 This is HQ Bomber execution。」

その命令で爆撃機が次々に毒ガス散布を開始した。

深海棲艦も艦娘も表皮を装甲化しているが所詮は有機物。化学兵器を防ぐことはできない。適切な防護もなく肌の大部分が露出している深海棲艦には深刻な問題だ。

できることなら神経ガスあたりもばらまきたかったがさすがに米軍の許可が出なかった。

毒ガスで敵の航路を限定し、何とか敵を押さえ続ける。

それでも、こつちが出せる戦力は一万がいいところだ。

情報部の動かせる部隊を何とか拡張しようと試みたが数週間できることには限界がある。

70倍近い戦力差を埋めるのは正直無理がある。

それなら無理せず後退をし続けろばい。

「降下開始！」

敵の目前に艦娘を空挺降下させて戦闘を実行。敵を引き付けたら毒ガス散布範囲を走り抜ける。

艦娘にはあらかじめ毒ガス対策が必要ではあるがアメリカの工業力であれば装備一万セット程度、一週間もかからず用意できる。

「あとは、現場指揮官がどれだけ育ったかだな。」

長門は不快な装備に身を包み飛行機の中でじっと出番を待っていた。

村上不在の間鎮守府に残された艦娘は連日連夜出撃に次ぐ出撃で練度を上げ続け。本土に残された艦娘はワーグナーのもとで訓練を

受けさせられた。

九十九里浜の艦娘と合わせて一万二千の艦娘で毎日毎日訓練を受けさせられた。

ワーグナーは自分たちが客で無くなった途端に豹変した。

村上も大概いかれた野郎だったが、ワーグナーは少し毛色が違った。

訓練の鬼とでも言えればいいのだろうか？

何時間でも際限なく訓練を延長し、72時間無補給で訓練をさせられたりもした。

ようやく宿舎に帰ってきてても寝具は撤去されており6時間の睡眠のちたたき起こされてまた訓練。

ただ不思議と理不尽な仕打ちには思えなかった。合理的には見えない体育会系の訓練だったがどうにもワーグナーの訓練には目的が見えるのだ。

その目的はすぐに分かった。村上はワーグナーに圧倒的劣勢の状況に空挺降下して損害なしで撤退することを要求していたのだ。

その為に無補給無支援でいかに精神状態を保ち疲労を見せずに戦うのか。

ある意味で守られていた艦娘を戦争の泥沼に突き落とし、泥水を啜らせる。それが村上の決定だった。

「やっつけられないな。」

「どうしたの長門？」

長門はそう陸奥に嘆くが、内心全く別の事を考えていた。

「竹野。いや村上は勝手だなと思ってな。」

「指揮官なんてそんなものでしょう？でも案外……。」

「いやではない……な。」

「降下開始2分前。」

いい加減聞きなれたジャンプマスターの怒鳴り声で装備を再確認する。

ただでさえ艤装で動きにくいにもかかわらず毒ガスから身を守るための装備が動きをさらに邪魔する。

極めつけは装甲車などを降ろすための大型パラシュートだ。戦艦クラスの艦娘を一般的なパラシュートで降下させるのは無理だったためだ。

「降下開始一分前！」

「気張って行くぞ！」

長門は指揮下の艦娘総勢50体をそう激励する。

「GO！GO！GO！」

ジャンプマスターの指示で長門たちはいつせいに降下する。

副砲の反動で速度を制御しつつ降下していく。たとえ副砲でも上空から撃ち込めば戦艦級の深海棲艦の装甲であっても抜くのは容易い。

「これで命中させられると思っっているのか？」

そんな愚痴がこぼれるが案外当てられないこともなかった。

弾速の減衰がない上に弾道を計算しなくても狙った場所に当たる。確かに訓練すればできなくはない芸当だがそれを平気な顔で要求するのは狂気ではない。

減速はしたつもりだったが開傘の衝撃は訓練の時よりも大きかった。

体に急激なGがかかる。

「開傘した。」

『了解。援護射撃を開始する。』

パラシュート降下中の無防備な自分たちを援護するためにA—10Xが空域に侵入してきた。

白リン弾をばらまきながら低速で旋回し、的確に深海棲艦にダメージを与えていく。

これができるなら最初からやってくれと思ったりするがそううまくいくわけでもなく最初はうろたえていた深海棲艦の反撃が開始されると次々に撃墜されていった。

被弾すること想定で設計されているとはいってもそれはせいぜい機関砲程度。第二次世界大戦レベルの艦砲を受ける想定では作らない。

「陸奥！見てられない。降りるぞ。」

「ちよつとー！どうするつもり？」

長門は残り十数メートルの地点でパラシュートを切り離してすぐに戦闘を開始する。着水の衝撃で脳まで揺れるが気にしていられない。

無防備な自分たちを守るために戦っている彼らが無防備では本末転倒ではないか。

「一、二番砲塔、てー！」

長門は無我夢中で三、四番砲塔の旋回を待たずに射撃を開始する。

しかしその行動はとても褒められたことではない。敵のヘイトが一気にこちらに向いたのだ。

「落ち着きなさい！現場指揮官が冷静さを欠いてどうするつもり。」

だが、長門はただ冷静に一言

「冷静さを欠いてなどいない。」

と言った。

長門がほかの部隊よりも数秒早く着地したのは情だけの行動ではない。確かに襲われているA-110を救う意味もあったがそれよりも深海棲艦側に指揮官が付いても生まれるほんの数秒の野性的な判断を誘発するための行動だった。

その行動にまんまと引っかけた深海棲艦は長門の方に気を取られ大急ぎで砲塔を回していたがそこから砲弾が発射されることはなかった。

ほんの数秒の間だったがあまりにも無防備な背中を晒しすぎたのだ。

「沈め！馬鹿が！」

長門の砲撃を合図に一齐に艦娘たちが襲い掛かり敵を沈めていく。

ただでさえマスタードガスや、白リン弾などの兵器で混乱していた戦場に艦娘が空挺降下してきたのだ。深海棲艦側にはそれに対応しうるだけの指揮官も装備もなかった。

「敵が引いていくがどうする？」

長門は村上に戦況を説明しがてら指示を求める。

『今のは敵の前衛でしかない。南下して敵の主力と交戦する。』

「正面で撃ち合えばこんな小手先の方法が通用しない火力で叩き潰されるぞ?。」

『敵に冷静な戦況判断ができていれば危険だが敵が今持っているのはよくわからんガスとよくわからん砲弾で攻撃されたかと思つたら突然艦娘がどこから湧いてきた。これの程度の情報で、正確に戦況を判断できるのならそれは魔法の類だ。敵がこっちのボールを剥ぐ前に敵をもつと南に押し込む。』

「了解だ。」

韓信と曹操

アムンゼンは不気味なほど静かな海を航行していた。

よくわからないが敵の攻撃は全て止み、簡単に撃破できる敗残兵のような深海棲艦だけが定期的に輸送船の近くに現れる。それをまるでプロモーションのように素早く排除して、多くの避難民を救出する。

裏で何が起きているのかさっぱりだが、わかるのは自分と自分の部隊が見世物にされているということだ。

「気味が悪いと言ったらありやしない。俺たちが安直すぎたのか、それとも村上たちが規格外すぎたのか。」

そうぼやくと士官の一人が答える。

「どちらも違いますよ。あなたの判断は決して安直などではなかった。ただ若さゆえに手段を間違えただけです。もしあなたがこうやって必死に人々を守ろうとしなければ村上少将は別の見世物を探してきたでしょう。つまり、あなたの行動は村上少将ですら必要だと判断していた。」

「こっちは死地に行く心づもりでここにきた。にもかかわらず村上は誰だつていいと。あいつにとつてこっちは取るに足らない存在だつてことだ。」

「まあ見事に釣られた訳ですから否定はしません。」

「敵部隊壊滅を確認しました。」

「わかった。再度増速。このまま北上する。」

アムンゼンは気の抜けたCICの状況を見てまずいとは思っていたが、今注意しても無駄だろう。自分たちはまたも本当の意味での危機を経験しそびれたのだ。

「配置換えを要請するべきだな。今のままじゃ村上にお膳立てされて奴の手の中で踊る演者にすらなれない。」

「そこまで悲観的にならなくてもいいのでは？」

「悲観的になつているわけじゃない。若さだけで担ぎ上げられているのは癪なだけだ。もう一度キャリアをやり直すよ。それを村上が許

してくれるのかわからないが、俺はまだ若い。何とかするさ。」

「明日を語るのはいいいですが今は彼の手の中で踊ってでも救える人を救いましょう。」

「わかってる。」

作戦開始から三時間が経っても村上は継続して南下を指示していた。その間に村上が搭乗している機体も空中給油を受け、かれこれ丸二日近く空の上にあった。

「まだ南下をするんですか？敵のミサイル攻撃も激しくなってきましたしそろそろ引き上げるべきだと思いますが？」

村上にそう指摘してきたのは若い士官だった。

「いま南下をやめれば敵はどう思う？」

「どう思うですか？」

「ああ。」

若い士官は少し考えて答える。

「増援を警戒して撤退したか、あるいは防衛ラインがあるのではないか、と思うかもしれませんが。」

「そうだな。しかしこう考えるかもしれない。実はたいした戦力ではないのかもしれない。」

「それは……」

「敵に精神的な余裕を与えればこちらの戦力について冷静に分析するだろう。そうすればこっちの化けの皮が剥がれる。」

雑兵の数だけが売りの深海棲艦だがそれ故に指揮官不足は深刻だろう。

しかし、残念なことに人類は指揮官なしの深海棲艦に追い込まれていた。圧倒的な物量というものは小細工など容易く破壊することが出来る。故に、より巧妙な小細工を仕掛け、こざかしい戦い方をしなければならぬのだ。

「ですが、これ以上深追えばいよいよ引き際を見逃しますよ？」

「敵が反転攻勢に出たところでその進行速度は知れている。だがこっちは計画がなくともかなりの速度で後退できる。包囲などさせる気

はない。仮にこっちの想定を超える指揮官がいるのなら最初の攻撃でパニックを起こしてもそれをすぐに收拾してこっちに攻撃を仕掛けてくる。」

若い士官は不満そうではあるが彼には村上に反論できるほどの知識も経験もなかった。

強気な村上だったが、はつきり言って現状では艦娘の命を保証できる程の情報も優勢も確保できていない。

行き当たりばったりとまではいかないが、一瞬でも判断を誤れば部隊が容易に壊滅しかねない。

「爆撃部隊に通達。先行して毒ガスを散布。周囲の気象情報を再確認してくれ。」

村上の指示で機内では情報官がまたせわしく動き始める。

「海上の風は許容範囲内です。付近を航行中の民間船舶なし。汚染についても許容値に収まるものと予測できます。」

「第四次攻撃を承認する。空母は速やかに艦載機を発艦させろ。」

村上の指示で蒼龍は艦載機を上げる。

気が狂うほど何度も繰り返した訓練おかげというか、せいというか限界まで艦載機をぶん回しても回避行動がおろそかになることはなかった。

元から極めて高い戦闘力を誇っていた蒼龍に更なる教育を施せばもはや手をつけられなくなるわけで、中長距離は艦載機で対応し近距離は体術で弾丸の一つすら使わずに深海棲艦を引きちぎる。

しかしすでに蒼龍だけが突出している訳ではなく部隊全員の実力が彼女に怒号の勢いで迫っていた。

もともと戦場で戦うことを想定して訓練をしていたわけではない蒼龍だったが、それでもそこらの艦娘ではとても考えられないレベルの実力だった。

「前方5海里の海上に落伍した深海棲艦を確認しました。攻撃しますか？」

加賀の提案に蒼龍は首を傾げ

「そんな弱った深海棲艦にこっちの爆弾を使う価値はない？ 先行している巡洋戦艦部隊に位置情報を打電。そっちに処理させなさい。」

艦載機の爆弾を使えば一度母艦に戻って再補充する必要がある。飛行隊が優先して処理すべき目標ではない。

その通りだといえそうですが安全を優先するならば叩けるときに叩くべきだ。

しかし今は安全策が取れないから防護服を着て毒ガスの中を進んでいる。

そして蒼龍の予測は的中した。

「観測機より報告。十一時方向より敵空母及び巡洋艦を主力とする部隊が反転してこちらに向かってきています。距離は15海里、こちらとの相對速度は82ノットです。」

「わかりました。艦隊増速。全航空隊に攻撃を指示せよ！ 敵の部隊の目的は威力偵察だ。時間をかければ敵はからくり気付く。速やかに叩き潰せ。」

『第43艦隊榛名です。こちらこそちらと同じ敵艦隊を補足しました。砲戦に移行します。』

先行していた巡洋戦艦部隊の一つが支援を申し出てきた。

蒼龍は考える。航空部隊だけが攻撃を仕掛ければ、時間的には最速で敵を葬ることができる。だがそれは最善なのか？

おそらく違う。空海が連携して攻撃を仕掛けたほうが敵の報告はより大きな誤報を生み出す。

敵に恐怖を植え付け、敵の指揮官の頭を失敗の二文字で埋め尽くす。

「村上少将。私たちの航空隊の指揮権限を委譲します。」

蒼龍の提案の意図を一瞬で理解した村上は

『了解だ。第43艦隊、君たちは私が直接指揮を出す。榛名問題ないか？』

『はい。榛名は大丈夫です。』

『よし了解した。』

蒼龍はしばらく通信に耳を傾けて村上の指揮を聞いていたがこの

数か月で指揮を学んでから、彼の指揮がどれだけ常軌を逸しているのかよく分かった。

航空隊への指示では多くのものが、低空だとか急降下だとか言うが彼はそんなことは言わない。

効果的な戦術であることには疑いのようなない急降下爆撃だが情報部からの正確なデータリンクがある状態でわざわざリスクの高い急降下爆撃を行う必要などない。

A W A C S に積まれたコンピューターで最適な投下時間と高度を算出して初撃で敵の対空砲火を弱体化させ、今度は急降下爆撃を行う。

機体が急降下する音に気を取られている敵に静かに侵入した雷撃機からの本命の攻撃を確実に当てていく。

そうして戦艦を無力化してから第43艦隊の登場だ。怯えきった敵に派手な砲撃を加えていく。

あえて小型の艦艇を見逃しつつ敵を蹴散らす。

敵部隊はこちらの総戦力の三分の一程度の規模だったがこちらは十分の一の戦力も使用することなく敵を壊滅させたのだ。

その間に別の部隊が敵の敗残兵に肉弾戦を仕掛けて執拗に痛めつける。

ようやく第一次攻撃の損害を把握して立て直しを図っていた敵艦隊はまたもパニックに陥るだろう。

そして敵の目である無人偵察機はF-35Xをはじめとする米軍の戦闘機に片っ端からたたき落とされ戦況が優勢だと判断した米軍による地上のミサイルへの攻撃を開始された。

「こうなってしまうては立て直しに苦労しそうね。」

加賀がそうつぶやくのを聞いた蒼龍は

「慢心は身を滅ぼすかもしれませんよ。」

と注意したが正直なところこの短期間での一万近い兵力を吹き飛ばされた敵がこちらの作戦終了までに立て直してこれると思えなかった。

もし避難誘導が遅れて敵の反撃が始まったとしてここまで南下し

てしまつては再侵攻して来るにしても時間がかかる。それに村上は容赦なく毒ガスをばら撒くだろうし簡単に進むことなどできるはずがない。

もし目標が敵殲滅であつたのなら結果は違ふかもしれないが、時間稼ぎだけが目標の今回の作戦ではもう敵が戦略的に勝利することは起こりえないだろう。

陸上に上陸してゲリラ戦を実施する計画がおじやんになつた村上は今どんな顔をしているのだろうか？

ここから敵が巻き返してくる可能性が低いという報告を聞いて村上は安堵と同時に戦術研究の機会を失つたことを残念に思っていた。

勝因は敵の攻勢自体に無茶があつたことや、大規模な支援が受けられたこと、練度が極めて高い艦娘で艦隊が構成されていたこと、戦域までの移動での消耗がなかつたことなどいろいろだ。

だが最も大きな理由は敵にはここで無理に押す必要性が存在していなかつたことだろう。

こちらが無理に無理を言わして戦つたのに対して敵にとって今回の戦闘は『倒せたらいいな。』程度の重みでしかなかつた。

もしこちらに損害が出ていればそれだけで戦略的には負けだつたのだ。

そのため村上は敵が反撃に出た時点で部隊を上陸させてなれない陸上での戦闘で地味な戦闘を繰り返すつもりだつた。ゲリラ戦は戦闘センスに頼る深海棲艦には部が悪いと言う仮説を確かめるためにもできれば実施したかつた計画だつたがまたいつか。いやどうせやらなければいけないときが来るだろう。

東京 防衛連合海軍本部ビル

ビルの前には報道陣が並び、その騒動の中心で方に星条旗を付けてむつかしい顔をしている軍人が一人。

その目はビルのほうからこちらに向けられている銃口を見ていた。彼はそれに一切動じることなく腕を組んで部下から受け取つた三

つ折りの紙を開いていく。

その銃口に一切屈していないのは彼だけではなく多くの記者も同じだった。

理由は簡単だった。

男の後ろにはビル丸ごと吹き飛ばすのに十分な戦車が並び、上空は大量の攻撃ヘリがビルを取り囲むように飛んでいたからだ。

男は紙を開き終えると声を張り上げてそこに書かれた文を読み上げる。

「防衛連合軍憲章第一条第四節により現時点を持って司令長官を解任。現在の司令部を解体し、最高司令部に所属する指揮官は速やかに出頭せよ。この命令に従わない場合、防衛連合軍憲章第十二条第三節に基づいて強制執行を実施する。強制執行に際して発生する人的、物的、その他あらゆる損失に大してアメリカ合衆国政府、及び英国亡命政府は責任を負わない。以上。第53代アメリカ合衆国大統領リカルド・フォン・シューマン。英国亡命政府首相フレドリック・ジェームズ。」

読み終えた男は一つ小さな息を吐くとまたその紙を丁寧に折りたたむと部下に渡してビルのほうに向かって歩き出す。

防衛連合軍の兵士たちは震えながら彼に銃口を向けるが結局砲声の一つもならなかった。

情報部の部隊も、憲兵隊もアメリカ側につきこのビルをすでに離れていた。抵抗してくる部隊がないのも当然だろう。

ラッセルがアメリカに歯向かって抵抗するはずがない。日和見で世渡りのうまい彼が自ら逃げ道をふさいだりするわけがない。

司令長官室に乗り込むとラッセルは驚いた演技して見せるがその目はいたって冷静に自分の保身だけを考えていた。こんな状況で冷静に保身を考えられる人間はそうそういない。だからこそ司令長官という不相応なポジションに立てたのだろう。

「ポーク・ラッセル。君の身柄はこちらで預からせてもらおう。手を頭の後ろで組め。書類とパソコンに触ればここで射殺することになるからな。」

またラッセルは怯えたような演技をするが彼は全く動じていない。恐らくアメリカ政府にいる知人のことを思い出して使えそうな人間でも見繕っているのだろう。

関係者の拘束が済んだ後は大量の文章とハードディスクを回収する。

ただ今度も情報部と村上少将はいかにも怪しいにもかかわらず調査対象外だった。

不満だがCIA長官が直接絡んできた案件だ。下手に動けば二度とアメリカに帰れなくなる。

「隊長……。」

「言いたいことはわかるがやめておけ。知らないほうがいいこともある。」

部下をそう諭し、彼は執行を再開した。

その翌日。連邦政府と英国の指示のもと新たな人事が決定された。

司令長官に中越。最高司令部の人間も大部分が入れ替わりアムンゼンも抜てきされた。

彼は拒否したらしいが、世論形成もすでに終了しており彼はすでに英雄にされてしまっていた。

腐敗した司令部の命令を無視して多くの市民を救った彼が英雄でなければ誰が英雄と言えようか？

そんな勢いで反体制的なメディアですら彼を絶賛した。

その流れはアムンゼンごときが止められるものでもなかったし彼がインタビューで村上がやったことだと説明してもその記事が世に出ることはなかった。

その村上は司令部から追い出されて戦術研究課に異動させられることになっていた。

ただ、そんな人事は見せかけのものでこの大規模な人事の裏で情報部に竹野という名前が追加されていることに気がついたのはごく少数だった。

神託か？執行力か？

三週間前 東京 アメリカ大使館

村上は大臣の車に同乗して大使館の前に来ていた。

「相変わらずこういう時、あなたの仕事は驚くほどお早いですね。」

村上は官僚ではないからこそ言える小言を言ってみる。

「草案を提出しなくても職を失うことはありません。けれど、君が持ってきた話は言ってみれば爆弾と同じです。手早く他人に擦り付けないと私の政治生命が危ぶまれます。」

「国民が聞けば激怒しますよ。」

村上は苦笑する。

「草案など放っておいても官僚が仕上げてくる。この国の政治家に必要なのはどんな非難も、国民の悲痛な声も聞いても動じない精神力ですよ。」

「あなたは下手に老害にならず、老獪になっている分たちが悪い。」

「そんな私を利用する君も同じ穴の貉ですよ。」

悪い顔をして微笑む大臣を置いて一人で車を降りると大使館のゲートに向かって歩いて行く。

「誰が来ているのやら。」

警備をしている兵士たちは格好だけは正規軍のそれだったが、いい加減村上にもわかるようになってきた。彼らは裏で仕事をするのが得意な奴らだ。

目を合わせずにこちらを観察するのがうますぎる。

だからと言ってこちらから仕掛ける意味も必要もない。

案内に従って応接室に入り出てきた紅茶に手をつける。

久々に味わって飲んだ紅茶の味は格別……でもなんでもなかった。

どちらかといえbaumずい方の味だった。

顔をしかめていると笑顔で応接室に男が入ってくる。

「初めまして。私はポール情報官です。CIAの日本支部責任者です。」

ニコニコと笑顔を浮かべながら手を差し出してくる自称日本支部責任者に対して村上も笑顔を向けて握手をする。

歳は40代ぐらいだろうか？整っているわけでも不細工なわけでもなくただ地味で印象に残らない顔と雰囲気をもとっていた。

「それでご用件とは何でしょうか？」

流暢な日本語で話を始めるポールに村上は笑顔を向けたまま言い放つ。

「その前に自己紹介をしてくださりませんか？」

応接室はあふれんばかりの笑顔に包まれながら沈黙する。

ムーンにあらかじめ日本を担当している責任者を調べさせておいた。

たしかに名前はポールで顔写真もなかったため目の前の男が偽物である保証はない。だがここで指摘しなければ目の前の男の協力を引き出すのは極めて困難になるだろう。

そしてポールは突然表情筋から力を抜きトーンを下げて言う。

「もしお前が私の正体に疑問すら抱かないようであれば私は貴重な時間を無駄にしていたところだったよ。」

「それで？あなたは何者なんです？」

村上の問いには答えるつもりなどないようで、村上の言葉を無視して話を強引に進め始めた。

「俺はお前を利用すべきかどうか決めかねている。信用できるかどうかも怪しいうえに能力も不確かだ。」

「それはお互い様ですよ。CIAだからと言って無条件で能力と信用が保証されるわけではない。」

ポールはこちらの言い分を完全に無視して切り返す。

「主導権がどちらにあるのかは明確だ。ムーンを引き入れられたのはお前が彼女の必要とする力を持つていたからだ。だが俺にはお前が提供する小規模な軍事力など必要ない。要件を聞くかどうかは俺が決める。お前にはどんな魅力があるんだ？俺の興味を惹いてみる。」

ポールは乱暴にそう言い放ち、ネクタイを強引にほどくと机に叩き付けて、ラップトップパソコンを取り出しこちらに興味なさそうに作

業を始める。

「あなたはCIA長官、セドリック・フォン・ブラウン。そうですね？」
ブラウンと呼ばれた男は少しも動揺することなく作業を続け片手間に答えた。

「ある程度頭が回る人間であれば状況から判断できることだ。それだけか？」

ブラウンの薄い反応を村上の方も特に気にする様子もなく勝手に話を進める。

「この映像を見ていただけますか？」

そう言つて村上はタブレットを取り出す。

「お待たせしました。」

そう画面の中の人間に声を掛けると返事が返ってくる。

『CIA長官殿に顔をみられるとまずいのだが。言つても無駄か？』

あの汚職官僚がそう文句を言う。

ブラウンは少しだけ意外そうな顔をして官僚を見る。

「厚生労働省職業安定局労働市場分析官の西村陽一。それで？」

ブラウンは一瞬で官僚の本名と役職を言い当ててまたパソコンの画面に視線を戻す。

『まさか幹部全員の名前を覚えているとでも？』

西村が驚きながらそう聞くとブラウンは答える。

「そんなわけないだろ。ニサエルならやりかねんが俺にはそんなことできない。まさかそこまで暴れておいてCIAにマークされていないと思つていたのか？」

『どこまで知つている？』

「答える必要がない。まあ、大概のことはばれていると思つたほうがいい。」

『……』

西村は微妙な顔をして黙り込む。

「それで？彼とお前を仲間にするメリットの間にどんな関係性があるんだ？」

確かに西村は強力な手札となりうる人物。だがそれだけだ。

CIAにも同様の手札がある。それにすでにマークしている人物であれば村上を挟むことなくCIAが直接彼を脅すなりすればいいだけの話だ。

「AaronMankindはCIAによつて作られた。違いますか？」

その言葉を聞いてブラウンが動揺の色を示す……わけがなかった。

「随分と脈絡のないことを言うんだな。AaronMankindはCIAと敵対している。それがどうして俺たちが作ったものだ？」
冷静に、そして興味なさそうにそう聞く。

「たしかにAaronMankindは体制に反抗し防衛連合軍に損害を与えている。だがそれは致命的ではない。彼らは民衆の不満をまとめ上げてガス抜きをしているようなものです。重大な損害が出た先日の攻撃も結局は後ろにニサエルがいた。あなた、あるいはニサエルは、カルトが出てくることを予見していた。だから先手を打った。反体制派の暴走をコントロールするために工作員を潜入させようも組織自体を自分たちが作ったほうが手っ取り早い。」

「確かに幹部を全員こちら側の人間で固めればまずCIAの関与がばれることはないだろう。だがそれは妄想に過ぎないな。」

「では、どうして彼がAaronMankindとCIAのセーフハウスを行き来していたのでしょうか？」

村上は手札を切る。

『ほら、お前の上司だぞ。』

ブラウンは声が聞こえた画面の方を見る。

「そう言う事か。」

ここに来てようやくブラウンは作業をやめてこちらの方を向く。

「言わなくても分かっていると思いますが、彼女はスコラーヴェ・ジャコ・アナスタシア。AaronMankindの第1階位神官です。そしてあなたの部下だ。」

「記憶がないな。」

ここでもしブラウンが黙り込むのであれば打つ手はない。

潜入している工作員はCIAの名簿から消される。二人がつながっている証拠など存在しない。

彼らの頭の中をのぞいて。

「貴方は私を試すためにここまで来た。わざわざあなたの貴重な時間を割いてまでもここに来たにもかかわらず何の収穫もなく帰るつもりですか?」

「俺がお前の力を必要だとも思っているとも?」

「そうでなければあなたの行動を説明できない。」

「俺がお前のためだけに日本まで来たとも思っているのか?何かのついでだとは考えなかつたのか?」

ブラウンはなかなか認めないが「こころで終わらせに行く。」

「私はあなたが否定すればするほど強固に持論を支持します。あなたが何を言おうと無駄です。私の妄想が事実であろうがあるまいが私は以後あなたの邪魔をし続けますよ。」

ブラウンと同じ土俵で戦っても勝ち目などない。ならば場外乱闘でも何でもしてやればいい。

致命傷を負わせることできなくとも耳元で飛び回るコバ工程になれればそれで十分だ。

「協力を断つても問題は生じないが、細々とした厄介なことを押し付けられる。最低限の実力を見せながら魅力ではなく負の要素で俺を動かすということか。」

ブラウンはこの応接室に到着した段階で、すでにどうするのか決めていた。

「いいだろう。君が望むなら隠されてきた真実を教えてやろう。」

「望まなければ?」

「隠されてきた真実があると知っていながら私の管理下にないお前を生かしておく理由はなくなる。」

「殺されないほうの選択肢でお願いします。」

「まず何から話そうか。そうだな、君の妄想の真偽を教えようか。間違っていない、だが正確には正解でもない。Aaron Mankindが成長を始めた段階で背教者を粛清すると言つて幹部を大勢殺

害して組織ごと乗っ取った。より、リアルなカルトを作るために教祖だけは利用させてもらっている。残念ながらCIAのカリキュラムと言えども、頭のおかしいカルト教祖を作ることはできない。奴らは根本的に頭がおかしいが謎のカリスマで人を魅了する。」

「そしてニサエルは教団を使ってすべての発端となった何らかの組織と通じていた幹部を殺害した。そして、その後、彼はその組織に寝返った。どうしてでしょうか？」

「お前もある程度わかっていると思うが、考えられることはいくつもある。彼が多くの内通者を組織にとつて不利益をもたらしかねない存在だと判断した。あるいは交渉のためだけに虐殺を実行した。」

「ですが本当にそれだけなのでしょうか？」

ブラウンは一つため息をついたかと思うと封筒を取り出し机の上に置く。

そして一言。

「一から説明する必要があるな。Project Noah. これがすべての始まりだ。」

とだけ言った。

ノアの箱舟はよく知られた物語だ。神が穢れた人間に失望して善人たるノアに避難のための方舟を作らせて世界を一度洗い流したという話だ。

悪いとらえ方をするのであれば、神が自分の作品が気に食わないと言う極めて身勝手な理由で世界を破滅させ、自分にとって都合のいい人間以外を強制排除したという話だ。

「それは地球を方舟に例えて世界政府の設立を目指す計画だったり…… しませんよね。」

「残念ながらそんな素晴らしい計画ではない。Project Noahは地球からアメリカ政府が選んだ人間以外を消し去るための計画だった。」

淡々と、何でもないかの様に、白状した。

それは、村上が考えうる限り最悪の想定だった。

地球号の人員整理計画

ブラウンは淡々とこの戦争の真実について語り始めた。

「計画が始動したのは1950年の4月。ソ連が核実験を成功させたことに伴ってアメリカは一方的な優位を失った。そこで軍部はトルーマンにとんでもない計画を提案した。それがノア計画だ。そしてそれを承認させた。彼の名誉のために言っておくが戦争の勝利から数年しかたつていない状況で大統領と軍部のパワーバランスがどうなっているかなど言うまでもないだろう。そんな中でマツカーサーを解任した彼は十分その責務を果たしている。」

「ですが、次の大統領が計画を止めれば済むだけの話では？」

「本当に軍部の統制下にあった計画であればそれだけで終わりだ。だが計画はすぐに軍の手の中から離れていった。ノア計画を主導するArk機関が設立された。その後、大統領職には任期があり、情報漏洩を防ぐためという言い分で、大統領ですら知ることが出来ない極秘計画が誕生した。そしてそのArk機関の監視を軍から引き継いだのが当時、設立されたばかりのCIAだ。」

「CIAは手綱を握りなおせたんですか？」

「当時のCIA上層部は握りなおせたものだど勘違いしていた。計画立案者の能力についての見積もりは甘く、本人が持っていた危険思想を矯正しようとしなかった。」

「危険思想？」

「彼は世界初めての核実験を学生の時、教授の招待で観覧していた。その時彼はこう思った、人類は神に成り代われる。と。その記録は軍によって削除されマンハッタン計画に関わった一部の物理学生の名前も削除されていた。設立当初のCIAが軍が隠していた機密情報にアクセスできるはずもなく危険な人物を中核に置き計画は本格的に稼働し始めた。米国政府と計画のかかわりを隠すためにレイヴン開発投資銀行が設立されたことは知っているだと思うが、とにかく計画の存在を知っていた人間は少なく、倫理など無視した計画だったという事だけ知っておけばいい。」

「話を聞く限り、核兵器で世界を焼き払うと言うのがノア計画の概要ということになります。ですがそれでは艦娘や深海棲艦について説明出来るのでは？」

「核兵器を全世界で使用すれば政府によって選ばれた人間の住処も失われる。そこで軍を使用せずに人類の分布を大幅に変化させる必要性が生じた。」

「それが深海棲艦？」

「いや。その役割は本来艦娘が負うはずだった。」

「艦娘がですか？」

「そうだ。深海棲艦は意図的に生み出されたものではない。」

「そこら辺の事情に目をつむったとして、深海棲艦も艦娘も今の技術水準で作ることが出来るとは思えません。」

「そこで何かしらの計画が起動され技術的な問題を解消したらしいがその計画に関してArk機関側からCIAには何の説明もなかった。」

「問題にならなかったのですか？」

「それ以上の問題への対処にCIAは追われていた。政府が求めたのは非現実的な計画ではなくより現実的な対ソ連戦闘計画だった。同時にCIAは中南米への介入を強めていた。チエゲバラの息の根を止めるため、カストロ議長をこき下ろすため、目的は様々だったが当時のCIAには自分の下部組織を監査して監督する余裕はなかった。」

「まさかそれで数十億人を殺すことが出来る計画の監督を怠ったのですか？」

「CIAを出し抜けるのはKGBだけ。そんな考えが当時のCIA上層部に蔓延していた。能力もない、スパイと言うものが何かよく知らない。そのくせ血の気だけはある戦地帰りの閣僚どもには部下を怪しむという考えが根本からなかった。」

「では計画が見直されたのはいつなんですか？」

「何度か計画を見直そうという話が上がってきたがそのたびにArk機関の担当者が巧みな説明をして切り抜けていた。」

「巧みな説明？」

「計画の凶暴性を一切説明せずに自国の威信が低下していることをついでに予算を捻出させたり、戦略兵器の新設計など研究の分野を拡大して何とか予算を搾り取ろうとした。」

「その努力の甲斐あってソ連が崩壊するまでは計画を維持し続けた訳ですね。」

「そうだ。だが1995年の会議で計画が明らかに時代錯誤であることや詳しい計画の内容の開示をArk機関側が拒否したこと、さらには世界を容易に破壊しうるライバルが崩壊したことで計画は存在意義を失っていた。結局その会議で計画の即時停止と研究成果及び設備の押収が決定された。」

「けれど研究所には何も残っていなかった。」

「その通りだ。CIAの部隊が研究所に突入したときすでにArk機関は姿をくらませていた。レイヴン開発投資銀行の経営権すら奪い返せず、強硬手段に出ようとしたCIAは大統領に制止された。」

「莫大な予算をとんでもない計画につき込んでいたことがばれるのを恐れたということですね。」

「どうだよくある話だろ。見逃せば数十億人が死ぬかもしれないということに目をつむればな。政治家たちは計画を本気で実行しようとしている人間がいるとは思わなかった。それに技術的に無理があると複数の軍関係者から説明を受けたらしい。」

「けれどArk機関にはその技術力あった。」

「これを見る。」

ブラウンは封筒から数枚の写真を取り出しそれをこちらに見せてくる。

その写真には艦娘らしきものが映っていた。

「この写真は第一次フィリピン海海戦でとられたものだ。」

第一次フィリピン海海戦は人間と深海棲艦の最初の戦いだ。少なくともそうであるはずだった。

「第七艦隊を壊滅させたのは……艦娘？」

「この写真を見る限りそう言う事になる。」

「艦娘が敵であるならば現在の状況を説明するのが極めて困難になります。もしそれが事実であるなら今人類に打つ手はない。深海棲艦だけでいっばいっばいの人類が艦娘までも相手取って戦えるはずがないわけですから。」

「そうだ。もし艦娘が敵であるのであれば人類は抵抗が無意味な状態だ。いや、人類の大多数と言った方がいいか。ノア計画で生き残るごく少数の人間にとっては危機でも何でもないからな。」

村上はブラウンのとらえにくい態度に多少イラついていたが一度冷静になつて考える。

「艦娘は舞台装置?」

「ようやく気が付いたようだな。人類が本気で抵抗すれば深海棲艦の脅威など数年あれば排除できる。人類は平和的な外交手段では連携できないが強大な敵に抵抗するためであれば簡単に連携する。だから拮抗を演じるために艦娘は用意され、その未知の存在を容易く受け入れさせるために深海棲艦と云ういかにも邪悪な見た目をした艦娘よりも未知な敵を作り出し人間のくだらない正義の尺度を利用した。」

「けれど、Ark機関の思惑通りにはならなかった。」

「Ark機関の想定をはるかに上回る程に人間は醜かった。Ark機関はたった一年で艦娘を改造し妖精と云うインターフェイスを作り上げ今のレベルの人類でも艦娘を利用できるようにまでした。にも関わらずそれ以外の人類は大量の兵士が死んでいく現状に目をつぶり、勝てるかどうかわからない戦争であるにもかかわらず戦後処理について話し合ってみたり、混乱に乗じて商売敵の国に火種をばらまき混乱を招いたり。と、ろくなことをしなかった。」

「中国の内乱にやはり米国が関与していましたか。」

「言い訳だが、CIAが関与しようがしまいが燃え上がるには十分な火種があつた。」

「ですが引き出せたかもしれない協力の芽を早々に摘んでしまったことに変わりありませんよ。」

「話を戻す。艦娘が舞台装置としての役割を終えるタイミングは分か

らんが着々と人類は支配地域を損失している。Ark機関がフロンティアとして必要と考えている領土がどれほどあるのかによってタイミングは変動するがアメリカ全土、あるいはヨーロッパ全土程度だろうか。」

「そのどちらかから軍が撤退すれば全世界は核の炎に包まれると?」「だろうな。恐らくミサイル防衛が無駄な量の飽和攻撃を仕掛けてくるだろう。敵の技術水準を考えればその程度容易だと考えるべきだ。」

「ではもし艦娘と人類が深海棲艦を押しつけたとしたらArk機関はどう動くでしょうか?」

「さあな。少なくとも人類が団結しているところを見て感動し、計画を中止するような奴らではないことは確かだ。艦娘の脳にチップが仕込まれていて、たった一つの指令で人類に歯向かう可能性も否定できないいな。」

ブラウンは何かの映画で見たことがあるような話をするがその可能性も現状否定できない。

人類が艦娘への依存度を高めれば高めるほど危険は増していく。国連軍が存続しているのは事態を把握しているアメリカ上層部の人間がそうさせているからなのかもしれない。

「そう悲観的になるな。艦娘の数と、深海棲艦の数、比べて見ろ。チップだとかを仕込むまでもない。」

それはそれで悲惨な事態だ。だが確かに自分を神か何かだと勘違いしているArk機関の連中がチップを仕込んで騙し討ちというストーリーを望むとは思えない。

それよりも神から最後の慈悲を与えられながらもそれを使いこなせず敗北していった下等な人間達と言うストーリーの方が彼らにとっては都合がいいだろう。

「それで?まず何から始めるべきですか?」

「お前の考えを述べてみる。いや考えではないな。お前の計画ではこの後どうする予定なんだ?」

「まずは現在の防衛連合軍上層部の首を飛ばします。そして二サエル

が裏切ったことを大々的に公表して敵を明確化します。」

「ノア計画について公表すれば米国の立場はなくなる。いま米国の協力なしに戦闘を続行するのは不可能だ。」

「だから生贄が必要なんですよ。CIAにすべての罪を擦り付けて沈めるんです。」

「CIA長官に対してよく言ったものだな。」

「貴方だってこれ以外に選択肢がないということを知っているはずですよ。」

「用意できるのであればほかの生贄が欲しいところだがこれだけ大きな計画を裏で実行していたと公表して信じてもらうにはCIAほどの巨大組織でなければ役不足だろうな。だが残念ながらCIAを生贄にすることは許容できない。CIAには今後もしなければならぬことがあるということもあるがそれ以前に、CIAの暴走と言う結論では結局アメリカが非難を受けることを免れない。」

「自国が起こした問題にもかかわらずこの期に及んで自己保身のためにまた隠蔽ですか？世論が求めているのはもつと単純な対立構造です。Ark機関の事を公表して複雑な事情を説明するよりももつと単純な……」

「気が付いたか？単純な構造にしたいのならCIAを突然引つ張り出してくるよりも簡単な方法がある。」

ブラウンはただ冷酷にそう告げた。

「君の協力の申し出を受ける代わりに私たちが要求することはただ一つだ。」

「それが本当に交換条件になるとでも思っているのか？」

ブラウンは鼻で笑ったかと思うと

「私たちの要求で君が失うものはいずれ君自身の手によって結局損なわれるものに過ぎない。違うか？」

ブラウンの事を甘く見ていたことは否めない。だが間違いなくこいつはニサエルの上司としてほんのわずかな時間だったかもしれないが彼の事を制御下に置いていた実力を持っている。甘かったのだ。こちらの考えも計画も全て知った上でこの男は今日この場所にいる

のだ。

「条件を飲みましょう。一か月以内に主要国の首脳あるいはそれに近い権限を持った人間を集めてください。」

村上にはそう言うしかなかった。

「一か月？二週間あれば十分だ。連絡役は西村に任せる。以上だ。」

「計画の説明はいらない？」

「防衛連合軍も、国連軍もぶっ壊し、人類共同戦線を作らせる。そんな単純な計画、わざわざ説明されなくとも理解できる。」

ブラウンはそう言うのと応接室から出ていった。

そこから話はスムーズに進んだ。会談で多少もめたがアメリカ代表が強引に話を進めて国連軍代表者を半ば脅迫するような形で同意させた。

『準備はすべて整ったと？』

「いや。まだだ。」

村上は西村と会話しながら最後の調整をしていた。

『何か足りないのか？』

「プロパガンダが不十分です。防衛連合軍への民衆の失望を取り払うためにはもっと強力な手が必要なはずだ。」

『あいにく私が見える手札に強力なプロパガンダを打てるものはありませんよ。』

「報道各社に記事を書かてください。」

『どんな？』

「物語に出てくるような『英雄』の話です。」

『記事じゃないのか？』

「大半が真実だと信じる物語は記事と同じですよ。」

『あくどいことばかりうまくなくていくな。感心しないぞ。』

「あなたが言えることじゃないでしょう。」

その二週間後アメリカ、日本、フランス、ドイツ、ロシア、カナダ、ブラジル、イタリア、英国亡命政府の各首脳が集まり会談が開かれた。そこで防衛連合軍と国連軍の統合について協議が開始されること

になる。

New Deal 作戦

英米による強制執行から2か月。防衛連合軍の各部署ごとに国連軍や米軍と統廃合を繰り返してどこかで綿密な打ち合わせが行われたのではないかと疑うほどの速度で組織の再編が進んでいた。

「それで？組織の名前は公募で決定するのか？」

「現時点ではその予定です。」

中越の質問に山本が答える。

「どうして私がニサエルとラッセルの尻拭いをさせられているのかねえ。」

「信頼できる人間の中で最も能力が高いからでしょうね。」

「村上はもう信用に値しないと？」

「そんなことはないでしょう。彼は戦術研究課に配属されたそうですよ。」

「なら、情報部の竹野という男についてどう説明する？」

「それは……。」

「彼について調べてもらいたい。」

山本は微妙そうな顔をして

「私はただの秘書ですよ。情報部の人間を調べるなんて無謀なことはありません。」

「でも四年前まで村上の事をCIAから守っていたのは君じゃないのか？それとも防諜と諜報は違うと？」

「確かに私が裏でいくつかの件をさばきましたがその程度ですよ。」

「そうか。再開しよう。報告の続きを。」

「はい。ヨーロッパでの撤退戦では損害を許容範囲に抑え第4次防衛ラインまでの撤退を完了しました。これでフランス、オランダ、ベルギーのほぼすべてが敵の手に堕ちました。代わり現在は山岳地帯で強固な防衛線を構築しています。」

「イタリア半島からの撤退も予定されていたな？」

「イタリアの保持は海岸線の長さからして現実的ではないという判断ですね。それが何か？」

「いや。イタリアの文化財はどうなってしまうのかと思つてな。」

「気持ちばかりですが、文化財のためだけに犠牲を強いることはできませんよ。」

「もうこれ以上の損失は勘弁してほしいな。」

その言葉には気力がなく、中越の表情は大規模な攻勢計画の直前にはとても見えなかった。

「ええ。同感です。」

中越は目の前のブラックコーヒーを一気に流し込むと姿勢を正して言う。

「New Deal 作戦の準備状況は？」

「あなたが推した、飛龍案をアムンゼンが修正したものが認可されたようです。現在投入予定の部隊の再教育を待っています。」

「ようやく認可されたか。それで、第5次再編計画に問題は？」

「情報部所属になっている艦隊が報告を拒んでいますですがそれ以外は問題ありません。」

「胡散臭い野郎の胡散臭い部隊か。」

「あなたにとって村上是部下以上のものだったのでは？」

「彼は官僚で私は軍人。いつかは決別する運命だった。彼は賢い男だ。私の信頼を得ることが最善だと判断していただけだよ。」

中越は少し悲しそうな顔をしてコーヒーを啜る。

「そう言うものですか。」

「軍人と役人は本来仲良くできないものさ。」

中越はそう言って大量の資料を憎たらしそうにまとめて立ち上がる。

「軍人の仕事をしてくるよ。後は任せたよ。」

そう言って部屋を出ていく。

「了解です。」

「ん。」

とだるそうな返事をして彼は基地に向かった。

「だから！何度言えばわかるんですか？私の部隊ならばこれだけの敵を相手にしても問題ありません！」

「落ち着け飛龍。君の大隊長としての腕は認める。だがな、一騎当千の部隊に戦局の重要なポイントを任せるのはあまりにもリスクが大きすぎる。」

アムンゼンは怒鳴る飛龍をなだめながら海図を眺める。

「私の上官は中越司令です。たとえ階級が上であったとしてもあなたが私に命令をすることはできませんよ。」

「君は戦果を急ぎすぎている。どうしてそんなに慌てるんだ？」

「貴方には関係ないことです。」

飛龍はそう冷たく返すがアムンゼンは飛龍がなぜこうも頑なになっっているのかを知っている。

それに、関係ないなんてことはなく、飛龍が慌てる理由と自分は関係大有りだと言うことも知っていた。

「いいや。関係大有りだな。君も私も同じ男に尊厳を引き裂かれた。」

「だったらあなたはどうして慌てないんです？心をへし折られて向上心がなくなったとでも？関係があるからと言ってそんな人間を相手にする時間はありませんよ。」

「だから……！」

「いい加減にしなさいよ。」

アムンゼンの言葉は不知火によって途中で遮られた。

「飛龍さん、この男に何を言っても無駄ですよ。自分の少しばかりの才能で調子に乗っていたところを本物の才能に殴打されて腹を曲げているだけのつまらない人間です。でもあなたは違う。」

「なんてことを言うんだ……。」

アムンゼンは小さく文句を言い、飛龍の辛辣な言葉に身構える。

けれど飛龍から辛らつな言葉が飛んでくることはなく彼女も小さく

「あの男がちらつく考え方が気に食わない。けれどそれは優秀な指揮官の考え方でもある。だからもつとムカつく。」

とだけ言っ指揮所を出ていく。

アムンゼンは不知火は互いの顔を合わせて驚きの顔を隠せなかった。

「意外ですね。」

「意外だな。」

「飛龍さん……何があつたんでしようか。」

「村上、いや、竹野と決別したことが原因であることは確かだろうな。」
「貴方と同じくそれが良い影響をもたらしているのならいいんですが。」

「竹野が何をたくらんでいるのか知る必要がありそうだが……。」

「恐らく調べても無駄ですよ。噂では彼は部隊の艦娘に拷問を含めた訓練を受けさせているそうです。あなたや私のような人間が興味だけで知ることが出来るほど甘くない。」

「分かっているがどうして飛龍だけなんだ？」

「彼女が手に負えなくなったからでしょうか？」

「竹野の手に負えない艦娘を中越司令が半ば放牧のような状態にしておくと思うか？」

「中越司令が何かしら事情を知っているとでも？」

「そうは言わないが中越司令の行動には不可解な点が多い。」

「私の行動が不可解だと？」

他人の陰口を叩いてるときほど案外本人が近くに入るものだ。

「司令……何でもないです。」

「おいおい。それはいくら何でも無理があると思わんかね。飛龍の事だろ？」

「ええ。まあ。」

「なぜ彼女だけが、村上、いや、竹野の手を離れたのか。私もよくわからん。確かに彼は私にはほかの人間より多くの情報を与えた。だがそれはエピローグどのようなで振舞えばいいかと言った情報だけだ。」
「エピローグですか？」

「どうやるのかは知らんが彼にはこの戦争の終着点がある程度見えているんだろうな。」

「それではあなたはエピローグでどうふるまうんですか？」

「詳しくは言えないが別に私の地位や権力が必要な行動ではないな。」
「飛龍はどうすれば？」

「好きにやらせてやれ。君は数か月前と比べれば随分大人になった。君はそろそろ保護者にならなければいけない。竹野は私に彼女を任せたが、ついでに押し付けてきた司令長官の職があまりにも重たすぎた。」

「貴方を司令長官にしたのは竹野なのですか？」

「そう考えると一番仮説に破綻がない。この話はここらで終わりにしよう。不知火、飛龍を呼んできてくれ。アムンゼン、他の指揮官を全員呼び出せ。New Deal作戦について説明を始める。」

同基地 戦術研究棟大型会議室

「司令長官の中越だ。今日は人類のこれからを決めることになる極めて重要な作戦が正式に認可されたことを報告したいと思う。すでに聞いていると思うがヨーロッパではすでに撤退が進み物資供給の総量も低下の一途をたどっている。にもかかわらず、旧防衛連合軍は戦力の温存を決定し批判を受けた。これ以上、失敗は許されない。」

中越がリモコンを操作して前面のスクリーンに作戦概要が表示された。

「我々はベーリング海の島々に同時上陸を行う。今まで深海棲艦は北極圏に近い海域での行動を避けていた。だが衛星による解析や、米軍の島嶼駐屯軍の交戦記録などから敵がベーリング海の島々を狙っていることは明らかだ。司令部はこの敵の動きを日本海への展開のための準備であると判断した。残念ながら旧国連軍にも我々にもカムチャツカ半島全域をカバーする地上戦力はない。そこで敵の飛び石を潰す。ろくな耐寒装備がない深海棲艦側が北極圏で長距離行軍するのは無理があるが、幸いなことにこちらには艦娘以外のものを量産する工業力がある。敵の進軍速度を圧倒して各個殲滅を試みる。そのままアラスカに進軍してアラスカの沿岸地域を確保する。中東とのパイプラインの寸断や中東が占拠される事態に対応するための保険としてアラスカの油田を日本が利用できるようにする。作戦目標

はこんなところだ。」

「初の反抗作戦にしては少し弱いと思うのだがどうだね？」

アメリカの軍服を着た男が立ちあがり言う。

「アメリカ空軍代表のポール・スチュアートだ。初の大規模作戦は象徴的な側面を持つ。プロパガンダの意味を持たせるのであればハワイの奪還が最も良いとは思わんか？」

恐らくこの男はハワイの奪還が現実的ではないことを知っている。にもかかわらずどうしてこんな提案をしてくるのか？中越にはそれがわからなかった。

「ハワイを短期間奪還することが出来たとしてそこに駐屯する兵のための兵站をどう確保するつもりですか？」

「空輸で充分な量を輸送できる。アメリカにはその力がある。」

中越がこのアメリカ人を黙らせるために「無理だから」と知ってしまったえば彼の負けだ。

アメリカはできると言っているのに旧防衛連合軍はできないと言っているという最悪な構造が出来上がる。

目的はわからないが上で話がまとまったからと言ってそのやり方にただ同意して政府に忠誠を誓うほどアメリカ人の自我は弱くない。

「そうですね。ではそのプロパガンダがもたらす効果に、空輸でかかるコストとアラスカの資源程価値がありますか？」

「プロパガンダの効果は二度の大戦で我が国が証明している。我々の国の国民を鼓舞すれば一国で深海棲艦を蹴散らすことだってできる。」

「では未だに東海岸の主要地域を取り戻せていないのをどう説明するおつもりですか？」

「それは……。」

「アメリカの工業力は確かに凄まじい。ですがそれは国際組織と協力しない理由にはならない。私達が日本のためだけに見える今回の作戦を行うのは日本列島単体が世界のGDPの17%を持っているからです。軍隊にはプロパガンダが必要ですがプロパガンダが軍隊の目的ではない。それをあなたはよくわかっているはずだ。」

「まあいい。今回の作戦で我々が行うことはせいぜい後方支援程度だ。だが私がこのような提案をしたということのを忘れるなよ。」

そう言うとも男は腰を下ろす。

それを確認して中越は計画を再び話始めた。

「アムンゼン、あとは頼む。」

「わかりました。第一艦隊第一攻撃群司令のアムンゼンです。作戦の説明を担当します。まずこちらが用意した兵力に関しては先ほど配布した資料の通り艦娘250万、戦闘機470機、攻撃機250機、戦闘艦25隻、支援艦68隻、旧国連軍第105師団、第23空挺師団、第5海兵師団。アラスカ沿岸部への攻撃に際して米軍第十一空挺師団と第237自走砲大隊が参加します。」

「不十分だな。」

意外なことにもその兵力を見て少ないという感想が出た。

アムンゼンも中越も計画を進められる最小限の戦力だけしか用意できなかった。

しかし、数だけを見れば強大に見える戦力だ。

「少ないと?」

「敵が展開している守備兵力は500万、ミッドウェー島付近にはさらに数千万の兵力が展開されている。恐らく日本海へ侵攻するための兵力だろう。いくら寒冷地帯で敵の進軍速度が遅くとも攻撃されているとなれば話は別だ。ついでに言うのであれば敵に指揮官がいる以上寒いことを理由に進行速度が遅くなると仮定するのは都合の良いすぎる解釈だと言わざるを得ない。そうした仮定の下立案された今回の計画は陳腐だと評価するのが適切だ。」

「ワグナー大佐でしたね。私達はミッドウェー島付近の敵艦隊を認識していないわけではありません。ですが大抵の場所は敵の大部隊の救援が二日以内に到着しますがベーリング海は違います。早くとも5日かかります。その間に敵を殲滅すれば問題はない。」

「もし殲滅できなければ貴重な戦力を失うことになるぞ。」

「この程度の作戦すら、こなせないのであればどんな作戦であっても成功させられない。つまりそれは人類の全面敗北を意味します。だ

からこの作戦の成否は重い。我々がじわじわと死んでいくのか、それともまだ抵抗するチャンスが残されているのか。そんな綱渡りの始まりにすぎません。New Dear作戦から始まる第一攻勢計画のすべての作戦が危険な綱渡りです。我々にもう安住の地は残されていない。絶滅を受け入れるか、リスクを受け入れるか。二つに一つです。」

「そのリスクを受け入れるだけの価値が君の作戦、いや飛龍中佐の計画にあることを祈るよ。」

ワグナーは険しい顔で半ば投げやりにそう言って席についた。

精神論者の系譜

カムチャツカ半島から南東に340kmの海上

「両舷増速。アムンゼン司令。もうじき商用のルートを外れて進入禁止海域に入ります。」

「報告ありがとうございます。」

アムンゼンは航海長の報告に耳を傾けながら海図を眺めていた。

「今の時代、海図なんか眺めて何になるんです？」

飛龍がまたも突っかかってくる。相変わらず飛龍はアムンゼンに心を開くことはなく、何ならあたりが強くなっていた。

「アナログなものからしか得られない情報もあるかもしれないだろう？」

「その情報が状況においてどうやって使えるのか疑問ですけどね。」

「それでもやらない方がまだ。」

「ですが、そのやらなくてもいい作業にかける時間をもっと重要な作業に使えばもっと有効なのでは？」

二人の言い合いは過熱していく。

「いい加減にしてくれませんか？」

過熱した二人のどう考えても無駄な議論を不知火が冷たい視線を向けながら制止する。

「指揮官であるお二人が全く持つて必要のない議論をしていることの方が明らかに問題ですよ。」

「それは……。」

同じ艦娘である不知火の指摘を受けて飛龍は気まずそうにしている。

「アムンゼン司令。第一艦隊の充足状況について報告です。予想を下回る気温のために防寒用品の若干の不足が予想されます。先の実験結果をもとに考えると艦娘でも第一、二度の凍傷を負う可能性があります。」

「作戦行動に問題は？」

「恐らく生じないかと思いますが配慮をお願いします。凍傷での死傷

者は今後の士気にかかわる可能性がありますので。」

「わかったありがとう。飛龍……」

「作戦の最適化を行います。作戦時間を72時間から65時間に短縮できるように調整します。」

飛龍は作戦完遂のために素早く頭を切り替える。アムンゼンもそれを揶揄することはなかった。

不知火は案外いいコンビじゃないかと思いつながらブリツチを後にする。

「飛龍、竹野の動きは、いや情報部の動きはつかめないのか？ どうしても奴らの動きが気がかりだ。」

「あんな身勝手な人間の事なんか知りません。私は厄介払いされた人間ですから。」

アムンゼンはそれが飛龍の地雷だと知つていながら踏み込んだ。

どうしても知らなければいけないことがある。アムンゼンは飛龍ともめながらも何度か撤退戦を指揮し少しばかりの攻勢作戦の指揮も行った。

飛龍には棘があるがコントロール可能で、冷静で的確な指揮を出すことが出来る。指揮官としての能力も単体でのずば抜けた戦闘能力も竹野に見捨てられるようなレベルではない。

スパイかとも疑ったが飛龍の性格は頑固で正義に満ちている。その正義が攻撃的すぎるのは問題だがスパイなどという人種にはなれない性格だ。

「厄介払い、つまり能力不足だと？」

「戦闘面では私は蒼龍にだって引けを取らない。そこらの艦隊の艦娘となら一対十でも負ける気はない。」

飛龍ははつきりとそう言い切った。

「ならどうして？」

『戦闘面では』それが全てです。竹野司令は私が彼の計画のほつれとなることを恐れたんでしょう。」

「ほつれ？」

「彼は私に何も教えてはくれなかった。私から情報が漏れるとでも

思ったのかもしれませんが。」

「君は彼に忠誠を誓っていないかったと？」

「そんなことはありません。私は彼の事を信頼して日に日に変わっていく彼のやり方にだって文句は言わなかった。それが正しい手段ではないことは分かっていますが、それが正しい目的のための手段であることは直観で分かっていましたから。」

「本当に竹野はあなたを追い出したかったんでしょうか？」

「どういうことですか？」

「あなたには追い出される理由はない。能力は高く頭は切れる。」

「そんな風に思っていたんですね。」

「私はあなたの事を高く評価しているんですよ。とにかくあなたを切る理由が竹野にはない。それに、能力の高い人間を追い出すときわざわざ中央の重要ポストに配属すると思いませんか？」

「私が同じ立場なら僻地に追いやって腐らせませすね。」

「それは……まあ、そうですね。ではあなたは今僻地にいますか？」
「NOですね。私は自分の能力を最大限に生かせるポストに配属されました。ですが今のポストに配属したのは中越司令ですよ。あ……。」

「竹野が中越の行動を予測していないはずなどない。気が付きましたか？」

「司令が感情論で動いた可能性は？」

「あなたから見て今の竹野が感情で動くように見えるのならそうかもしれませんね。」

「ないですね。」

飛龍は即答した。

「冷静になればあの男が私を切るまでの流れはあまりにも出来すぎていた。情報を遮断しこちらの不信感を煽り、信頼を一瞬で破壊する一手を最適なタイミングで実行する。司令はそれを完璧にやってのけた。そう考えることも出来るかもしれませんが。」

飛龍はやつと気が付いた。自分の思考があまりにも感情的で短絡的すぎたことを。怒りが冷静さを奪っていたことを。

「彼にとって私はマリオネットの一つ。一体私にはどんな役が与えられたのでしょうか。」

「それがわかれば何も苦労はしませんよ。それと、彼がいくつのマリオネットを持っているのか知りませんがマリオネットどうし仲良くしましょう。」

「あなたもマリオネットだと?」

「私はフィリピンで40万の艦娘を殺しかけた。情報部艦隊に救出されたにもかかわらずその戦果のすべてが私のものになった。私が報道に気が付いた時すでに根回しは終わっていました。私が出そうとした訂正の記事は全て握りつぶされました。誰がそれを行ったのか。もはや言うまでもないでしょう?」

「そうですか。それで私に歩み寄ろうと?」

「その言い方には悪意を感じます。私は、」

「司令!北東方向120kmに敵艦隊を補足。アツツ島の防衛部隊にも動きがありました。」

二人の会話を遮るように報告が入る。

「詳細を報告しろ。」

「補足した艦隊の規模は15〜20万と想定されます。アツツ島の防衛艦隊も移動を開始したようです。規模は80万程度です。」

「多いな。」

「どうやって80万程の兵力の兵站をどうやって維持したのか訳が分かりません。」

「よし。第一艦隊、第二艦隊を攻撃態勢に移行。補助艦艇、および火力艦は輪形陣を維持。観測機を飛ばせ。」

「了解。」

「飛龍!」

「分かってる。第一攻撃群は任せて。」

「頼む。」

飛龍はブリッチを足早に去っていく。

アムンゼンはそれを見送ることはなくすぐに作戦用のディスプレイに視線を落とす。

『ジャックリー合同艦隊司令だ。わが艦隊はすでに攻撃の準備を完了している。敵に対して牽制攻撃を行う。』

合同艦隊は旧国連軍艦隊を母体とする多国籍の船団だ。もちろん指揮官旧防衛連合軍の士官ではなかった。

「ジャックリー司令。待つてください。上が話を付けたはずです。今回は私たちの指揮下に入ると。」

事態が急激に変化し始め、元国連軍の士官たちの抵抗が予想通り始まった。

『だったらなんだ？現場での指揮権限を持っているのは私だ。』

「残念ながら私にはあなたを今ここで更迭する権限がある。」

もちろんはったりだ。国連軍に根を張っている士官をどうやって更迭するのかアムンゼンには見当もつかない。

『そんな訳がない！』

ジャックリー司令は語気を強めて根拠のない反論をする。

アムンゼンはそのジャックリーの様子を見て意地の悪い考えが思いついた。

「その荒い氣質が私のような部外者があなたの人事に干渉する隙を作ったんですよ。」

『何を言っている。』

「あなたがそのポストに居続けることをよく思っていない人間もいるということですよ。深い意味はない。」

アムンゼンはすらすらと？をついてみるが当然それに気が付かないジャックリーではなかった。

『はったりか。いい度胸だな。』

「認めてくださるんですか？」

『今回だけだ。』

アムンゼンはそれを聞いて無線を切り、胸をなでおろす。

「気苦労の多い役回りですね。」

そんな様子のジャックリーを見た艦長がそう声をかけてくる。

「私の上官たちはみんな私を都合のいい傀儡として利用してくる。にもかかわらず私は部下に敬意を払い。君の意見も尊重しているつも

りだ。これほどの人格者はこの時代にはそういない。」

アムンゼンはそう冗談を言い、笑う。

「人格者ですか。私は本当にそう思いますよ。」

「今、艦娘に手を出すような提督と比較しましたね。」

艦長はバツが悪そうに苦笑いを浮かべる。

「ばれましたか。」

アムンゼンの顔から一瞬笑顔が消えて彼は、海図に再び目を移す。

「艦長。進路を左に三度修正してください。」

「海流の影響で多少船が揺れるぞ。」

「かまいません。人間様の乗り心地のために作戦が長引くことなど論外ですから。」

「わかった。」

アムンゼンはコンピュータをいじり作戦時間短縮の調整を再開する。ほかの士官が出してきた艦娘軽視の計画案はいくつかあるがあまりにもお粗末すぎる。精神論に近い何かだ。

もちろん強靱な精神が作戦の成功率を変化させることはわかつている。だが、強靱な精神を作るには生き残るといふ経験が必要でありそれは遺伝子に刻まれているわけでもなければ天から降りてくるようなスピリチュアルなものでもない。死地をさまようことに対する「慣れ」に過ぎない。心が強くなると同時に恐怖が与える影響が軽減されていくのだ。

深海棲艦の絶対数に艦娘がはるかに及ばないのであれば練度で圧倒する以外の活路はないがそれをあきらめて受け入れるのは極めて難しい。

「スキヤマンダー。作戦計画を更新した。すべての部隊に共有しろ。」

『了解。少しお待ちを。』

十数秒後に再び報告が入る。

『共有完了しました。』

「ありがとう。」

その報告を受けたアムンゼンはブリッチを去り、指揮所に向かう。アムンゼンはディスプレイに囲まれた窓のない部屋が嫌いだった。

だから士官が本来いるべき指揮所ではなくブリッチに居座っていたのだ。

しかし戦闘が始まりそうな状況でそうはいってられない。

「指令。すべての部隊に変更の通達を完了。現在最終調整中です。」

指揮所に入るとワイヤレスのヘッドセットを受け取りながら部下から簡潔な報告を聞く。

「左翼の部隊を加速させて先行させてください。右翼の部隊は合同艦隊の戦闘艦の露払いを。合同艦隊に多少の花を持たせてやらないと今回の作戦はうまくいきません。」

ヘッドセットのマイクの位置を調整しながらアムンゼンは指示を出す。

「了解です。攻撃開始は合同艦隊の砲撃に合わせると通達します。」

「よろしく。国連軍と防衛連合軍の間に上下関係などない。実力を見せつける必要もなければ国連軍の力量を計る必要もない。それを忘れないでください。」

「観測機が敵艦隊を捕捉！」

「よし。衛星誘導装置を作動。合同艦隊の攻撃を誘導してくれ。」

「作動まで30秒。」

「第一第二艦隊、斉射用意。」

「衛星誘導装置の正常な作動を確認しました。」

「第一艦隊第一攻撃群司令のアムンゼンです。NewDear作戦の開始を宣言します。」

「了解。カウントを開始します。5、4、3、2、1、fire！」

後方から轟音が聞こえてくる。合同艦隊の戦闘艦が一斉に射撃を実行したのだ。

「弾着まで2分43秒。」

「フェーズ1開始。」

「第一第二艦隊へ。フェーズ1を開始せよ。」

『AWACSから司令部へ。現在戦闘機部隊が敵戦闘機と交戦中。制空権確保まで8分ほど頂きたい。』

「アムンゼンです。8分は待てない。3分以内に決着がつかなければ

フェーズを開始する。」

『わかった……』

アムンゼンの頑とした姿勢のおかげかはわからないが二分ほどで決着はついたようだ。

『…… 戦闘機パイロットを確認。殺害する…… まて！ 戦時条約を守ら…… やめ……』

「この音声はどこからだ。」

「識別信号からして情報部です。」

「そうか。」

深海棲艦は戦闘機を操縦できない。敵戦闘機パイロットの数はそれほど多くない。可能性が高い。

脱出して救助を待っているパイロットを艦娘に殺させたのだろう。

「フェーズ1を開始する。」

アムンゼンの指示を受けて第一第二艦隊から少数の艦娘が速度を上げて敵陣に突っ込んでいく。

寒冷地であるため砲塔自体はよく回るがただでさえ深海棲艦の体温維持機能は艦娘のそれより弱い。

そのうえ大した防寒装備もなくこの地域で動くのは難しい。

低速戦艦や上陸部隊に対応することはできるかもしれないが高速で動く艦娘の部隊に対応できるはずがない。

「1E 2Eともに目標に接近中。」

「例のシステムを再度点検しろ。」

「艦娘の位置情報にずれはなし。現時点で機材の故障は報告されていません。予備機の準備状況も良好。いけます。」

「よし。フェーズ1にコンティニュー許可を出す。」

『朝潮。了解しました。』

その連絡が入った直後1Eと2Eは砲撃を一切せずに敵陣に突入した。

敵の陣形の内部に入り込んでいったのだ。

相も変わらず士官たちによる士官たちのための無駄な会議が行われていた。

決まったことといえばNewDear作戦という名前だけ。具体的な作戦は何も決まらない。

この事態はある程度予想していた。

「私から一つ提案がある。私の直属の部下に飛龍というのがいるんだが彼女が書いてきた作戦を私から提案する。」

「艦娘に作戦計画をさせると?」

士官の一人が鼻で笑う。中越はその士官に対してカウンターを放つ。

「君たちの出してくる作戦計画よりも艦娘が提出してきた作戦のほうが実行性があり有効だった。それだけの話だ。文句を言うのは構わんが、私が一度この計画をチェックして論題に挙げるに値すると判断したということをお忘れな。」

中越の言葉に誰も言い返すことはできなかった。

「飛龍。」

「はい。では私から作戦の提案を。」

飛龍はベーリング海が中央にくる地図を取り出し提示する。

「私からはベーリング海に点在する島を攻撃することを提案します。まずこの海域は非常に気温が低く今まで深海棲艦が展開していなかった地域であり通称ルートとして極めて重要です。しかし敵はベーリング海の島に次々に上陸して勢力を強めています。」

「防衛部隊からの報告によれば今は反撃の時ではないと聞いている。敵の勢力は強大であり反撃は困難だそうだ。」

「深海棲艦がなぜ今まで寒冷地での行動を避けていたのか。それは明白な理由があります。深海棲艦には寒冷地での行動に大幅な制限があるからです。少し前まで彼らには自由意志があった、しかし今彼らは命令に従って動く兵士となっています。」

「だとしても大部隊を運用されては手を出せない。敵も馬鹿じゃない。行動が制限されているから数で圧倒して面で敵を叩き潰す戦略をとっている。狙いが甘くても弾丸の雨を降らせれば狙う必要など

なくなるからな。」

「ええ。ですが敵によく狙いを定めることを強いる方法があります。」
「なんだ？」

「敵の陣形の内部に入り込んでしまえばいい。流れ弾は海の藻屑となる前に味方を貫くことになり知性のある深海棲艦は攻撃をやめ知性のない深海棲艦は味方を打ち続ける。」

「敵陣に突撃した部隊が白兵戦で撃破されたらどうする。」

「白兵戦など簡単に回避できます。低速戦艦を突撃する部隊に編制せずにかく乱だけを目的にすれば問題はありません。敵はそれなりの間隔をあけて航行しています。その間を縫っていけるような高練度の艦娘を選抜して突撃隊を組織します。」

「敵を速度や練度で圧倒するというのは結局ただの精神論だ。」

「なら言い方を変えます。低体温症の人間と健康な人間、どちらの身体機能が優れていますか？」

「そういう話ではない。」

中越も飛龍の作戦に何か思うところがないわけではない。飛龍のような艦娘が複数いるのならばこの作戦を実行することをためらうことはないだろう。だがそうではない。

能力があってもミスを起こさないわけではない。作戦を迅速に行うとしても一時間やそこらで終わるものではなく練度という状況によって変化するあいまいな要素に重要な部分を担わせるのは普通は賭けとなる。

「君たちが言いたいことはわかる。確かにこの作戦は穴があるし未完成だ。だがな、我々は反抗作戦を行うといつて戦力を温存してきた。これ以上、国連軍や米軍を抑えておくことはできない。我々がすべきことは最適な作戦を完璧に実行することではなくある程度の効果がある作戦を戦略的には成功といえるようにすることだ。」

「ですが、」

「君たちがここににいる理由は誰かが出した作戦にケチをつけることではない。」

「わかりました……。」

現在

「合同艦隊から報告が！砲身の劣化により発射速度、精度ともに低下するとのことですよ。」

「わかった。」

フェーズ1開始から30分ほどたち徐々に戦果以外の報告が聞こえてきた。敵からの組織的な反撃だけはまだないが徐々に混乱は落ち着きつつある。

1E2Eからの連絡からも時折息苦しそうな声が聞こえる。

「予想通りになりましたね。」

アムンゼンがそうつぶやくとそばにいた士官が答える。

「中越司令の言葉ですか？」

「そうです。彼は時間経過とともに状況は不利になると予想していました。飛龍の作戦では不十分だとね。」

状況は悪化していた。突撃隊が離脱していない状況で精度の低下した合同艦隊の砲撃を行うことはできない。

「フェーズ2を実行します。各隊用意を。」

勝利の重み

朝潮は肉体的な活動限界へと着実に近づいていた。

隊長である彼女がそうであるのだから部下である艦娘は、より深刻な状況であることが容易に予想できた。

「司令部へ。1Eのダメージが許容上限を超えました。」

『アムンゼンだ。そちらの状況はリアルタイムで確認している。フェーズ2の実行まで敵を押しさえつけろ。』

すでに十数名の艦娘の殉職が確認されておりその中には数名のEースが含まれていた。

限界を超えて戦闘を継続したところで物語のように覚醒したりすることは無い。艦娘の性能はファンタジーのそれだが、その肉体は基本的な化学、物理法則に従っている。

飛龍のやり方ははつきり言って精神論の他ならない。
だが、

『フェーズ2を開始する。1E2E、離脱に備えろ。』

朝潮はその指示を聞き背中のロープを勢い良く引く。
するとバルーンが射出され空に上がっていく。

「フルトン回収システム。これが飛龍の精神論を作戰へと昇華させるための方法ですか？」

アムンゼンは部下の言葉に首を縦に振ることはなくこう言った

「あれはフルトン回収システムなどという古いシステムではありませんよ。回収に使用するのは大型の輸送機ではなく小型の無人機、それをAIが操縦し、そのAIに指令を与えるのもAIです。人間の処理速度をはるかに上回るAIでなければこれだけ大勢の艦娘を事故なく、そして最適なタイミングで回収することなどできませんよ。」

竹野はプライベートジェットの中で戦場の映像を眺めていた。

「これが飛龍の作戰ですか？」

蒼龍がそう聞いてくる。

「いや、彼女一人では敵を叩き潰すところまでしか思いつかないだろ

う。回収方法を思いついたのはアムンゼンだろうな。馬が合わないかと思ったが案外いいコンビだな。」

「こうなることを予測していたのでは？」

「ここまでスムーズに事が運ぶとは思っていなかった。こうなるかわかっていれば飛龍を中越直属の部下にすることはなかった。」

「もし作戦がうまくいかなければどうするつもりなんです。情報部艦隊はいまあの海域に展開できませんよ。」

「私たちは子守じゃない。彼らが彼らの力だけで勝利を収めることができるのならば私たちが今こうやって裏で手をまわしているのもすべて無意味というものだよ。」

「達観していますね。」

「どちらかというところあまりにも敵が強すぎるからあきらめている。高い確率で自分がArk機関の都合で間引かれることになる。そう考えると逆に冷静になれる。」

「嫌な考え方ですね。」

「仕方ないだろ。それであと何分で到着だ？」

蒼龍は機内の内線をとると少し話してから竹野のほうを見る。

「一時間と二十分だそうです。」

「そうか。ならもう少し作業を進めよう。」

「1Eの離脱を確認しました。続いて2Eの離脱を開始。」

「合同艦隊の支援攻撃を強めろ。第一艦隊第一第二第三攻撃群は強攻しろ。」

アムンゼンは性根場を迎えていた。攻撃を徐々に弱めて敵に対するプレッシャーが低下していく中で撤退戦に挑まなければならぬのだ。

「敵からの反撃が徐々に強まっています。」

「第二艦隊第三攻撃群を前進させてください。第四攻撃群を後退させながらポジションを変え、第一艦隊第四攻撃群の航空隊に支援攻撃をさせてください。敵艦隊に南西方向からのプレッシャーを与えれば敵の反撃を受け流せるはずですよ。」

しかし、アムンゼンは冷静にそう指示をする。

押すわけでもなく後退するわけでもない。相手に絶対にペースを譲らないための行動をとったのだ。

「損害報告が多数上がってきていますが敵の攻勢は弱まっています。」

「2Eは？」

「離脱完了。現在1E2Eともに確認作業中です。」

「フェーズ3に移行する。」

「まだ確認作業中です。同士討ちの恐れがあります。」

「現時点で離脱できていない艦娘の命を救う方法などもはやりありません。同士討ちになったとしても攻撃する。そうしなければまだ救える命を取りこぼしてしまおう。」

「了解しました。コードクリスタル。フェーズ3開始の許可を出す。」

『コード確認。凍結材の散布を開始。フェーズ完了まであと14分』

「海面温度の低下を確認。」

「チャージング工法のできない補助艦および戦闘艦を離脱させてください。同時に戦闘艦にフェーズ完了まで射撃の禁止を通達。せっかく作った氷を破壊されてはこまる。」

「外気温が急激に低下中。まもなくマイナス20度。一部の深海棲艦と艦娘が航行不能に陥っています。」

「艦娘はすぐに離脱させてください。深海棲艦は放置で構いません。今撃つても弾の無駄となる上に深海棲艦の離脱を手助けしかねない。」

「海面温度さらに低下。氷塊が急速に成長中です。」

「あと何分でフェーズを完了できる？」

「あと8分です。」

「報告。一部の深海棲艦が攻撃の有効範囲から抜け出しました。」

「確認しました。14B北北東0.7海里的敵を攻撃してください。」

『14B比叡了解。攻撃開始します。』

「三分で片をつけていただけるとありがたい。」

『問題ありません。』

「任せました。」

「司令、敵はどうやら凍結材を毒ガスと誤認して活動を控えているようです。あと五分もすれば状況を把握して大規模な攻撃に移る可能性が。」

「五分で状況を理解できますかね。」

「油断していいことなんてありませんから。」

アムンゼンは部下の言葉に苦笑いをしながら返す。

「五分後敵が反撃してくると想定して防衛体制を構築します。ポジションQ4に配置を転換してください。なお10C、3D、23Aは戦闘不能になっていきますので隣接する部隊は防衛範囲を1.33倍に拡大してください。」

『11C了解。』

「あと数分耐えれば勝敗は決するはずです。ここが最後の山場となるはずです。」

「はずが多いですね。」

「これはシミュレーションではなく戦争ですからね。」

予想より少し早い4分後敵が最初の攻勢を開始した。

盤石な防衛体制を敷いてはいたが相手もこれから起こることをなんとなく予想しているようです。不随となっている四肢を必死に振り回し死に物狂いの抵抗をしていた。

「司令、敵が大挙して一転に押し寄せています。ポジションQ4は包囲には優れています。一点集中の攻撃にはそこまで強くありません。配置転換をすべきです。」

「いま包囲を解除すれば作戦が無意味になる可能性が高い。それはわかっているはずです。」

「その作戦のために私たちは数分を作らなくてはならない。ですがこのままではその数分が作れないと言っているのです。」

「合同艦隊に座標を送れ、一度だけ斉射を許可する。」

「正確な射撃は期待できませんよ?」

「期待してない。対空砲弾を使わせろ。」

「そんなもの今の時代積んでいますかね?」

「積んでいるさ。」

『ああ。数発だけだが積んでいる。対空砲弾装填。一斉射リンク確認。3・2・1・Fire』

アムンゼンはジャックリーの経歴を知っていた。彼は数回だけだが村上とともに戦闘をしていたこと。そして村上が彼を酷評したのが最初の一回だけだったことも。

村上のやり方と実力をたった一度で見抜き対応したわけだ。

対空砲弾や機雷など村上の好きなびっくりアイテムを積んでいるはずなのだ。

「しかし対空砲弾では艦娘を傷つけることはないでしょうが深海棲艦を傷つけることもできませんよ。」

「確かに意味のない攻撃です。作れる隙はせいぜい一秒ぐらいでしょう。ですが一秒あれば戦局をひっくり返せる。彼女がいるんですから。」

『3E飛龍です。着弾と同時に一気に反撃に出ます。』

「よろしく頼みます。」

『弾着まで3・2・1!』

弾着から0・47秒遅れて飛龍の飛ばした雷撃隊が魚雷を投下して0・81秒後に爆撃隊が爆撃を行った。その爆撃に対応しようとした深海棲艦はその魚雷捕捉することなどできなかつた。アムンゼンが作った一秒で雷撃を行い自身の爆撃隊でさらに数秒を作りたつた一人で最前面の敵を消し飛ばした。

そして彼女の隷下の艦娘も一気に反撃に出る。たった一秒の隙をこじ開けて敵の前衛を食い破っていく。戦艦クラスを軽巡クラスで叩きのめし飛龍は最前面に出て白兵戦を挑んだ。死に物狂いで反撃に出ているはずの敵も鬼のような部隊の出現でしり込みをする。

死に脅迫されて高い士気を保っていた敵により恐ろしいものをぶつけて強引にその催眠を解く。アムンゼンにはできない芸当だ。飛龍を1Eや2Eに入れなかつたのはこのためだ。戦場の空気を破壊する手段をアムンゼンは他にもっていかなかった。

「恐ろしい艦娘ですね。」

「悪魔のようですが、意外と子供じみている。それが彼女です。」

「子供ですか？あれが？」

「見ていればわかります。彼女は親に捨てられた子犬のような顔をする時がありますから。」

「そうですね。」

『フェーズ3完了。』

「了解。フェーズ4を開始します。コードエクソダス。」

『コード確認。ブースターを点火。』

敵の攻撃部隊を叩き潰すために飛龍が考えた作戦の最終段階がついに始まった。

半径14キロを凍結させて低下している深海棲艦の移動速度をさらに鈍化させる。

ここまでは完了した。深海棲艦は氷を割りながら進むか氷の上になり歩きしかない。

そして氷を抜け出せば集中砲火に遭う。だが深海棲艦を倒すには艦娘も氷の上上がるしかない。それではここまでしてこの状況をセッティングした意味が薄れてしまう。

『ブロック1. 2. 3ともに加速中到達まで二分。』

そこで飛龍はこういった。

『タイタニックの逆をやればいい。』

と。つまり馬鹿でかい氷山を深海棲艦にぶつけた圧死させるといふかなりぶっ飛んだ作戦だ。しかし、NASAに協力要請を出しロケット用のブースターを借りることで問題の多くが解決してしまった。

極低温状態でも性能を發揮し複数あれば氷山を動かすことが可能な出力を提供する。もちろん戦果を挙げることは条件となるがいま海水の中に取り残されている敵の数は最低でも75万、最大なら120万これでも敵の数パーセントにすぎないがこれだけの敵を数百名の損失で叩き潰して文句を言われるようであればもうどうしようもない。

「衝突まで三十秒。衝撃に備えてください。」

「すべての艦隊に通達を包囲陣形を解除して速やかに後退してください。」

い。」

「後退を開始しました。現在すべて想定内で進行中。」

「飛龍。そろそろ引け。」

『わかつてる。』

そして三十秒が経過した。爆音が空に響き巨大な波が船を襲う。

「船体前方にダメージを受けました。チャージング航法を行う場合注意が必要です。」

警報が鳴り響いているが船自体のダメージは中程度のものだった。

「ほかの基幹システムに問題は？」

「現在確認中ですが、ダメージは想定内に収まったものとみられま
す。」

「戦果の確認はまだですか？」

「合同艦隊が観測機を挙げたようですがあの波が生み出したしぶきの
せいで状況の確認には時間がかかるとのことです。」

「ソナーに反応は？」

「氷塊とみられるものは確認できますがそれ以外には何も。」

アムンゼンは深呼吸をして落ち着きを取り戻すことを試みる。

『仮に作戦が成功していたとしてもNew Deal作戦はそれで終
わりじゃない。アラスカで待っている。』

ちょうど中越からの励ましなのかよくわからないメッセージが送
られてくる。

「あのお方は何がしたいのでしょうかね。今回の作戦も少し離れたと
ころから見ただけにとどめていたわけですし。」

「なんだか現場にはよくわからない陰謀が山ほどあるようですが気に
したら負けです。」

「司令は司令で闇を抱えていそうですね。」

「そういうな。」

『こちら合同艦隊です。確認戦果94万。現在確認作業を続行中。』

「それはよかった。進路をポイント6に向けてください。上陸支援作
戦の用意を始めてください。」

アムンゼンはそういうと椅子に深く腰を掛けてため息を一つつい

た。

「聞いたかい？」

「またあなたですか。」

「いつになったら私のことを名前で呼んでくれるのか？」

ニサエルは何とも言えない表情をする。

「私は前にあなたのことを名前で呼びましたがあなたはそれを拒絶した。」

「確かにあの名前は私のものだったが同時に私という個を表現するには不十分なものだったからです。」

「私にとつてあなたを表すのにあの名前以上にふさわしいものはありません。」

「ひとまずその話はおいておきます。ベーリング海の件です。」

「手痛いダメージだとも？」

「そこまでのことではありません。戦力の数パーセントを失ったところで問題はない。あの地域の指揮官にもそう言っておきました。面白い作戦を展開されて少し戸惑ってしまったようです。」

「大きな問題にならないのならば気に留める必要はないでしょう？」

「君が本心でそう思っているとは思えない。君はそんなに馬鹿じゃない。」

「それはどうも。」

「あの戦闘をどう見る。」

「我々の指揮官と敵の指揮官の能力差を象徴する出来事だったと考えます。」

「どうしてそんなことが起きた？」

「私が防衛連合軍を離れたからです。もともとから防衛連合軍の指揮官の層は厚かった。けれど組織の腐敗と分断政策によつて機能不全に陥っていた。私はポーク・ラッセルが付け入る隙を作りました。彼ならば腐敗を放置するだろうと考えたからです。ですが残念ながら彼は私の期待したような働きをしてくれなかった。」

「人選ミスか？」

「いえ。そんな単純なミスを犯すと思いますか？」

「思わない。」

「もちろん彼以外にも手駒は配置していましたがブラウンにすべてをつぶされました。」

「君はブラウンと戦って負けたと。」

「どちらかというところCIAと一人で戦って引き分けに持ち込んだといってもらったほうが恰好はつきますがね。」

「君ならCIAと一人で戦っても完封ぐらい容易くできるはずだがね。」

「CIAからの攻撃は想定外でしたから。」

「攻撃は予想外だったから守り切れなかったと？君がCIAがあつた状況で介入してこないと本気で思っていたとでも？」

「いろいろと事情がありました。本来ならば私の裏切りから一か月間、CIAは手を出さないことになっていました。」

「気になる話だな。」

「いつかあなたにも事情を教えますよ。」